



国立大学法人

福島大学

Fukushima University

福島大学研究年報

平成 17 年度

創刊号

平成 17 年 12 月

■目次■

『福島大学研究年報』の発刊に当たって 福島大学副学長 北村 寧

論文

○プロジェクト研究推進経費

彫刻家新海竹太郎の有栖川宮威仁親王銅像と天鏡閣
..... 磯崎 康彦 (一)

「菰」の本草学—陸游詩所詠菰草考序説—
..... 澁澤 尚 (九)

〈道〉〈俗〉対立の構造—『経国集』「梵門」を中心に—
..... 井実 充史 (三)

調査報告

○プロジェクト研究推進経費

福島大学学生の「身体リテラシー」に関する実態調査
新谷 崇一・小川 宏・菅家 礼子・川本 和久・工藤 孝幾
黒須 充・佐々木武人・佐藤 理・坂上 康博・白石 豊
鈴木裕美子・杉浦 弘一・中村 民雄・深倉 和明・森 知高
安田 俊広 1

〈判例評釈〉「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記
—最判 (2小) 平成14年6月10日判例時報1791号59頁—
..... 富田 哲 17

新しい経済学入門教育をめざして
井上 健・大野 正智・熊本 尚雄・真田 哲也・清水 修二
中村 勝克・箱木 禮子・藤原 一成・森 良次 25

○奨励的研究経費

阿武隈急行グロットグラム調査報告 (1)
..... 半沢 康・武田 拓 33

平成16年度研究成果報告書

○プロジェクト研究推進経費 36

○学術研究支援助成 47

○奨励的研究経費 59

平成16年度研究業績一覧 65

『福島大学研究年報』の発刊に当たって

福島大学副学長

北村 寧

平成16年は本学が法人化と全学再編による「新生福島大学」として新たなスタートを切った画期的な年であった。「国立大学法人福島大学」となったこと、「学部制」から「学群・学類・学系制」へ転換したこと、「共生システム理工学類」を創設したこと、等々。法人化されて、まもなく2年になろうとしているが、この間、さまざまな新しい試みが行われ、新しい成果が生み出されてきた。『福島大学研究年報』（以下、『研究年報』と略称）も法人化のもとでの新たな所産の一つとすることができる。

まず、『研究年報』発刊までの経過を簡単に述べておこう。出発点は平成16年度・年度計画（No.126）であり、それは「学内の各学部・センターによる10誌の学術刊行物・年報について、学系設置に伴い、既存の研究出版物、出版助成のあり方、新しい研究発表方法等の見直しと新しい方針を検討する」というものである。平成16年度新設の研究推進委員会はワーキンググループにおいて検討し、「学部研究論集方式を廃止し、全学研究機関誌『福島大学研究年報』を創設する」を主な内容とする方針案をとりまとめた。平成17年2月、研究推進委員会はこの方針を教育研究評議会に提案したが、2度の審議の後、役員会が引き取るようになった。役員会は『研究年報』刊行の新しい方針を3月31日の教育研究評議会に提案し、承認された。4月、研究推進委員会は内部に「研究年報編集委員会」を設置し、「編集・投稿規定」・「編集細則」・「執筆要領」の作成、原稿募集、レイアウト、印刷所との交渉等々を精力的に行い、このたびの発刊に至ったものである。

次に、『研究年報』の特徴と意義であるが、本誌は本学が重点的に配分した研究費による研究成果を発表する場として位置づけられており、これが大きな特徴である。「重点的に配分した研究費」とは平成16年度から措置した「奨励的研究助成予算」である。これは、平成16年度は学長裁量経費、奨励的研究経費、学術振興基金（学術研究支援助成）の3つの柱から構成され、平成17年度は学長裁量経費に代わって「プロジェクト研究推進経費」が措置されている。奨励的研究助成予算は選考により配分するもので、いわゆる競争的研究経費に相当する。これらの研究経費による研究成果を発表する場を大学として保障することは重要な意味があろう。なお、本学教員の前年度の「研究業績一覧」を掲載しているが、これも本誌独自のものである。

さらに、『研究年報』の刊行は対外的にも意義あるものである。1つは、研究活動のアカウントビリティ履行を促進するという点である。『研究年報』（冊子体）を電子情報で公表することにしたが、これは研究情報を広く社会に発信する点で大きな意味がある。もう1つは、研究活動に対する「評価」に関わる。国立大学法人評価委員会による「評価」と「認証評価機関」による大学評価（認証評価）を受けねばならないが、本誌刊行はこうした二重の「評価」への積極的対応として一定の意義を有するといえよう。

いうまでもなく、『研究年報』は大学として発行する「研究機関誌」である。この創刊号を出発点として、今後多くの研究成果が発表され、特色ある「全学研究機関誌」として発展していくことを願っている。最後になったが、刊行にご協力いただいた方々に心から感謝の意を表し、発刊の辞としたい。

《調査報告》

福島大学学生の「身体リテラシー」に関する実態調査

健康・運動学系*

I. はじめに

1. 本調査研究の問題意識

本稿は平成16年度から取り組まれている中期目標・計画にもとづく6年間の系研究「身体リテラシー教育の充実に関する実践的研究」について、1年目に取り組んだ調査の報告である。テーマとした「身体リテラシー」は、健康・運動学系の研究計画の検討のなかで、今日のからだに関する状況と教育課題をふまえ、「自己の身体の仕組みを知り、身体機能の維持・向上の仕方や身体運動の社会的意味を理解し、身体を操作する技術を身につけること」とおさえ、これを今後の系研究および実践展開の中でさらに概念の内実を豊かにしていくための作業仮説とし研究をスタートさせた。

これまでの検討で「身体リテラシー」の内包するものとしては「すべての人にとっての生存を維持するための必要最小限の身体的能力」と、「人生の質をさらに豊かにするための文化」という側面が考えられている。前者は生存の基盤としての身体的諸力であり、それぞれの人生における幸福追求のための手段としての健康の保持増進にかかわるものである。後者はスポーツ文化の享受（スポーツに親しむ・楽しむ）やスポーツを媒介としてのコミュニケーションなどによる関係性の発達、そして権利としての体育・スポーツ実践（ユネスコ「体育・スポーツ憲章」）や権利としての健康（WHO憲章）も含んでいる。

系研究と実践の中核に位置づけた「身体リテラシー」概念は、現在の健康・運動学系の前身であった「保健体育系列」として共通教育の健康・運動科目の検討の中にその萌芽が認められる^{1)~6)}。特に一般教育の大綱化を契機とした「健康・運動科学実習」の立ち上げのための検討と、その後の実施・評価・検討をとおして育まれてきた。例えば「健康・運動科学実習」における実技では、スポーツ文化の享受（新谷「スポーツ＝文化の享受」アリーナNo.17）とおさえ、スポーツそのものを楽しみ、仲間との交流を図り、心身をリフレッシュし、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を培うこと

をねらいの一つとして位置づけ実施し、学生による授業評価でも高い評価を受けてきている^{7)~10)}。

今後「身体リテラシー」に関する系研究と実践（「健康・運動科学実習」）を展開するにあたっては、特に「身体」が内包する多様な中身を明らかにしていくことが重要な課題となるであろう。環境との調和を無視した社会・経済開発のもとでわが国では先ず深刻な環境破壊が、そして前世紀後半から子どもの「からだと心」に様々な問題が現れだした。現象的にはいわゆる「体のおかしさ」や「心の問題」である。バブルがはじけ社会の病弊が一気に吹き出した1990年代に入ると哲学や思想界では「身体」を巡る論議が盛んに行われるようになった。そのなかで教育学者佐藤学¹⁶⁾は、今日の子どもの「からだ」の変化は、単なる「生理学的・医学的症状」にとどまらず、「人と交われない硬直した身体、人前に立つと萎縮してしまう身体、感受性と応答性を喪失した身体、硬いから覆われた自閉的な身体、精神的な意味における身体の危機」と化してきており、「教育の危機的状況の大半は、その根底において身体の異変を軸として生じている」ととらえられる」と注目すべき見方を示した。また「唯脳論」の著者養老孟司との対談¹⁷⁾では、現代社会における「喪失する身体」を問題視し、「唯脳化社会から生身のからだをとり返す」こと、つまり身体性の回復の必要性を示唆している。

現代社会に生きる人々の「身体」に関わる課題の内実をいっそう豊かにつかみ、あわせ「健康・運動科学実習」に取り組む学生の、時間や施設・設備などの条件も考慮し、新たな「健康・運動科学実習」創出と展開の充実をはかっていくことがわれわれの課題である。

2. 調査方法および対象

作業仮説としての「身体リテラシー」概念をもとに質問項目を設定した。項目は身体運動やスポーツに関する意識と健康維持に関する生活状況および身体活動量をとらえる内容で構成した。身体運動やスポーツに関する意識を問う項目では、「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの4段階で回答を求めた。健康

*健康・運動学系教員：新谷崇一、小川 宏、菅家礼子、川本和久、工藤孝幾、黒須 充、佐々木武人、佐藤 理、坂上康博、白石 豊、鈴木裕美子、杉浦弘一、中村民雄、深倉和明、森 知高、安田俊広

維持に関する生活状況および身体活動量については、行動の有無について二件法で回答を求め、身長、体重、時刻を記入させた。なお定期的運動実施に関わる心理的特性については岡¹⁸⁾による運動セルフエフィカシーをまた身体活動量については村瀬¹⁹⁾らによる国際標準化身体活動質問表(IPAQ)日本語版 Long Version(LV)を用いた。集計には統計パッケージ SPSS Version13を用い、差違の検討のため有意水準5%未満による χ^2 検定を行った。各集計表の数値は特にことわらない限り、上段に回答人数、下段に割合(%)を示した。

調査期間、調査対象は以下のとおりである。

期間：平成16年11～12月

対象：平成16年度健康・運動科学実習の受講者全員(都合により実施できなかったクラスおよび欠席者、所属や性別などについて回答漏れのあったものを除く)。
教育学部318名、行政社会学部156名、経済学部333名、計807名。

注) 平成16年度は文部科学省の委託を受け「新体力テスト」も実施した。アンケート調査と新体力テストの両データについて欠損値がないものを併合した結果656名となった。アンケート調査と新体力テストを関連づけて分析する際はこのデータセットを用いた。

II. 運動文化&コミュニケーション部門

1. 単純集計、及び男女の比較から

Q1「自分の運動能力は高いほうだと思う」という質問への回答(表1)は肯定約4割、否定約6割であった。男女別では、男子の肯定が46.3%に対して女子の肯定は31.2%と有意に低く、また女子の約3割が「全くそう思わない」に回答していることから、女子の運動に対する自信の無さが窺える。

表1 自分の運動能力は高い方だと思う。

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	71 14.5	192 39.3	191 39.1	35 7.2	489 100.0
女子	93 29.2	126 39.6	95 29.9	4 1.3	318 100.0
全体	164 20.3	318 39.4	286 35.4	39 4.8	807 100.0

Q2「スポーツは相手に勝たないと意味がないと思う」に対する回答は表2の通りであった。全体で見ると肯定30%、否定70%に分かれた。しかし男女別で見ると女子の肯定18.2%に対して男子の肯定が約38.8%と有意に高く、やや勝敗にこだわり過ぎる男子が多いことが分かる。スポーツは互いに勝利を目指して競い

合うものであり、結果としての勝利は確かに大きな達成感や喜びをもたらしてくれるものではある。しかし結果として勝利しなければ意味がないと考えると敗者は報われず、勝利至上主義に陥ってしまう可能性が出てくる。勝利を目指して全力を尽くしたり、作戦を工夫したり、プレーそのものを楽しむこと、すなわちその過程にも大きな意味が含まれていることを理解させたい。今後社会人となって生涯スポーツやレクリエーションスポーツを楽しんでいく世代に向かう大学生に対して、より広いスポーツの価値観を育成していく必要があると考えられる。

表2 スポーツは相手に勝たないと意味がないと思う

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	117 23.9	182 37.2	143 29.2	47 9.6	489 100.0
女子	101 31.8	159 50.0	56 17.6	2 0.6	318 100.0
全体	218 27.0	341 42.3	199 24.7	49 6.1	807 100.0

Q3では「スポーツは運動能力が高い人だけが楽しめる文化だと思う」と、スポーツに対する考え方を尋ねた。結果は全体の85%が否定派であった(表3)。スポーツは運動能力の高低にかかわらずみんなが楽しめる文化である。スポーツは競技スポーツだけではなく、生涯スポーツやレクリエーションスポーツなど多種多様であり、自分のレベルや指向、ペースに合わせて楽しめることを理解させたい。

表3 スポーツは運動能力が高い人だけが楽しめる文化だと思う

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	270 55.2	149 30.5	60 12.3	10 2.0	489 100.0
女子	161 50.6	115 36.2	36 11.3	6 1.9	318 100.0
全体	431 53.4	264 32.7	96 11.9	16 2.0	807 100.0

Q4「運動は人間が生きていく上で欠かせないものだと思う」は、基本的な運動の必要性について質問したものである。結果は全体の約90%が肯定の回答であった。男女別で見ると、男子の「強くそう思う」割合が64.4%と、女子の54.4%に対して有意に高かった。この結果から、学生自身、運動の必要性については認識していることが分かった。最近の健康ブームもあり、運動の必要性は雑誌やTV番組など様々なところで説かれている。文明社会の中で運動の機会は減少しているものの、健康の維持増進を考えれば人間の生活から運動を欠くことは出来ないだろう。今後、運動をどのように実行させ、習慣化させるかが指導する側の課題

となるだろう。

表4 運動は人間が生きていく上で欠かせないものだと思う

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	9 1.8	29 5.9	135 27.7	315 64.5	488 100.0
女子	4 1.3	29 9.1	112 35.2	173 54.4	318 100.0
全体	13 1.6	58 7.2	247 30.6	488 60.5	806 100.0

Q5「授業の中で、誰にでも自分から積極的に声をかけて一緒に取り組むことができる」は、体育授業における他者との関わりに対する積極性についての質問である。

アンケートの結果、積極的に声をかけられる学生が約30%、かけられない学生が約70%であった。調査対象が1年生ではあるが、調査時期が10月であったことを考えると、もう少し積極性があるのではいかと考えられ、こうした社会性、コミュニケーション力の向上が今後望まれる。

身体リテラシーとは、単なる身体に対する知識、理解、運動の仕方だけでなく、身体活動をととした社会性をも含む包括的な概念である。したがって健康・運動学系では健康・運動科学実習の活動を通して、こうした他者への働きかけがスムーズにできるようになることも視野に入れて授業内容を検討していきたい。

表5 授業の中で、誰にでも自分から積極的に声をかけて一緒に取り組むことができる

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	90 18.4	253 51.7	116 23.7	30 6.1	489 100.0
女子	46 14.5	166 52.2	89 28.0	17 5.3	318 100.0
全体	136 16.9	419 51.9	205 25.4	47 5.8	807 100.0

Q6「健康運動科学実習がきっかけとなって出来た友人は、他の授業で出来た友人よりもたくさんいる」の質問に対する回答は表6の通りであった。全体の約3割が肯定であった。男女別で見ると、女子の肯定が33.4%と、男子の肯定26.1%に対して有意に高かった。運動することを主な目的として授業に参加する男子に対して、運動を通じて仲間作りしたい女子という傾向の違いが結果に表れているとも考えられる。Q5で述べたように、身体リテラシーには身体活動をする中で人間関係を作り上げていく能力を含んでおり、そのため健康・運動科学実習では特に1年前期の入学間もない時期に実技を通して積極的に仲間作りを促進させる授業内容を検討している。その狙いからするとこの質

問に対する回答は肯定派が多数であることが望ましいわけだが、決して期待通りの結果とは言えない。今後、男子も含めてさらに仲間作りの意識を高めていきたい。

表6 健康運動科学実習がきっかけとなってできた友人は、他の授業で出来た友人よりもたくさんいる

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	165 33.7	196 40.1	95 19.4	33 6.7	489 100.0
女子	85 26.7	127 39.9	80 25.2	26 8.2	318 100.0
全体	250 31.0	323 40.0	175 21.7	59 7.3	807 100.0

Q7「他の人のナイスプレーやいい動きを一緒になって喜んだり称賛したりできる」は、身体活動を集団で行う際の他者との関わりを考えたときに最も基本的なコミュニケーションスキルが、この「一緒になって喜ぶ」「称賛する」ことであると考え、調査したものである。結果は、ほぼ9割の学生が出来ると回答した。男女別で見ると、女子の肯定が93.1%と、男子の肯定87.0%よりも有意に高かった。今後、こうした基本的なスキルの上に、さらに高いレベルのコミュニケーションスキルを獲得させる授業内容の検討が必要となるだろう。

表7 他の人のナイスプレーやいい動きを一緒になって喜んだり称賛したりできる

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	11 2.2	53 10.8	169 34.6	256 52.4	489 100.0
女子	2 0.6	20 6.3	108 34.0	188 59.1	318 100.0
全体	13 1.6	73 9.0	277 34.3	444 55.0	807 100.0

Q8「授業の始まりや終わりに、相手よりも先に挨拶するほうだ」は、身体リテラシーの中で、マナーやコミュニケーションの積極性に関する質問である。挨拶という日常のマナーを、授業の仲間に対して積極的に出来るか尋ねてみた。結果は、「先に挨拶する」46.3%であった。

表8 授業の始まりや終わりに、相手よりも先に挨拶するほうだ

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	59 12.1	212 43.4	152 31.1	66 13.5	489 100.0
女子	24 7.5	138 43.4	137 43.1	19 6.0	318 100.0
全体	83 10.3	350 43.4	289 35.8	85 10.5	807 100.0

Q9「自分だけでなく、他の人も楽しんでいるかが

「すぐ気になる」は、他の人に意識を向けることが出来ているか、自己中心的な活動で終わっていないか調査してみたものである。結果は約4分の3が「気になる」と回答している。しかしこの結果が実習で高められたものなのか、学生が初めから持っていたものなのかは今回の調査からは不明である。

表9 自分だけでなく他の人も楽しんでいるかがすぐ気になる

	1 全くそう 思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	35 7.2	91 18.6	184 37.6	179 36.6	489 100.0
女子	13 4.1	64 20.1	143 45.0	98 30.8	318 100.0
全体	48 5.9	155 19.2	327 40.5	277 34.3	807 100.0

Q10「他の人も楽しめるように、自分から声をかけて働きかけていくほうだ」は、Q8の挨拶場面に対して、より一般的な活動場面で他者への積極的な関わりが出来るかどうか尋ねたものである。結果は「働きかけていく」38.1%と、Q8の挨拶場面よりも低い。挨拶のような決まったパターンのコミュニケーションなら進んで出来るが、その場の状況や人に応じた適切なコミュニケーションを図ることはそれなりのスキルが必要とされるため、少し躊躇してしまう学生の姿が思い浮かばれる。

表10 他の人も楽しめるように、自分から声をかけて働きかけていくほうだ

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	83 17.0	223 45.7	138 28.3	44 9.0	488 100.0
女子	47 14.8	146 45.9	101 31.8	24 7.5	318 100.0
全体	130 16.1	369 45.8	239 29.7	68 8.4	807 100.0

Q11「どんなスポーツでも自分の技量でそれなりに楽しめると思う」は、スポーツを楽しむ能力があるかどうかを調査したものである。結果は、約3分の2が「楽しめる」と回答している。男女別で見ると、男子の68.9%が「楽しめる」と回答しており、女子の61.3%よりも有意に高かった。今後の課題は、3人に1人がどのような理由で「楽しめない」と回答しているかを探り、彼等に幅広いスポーツの楽しみ方を提供するような授業を展開出来るかである。ここで言う「楽しむ能力」とは運動能力とは一致しない。何故ならたとえ運動能力が高くても自分の好きなスポーツ種目しかやろうとしないで「このスポーツはやってもつまらない」と決めつけてしまう人もいれば、運動能力は高くはないが「このスポーツはこうやったら面白そうだ」と楽し

み方を自分のレベルに合わせて工夫出来る人もいるからである。

表11 どんなスポーツでも自分の技量でそれなりに楽しめると思う

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	44 9.0	108 22.1	185 37.8	152 31.1	489 100.0
女子	29 9.1	94 29.6	123 38.7	72 22.6	318 100.0
全体	73 9.0	202 25.0	308 38.2	224 27.8	807 100.0

Q12「授業ではある程度決まった仲間と活動している」という質問に対する回答は表12の通りであった。約90%の学生が決まった仲間と活動していることが分かった。通年授業の後期に調査した結果であるので、授業が進むにつれ固定化していったのではないかと推察される。仲間作りやコミュニケーション力を高めることを身体リテラシー教育のねらいの一つとしていることを考えれば、出来るだけ多くの人と関わらせるような授業展開の工夫が望まれるところである。

表12 授業ではある程度決まった仲間と活動している

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	16 3.3	47 9.6	214 43.8	212 43.4	489 100.0
女子	14 4.4	22 6.9	144 45.3	138 43.4	318 100.0
全体	30 3.7	69 8.6	358 44.4	350 43.4	807 100.0

Q13「授業の中でたくさんの人と関わることが楽しい」は、他者とのコミュニケーションを楽しめるかについての質問である。結果は、全体で約3分の2(66.6%)が「楽しい」と回答している。男女別で見ると「楽しい」と答えた学生は、男子の61.7%に対して女子は73.9%と有意に高く、女子のコミュニケーション指向が男子よりも高いことが分かる。

表13 授業の中でたくさんの人と関わることが楽しい

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	32 6.5	155 31.7	207 42.3	95 19.4	489 100.0
女子	6 1.9	77 24.2	156 49.1	79 24.8	318 100.0
全体	38 4.7	232 28.7	363 45.0	174 21.6	807 100.0

Q14「この授業を通して、人とコミュニケーションをとるのが上手くなったと思う」に対する回答は、「上手くなった」が21%と芳しくない。しかしこれは授業でコミュニケーションスキルについて計画的に教えられてこなかったことを考えると、当然の結果であるとも言える。身体リテラシーの中にコミュニケーション

スキルが含まれることを念頭に置き、授業の中でも計画的にコミュニケーションスキルを身につけさせるプログラムを検討する必要があるだろう。

表14 この授業を通して、人とコミュニケーションをとるのが上手になったと思う

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	154 31.5	238 48.7	85 17.1	12 2.5	489 100.0
女子	76 23.9	170 53.5	68 21.4	4 1.3	318 100.0
全体	230 28.5	408 50.6	153 19.0	16 2.0	807 100.0

Q15会話の中ではどちらかという聞き役になることが多い」という質問に対する回答は、「聞き役が多い」が過半数を超えた。男女別で見ると、男子59.5%に対して女子50.9%と、聞き役になることが多い男子の割合が女子よりも有意に高かった。ただこの質問に対しては、話す方が積極的で良く、聞き役は良くないと単純に言えるものではないため、調査項目として再検討が必要である。

表15 会話の中ではどちらかという聞き役になることが多い

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	36 7.4	162 33.1	186 38.0	105 21.5	489 100.0
女子	22 6.9	134 42.1	106 33.3	56 17.6	318 100.0
全体	58 7.2	296 36.7	292 36.2	161 20.0	807 100.0

Q16「集団の輪の中に入っていきることが苦手である」はQ5やQ10とも関連するが、他者への積極的な関わりが出来るかについて、形を変えて尋ねてみたものである。結果は苦手な人が約50%であった。この質問についても、どんな集団の輪の中にでも全く抵抗無く入っていけることが良いことなのか、それともある程度の抵抗感があって当前なのかについて、議論の余地があるだろう。

表16 集団の輪の中に入っていきることが苦手である

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	67 13.7	182 37.2	139 28.4	101 20.7	489 100.0
女子	48 15.1	125 39.3	89 28.0	56 17.6	318 100.0
全体	115 14.3	307 38.0	228 28.3	157 19.5	807 100.0

Q17「自分は集団の盛り上げ役になっていると思う」に対する回答は表17の通りであった。結果は「盛り上げ役になっている」21%であった。この割合が適正かについては現時点で比較すべきデータがないため、今

後集団の活性化との関連を検討する必要がある。ただし他者とのコミュニケーションスキルレベルとして、集団の盛り上げ役になれる人は高いレベルにあると考えられる。仲間を笑わせたり場の雰囲気を和ませたりする人物が集団活動の潤滑油的存在となることによって、集団がまとまり、活動が活性化すると考えられる。

表17 自分は集団の盛り上げ役になっていると思う

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	172 35.2	214 43.9	79 16.2	23 4.7	488 100.0
女子	100 31.4	151 47.5	57 17.9	10 3.1	318 100.0
全体	272 33.7	365 45.3	136 16.9	33 4.1	806 100.0

Q18「人と関わるより、一人で黙々と練習したり試合したりするほうが好きだ」という質問に対して、約3割の学生が「一人で黙々とするほうが好き」と回答した。男女別では女子23.6%に対して男子34.0%と男子の方が有意に高く、女子よりも男子のほうが一人で取り組むスタイルを好んでいることが分かる。

表18 人と関わるより、一人で黙々と練習したり試合したりするほうが好きだ

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	146 29.9	176 36.1	101 20.7	65 13.3	488 100.0
女子	109 34.3	134 42.1	57 17.9	18 5.7	318 100.0
全体	255 31.6	310 38.5	158 19.6	83 10.3	806 100.0

Q19「どちらかという人に誘われてから、それに応じる方だ」はQ5やQ10と関連して、逆の受動的な立場からの質問をしたものである。結果は肯定回答が全体の約3分の2であった。

表19 どちらかという人に誘われてから、それに応じる方だ

	1 全く そう 思わない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	35 7.2	123 25.2	216 44.2	115 23.5	489 100.0
女子	22 6.9	102 32.1	116 36.5	78 24.5	318 100.0
全体	57 7.1	225 27.9	332 41.1	193 23.9	807 100.0

Q20「プレー中に自分の感情（喜び、くやしき等）を素直に表すことが出来る」という質問に対する回答は表20の通りであった。「出来る」が72.5%と多数を占めた。男女別で見ると、女子の「出来る」76.7%は男子の69.7%よりも有意に高かった。身体活動をする中で感情の表出をすることは、単にストレスを発散するためだけでなく、集団でスポーツを楽しむために大切

な要素であると考えられる。何故なら一緒にプレーする仲間がどのような気持ちでプレーしているかを感情の表出によって知ることが出来れば、Q7で問うたような称賛の言葉や、「ドンマイ！」等という声かけのコミュニケーションをとりやすくすることが出来るからである。こうした感情の素直な表出から徐々に仲間つくりにつなげていき、最終的に誰とでも抵抗無くコミュニケーションがとれるような身体リテラシーを育てていきたい。

表20 プレー中に自分の感情（喜び、くやしき等）を素直に表すことが出来る

	1 全くそう 思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	32 6.5	116 23.7	165 33.7	176 36.0	489 100.0
女子	14 4.4	60 18.9	125 39.3	119 37.4	318 100.0
全体	46 5.7	176 21.8	290 35.9	295 36.6	807 100.0

Q21「あなたは運動する（体を動かす）ことが好きですか？」という質問に対して、全体の84.2%が「好き」と回答している。しかし男女別で見ると、「好き」と答えた割合は、男子89.3%に対して女子は76.1%と有意に低く、女子が男子ほど運動を好んでいないことが分かった。今後、女子に対しても運動好きを増やすような授業の方策が検討される必要がある。

表21 あなたは運動する（体を動かす）ことが好きですか？

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	15 3.1	37 7.6	118 24.1	319 65.2	489 100.0
女子	17 5.3	59 18.6	10.3 32.4	139 43.7	318 100.0
全体	32 4.0	96 11.9	221 27.4	458 56.8	807 100.0

2. 学部間の比較から

各質問に対する回答を学部別に集計し、分析した。その結果以下のような学部の特徴が明らかとなった。

<教育学部>

Q2「スポーツは相手に勝たなければ意味がないと思う」肯定26.4%と、行政社会学部と経済学部の平均33.5%よりも有意に低く、勝利至上主義に否定的なスポーツ観を持つ教育学部生像が見える。また、Q5「誰にでも自分から積極的に声をかけて一緒に取り組む」（教育36.8%>行社・経済平均27.6%）し、Q7「他の人のナイスプレーやいい動きを一緒になって喜んだり賞賛したりできる」に「強くそう思う」教育59.4%>行社・経済平均52.3%、Q10「他の人も楽しめるように、自分から声をかけて働きかけていく」教育42.8%>

行社・経済平均35.0%、Q13「授業の中でたくさんの人と関わるのが楽しい」に「強くそう思う」教育25.2%>行社・経済平均19.2%、Q17「自分は集団の盛り上げ役になっていると思う」教育25.5%>行社・経済平均18.0%、Q20「プレー中に自分の感情を素直に表すことが出来る」に「強くそう思う」が教育41.2%>行社・経済平均33.5%と、スポーツの勝敗よりも仲間との関わりを授業やその他のスポーツ場面で強く意識している傾向が見られた。そしてその結果、Q6「健康運動科学実習がきっかけとなってできた友人は、他の授業で出来た友人よりもたくさんいる」に肯定した学生の割合は教育34.3%>行社・経済平均25.6%と、教育学部生が実習でたくさんの友人を作っている結果につながっていると考えられる。

<行政社会学部>

行政社会学部生は、Q3「スポーツは運動能力が高い人だけが楽しめる文化である」に「全くそう思わない」が行社64.7%と、教育54.1%経済47.4%に対して有意に高く、スポーツは万人が楽しめる文化であるという価値観を多くの行政社会学部生が持っていることが明らかとなった。

また、Q12「授業ではある程度決まった仲間と活動している」に「強くそう思う」が行社35.9%と教育、経済平均45.2%に比べて有意に低いことや、Q15「会話の中ではどちらかという聞き役になることが多い」に「強くそう思う」が行社25.6%と教育、経済平均18.6%に対して有意に高いこと、さらにQ18「人と関わるより、一人で黙々と練習したり試合したりする方が好きだ」行社37.8%と教育、経済平均28.0%に比べて有意に高いことから、つき合う相手を特に固定化しないが、つき合い方がやや受け身的でおとなしく、人との関係作りよりも自分にこだわりたい気質がありそうである。いかにも公務員的とは言い過ぎであろうが、人との関わりを好む教育学部生がいかにも教員的であるのと好対照な結果となった。

<経済学部>

極めて独断的に言えば教員的な教育学部生と、公務員的な行政社会学部生という特徴が出た2学部であるが、経済学部については特筆するような傾向が見られなかった。

3. 集団種目、個人種目という区分による比較から

健康運動科学実習では、1年を通じて自分の取り組

みたい種目を選択させている。中には選択希望者が集中して第2、第3希望へ変更を余儀なくされた学生もいるが、大多数の学生は希望どおりの種目を受講できている。そこで、集団種目を選択した学生と個人種目を選択した学生の間にどんな特性があるかについて分析した。ここで集団種目としたのは、「ソフトボール」「サッカー」「バスケットボール」「バレーボール」であり、個人種目としたのは「バドミントン」「ゴルフ」「テニス」「エアロビクス」である。

集団種目を選択した学生の運動、スポーツ観に関する特徴としては以下のとおりである。

Q1「自分の運動能力は高い方だと思う」45.4%と、個人種目33.4%に比べて有意に高い。

Q2「スポーツは相手に勝たなければ意味がないと思う」34.1%と、個人種目26.2%に比べて有意に高い。

Q4「運動は人間が生きていく上で欠かせないものだと思う」も64.3%と、個人種目55.3%に比べて有意に高い。

Q11「どんなスポーツでも自分の技量でそれなりに楽しめると思う」70.9%と個人種目59.4%よりも有意に高い。

Q21「あなたは運動することが好きですか？」91.3%と、個人種目74.6%に比べて有意に高い。

以上のことから、集団種目選択者は運動好きで、運動の必要性も理解しているが、運動に対する自信がある分、勝負にはこだわるといった傾向があることが分かった。

また、「他の人のナイスプレーやいい動きを一緒になって喜んだり賞賛したりできる」に「強くそう思う」が60.0%と、個人種目48.4%に比べて有意に高いことや、Q9「自分だけでなく、他の人も楽しんでいるかすごく気になる」に「すごくそう思う」が38.7%と、個人種目28.5%よりも有意に高いことから、集団種目らしい他者への共感や配慮が見られる。

そうした他者への配慮を授業で実践することにより、Q14「この授業を通して、人とコミュニケーションをとるのが上手くなったと思う」23.9%と、個人種目17.0%よりも有意に高いこと、またQ6「健康運動科学実習がきっかけとなってできた友人は、他の授業で出来た友人よりもたくさんいる」34.8%と、個人種目21.3%よりも有意に高い結果につながっていると考えられる。この結果が、集団種目を選択した学生が初めから持っていた特性なのか、実習を履修する中で育まれたものなのかを今後明らかにしていく必要がある。

一方、個人種目選択者の特徴としては、Q3「スポ

ーツは運動能力が高い人だけが楽しめる文化である」16.7%と、集団種目11.7%よりも有意に高く、少数ではあるがやや偏ったスポーツ観を持っている学生が多いことが分かった。またQ12「授業ではある程度決まった仲間で活動している」に「強くそう思う」が50.7%と、集団種目37.8%よりも有意に高く、これは個人種目選択者が元々持っている特徴なのか、あるいは個人種目の授業展開上、ある程度固定化してしまう傾向があるのかについては、今後さらに検討、分析を進めていく必要がある。

Ⅲ. 健康部門

1. 健康意識について

『あなたは自分を健康だと思えますか』との質問に対し、表22のような回答を得た。「強くそう思う」「そう思う」をあわせた肯定的な回答が70%近くを占めた。女子学生は男子学生に比べ肯定的に回答した割合が有意に高かった。

表22 あなたは健康だと思えますか

	1 全くそう 思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	55 11.3	112 23.0	226 46.3	95 19.5	488 100.0
女子	5 1.6	78 24.5	159 50.0	76 23.9	318 100.0
全体	60 7.4	190 23.6	385 47.8	171 21.2	807 100.0

『あなたは自分自身の日常生活は健康的だと思えますか』との質問に対し、表23のような回答を得た。約半数の学生が自分自身の日常生活を健康的であると肯定的に回答したものの、女子学生は男子学生に比べ肯定的に回答した割合が有意に高かった。

表23 あなたは自分自身の日常生活は健康的だと思えますか

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	103 21.1	185 37.9	161 33.0	39 8.0	488 100.0
女子	24 7.5	122 38.4	150 47.2	22 6.9	318 100.0
全体	127 15.8	307 38.1	311 38.6	61 7.6	806 100.0

『健康的な食生活を送っていますか』との質問に対し、表24のような回答を得た。日常生活と同様に約半数の学生が自分自身の日常生活を健康的であると肯定的に回答したものの、女子学生は男子学生に比べ肯定的に回答した割合が有意に高かった。

表24 健康的な食生活を送っていますか

	1 全くそ う思わない	2	3	4 強くそ う思う	合計
男子	106 21.7	167 34.2	176 36.0	40 8.2	489 100.0
女子	34 10.7	115 36.3	136 42.9	32 10.1	317 100.0
全体	140 17.4	282 35.0	312 38.7	72 8.9	806 100.0

2. 健康に関する自己評価と日常生活および食生活に関する自己評価との関連性

『あなたは自分を健康だと思えますか』との質問に対し肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生に比べ『あなたは自分自身の日常生活は健康的だと思えますか』との質問に対し肯定的に回答した割合が有意に高かった（表25）。

表25 自己の健康に関する評価と日常生活に関する評価との関係

		あなたは自分自身の日常生活は健康的だと思えますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
と あ な た は 自 分 を 健 康 だ と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	213 85.5	36 14.5	249 100
	肯定的回答群 (3または4)	221 39.7	335 60.3	556 100
	合計	434 53.9	371 46.1	805 100

同様に『あなたは自分を健康だと思えますか』との質問に対し肯定的に回答した学生は否定的に回答した学生に比べ『健康的な食生活を送っていますか』との質問に対し肯定的に回答した割合が有意に高かった（表26）。

表26 自己の健康に関する評価と食生活に関する評価との関係

		あなたは自分自身の日常生活は健康的だと思えますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
と あ な た は 自 分 を 健 康 だ と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	181 72.7	68 27.3	249 100
	肯定的回答群 (3または4)	241 43.3	315 56.7	556 100
	合計	422 52.4	383 47.6	805 100

以上のことから学生自身が考える「健康である」という状態は、日常生活および食生活の両方が健康的であるとの考えに起因している可能性が考えられる。

3. 食生活について

『食事の時刻は決まっていますか』との質問に対し、表27～29のような回答を得た。

50%弱の学生が朝食を決まった時刻に摂っていたが、

約20%の学生は朝食を欠食していた。男子学生は女子学生に比べ決まった時刻に朝食を食べる学生が有意に少なく、欠食する学生も有意に多かった。

表27 朝食の時刻は決まっていますか

	1 決まっ ている	2 決まっ ていない	3 食べない	合計
男子	181 37.0	189 38.7	119 24.3	489 100.0
女子	186 58.5	85 26.7	47 14.8	318 100.0
全体	367 45.5	274 34.0	166 20.6	807 100.0

昼食を欠食する学生はほとんどいなかった。しかし男子学生は女子学生に比べ決まった時刻に昼食を食べる学生が有意に少なかった。

表28 昼食の時刻は決まっていますか

	1 決まっ ている	2 決まっ ていない	3 食べない	合計
男子	343 70.1	140 28.6	6 1.2	489 100.0
女子	274 86.2	41 12.9	3 0.9	318 100.0
全体	617 76.5	181 22.4	9 1.1	807 100.0

夕食はほぼ全員が食べるものの約70%の学生はその時刻が一定ではなかった。この傾向は男女の間に差はなかった。

表29 夕食の時刻は決まっていますか

	1 決まっ ている	2 決まっ ていない	3 食べない	合計
男子	154 31.5	334 68.3	1 0.2	489 100.0
女子	93 29.2	222 69.8	3 0.9	318 100.0
全体	247 30.6	556 68.9	4 0.5	807 100.0

本調査は大学1年生に対して実施した。これまで親元で生活してきた学生にとって、自分で食事を作り、食べることは面倒で難しい。朝食を欠食する学生は20%と多い。夜更かし等が原因で起床時刻が遅くなり、朝食を食べる時間が無い学生が多いことが予想される。朝食を欠食する者の割合は、健康日本21では20歳代男性で32.9%、中学・高校生で6.0%であると報告され¹²⁾、健康ふくしま21計画では10歳代男性で22.0%、20歳代男性で40.4%であると報告されている¹⁵⁾。これらの報告と比べると福島大学1年生の朝食の欠食者の割合は決して多くない。しかし、健康日本21では「欠食の始まりは中学・高校生頃からという者が多くみられる」と述べている¹²⁾。一人暮らしが始まった大学生の欠食者が今後増加する可能性は十分考えられる。また授業に合わせて起床する傾向にあると考えられ、朝食は食べる

もののその時刻が決まっていない学生も多い。昼食は昼休みに食べる人が多いため、食べる時刻が決まっている傾向にある。しかし夕食は食べる時刻が決まっていない学生が多い。これは授業終了後の生活が毎日一定でないことが原因であると考えられる。クラブ活動やアルバイトなど、日によってスケジュールが異なり、決まった時刻での食事を困難にさせていると考えられる。食事の時刻が一定でないと血糖値等のサーカディアンリズムが一定でなくなり、様々なトラブルの原因になるといわれており注意が必要である。従って、食生活に関する学生教育が課題である。

4. 食生活に関する評価と食事の時刻との関係

『健康的な食生活を送っていますか』との質問に対し、肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生に比べ朝食の時刻が決まっていると回答した学生の割合が有意に高く、朝食を欠食する学生の割合が有意に低かった（表30）。

表30 食生活に関する評価と朝食の時刻との関係

		朝食の時刻は決まっていますか			
		1 決まっている	2 決まっていない	3 食べない	合計
健康的な食生活を送っていますか	否定的回答群 (1または2)	125 29.6	164 38.9	133 31.5	422 100
	肯定的回答群 (3または4)	241 62.8	110 28.6	33 8.6	384 100
	合計	366 45.4	274 34.0	166 20.6	806 100.0

昼食においても同様に、健康的な食生活を送っていると肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生に比べ昼食の時刻が決まっていると回答した学生の割合が有意に高かった（表31）。

表31 食生活に関する評価と昼食の時刻との関係

		昼食の時刻は決まっていますか			
		1 決まっている	2 決まっていない	3 食べない	合計
健康的な食生活を送っていますか	否定的回答群 (1または2)	290 68.7	126 29.9	6 1.4	422 100
	肯定的回答群 (3または4)	327 85.2	54 14.1	3 0.8	384 100
	合計	617 76.6	180 22.3	9 1.1	806 100.0

夕食においても同様に、健康的な食生活を送っていると肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生に比べ夕食の時刻が決まっていると回答した学生の割合が有意に高かった（表32）。

表32 食生活に関する評価と夕食の時刻との関係

		夕食の時刻は決まっていますか			
		1 決まっている	2 決まっていない	3 食べない	合計
健康的な食生活を送っていますか	否定的回答群 (1または2)	80 19.0	339 80.3	3 0.7	422 100
	肯定的回答群 (3または4)	167 43.5	216 56.3	1 0.3	384 100
	合計	247 30.6	555 68.9	4 0.5	806 100.0

以上より、食生活に関する自己評価と決まった時刻に食事をする事との間には関連性が高く、食生活の善し悪しの指標となっていることがわかった。

5. 生活習慣について

『健康的な睡眠を確保していますか』との質問に対し、表33のような回答を得た。肯定的な回答と否定的な回答がそれぞれ半数を占めた。

表33 健康的な睡眠を確保していますか

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	84 17.2	160 32.7	185 37.8	60 12.3	489 100.0
女子	29 9.1	119 37.4	117 36.8	53 16.7	318 100.0
全体	113 14.0	279 34.6	302 37.4	113 14.0	807 100.0

『日常の就寝時刻、起床時刻は決まっていますか』との質問に対し、次のような回答を得た。

約25%の学生で就寝時刻が決まっており、男女とも同じ傾向であった（表34）。

表34 就寝時刻は決まっていますか

	1 決まっている	2 決まっていない	合計
男子	121 24.7	368 75.3	489 100.0
女子	84 26.4	234 73.6	318 100.0
全体	205 25.4	602 74.6	807 100.0

就寝時刻の平均は0時49分であった。各時間帯の分布は表35の通りであった。午前0時以降に就寝する学生は90%近くを占めた。

表35 就寝時刻の度数分布

就寝時刻	人数	割合
21:00~21:59	3	0.4
22:00~22:59	8	1.0
23:00~23:59	97	12.4
0:00~0:59	266	34.0
1:00~1:59	246	31.5
2:00~2:59	129	16.5
3:00~3:59	28	3.6
4:00~4:59	5	0.6
合計	782	100.0

約60%の学生で起床時刻が決まっていた。女子学生の方が男子学生よりも起床時刻が決まっている割合が有意に高かった(表36)。

表36 起床時刻は決まっていますか

	1 決まっている	2 決まっていない	合計
男子	271 55.4	218 44.6	489 100.0
女子	215 67.6	103 32.4	318 100.0
全体	486 60.2	321 39.8	807 100.0

起床時刻の平均は7時09分であった。起床時刻の分布は表37の通りであった。7時台に起床する学生が多く、次いで6時台、8時台であった。1時間目の授業が始まるのが8時40分であること、学生の多くがキャンパスの近くに住んでいることが今回の結果の要因であると考えられる。

表37 起床時刻の度数分布

起床時刻	人数	割合
4:00~4:59	2	0.3
5:00~5:59	48	6.2
6:00~6:59	216	27.9
7:00~7:59	341	44.0
8:00~8:59	121	15.6
9:00~9:59	34	4.4
10:00~10:59	13	1.7
合計	775	100.0

睡眠時間の平均値は6時間21分であった。睡眠時間の分布は表38の通りであった。

表38 睡眠時間の度数分布

睡眠時間	人数	割合
3:00~3:59	7	0.9
4:00~4:59	55	7.1
5:00~5:59	162	21.0
6:00~6:59	286	37.1
7:00~7:59	189	24.5
8:00~8:59	60	7.8
9:00~9:59	10	1.3
10:00~10:59	2	0.3
合計	771	100.0

『あなたはたばこを吸っていますか』との質問に対し、表39のような回答を得た。健康日本21では高校3年生の毎日喫煙者の割合は男子で25.4%、女子で7.1%に達していると報告され¹³⁾、健康ふくしま21計画では15~19歳の喫煙率は男性で8.7%、女性で2.4%と報告されている¹⁴⁾。これらの報告と本調査の結果にはばらつきがある。これは各調査の方法や対象が異なるためと考えられる。健康ふくしま21計画では、家族ごとに調査用紙を回収したため、家族に内緒で喫煙している未成年者のデータが欠けている可能性が考えられる。一方、本調査では授業時間中に教員がいる部屋の中で実施したこと、この調査結果を授業評価等には利用しないことや未成年者の喫煙者に対しても特別な対応はしないことを調査時に伝えたが、他の調査項目と一緒に調査したため記名方式で実施したことなど、喫煙率を正確に調査することに関してその方法に欠点があった。福島大学1年生の実態を正確に把握するためには、さらなる厳密な調査が必要である。

表39 あなたはたばこを吸っていますか

	1 吸っている	2 吸っていない	3 以前吸っていた	合計
男子	78 16.0	393 80.4	18 3.7	489 100.0
女子	8 2.5	304 95.6	6 1.9	318 100.0
全体	86 10.7	697 86.4	24 3.0	807 100.0

喫煙者(現在の喫煙者)の1日あたりの喫煙本数は 9.3 ± 6.9 (平均値 \pm 標準偏差)本、最大値は30本であった。男子では 9.6 ± 6.3 本、女子では 7.1 ± 10.5 本であった。

『たばこは健康の維持増進のために良いと思いますか。悪いと思いますか。』との質問に対し、表40のような回答を得た。「どちらともいえない」と回答した学生が約6%、男子学生においては8%もいた。喫煙により「気持ちが落ち着く」、「イライラが解消する」、「ストレス発散する」など、喫煙者における一時的な効果

はニコチン中毒が招いたものであることがわかっており、非喫煙者が喫煙することにより同様の効果が得られるわけではないことは明白である。これらの防煙教育を大学生にも実施する必要性も感じられる。

表40 たばこは健康の維持増進のために良いと思いますか。悪いと思いますか。

	1 良い	2 悪い	3 どちらともいえない	合計
男子	9 1.8	441 90.2	39 8.0	489 100.0
女子	0 0.0	309 97.2	9 2.8	318 100.0
全体	9 1.1	750 92.9	48 5.9	807 100.0

『あなたはお酒を飲みますか』との質問に対し、表41のような回答を得た。この質問も喫煙同様、未成年者の飲酒に対して特別な対応をしないことを伝えて調査した。

大学生になると飲酒の機会も増える。機会飲酒と答えた学生が80%以上いたことからいわゆる「飲み会」が飲酒の機会を増大させていると考えられる。

表41 あなたはお酒を飲みますか

	1 飲む	2 機会飲酒	3 飲まない	合計
男子	40 8.2	388 79.5	60 12.3	488 100.0
女子	7 2.2	281 88.4	30 9.4	318 100.0
全体	47 5.8	669 83.0	90 11.2	806 100.0

『飲酒は健康の維持増進のために良いと思いますか。悪いと思いますか。』との質問に対し、表42のような回答を得た。飲酒の効能は様々な意見があり単純に善し悪しを決めかねる。本調査で「どちらともいえない」との回答が多かったのは、このことを反映してのことかも知れない。しかし、多量の飲酒や習慣性の飲酒は健康を損ねることは周知の事実である。「良い」と回答する男子学生が約20%もいたことは今後のアルコール教育についての課題と考えられる。

表42 飲酒は健康の維持増進のために良いと思いますか。悪いと思いますか。

	1 良い	2 悪い	3 どちらともいえない	合計
男子	98 20.1	67 13.7	323 66.2	488 100.0
女子	23 7.3	36 11.4	258 81.4	317 100.0
全体	121 15.0	103 12.8	581 72.2	805 100.0

6. 体格について

『あなた自身の健康にとって望ましい体重を答えて

ください』という質問に対する回答は、男子学生では63.1±6.3kg、女子学生では48.9±4.6kgであった。一方実際の体重では男子学生は64.0±9.9kg、女子学生は53.1±7.8kgであった。

実体重に対する健康にとって望ましい体重と実体重との差の割合(=(望ましい体重-実体重)÷実体重×100)を算出した。結果がプラスであれば、実体重の方が少なく体重を増やした方が良いと考えられ、マイナスであれば実体重の方が多く、体重を減らした方が良いと考えられる。全体では-3.09±10.11%、男子学生では-0.49±10.50%、女子学生では-7.07±8.01%であり、女子学生では望ましいと考えている体重よりも実体重の方が重い傾向が認められた。

BMIが適正(18.5~25)である学生を抽出し(男子387名、女子254名)、彼らにおける「実体重に対する健康にとって望ましい体重と実体重との差の割合」を算出すると全体では-2.53±7.65%、男子では0.15±7.54%、女子では-6.62±5.78%であった。

望ましいと考える体重と実体重においてピアソンの積率相関係数を求めると、男子学生では0.592、女子学生では0.721といずれも有意な相関であったが、女子学生の方がその相関が高かった。

『現在のあなたの体重は、健康にとって望ましいと考える体重と比べて、重いですか?軽いですか?』という質問に対して、「非常に重い」を5、「非常に軽い」を1とした5段階評価において、表43のような回答を得た。

表43 現在のあなたの体重は、健康にとって望ましいと考える体重と比べて、重いですか。軽いですか。

	1 非常に軽い	2	3	4	5 非常に重い	合計
男子	25 5.1	119 24.3	165 33.7	137 28.0	43 8.8	489 100.0
女子	3 0.9	19 6.0	85 26.7	151 47.5	60 18.9	318 100.0
全体	28 3.5	138 17.1	250 31.0	288 35.7	103 12.8	807 100.0

『現在のあなたの体脂肪率は健康にとって望ましいと考える体脂肪率に比べて、高いですか?低いですか?』という質問に対する5段階評価において、表44のような回答を得た。

表44 現在のあなたの体脂肪率は、健康にとって望ましいと考える体脂肪率と比べて、高いですか。低いですか。

	1 非常に低い	2	3	4	5 非常に高い	合計
男子	4 0.8	52 11.0	172 36.4	193 40.8	52 11.0	473 100.0
女子	1 0.3	11 3.5	95 30.3	145 46.2	62 19.7	314 100.0
全体	5 0.6	63 8.0	267 33.9	338 42.9	114 14.5	787 100.0

体格について半数以上の学生が「体重が重い」「体脂肪率が高い」と感じており、この傾向は男子学生(約50%)よりも女子学生(約65%)の方が強かった。

これらの結果から、男子学生では望ましい体重と実体重との間に差が小さい学生と大きい学生が混在している。一方、女子学生の方が望ましいと考えている体重と実体重との間に差は大きい。関連性が高く、且つ一様に実体重よりも健康にとって望ましいと考える体重の方が軽いことがわかる。これは、望ましい体重を適切に理解していないか、あるいは近年いわれている女性における瘦身願望が健康にとって望ましい体重に反映された可能性が考えられる。しかし、「ちょうど良い」と感じている学生の割合も多く、ある程度は適切な考えを持って生活していることも伺える。

7. 運動能力および健康と運動について

『あなたは、自分自身に体力がありますか』という質問に対し、表45のような回答を得た。肯定的に回答した学生が約40%おり、男子学生が肯定的に回答した割合は女子学生が肯定的に回答した割合よりも有意に高かった。

表45 あなたは自分自身に体力がありますか

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	90 18.4	191 39.1	169 34.6	39 8.0	489 100.0
女子	51 16.1	155 48.9	94 29.7	17 5.4	317 100.0
全体	141 17.5	346 42.9	263 32.6	56 6.9	806 100.0

『あなたは、自分自身に筋力がありますか』という質問に対し、表46のような回答を得た。約3分の1の学生が肯定的に回答した。男子学生が肯定的に回答した割合は女子学生が肯定的に回答した割合よりも有意に高かった。

表46 あなたは自分自身に筋力がありますか

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	84 17.2	220 45.0	154 31.5	31 6.3	489 100.0
女子	73 23.0	156 49.1	79 24.8	10 3.1	318 100.0
全体	157 19.5	376 46.6	233 28.9	41 5.1	807 100.0

『あなたは、自分自身に瞬発力がありますか』という質問に対し、表47のような回答を得た。肯定的に回答した学生が約40%いた。男子学生が肯定的に回答した割合は、女子学生が肯定的に回答した割合に比べ有意に高かった。

表47 あなたは自分自身に瞬発力がありますか

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	63 12.9	185 37.8	188 38.4	53 10.8	489 100.0
女子	70 22.0	142 44.7	86 27.0	20 6.3	318 100.0
全体	133 16.5	327 40.5	274 34.0	73 9.0	807 100.0

『あなたは、自分自身に持久力がありますか』という質問に対し、表48のような回答を得た。肯定的に回答した学生が約3分の1であり、その傾向は男女とも同様であった。

表48 あなたは自分自身に持久力がありますか

	1 全くそう思わない	2	3	4 強くそう思う	合計
男子	137 28.0	184 37.6	126 25.8	42 8.6	489 100.0
女子	95 29.9	125 39.3	84 26.4	14 4.4	318 100.0
全体	232 28.7	309 38.3	210 26.0	56 6.9	807 100.0

8. 体力に関する自己評価と筋力、瞬発力、持久力に関する自己評価との関係

『あなたは自分自身に体力がありますか』との質問に対し、肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生と比べ、『あなたは自分自身に筋力がありますか』『あなたは自分自身に瞬発力がありますか』『あなたは自分自身に持久力がありますか』のいずれの質問に対しても肯定的に回答した割合が有意に高かった(表49~51)。その傾向は持久力を問う質問でもっとも顕著であった。以上のことから、自分自身の体力の評価は持久力の評価に寄与している割合が大きく、また筋力や瞬発力にも関連性があることがわかった。一般的に考えられている『体力≒持久力』というイメージは、本調査における福島大学生においても同様であった。

表49 体力に関する自己評価と筋力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に筋力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
力 あなた は自分 自身に 体力 があ るか と思 いま すか	否定的回答群 (1または2)	387 79.5	100 20.5	487 100
	肯定的回答群 (3または4)	145 45.5	174 54.5	319 100
	合計	532 66.0	274 34.0	806 100

表53 運動愛好度と筋力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に筋力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
か ず あ な た は 運 動 す る 事 が 好 き で す か	否定的回答群 (1または2)	111 86.7	17 13.3	128 100
	肯定的回答群 (3または4)	422 62.2	257 37.8	679 100
	合計	533 66.0	274 34.0	807 100

表50 体力に関する自己評価と瞬発力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に瞬発力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
力 あ な た は 自 分 自 身 に 体 力 が あ る と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	334 68.6	153 31.4	487 100
	肯定的回答群 (3または4)	125 39.2	194 60.8	319 100
	合計	459 56.9	347 43.1	806 100

表54 運動愛好度と瞬発力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に瞬発力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
か ず あ な た は 運 動 す る 事 が 好 き で す か	否定的回答群 (1または2)	104 81.3	24 18.8	128 100
	肯定的回答群 (3または4)	356 52.4	323 47.6	679 100
	合計	460 57.0	347 43.0	807 100

表51 体力に関する自己評価と持久力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に持久力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
力 あ な た は 自 分 自 身 に 体 力 が あ る と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	434 89.1	53 10.9	487 100
	肯定的回答群 (3または4)	106 33.2	213 66.8	319 100
	合計	540 67.0	266 33.0	806 100

表55 運動愛好度と持久力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に持久力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
か ず あ な た は 運 動 す る 事 が 好 き で す か	否定的回答群 (1または2)	115 89.8	13 10.2	128 100
	肯定的回答群 (3または4)	426 62.7	253 37.3	679 100
	合計	541 67.0	266 33.0	807 100

9. 運動愛好度と体力の要素の自己評価との関係

『あなたは運動する（身体を動かす）ことが好きですか』との質問に対して肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生に比べ、体力、筋力、瞬発力、持久力に関する自己評価のいずれの質問に対し肯定的に回答した割合が有意に高かった（表52～55）。つまり運動の好き嫌いは、身体能力の有無の自己評価との関連性が高いことがわかった。

表52 運動愛好度と体力に関する自己評価との関係

		あなたは自分自身に体力があると思いますか		
		否定的回答群 (1または2)	肯定的回答群 (3または4)	合計
か ず あ な た は 運 動 す る 事 が 好 き で す か	否定的回答群 (1または2)	114 89.1	14 10.9	128 100
	肯定的回答群 (3または4)	373 55.0	305 45.0	678 100
	合計	487 60.4	319 39.6	806 100

10. 体力テストの総合評価との関係

文部科学省の体力・運動能力テストの結果と身体活動や運動能力に関する自己評価との関連性を検討すると、運動能力等に関する自己評価で肯定的に回答した学生は、否定的に回答した学生と比べ、体力・運動能力テストの成績が良い（総合評価がAまたはB）割合が有意に高く、学生自身の自己評価にはある程度の根拠があることがわかった（表56～61）。

表56 運動能力自己評価と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
方 だ と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	95 23.9	303 76.1	398 100
	肯定的回答群 (3または4)	173 67.1	85 32.9	258 100
	合計	268 40.9	388 59.1	656 100

表57 運動愛好度と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
あなた は運動 する こと が好 ま し か ら い ま す か	否定的回答群 (1または2)	9 8.9	92 91.1	101 100
	肯定的回答群 (3または4)	259 46.7	296 53.3	555 100
	合計	268 40.9	388 59.1	656 100

表62 身体活動自己評価と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
あなた は日 常身 体 を 動 か し て い る 方 だ と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	120 29.1	292 70.9	412 100
	肯定的回答群 (3または4)	147 60.5	96 39.5	243 100
	合計	267 40.8	388 59.2	655 100

表58 体力自己評価と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
あなた は自 分自 身に 体 力 が あ る と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	108 27.3	287 72.7	395 100
	肯定的回答群 (3または4)	160 61.3	101 38.7	261 100
	合計	268 40.9	388 59.1	656 100

表59 筋力自己評価と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
あなた は自 分自 身に 筋 力 が あ る と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	124 29.1	302 70.9	426 100
	肯定的回答群 (3または4)	144 62.6	86 37.4	230 100
	合計	268 40.9	388 59.1	656 100

表60 瞬発力自己評価と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
あなた は自 分自 身に 瞬 発 力 が あ る と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	110 29.3	265 70.7	375 100
	肯定的回答群 (3または4)	158 56.2	123 43.8	281 100
	合計	268 40.9	388 59.1	656 100

表61 持久力自己評価と文部科学省体力テスト総合評価との関係

		文部科学省体力運動能力テストの総合評価		
		上位群 (AまたはB)	下位群 (C、D、E)	合計
あなた は自 分自 身に 持 込 力 が あ る と 思 い ま す か	否定的回答群 (1または2)	138 31.7	298 68.3	436 100
	肯定的回答群 (3または4)	130 59.1	90 40.9	220 100
	合計	268 40.9	388 59.1	656 100

11. 運動と健康について

『あなたは、日常身体を動かしている方だと思いませんか』という質問に対し、表63のような回答を得た。日頃身体を動かしているのは女子学生よりも男子学生の方が多かった。女子学生は自分自身の体重が重い、体脂肪率が高いと感じているもののそれを改善するために運動（身体活動）に取り組む姿勢が不足していることが伺える。今後大学において身体活動量を増加させるような授業や体格改善を促す授業を展開することでこれを改善することができる可能性が考えられる。またいかに日常生活において身体活動量を増大させるかを考えさせ実践させるプログラムも必要と考えられる。

表63 あなたは日常身体を動かしている方だと思いませんか

	1 全く そう 思わ ない	2	3	4 強く そう 思う	合計
男子	92 18.9	183 37.5	114 23.4	99 20.3	488 100.0
女子	88 27.7	149 46.9	52 16.4	29 9.1	318 100.0
全体	180 22.3	332 41.2	166 20.6	128 15.9	806 100.0

『健康の維持増進のためにはどんな運動がもっとも良いと思いませんか』という質問に対し、表64のような回答を得た。持続的な運動が健康の維持増進のために良いという認識が広まっていることが確認された。女子学生において筋力トレーニング的な運動と回答した割合が多いのは、シェイプアップ等においてレジスタンストレーニングの有用性が説かれる機会が多いことに起因していると考えられる。

表64 健康の維持増進のためにはどんな運動が良いと思いませんか

	1 持 続 的 な 運 動	2 瞬 発 的 な 運 動	3 筋 力 ト レ ー ニ ン グ 的 な 運 動	4 息 こ ら え	合計
男子	409 83.8	19 3.9	54 11.1	6 1.2	488 100.0
女子	248 78.5	3 0.9	64 20.3	1 0.3	316 100.0
全体	657 81.7	22 2.7	118 14.7	7 0.9	804 100.0

12. 日常身体活動量

1週間あたりの日常身体活動量は4401±4770kcal/wkであった。男子学生では5061±4941kcal/wk、女子学生では3459±4352kcal/wkであった。1週間あたり2000kcal未満の身体活動量しかない学生は、全体で39.4%、男子学生では29.5%、女子学生では53.6%と、女子学生の方が有意に高かった。

生活習慣病等の予防のためには、1週間あたり2000kcal以上の身体活動量を確保することが推奨されている。本調査の対象となった大学1年生においては平均すると男女とも十分な身体活動量を確保しているといえる。しかし、推奨される2000kcalよりも少ない学生が約40%、女子学生においては50%以上がこの条件を満たしていない。従って授業において日常身体活動量を高める何らかのアプローチが必要である。

13. 運動セルフ・エフィカシー

岡の運動セルフ・エフィカシー尺度を用い、定期的に運動することに対する学生の「自信の程度」を評価した。尺度は運動を行うのに阻害的に作用する五つの状況のもとでの運動を行う自信の程度を「全くそう思わない」から「かなりそう思う」までの5段階で回答を求めるものである。この5段階に対応させて1から5点を配し合計点を算出した。したがって自信の程度を表す点数の最小は5点、最大は25点となる。結果は表65のとおりである。

表65 運動セルフ・エフィカシー集計表、合計点の分布

	平均値	標準偏差	10点以下	11～19点	20点以上
男子 (488人)	15.8	4.617	71	310	107
%			14.5	63.5	21.9
女子 (317人)	14.1	4.197	74	207	36
%			23.3	65.3	11.4
合計 (805人)	15.2	4.530	145	517	143
%			18.0	64.2	17.8

得点の平均値は男子の15.8点に対し女子は14.1点とやや低い。また、合計点が10点以下の自信の程度が低い者の割合も男子14.5%に対して女子は23.3%と有意に多い。20点以上の自信の程度が高い者の割合と好対照をなしており、女子の運動への意欲を高めていくことが課題としてみえている。

表66はQ21「運動をする(体を動かす)ことが好きか」に対する回答で区分される4群について、運動セルフ・エフィカシー得点の平均値を比べたものである。

全体の6割近くを占める運動への愛好度が高い群でも自信の程度の平均値は17.1であり、全体の平均15.2をわずかに上回っているにすぎない。健康の保持増進のためには継続的な運動が重要な要件である。定期的な運動を継続する意識と意欲を高めるプログラムの必要性が確認された。

表66 セルフ・エフィカシーと関連項目

Q21運動愛好度	平均	標準偏差	人数
1. 全くそう思わない	9.5	4.558	32
2	11.3	3.240	96
3	13.6	3.439	220
4. 強くそう思う	17.1	4.082	457

引用・参考文献

- 1) 工藤孝幾、「一般体育実技・理論の改革に向けて」アリーナNo.8、1991
- 2) 工藤孝幾、「保健体育系列での検討状況」第4回一般教育問題研究会報告集、1991
- 3) 工藤孝幾、「福島大学における保健体育科目のあり方に関する検討」アリーナNo.13、1993
- 4) 黒須 充、「新しい体育のカリキュラム」アリーナNo.16、1993
- 5) 新谷崇一、「スポーツ＝文化の享受」アリーナNo.17、1994
- 6) 黒須 充、「健康・運動科目の現状と課題」第1回共通教育問題研究会報告書、1997
- 7) 「健康・運動科目について」平成12年度共通教育アンケート調査結果、2000.3
- 8) 「健康・運動科目について」平成13年度共通教育アンケート調査結果、2001.3
- 9) 「健康・運動科目について」平成14年度学生による共通教育アンケート調査結果実施報告書、2002.3
- 10) 「健康・運動科目について」平成15年度学生・教員による共通教育アンケート調査結果実施報告書、2004.3
- 11) 村瀬訓生ら、「身体活動量の国際標準化 ～I P A Q日本語版の信頼性、妥当性の評価～」、厚生省の指標、第49巻、第11号、2002、pp1-9
- 12) 健康日本21企画検討会・健康日本21計画策定検討会、「健康日本21(21世紀における国民健康づくり運動について)」、財団法人健康・体力づくり事業財団、2000、pp71-89
- 13) 同上、pp111-116
- 14) 「健康ふくしま21計画」策定委員会、「健康ふくしま21計画～健康寿命の延伸をめざして～」、福島県保健福祉部、2001、pp33-38、
- 15) 同上、pp39-46
- 16) 佐藤学、「イニシエーションを奪われた若者たち」『ひと』、

1995

- 17) 佐藤学、対談集「身体ダイアログ」、2002、pp10-30
- 18) 岡浩一郎、「中高年者における運動行動変容の段階と運動セルフ・エフィカシーの関係」、日本公衆衛生雑誌 2002

《調査報告》

〈判例評釈〉

「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記

—最判（2小）平成14年6月10日判例時報1791号59頁—

富田 哲

【事案】

原告Xは被相続人Aの妻である。Aは本件不動産の権利一切をXに相続させる旨の遺言をした（第一遺言）。さらに第一遺言の約1年4か月後に、Aは追加の遺言をし、一切の財産をXに相続させる旨、および遺言執行者としてXを指定する旨を遺言した（第二遺言）。法定相続人の一人であるB（AおよびXの長男）の債権者であるYらは、Bに代位してBの法定相続分（2分の1）につき、不動産上の権利を相続した旨の登記を経由したうえで、Bの持分に対する仮差押えおよび差押えをしたことから、Xはこの仮差押えの執行および強制執行の排除を求めて、第三者異議訴訟を提起した。

第一審は、いずれもXの請求を認容した。仮差押えに対する第三者異議に対しては、被相続人Aの遺言は、第一遺言および第二遺言によって、自己の全財産をXに包括遺贈したものと認められ、原則として、対抗要件を具備する必要があるが、第二遺言によってXを遺言執行者として指定している以上、相続人は遺言執行者による遺言の執行の妨げとなる行為をすることができないから、遺言執行者が登記手続をしないうちにBが自らまたはBの債権者が同人を代位して権利移転登記をしても民法1013条に抵触するから仮差押え執行の登記は許されないものとした。差押えに対する第三者異議に対しては、被相続人Aの遺言については、第一遺言および第二遺言を総合して検討するべきであり、結局、被相続人Aの処分は包括遺贈であるとし、XはYに対して登記なくして対抗することができると解した。

原審は、次のように述べて、Yの控訴をいずれも棄却した。遺言書において特定の遺産を特定の相続人に「相続させる」旨の遺言者の意思が表明されている場合は、遺言書の記載からその趣旨が遺贈であることが明らかである場合であるか、または遺贈と解すべき特段の事情がない限り、遺贈と解すべきでない。……本件においては、第一遺言によって本件不動産につき被相続人Aが有していた権利は、Aの死亡と同時に、直

接Xに承継されたものというべきである。民法177条の適用については、「相続させる」旨の遺言による遺産の承継は、被相続人から当該相続人に対して、相続開始と同時に直ちに生ずるのであって、一時的にせよ他の相続人がその権利を取得することはないから、相続開始後における相続人間の権利の得喪変更を観念する余地がない。したがって、Xは、本件各物件について被相続人Aが有していた権利の相続による取得をその旨の登記がなくても、Yらに対抗することができるというべきである。

Yらから上告。

【判旨】 上告棄却

特定の遺産を特定の相続人に「相続させる」趣旨の遺言は、特段の事情のない限り、何らの行為を要せずに、被相続人死亡の時に直ちに当該遺産当該相続人に相続により承継される（最判平成3年4月19日民集45巻4号477頁参照）。このように「相続させる」趣旨の遺言による権利の移転は、法定相続分又は指定相続分の相続の場合と本質において異なるところはない。そして法定相続分又は指定相続分の相続による不動産の権利の取得については、登記なくしてその権利を第三者に対抗することができる（最判昭和38年2月22日民集17巻1号235頁参照）。したがって、本件において、被上告人は、本件遺言によって取得した不動産又は共同持分権を、登記なくして上告人らに対抗することができる。

【研究】

1 本件判決の問題点

(1) 本件判決の構成

最高裁平成14年6月10日の第2小法廷判決^①（以下、「本件判決」とする）は、いわゆる「相続させる」趣旨の遺言によって不動産を相続した場合に、受益者たる相続人はその取得を登記なくして第三者に対抗できる旨を判示したものである。本件判決は、いわゆる「相

続させる」趣旨の遺言に関する平成3年の最高裁判決⁽²⁾

(以下、「平成3年判決」とする)と相続分の指定と登記に関する平成11年の最高裁判決⁽³⁾(以下、「平成11年判決」とする)との結合から生み出された。すなわち、平成3年判決によると、「相続させる」趣旨の遺言は、遺産の分配の方法を定めた遺言であり、他の共同相続人も右遺言に拘束され、これと異なる遺産分割の協議、さらには審判もなし得ないのであるから、このような遺言にあっては、遺産の一部である当該遺産を当該相続人に帰属させる遺産の一部の分割がなされたのと同様の遺産の承継関係を生ぜしめるものであり、当該遺産において相続による承継を当該相続人の受諾の意思表示にかからせたなどの特段の事情のない限り、何らの行為を要せずして、被相続人の死亡の時(遺言の効力の生じた時)に直ちに当該遺産が当該相続人に相続により承継されるものと解すべきである」と判示しており、他方、平成11年判決によると、「相続分の指定により相続分はないとされた者は、相続により土地の持分を取得していないから、同人名義の登記は全部無効であり、したがって、YによるB持分の仮差押えは無効であるから、Xらは、Yに対し、自己の持分を登記なくして対抗できる」と判示している。

平成3年判決においては、受益者たる相続人と他の共同相続人との関係が問題となったケースであったのに対して、本件判決は受益者たる相続人と第三者との関係が問題となったケースである。法定相続分にもとづく不動産の取得と登記との関係につき、昭和38年の最高裁判決⁽⁴⁾(以下、「昭和38年判決」とする)は、いわゆる無権利説を採用し、相続人は登記なくして自己の相続分(なお、判決文においては、「持分」という文言が用いられている)を第三者に対抗することができるとしている。さらに平成11年判決によると、法定相続分を超える相続分の指定を受けた相続人と第三者との関係が問題となったケースにつき、やはり無権利説の立場から、相続人は自己の相続分(ここでも「持分」という文言を使用している)を登記なくして第三者に対抗できるものとしている。それゆえ、これらの判例の法理を結びつけると、「相続させる」趣旨の遺言によって当該不動産につき所有権を取得しなかった相続人は、この不動産については無権利者であって、たとえこの者につき当該不動産に関する相続登記がなされたとしても、この登記は無効である。そして第三者が登記名義を有している相続人から当該不動産の譲り受けたとしても、この不動産を取得することはできない。登記に公信力がない以上、本件判決のような結論が導き出

されたのである。

(2) 本件判決の妥当性

本件判決における被相続人Aは、まさに当該不動産を原告Xに与えるという強い意思を有しており、しかもXの生活状況を考えて、できるかぎりXに多くの遺産を与えようとしていたことが窺われる。その点からすると、本件判決は被相続人の意思にかなり忠実な判決であったといえよう。しかし、「相続させる」趣旨の遺言により不動産を特定の相続人に与える旨の遺言をして、法定相続分を超える部分についても対抗問題となる余地がなくなるとするならば、被相続人の意思を重視するあまり、第三者には知ることができない遺言という手段によって、受益者たる相続人以外の相続人から当該不動産を譲り受けた第三者の利益を不当に害するおそれがある。

次に、本件判決における第三者は不動産取引を業としている者と推測されうる。それに対して、原告は不動産取引に関しては、まったくの素人である。しかも被相続人は原告の老後の生活を考慮して、かかる遺言をしたのである。さらに被告は被相続人の息子(B)と取引関係にあり、Bは多額の負債を被告に負っていたのであるから、被相続人としてはかかる負債のために相続財産が使われることに対して嫌悪感を有していたのではあるまいか。不動産取引に関して専門的な知識を有する者とそうでない者とは、登記の必要性の認識に関して、非常に大きい相違がある。このような視点からすると、相続人を保護した本件判決は、その結論に関しては、妥当なものであったという評価もできよう⁽⁵⁾。

本件判決の事例においては、受益者たる相続人は他の相続人の遺留分を侵害しているが、この場合に他の相続人(B)は遺留分減殺請求権を行使することができる。しかし本件においては、他の相続人(B)がこれを行使するとは思われず、この権利は一身専属的な権利であって、債権者代位権の対象とはなりえないものと解されている⁽⁶⁾。それゆえ、相続人の債権者はこの遺言に沿った不動産の取得に対してまったく容喙しえないことになる。「相続させる」趣旨の遺言があるか否かも、相続分を指定する遺言があるか否かも、外部の者は知ることができない。本件判決に従う以上、相続人の債権者が法定相続分までは追及できるという期待を抱いていたとしても、その期待は一方的に奪われる結果となる。

そこで、本稿においては、相続関係と登記に関する

最高裁の判例の検討を通じて、受益者たる相続人と当該不動産を譲り受けた第三者の保護とをいかに調整していくかという観点から、この問題にアプローチしていきたい。

2 相続をめぐって登記の要否が問題となるケース

(1) 相続関係と登記が問題となる場合

相続は人の生死に伴う一つの「事件」である。その意味で相続は意思を基礎にする法律行為とは異質なものである。しかし、相続は売買などの取引行為と並んで不動産の物権変動をもたらす重要な要因である⁽⁷⁾。それゆえ、相続に関連する不動産物権変動を軽視することはできないし、当然、第三者に対する影響にも大きいものがある。そこで、相続財産を構成していた不動産の取得をめぐって、相続人と第三者との間でその帰属が争いになったケースとして、①法定相続分と登記、②相続分の指定と登記、③相続放棄と登記、④遺産分割と登記、⑤遺贈と登記に関する判例を概観しておくことにしたい。

(2) 法定相続分と登記

法定相続分と登記に関して、共同相続人の一人が相続放棄書を偽造して、単独相続による所有権移転登記手続をし、第三者からの借金の担保として売買予約とそれにもとづく所有権移転請求権保全の仮登記をしたところ、他の相続人は無権限で行われた無効な登記であるとして、各登記の抹消を請求したという事案につき、最高裁は「相続財産に属する不動産につき単独所有権移転の登記をした共同相続人中の乙ならびに乙から単独所有権移転の登記をうけた第三取得者丙に対し、他の共同相続人甲は自己の持分を登記なくして対抗しうるものと解すべきである。けだし乙の登記は甲の持分に関する限り無権利の登記であり、登記に公信力なき結果丙も甲の持分に関する限りその権利を取得するに由ないからである」⁽⁸⁾と判示した。

法定相続分と登記に関しては、判例はいわゆる無権利説に立っている。共同相続人の合意なしに、法定相続分とは異なる登記がなされていたとしても、それは無権限で行われた無効な登記であって、たとえ善意の第三者がその不動産を取得したとしても、登記に公信力がない以上、第三者は保護されないという結論になる。しかし、もしも法定相続のケースにおいて、他の共同相続人に対して登記を要求するならば、他の相続人の権利が甚だ害される結果となろう。第三者としては、法定相続分については戸籍等により確認することができ、法定相続分とは異なる登記がなされていると

きは、遺産分割協議書の内容を確認することが要求されてもよい。それゆえ、昭和38年判決における第三者は漫然と登記簿を信用したことに落ち度があったといえよう。

(3) 相続分の指定と登記

相続分の指定と登記に関して、相続分を指定する遺言により無権利者となった相続人に対して、その相続持分が存在するとして仮差押えをした第三者(Y)と指定相続持分権者(Xら)との権利関係が問題となったケースにつき、最高裁は「相続分の指定により相続分はないとされた者は、相続により土地の持分を取得していないから、同人名義の登記は全部無効であり、したがって、YによるB持分の仮差押えは無効であるから、Xらは、Yに対し、自己の持分を登記なくして対抗できる」⁽⁹⁾と判示した。同じく、法定相続分を下回る相続分の指定がなされたが、故あって法定相続分どおりの共同相続登記を経たところ、共同相続人から第三者が法定相続分に応じた共有権を譲り受けたという事案につき、最高裁は「春子の登記は持分80分の13を超える部分については無権利の登記であり、登記に公信力がない結果、原告人が取得した持分は80分の13にとどまるというべきである」⁽¹⁰⁾と判示している。

相続分の指定の場合においても、判例は法定相続分の場合と同様に無権利説を採用している。平成11年判決の事案は、法定相続分を下回る相続分を指定された相続人につき、これと異なる登記がなされていた場合に、他の共同相続人の債権者がこの登記を信用して差押えしたというケースであったが、この登記は無効であって、相続分の指定を受けた相続人はその相続分につき登記なくして第三者に対抗できるとされている。しかし、第三者にとっては、遺言により行われた相続分の指定の内容を確認するべき方途がない。それゆえ、第三者を害する危険は、法定相続に比して、はるかに大きいものとなるといわなければならない。

(4) 相続放棄と登記

相続放棄と登記に関して、相続人の一部の者が相続放棄をしたところ、放棄した相続人の債権者が法定相続分に相当する持分を当該相続人に代位して、所有権保存登記をしたのに対し、相続放棄をしていない相続人が第三者異議の訴えを提起したという事案であり、第1審は「相続放棄は民法第177条にいう物権の得喪変更該当する」とし、第2審は控訴を棄却した。これに対して、最高裁は「家庭裁判所に放棄の申述をする、相続人は相続開始時に遡って相続開始がなかったと同じ地位におかれることとなり、この効力は絶対

的で、何人に対しても、登記等なくしてその効力を生ずるものと解すべきである」⁽¹¹⁾と述べて、破棄自判した。

相続放棄においても、判例は無権利説を貫いている。これに対して、原審は対抗要件説を採用していたが、最高裁はこれを自判によって覆したのであるから、最高裁の強い姿勢を窺うことができる。最高裁判決によると、その理由を相続放棄は絶対的な効力を有するという相続放棄の性格に求めている。確かに相続放棄の絶対的性格は、相続放棄がなされた場合に代襲相続が開始しないという点にも現れている（民法887条2項）。それゆえ、相続放棄によって相続人の債権者の期待が害されることになるが、そのうえ相続放棄は詐害行為取消権の対象にならないと解されていることによって⁽¹²⁾、第三者にとっては、いっそう期待を裏切られる事態となる。

（5）遺産分割と登記

遺産分割と登記に関して、この判例の事案はかなり複雑であるが、遺産分割の調停により、法定相続分とは異なる遺産分割が行われたが、その旨の登記が行われないうちに、それとは異なる所有権保存登記がなされた。その登記は遺産分割の結果と合致していないとして更正登記手続の請求がなされ、それを認容する判決が出された。他方、共同相続人（2名）の債権者が登記に表示されたとおりの仮差押えを得て、その旨の登記手続を行ったが、これに対して、他の共同相続人が更正登記をするために、仮差押えをした者に対してその承認を求めたというケースである。最高裁は「遺産の分割は、相続開始の時にさかのぼってその効力を生ずるものではあるが、第三者に対する関係においては、相続人が相続によりいったん取得した権利につき分割時に新たな変更が生ずると実質上異なるものであるから、不動産に対する相続人の共有持分の遺産分割による得喪変更については、民法177条の適用があり、分割により相続分と異なる権利を取得した相続人は、その旨の登記を経なければ、分割後に当該不動産につき権利を取得した第三者に対し、自己の権利の取得を対抗することができないものと解するのが相当である」⁽¹³⁾と判示している。

日本の民法によると、遺産分割は相続時に遡って効力を生ずる。すなわち遺産分割が終了すると、事実上存在した共有状態は解消されて、相続財産は被相続人から相続人へと直接移転するものとされている（民法909条）。それゆえ遺産分割の場合にも、無権利説を貫いて、無権利者からの取得という構成も可能であった

と思われる。しかし最高裁の判例においては、遺産分割については無権利説を採用していない。確かに、現実の遺産分割をみると、遺産分割は相続開始後に相続人間においてなされる一種の取引行為という性質を否定することはできない。相続人間の協議によって遺産分割が行われるのであるから、第三者を害することになる遺産分割も可能となる。それゆえ、この側面が強調されて、遺産分割に関しては、対抗要件を備えることを必要とするという結論へと到達したと思われる。

（6）遺贈と登記

遺贈と登記に関して、共同相続人の一人に不動産を遺贈する旨の遺言がなされたが、受贈者への所有権移転登記がなされないうちに、相続人の債権者が相続人を代位して本件不動産につき相続による持分取得の登記を行い、この持分に対する強制競売の申立てがなされたところ、遺言執行者から第三者異議の訴えが提起されたという事案につき、最高裁は「遺贈は遺言によって受遺者に財産権を与える遺言者の意思表示にほかならず、遺言者の死亡を不確定期限とするものではあるが、意思表示によって物権変動の効果を生ずる点においては贈与と異なるところはないのであるから、遺贈が効力を生じた場合においても、遺贈を原因とする所有権移転登記がなされない間は、完全に排他的な権利変動を生じないものと解すべきである。そして、民法177条が広く物権の得喪変更について登記をもって対抗要件としているところから見れば、遺贈をもってその例外とする理由はないから、遺贈の場合においても不動産の二重譲渡等における場合と同様、登記をもって物権変動の対抗要件とするものと解すべきである」⁽¹⁴⁾と判示している。

遺贈は単独行為であって、贈与のような契約ではないので、遺贈の効力の発生時においては受贈者の意思は介在していない。しかし第三者の側からみると、遺贈者の意思によって物権の変動を生ぜしめるのであるから、遺贈もまた一種の取引行為とという性格を有するものといえよう。そのうえ、これを対抗問題として、遺贈を主張するためには登記を必要とすることは、取引の安全という点からも望ましいことであろう。しかし遺言の存在が不明である時点においても、対抗問題とするならば、今度は受贈者の地位が甚だ害されることになる。さらに、相続人の一部の者に遺贈という形で相続財産の一部を与えることは、「相続させる」趣旨の遺言によっても、また相続分を指定する遺言によっても、同一の目的を達成することができる。遺贈、「相

続させる」趣旨の遺言、および相続分を指定する遺言の間には、法的にはこれらを区別することができるかもしれないが、当事者の意識としては、これを明瞭に区別しているとは思われない。そうであるならば、遺贈と「相続させる」趣旨の遺言および相続分の指定との間において、大きく異なる結論が導き出されるような構成には疑問がある。

(7) 小括

最高裁の判例によると、法定相続分と登記、相続分の指定と登記および相続放棄と登記という場面で登記の有無が問題となるときは、無権利説に立ち、実際に不動産を取得した相続人は登記なくして第三者に対抗することができるとする。その結果、相続人の債権者等の第三者は、登記に公信力がないことにより保護されないことになる。これに対して、遺贈と登記および遺産分割と登記という場面でこれが問題になるときは、対抗問題になるとして、登記がなければ第三者に対抗できないものとする。そして本件判決により、「相続させる」趣旨の遺言と登記との関係については、これを対抗問題とはしないことが最高裁によって示されたのである。しかし現実の場面では、遺産分割と相続放棄とでは同一の機能を果たしていることがありうるし、遺贈、「相続させる」趣旨の遺言、および相続分の指定についても同一の機能を果たしていることがありうる。当事者が同一の目的を追求しているにもかかわらず、当事者がどの法形式を選択したかによって第三者保護が大きく異なることには疑問があるといわざるをえない。

3 第三者保護のための法的枠組み

(1) 無権利説からのアプローチ

—民法94条2項の類推適用—

無権利説によると、相続により不動産を取得した相続人は登記なくして第三者に対抗できるとする。しかし無権利説によると、相続財産を構成している不動産を譲り受けたり、差押えをした第三者の利益を不当に害するおそれがある。これに対して、無権利説の立場からは、民法94条2項の類推適用を利用して第三者の保護を図ることが提起されてきた。民法が登記に公信力を認めていないので、真の権利者である相続人が当該不動産を取得する以上、第三者は無権利者となることが前提である。けれども、判例において民法94条2項の類推適用が広く認められているので⁽¹⁵⁾、相続関係と登記とが問題となる場面においても、これを類推適用する⁽¹⁶⁾。すなわち「相続させる」趣旨の遺言によ

て当該不動産を取得した者であっても、遺言により自己が当該不動産を取得した事実を知りながら、長期間、相続登記をせずに放置していた場合には、民法94条2項を類推適用することによって、第三者の保護を図ることになる。おそらくこの場合には、善意のみではなく善意無過失までも要求するべきであろうが、これにより実質的に公信力を認めることと同一の結論を導き出すことになる。

(2) 対抗要件説からのアプローチ

—背信的悪意者排除論—

これに対して、対抗要件説によると、登記の先後によって決着をつけることになる。対抗問題として登記の優劣によって決着をつける典型的な例としては、一つの物権をめぐる二つ以上の取引関係が競合する（いわゆる二重譲渡）場合が想定されてきた。しかし日本においては、対抗問題という解決方法は、解除と登記、取消しと登記、取得時効と登記など、いわゆる復帰的物権変動とか原始的取得などの場合にも広く応用されてきた。そしてこのような法的構成は不動産をめぐる取引の安全に奉仕してきたのである。しかし対抗問題として決着をつけることになると、とりわけ不動産取引につき素人である当事者と不動産取引を業としている者との差が歴然と現れ、素人は登記手続きに遅れるという事態が生ずる。そのうえ対抗問題の場合には、自由競争の原理が働くから、第三者の善意・悪意を問題としないことが原則である。その結果、相続により不動産を取得したはずの相続人の利益が甚だ害されることになる。しかし、判例においては、背信的悪意の第三者に対して、対抗要件なくして当該不動産を取得することができるという法理が確立している⁽¹⁷⁾、相続関係と登記が問題となる場面においても、この法理を適用することが妥当な結論へと導くことになる⁽¹⁸⁾。すなわち、第三者が「相続させる」趣旨の遺言の存在を知り、それにより当該不動産を誰が取得するのかわかったうえで、他の相続人から当該不動産を取得した場合には、かかる第三者を保護する必要はないので、背信的悪意者として対抗問題から排除するべきである。とりわけ、かかる取得者が不動産取引を業としている場合であれば、単なる悪意または重過失の場合にも保護に値しないので、これらも対抗問題から排除するべきであろう。

(3) 最後の決め手

第三者の保護という観点からすると、無権利説からアプローチして第三者の保護のために民法94条2項の類推適用をするという構成をとるか、対抗要件説から

アプローチして第三者の保護を不要とする場合には背信的悪意者の排除論を持ち出すという構成との間には微妙なところの差はあるにしても、結論に大きな相違は存在しなくなる。そうであるならば、結論に大きな差異がないときに、いずれの法的構成が妥当性であるのかを、いかにして確定するべきかということが問題となる。もちろん、このような大問題に対して安易な結論は避けるべきであろう。ここでは今後の展望として、私見の結論部分のみ示すことにし、詳細は別稿において取り上げることにしたい。

不動産の権利関係をできるかぎり登記によって公示することが理想であるが、あらゆる権利変動を対抗問題として処理することは不可能である。対抗問題という法的構成は自由競争を念頭に置いた制度であるから、意思表示にもとづく権利関係の優劣を規律することは当然これに含まれることにならうが、対抗問題がこれに限定されるわけではない⁽¹⁹⁾。それゆえ、必ずしも取引行為とはいえないが、取引行為と同視されるべきものについては、対抗問題として処理することが妥当である。すなわち、法定相続分と登記との関係が問題となる場面については、無権利説を採用して、対抗問題とはしないということによいであろう。なぜなら、相続は当事者の意思を介在させずに被相続人の死亡という事実のみで権利変動を引き起こすので、取引行為的な要素はほとんど存在しないからである。これに対して、相続分の指定、遺贈および「相続させる」趣旨の遺言については、これらは被相続人のイニシアティブによって法定相続分に変更を加える行為であるが、これらには取引的要素が加わっているというべきであろう。一方、相続放棄および遺産分割については、これらは相続人のイニシアティブによって変更を加える行為であるが、同様にここにも取引的要素が加わっているものと評価するべきであろう。それゆえ、法定相続分の場合を除いて、対抗問題から出発することが妥当であると思われる⁽²⁰⁾。

4 おわりに

本稿においては、「相続させる」趣旨の遺言による不動産取得と登記との関係について、法定相続分と登記、相続分の指定と登記、相続放棄と登記、遺産分割と登記、遺贈と登記等の判例との比較検討を通じて、相続における第三者の保護のあり方を考察してきた。本件の「相続させる」趣旨の遺言に関する私見を要約すると、次のようになる。「相続させる」趣旨の遺言は、被相続人の意思によって法定相続分に変更を加えるもの

であって、その意味では取引行為的な要素を含むものである。それゆえ、「相続させる」趣旨の遺言により不動産を取得した相続人についても、登記がなければ第三者に対抗できないと解することが妥当である。そうすると、被相続人の意思に反して、かかる遺言により利益を受けた相続人の利益を損なうおそれがあるが、この場合には、背信的悪意者排除論を拡大し、「相続させる」趣旨の遺言につき単なる悪意の第三者も排除の対象とするべきである。

注

- (1) 本件判決に対する評釈・解説として、以下のものを参照した。①古積健三郎「「相続させる」という遺言に基づく不動産物権の取得と登記」『法学セミナー』576号116頁(2002年)。②赤松秀岳「「相続させる」遺言による不動産の取得を第三者に対抗するための登記の要否」『法学教室』268号130頁(2003年)。③水野謙「「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記」『ジュリスト』1246号79頁(2003年)。④水野謙「「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記」『判例時報』1809号188頁(2003年)〔『判例評論』530号26頁〕。⑤池田恒男「「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記」『判例タイムズ』1114号80頁(2003年)。⑥松尾知子「「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記」『判例タイムズ』1114号87頁(2003年)。⑦横田昌紀「「相続させる」趣旨の遺言による権利取得と民法177条」『みんけん』551号29頁(2003年)。⑧田中淳子「「相続させる」旨の遺言による不動産取得と登記」『法律時報』75巻9号97頁(2003年)。⑨犬伏由子「「相続させる」趣旨の遺言による不動産の取得と登記」『私法判例リマークス』27号75頁(2003年〈下〉)。
- (2) 最判平成3年4月19日民集45巻4号477頁。
- (3) 最判平成11年4月23日判例時報1711号29頁。
- (4) 最判昭和38年2月22日民集17巻1号235頁。
- (5) 水野評釈によると、「生活世界」「取引世界」という表現で区別している(水野謙、前掲『ジュリスト』1246号80頁)。
- (6) 最判平成13年11月22日民集55巻6号1033頁。
- (7) 2003年における不動産登記件数は、土地・建物を合わせて、売買による所有権の移転が1,845,396件、3,375,213個、相続または法人の合併による所有権の移転が853,592件、3,320,552個となっている。法人の合併と合わせた数字であるが、相続における不動産の権利移転の重要性を無視することはできない数字であると思われる。
- (8) 最判昭和38年2月22日民集17巻1号235頁。

- (9) 最判平成11年4月23日判例時報1711号29頁。
- (10) 最判平成5年7月19日判例時報1525号61頁。
- (11) 最判昭和42年1月20日民集21巻1号16頁。
- (12) 最判昭和49年9月20日民集28巻6号1202頁。これに対して、遺産分割協議は詐害行為取消権の対象になるとする(最判平成11年6月11日民集53巻5号898頁)。相続放棄と遺産分割とは同一の機能を果たすことがあることを考えると、相続放棄と遺産分割とで結論を異にすることには疑問がある。この点については、富田哲「相続放棄・遺産分割と詐害行為取消権 — 相続秩序と取引秩序との交錯 —」『行政社会論集』14巻3号103頁(2002年)参照。
- (13) 最判昭和46年1月26日民集25巻1号90頁。
- (14) 最判昭和39年3月6日民集18巻3号437頁。なお、最判昭和46年11月16日民集25巻8号1182頁も同旨。
- (15) 最判昭和45年9月22日民集24巻10号1424頁など。
- (16) 注(1)に掲げた判例評釈の中で、無権利説に徹しているのは、田中淳子氏のものである。すなわち「不動産物権変動論における「相続」をめぐる権利変動に関する問題について売買を前提として構築された「対抗問題」とは別の解決法理によって解決すべきだと考えるからである。したがって、原則として「登記不要説」を採り、例外として、帰責性がある受益相続人と第三者との関係に対しては94条2項類推適用により、「保護されるべきものを保護する法理」を用意すればよい」とする(田中淳子、前掲『法律時報』75巻9号101頁)。
- (17) 最判昭和43年8月2日民集22巻8号1571頁など。
- (18) 注(1)に掲げた判例評釈の中で、明瞭に対抗要件説に与しているものは見当たらないが、古積評釈の中では、「相続させる」という遺言がされた場合には、これに基づく権利取得はほぼ確定しているものであり、相続開始後直ちに相続人に登記を要求してもそれほど酷とはいえない。無権利の法理によっていわば形式論理的に登記を不要とすることには疑問が残る」と述べている(古積健三郎、前掲『法学セミナー』576号116頁)。
- (19) 大判明治41年12月15日民録14輯1301頁によると、民法177条は意思表示による物権変動のみならず、隠居による家督相続のような場合にも適用されるとするが、他方で、大判明治41年12月15日民録14輯1276頁によると、第三者の範囲として登記欠缺を主張する正当の利益を有する者とする。
- (20) この問題を対抗問題からアプローチしていくとき、最も問題となるのは日本の登記制度である。被相続人の合意なしに行われる移転登記がネックになっているといえよう。この点に関しては、松尾知子、前掲『判例タイムズ』90頁以下において、詳細な言及がある。

(とみた てつ 福島大学 法律・政治学系)

《調査報告》

新しい経済学入門教育をめざして

福島大学経済学系

井上健 大野正智 熊本尚雄 真田哲也

清水修二 中村勝克 箱木禮子 藤原一哉 森良次¹

〈はじめに〉

本稿は、経済学入門教育を担当する経済学系所属教員による経済学入門教育のあり方の研究及び日本の代表的大学における経済学入門教育の調査・分析研究である。

福島大学に第4の学部とも言うべき共生システム理工学類を新設するにあたり、既設3学部は大掛かりな改組を行った。経済学部は経済経営学類となり、2005年4月から学生定員を大幅に削減するとともに3専攻5コースの新しい教育体制をとることとなった。

経済学の入門教育をどのような内容・どのような体制で行うかは難しい問題であった。それまでの入門教育科目であった「経済学概論A・B」の選択必修制は政治経済学と近代経済学の二者択一を意味する。学生が事実上両方の科目を必修的に選択する状態にあったとはいえ、この二つの科目は経済学部設置以来、名称を変えながらも長年にわたって並列されてきた。しかし学部将来計画検討委員会の長く真剣な検討の結果、この「伝統的並列」をやめ、現代の事情にあった適切な経済学入門教育として統一された一続きの科目をおくことが決定された。

学部将来計画検討委員会は、新学類の基本構想として、経済分析専攻（経済分析コース）・国際地域経済専攻（地域経済コース、国際比較経済コース）・企業経営専攻（ビジネス・マネジメントコース、ビジネス・アカウントコース）の3専攻5コースをおき、すべての学生に必修2単位の入門教育として①経済データの見方・読み方②企業と簿記会計③データで見る日本経済④簿記原理⑤統計情報の処理、の5科目を課す、というカリキュラムを設定することとした。統一された経済学入門科目は①と③各2単位をセットであわせて一年間履修するという事実上一続きの科目である。「伝統的並列」はここに終わりを告げた。

この構想は教授会の議を経て、新学類発足の2005年

4月から実施されることとなった。決定の後、2005年4月の第一セメスターから早速学生が受講する①とその続編である③の担当者たちは、この構想の下で実際の教育をどのような内容でどのように行うのか、手法の異なる二つのグループが協力し合って入門教育を行うには何を主眼とすべきか、同質な教育を複数クラスに対して施していくにはどのような方法をとるべきかなどについて具体的な構想を立てねばならなくなった。検討が開始されたのは2004年度に入ってしばらくしてからのことだった。

担当者たちによる検討は2004年の秋以降熱を帯びていった。だが、さまざまな難問を抱えながらも一定の合意を見るに至ったのは2005年に入ってからであった。検討の過程で浮上してきたのが他大学における経済学入門教育、および政治経済学ないしマルクス経済学と近代経済学の並列問題の現状分析の必要性である。担当者たちは自らが抱える難問解決に資する手本を他大学に求めようと考えたのである。日本の代表的な大学において、経済学入門教育がどのようになされ、かの「伝統的並列」問題がどのように解決されているのかについて、情報は皆無と聞いてよかった。おそらくこの問題が正面から取り上げられて調査・検討されたことはないのではないのか、と思われた。情報は自分たちで集め解析するしかない、というのが担当者たちの意見であった。

こうした経緯から、日本の代表的な大学のいくつかを訪問し、インタビューと資料によって情報を集める研究が始まった。この報告書はこうした地道な調査研究をもとに、日本の代表的大学の経済学部・経営学部及びそれに類する学部等の経済学入門教育および「伝統的並列」科目の扱いについての現状と課題を分析したものである。以下ではまず初めに、2004年から検討を重ねた福島大学経済経営学類の第一第二セメスター必修科目である「データの見方・読み方」、「データで見る日本経済」の検討内容を紹介し、その後他大学

¹ 本稿に対し、経済学系所属教員阿部高樹、菊池壮蔵両氏から貴重なコメントをいただいた。紙面を借りて感謝の意を表したい。共同執筆者は「経済学入門教育」担当者及び各大学インタビュー担当者である。

の調査結果とその分析を紹介する。

1 経済経営学類経済学入門教育の研究

1) これまでの経済学入門教育及び学説史的見地による二手法の概略

はじめに、経済学入門教育において「伝統的並列」科目がなぜ存在したかについて概観しておきたい。これがどのように経済学入門教育に影響してきたかについて経済学説史的な整理をすることによって問題の所在を明らかにしておくためである。当然ながらここで取り上げる並列科目は教務上いくつかのカテゴリーに分類される「入門的科目」であって、これを除く専門科目は本稿の言及の範囲ではない。

条件を整えた実験や検証が出来る自然科学と異なり、社会科学である経済学では何かしらの現象を説明する学説が現れても、それを検証することが非常に難しい。統計学や実験経済学などの発達は、こうした困難を克服しようとしてなされてきたといえる。しかし残念ながら、自然科学と同レベルでの「科学性」を経済学に要求することは出来ない。二つのまったく考え方の違う経済学体系が並存しても、そのどちらが「正しいか」はにわかには断じがたいのである。

アダム・スミスの『国富論』によって本格的な経済学が誕生して以来、その労働価値論を継承したりカードを経てマルクスの『資本論』が現れ、抽象的人間的労働が生産過程で生み出す価値が市場価格変動の軸となるとする労働価値説（後述）に基づくマルクス経済学体系が構築される一方で、リカードのもう一つの流れとしてマーシャルに受け継がれた市場分析及びローザンヌ学派によって発展した限界分析をうけたミクロ経済学そしてマーシャルの弟子であるケインズによって大成されたマクロ経済学が近代経済学体系として確立されていった。経済学入門教育はまったく理論の異なるこの二つの大きな体系を背景に行われてきた歴史を負っており、当然のことながら、入門教育は二つの体系それぞれに独立に行われることが必要であった。この点については多少専門的な見地から後述したい。

マルクス経済学は市場における投機・恐慌・失業などの不均衡累積とそこへの国家的介入の必然性、資本主義発展の段階的把握などを主として扱う。思想的な意味で初期の社会主義国の建設や労働者の同権化・福祉国家（組織された資本主義）構築にも大きな影響を与えた。一方の近代経済学は主としてミクロ的市場分

析やマクロ分析を理論的柱とするとともに統計的手法による実証分析が大きな発展を遂げ、西欧諸国や日本など資本主義国で行われた経済政策の理論的バックボーンとなって世界経済に影響を与えた。とくにケインズのマクロ経済学は第二次大戦後の世界経済において深刻な不況を回避する手段としてその力を発揮した。しかしマルクスの思想を支えとしてきた同時代の社会主義国が計画経済の失敗に見舞われたのと同様、ケインズ主義も各国が財政赤字に苦しむようになってその有効性に疑問をもたれるようになった。近代経済学の世界では1970年代以降、マクロ経済学の有効性をめぐって熾烈な論争が行われるようになり、結果として経済学は大きく「発展」し、ミクロ的視点を重視する新古典派が影響力を持つようになった。「レーガノミックス」や「サッチャリズム」といったジャーナリスティックな取り上げられ方をしたが、この論争によって資本主義国家の経済政策が大きな変貌を遂げることとなったのである。「ケインズは死んだ」といわれたのもこの時期である。日本ではこの論争が財政改革の理論的背景としての役割を果たした。

1989年、ベルリンの壁が崩れ、社会主義国として世界のリーダーを勤めてきたソ連が崩壊したのはもうひとつの大変革の象徴であった。筆者の一人は社会主義国時代の最後の時期とソ連崩壊後の資本主義移行後の対照的な二つの時代のポーランドを訪問したが、ティッシュ一つ買うにも不自由で街中の肉屋には長大な行列が出来ており、デパートには貧弱な商品しかなかった頃と、同じデパートに商品があふれ、再建された旧市街に商店が立ち並んで人々であふれている現在とのギャップの大きさに驚いた。中国では、社会主義市場経済が共産党独裁の政府によって持ち込まれ、世界経済の行方を左右するほどの巨大な市場が急成長を続けるようになった。マルクス主義は思想としてさえその支持を失い、熾烈な競争が展開する資本主義的市場が中国経済を完全に覆うようになった。

一方、年間GDPを越えるような巨額の累積国債を抱え、財政赤字に苦しむ日本に象徴されるように、資本主義の宿命ともいえる大不況を乗り越える特効薬だった財政出動型の経済政策は、財政赤字の積み上げによって動きが取れなくなり、民間の総需要創出が経済を支えるようになった。資本主義国家は総じて規制緩和や市場の活用によって経済成長を果たそうとして激しい競争を演じている。消費、民間投資および輸出がその主役である。経済理論の主役は、「新古典派」となり、市場参加者たちの行動を分析するミクロ経済学が中心

的な役割を担うようになってきている。この20年の間に大学院レベルのマクロ経済学の教科書はケインズモデルから新古典派モデルへと入れ替わった。ミクロ経済学も、古典的な完全競争市場の分析の比重が下がり、経済主体の複雑な相互作用を厳密に分析できるゲーム理論の比重が大きくなった。その成果は1960年代に隆盛を極めたかつての「産業組織論」を完全に塗り替え、アメリカ、EU及び日本の現代の競争政策に大きな影響を与えている。

他方、学問研究の面において、主流派新古典派経済学への批判的潮流として、ホジソンなどの現代制度学派やレギュレーション学派、新リカード学派などが展開している。また、現実において、現代資本主義の新自由主義政策下での社会の二極化、格差・不平等の深まりや、アメリカ主導のグローバリゼーション、アメリカの「帝国」化・帝国主義的戦争の進行が、資本主義の矛盾を体系的に分析したマルクス経済学への注目を再び生み出している。そのなかで、新古典派的マルクス派ともいえる「アナリティカル・マルクス主義」などの潮流も生まれている。

このように、経済学入門教育を取り巻く現実の経済は、さらに急速で荒々しいほどの変貌を遂げ続けている。少なくとも大学院レベルでの20年前のスタンダードな教科書は、もはやスタンダードではない。経済学入門教育が大幅な見直しと現実への対応に迫られているのは当然のことなのである。

2) 政治経済学と近代経済学の理論的基礎の比較

先に述べたように、現実世界と経済学の間には常にギャップが存在し、現実が経済学の変貌を促し、それを受けた経済学の発展が現実の政策運営やものの考え方に影響を与える、という相互作用が繰り返されてきた。このような事象は情報が瞬時に世界を駆け巡るようになり、映像が現場の姿を直接伝えるようになって加速してきた。しかし経済学入門教育ではこれまでそうした状況に適切に対処してきたとはいえない。たしかに教材として新聞記事などを題材として時事問題を取り上げ、初心者向けに解説するといった工夫は行われてきたが、それは担当者個人の努力によるものであって、大学のカリキュラムとしての対処ではなかった。カリキュラムそのものとしては旧来の2手法の並列的な、「経済学概論A、B」のような体制がこれまでずっと続いてきた。ここで、経済学入門教育の並列問題を理解するのに不可欠な政治経済学と近代経済学の基本

的理論構造の違いについて概説しておこう。

まず政治経済学についてである。

合理的個人を主体とする方法論的個人主義に基づき市場経済の分析に集中する特徴をもつ主流派経済学に対して、人間社会の再生産の土台には自然と人間の物質代謝があり、市場の背景には歴史的に形成されてきた共同体や制度があることを重視、経済は合理的選択のみによって分析することは困難であるとする諸学派として、マルクス学派、現代制度学派などがあり、広く一般的にポリティカル・エコノミー、日本語では、政治経済学、社会経済学と呼ぶことができる。特に、労働価値論をスミス、リカードなどから受け継ぎ発展させてきたマルクス経済学はその重要な柱となっている。マルクス労働価値論は、人間社会の再生産・自然との物質代謝において最も基本となるのが労働であると捉えつつ、しかしながら、これが市場関係を通して「財」という物的形態で交換されることから、この労働が抽象化され媒介され、価値と価格が乖離する特殊な構造が成立するという理解に立つ。そして、その基礎の上に経済構造全体、つまり、社会・財貨の生産・流通・金融が体系的に分析される。たとえば、諸産業部門の特殊的利潤率の差から資本間競争による資本移動によって平均利潤率が形成されるが、それに費用価格を加えて成立する生産価格の基礎にはかかる労働投入があり、市場価格変動の軸となるのがこの生産価格となるという理解である。金融経済についても、それが究極的に生産に規定された経済の上部構造であり、『資本論』による架空資本概念によって、金融がバブル経済を生み出す潜在的傾向をもつという批判的論理を先取りしていた。資本主義の問題点の克服を目指した社会主義論そのものについて、現在はソ連崩壊などの総括を含め新展開が目指され、議論が分かれるところであるが、現実の資本主義の体系的分析それ自体として、この理論の妥当性と利点は明らかと思われる。過去の過剰なイデオロギー性を削ぎ落とし学問的に再評価されるべきことは否定できない。また、歴史的にみれば、マルクスの時代が古典的資本主義と金本位制の時代であったのに対して、現代は管理通貨制度を基盤とする現代資本主義段階にある。今日の新自由主義はその新局面として位置づけられる。これらの時代の段階区分と全時代に通底する一般性の両面を統一的に把握する点でマルクス経済学は強みをもつ。前近代社会と近代資本主義との経済構造の質的転換について概念化（たとえば剰余生産物と剰余価値、経済外的強制と自由意志の擬制など）してきたという利点もある。

こうした経済史認識によって現代認識を深めることができ、それは経済の入門教育には不可欠な視点といえる。

以上のような学問的対比のみならず、現実社会との関係からも、マルクス経済学が再注目される状況が世界的規模で広がっている。たとえば、これまでの資本主義の歴史は社会の二極化や、資源の独占などを目指す帝国主義の歴史、バブルや恐慌の歴史でもあり、こうした負の側面を批判的に捉えて、現状の市場経済を乗り越えた、平和・公平・環境・コミュニティを重視したオルタナティブな経済制度のあり方を探求するための基礎視角を提供する実践的経済学は、今日のグローバル・アジェンダや「もう一つの世界は可能だ」といった主張に照らしてみると、一段と重要性を増している。政治経済学、社会経済学が経済学の基本コースとして不可欠となる所以である。

これに対し、近代経済学では、個人の合理的選択理論と生産の理論から構築される個別財の市場分析を基礎とするミクロ経済学と、経済全体の生産規模を測るGDPあるいは所得の決定プロセスおよび生産・貨幣・労働及び経済成長をつなぐメカニズムを解明する理論を基礎とするマクロ経済学が表裏一体の体系としておかれ、これを基に経済学体系が構築されている。市場分析を中心とするミクロ経済学は、リカードを受け継ぐマーシャル、限界革命といわれた手法を大成させたローザンヌ学派のメンガー、ジェヴォンズ、ワルラスとさらにその現代化に貢献したヒックス及びサミュエルソン、アロー、ハーン、ドブリュー、と引き継がれてきたが、同じくリカードを引き継ぐマルクス理論との論争が最も激しく行われてきた歴史を持つ。ミクロ経済学では、財の交換は価格を介して需要供給のバランスに基づいて行われ、財自身がどのような「価値」を内蔵するかを一切考慮しない。あくまでも合理的行動をとる個人が自己の最適選択によって構築する需要と生産者が合理的に追及する最大利潤を介して構築される供給によって価格と取引量が決定される、とするのである。もし市場で超過利潤が生じれば、それを誘引として新規参入者が現れて供給を増やし、やがて価格の下落と市場全体での生産量の増加が起こり超過利潤は消滅する。こうした競争市場の調整機能によって社会全体が最適な資源配分を享受できることを論証していく。このとき、資本や労働の供給者はその貢献度に応じて市場が決めた報酬を受け取る、とする。一方、学部レベルでのマクロ経済学では、総供給であるGDPは消費・投資・政府支出・純輸出を構成要素とする

総需要によってその規模が決定されるとする所得決定理論から始まり、生産と貨幣、雇用量の関係を理論的に構築していく。現代マクロ経済学はこうしたケインズ体系を用いず、ミクロベースでの消費者の行動と生産者の行動及び投資行動から経済全体の成長までをモデルによって構築する。この分野は現在も進化し続けており、新しいモデルが次々に考案され、検討されている。近代経済学の入門教育はこうした学問体系の初歩の専門知識を授けるものとして位置づけられてきた。モデル分析および統計学を駆使する実証分析がマスターできるように、との配慮から数学及び統計学を同時に学ばせるカリキュラムが理想とされてきたのは、こうした背景からであった。

このように、政治経済学と近代経済学は、そのよって立つ理論的思想的背景がまったく異なり、したがってその上に構築される経済学体系もまったく異なるものとして発展してきた。経済学入門教育がそれらの専門教育の初歩的専門知識を与えるものとしておかれてきたために、二つの異なる経済学体系に則して二つの異なる入門教育が当然のこととして設定され続けてきたのである。

3) 経済学入門教育の課題

これまでの経済学入門教育が二つの異なる手法をとるそれぞれの経済学体系の基礎を解説するためのものとして位置づけられ、文字通り学術的な意味での「入門」として扱われてきたのは上述のとおりである。しかし現実の経済社会の激しい変化と経済政策論争の進展によってこうした体系そのものを見直す必要に迫られてきた。

社会の変化が経済学入門教育にもたらしたもう一つの要素は教育の受け手である学生の変化、及び大学教育に対する社会の期待の変化である。もっとも大きな変化は大学進学率の上昇に伴ういわゆる「大学の大衆化」である。「大学のレジャーランド化」などと揶揄された時代もあったが、とりあえず大学までは出ておこうという風潮は時代とともに強まりこそすれ、弱まる様子はない。経済の複雑化と変化のスピードの加速によって、社会から期待される内容も変化している。大学を卒業して社会人となったときに必要とされる基礎知識がこれまでよりずっと多様で深く大きくなっている。経済学入門教育はこうした社会のニーズの変化・状況の変化にも対応を迫られている。

経済学入門教育の課題として取り組まなければならない

ないもう一つの点は、経済経営学類に入学してくる学生が、かならずしも経済学を学ぼうとしていないということである。たとえばビジネスや経営に関心のある学生のかなりの部分は必ずしも学術的な意味での経済学を求めない。したがって、学部教育の中で専門的な経済学体系が現代に即して整えられていたとしても、その入門教育としてこの教育が位置づけられることが適切であるかどうか大いに議論の余地がある。多様な将来像を描いて入ってくる学生に、「将来必要とされる経済知識」のどの部分をどのように与えるべきか、容易でない課題が待ち構えている。一方で、こうした課題に答えるべく用意されている教育時間と教員のキャパシティは限られる。

こうした難問に答えを出し、それを実践して成果を出さねばならなくなった担当者集団は答えを求めて議論を積み重ねていくこととなった。

4) 新しい経済学入門教育を求めて

理想の追求 二つのまったく異なる手法で経済学教育を行ってきた担当者集団が直面した最初の課題は、どこに目標を定めるべきか、また、手法の違いは担当者のキャパシティの違いでもあることから、誰が何を担当すべきか、ということであった。スタートの条件は、二つの異なる手法を並列しないこと、経済経営学類新生すべてを対象とし、第一、第二セメスターそれぞれ2単位の必修科目とすること、である。また、少人数教育によって丁寧できめ細かい教育をおこなうためクラス規模を学年定員の半分とし、120人から130人の2クラスを同時に開講することとした。

担当者たちは、少なくとも旧来の理論中心のカリキュラムは新カリキュラムとして適切でない、との共通認識で一致してはいたが、そのうえで何をどのような切り口で教えていくのかについては、認識がばらばらだった。しかし、現実の経済が日々大きな変貌を遂げ、経済学入門教育がそれに対応しなければならないこと、したがって、「現実的であること」が共通のキーワードになることについては大きな意見の差は無かった。問題はその取り上げ方である。担当者グループは、マクロ経済学、財政学、金融論、産業組織論、政治経済学など、多様な分野の専門家から成り立っている。ミクロ経済学・マクロ経済学をバックボーンとする担当者たちにとっては、現実社会で共通に用いられる経済用

語や統計的概念、経済政策上の考え方などにはまったく違和感がなく、専門分野と重なるところが多い。一方そのほかの分野の専門家にとってはむしろ経済の現状分析や社会的背景の分析などが主たる専門分野であり、問題の切り口をどう作り上げていくか、どのようなスタンスから論を組み立てていくかが研究の核心を構成する。こうした多様な分野、多様な経験と研究の深さを持った担当者たちの人的資源を生かしつつ、現実的であるすべての学生にとって有用な経済学入門科目の内容をつめていくのは難しい課題であった。理想の教育を求めて議論は続いた。

現実的な解決 「現実的であること」が文字通り現実的な解決を与えた。これまでの議論から、現実の経済を教材とし、目前の経済の動きを理解し、何が問題であるのか、何が問題の解決となるのか、どのような分野を学べば解決に必要な知識や技術、考え方を習得できるのか、についてははっきりした目的意識を持たせることがまずは重要である、との共通認識が生まれた。また、すべての学生にとってミニマムの経済学知識を与えることの必要性も認識された。単に新聞などを読んで「感想」めいたことを論じられる、というレベルではなく、ある程度正確な事象分析力とそれに基づく自分なりの見解が構築できるための基礎知識を与えることも重要だ、ということである。

こうした目標がある程度はっきりしてきたところで「経済データの見方・読み方」と「データで見る日本経済」の中身が整い始めた。まず、「経済データの見方・読み方」では、一般社会で用いられる経済概念のうち最も基礎的なものを丁寧に教える、という目標が立てられた。この部分は、こうした概念を常に用いている専門家が担当し、新聞やテレビの経済記事を読むに当たって必要不可欠なものを厳選して講義内容に盛り込むこととした。GDPや消費者物価指数、失業率などの基礎的経済概念や実際の統計の見方の習得を主眼に置くことによって、事実をはっきりつかむ、という力をすべての学生に習得させようというのである。どちらかといえば技術的な性格を持つこうした概念の習得は第一セメスターが適切であると判断された。少人数教育の必修2クラスの同時開講となるため、二人の担当者はシラバス及び講義内容を出来るだけ同じものとするよう工夫することとなった。実際にやってみると、テキスト、資料などを完全に同じにしたとしてもなかなか難しい課題であった。結論的には無理に二つ

² 2004年10月から全国の国立大学は国立大学法人に移行したが、ここでは表記上、「国立大学」と呼ぶこととした。

のクラスの講義内容を「まったく同じ」とせず、「できるだけ」というレベルで、連絡を密にしながら調整を行っていくのが現実的であろう、ということになった。ただし成績の基準はそろえることにした。

一方、第二 Semester で学ぶ「データで見る日本経済」は、第二次世界大戦後の日本経済の発展と現状・問題点など、物の見方を習得させることが主眼とされた。担当者の個性がある程度反映されることとなるが、新聞、雑誌等の資料を中心に、現実経済の問題を解説し、どのような切り口で物事を見ればよいのかについて演習的に学習させることによって読み・書き・判断力を養うことを目標とした。経済記事を読むに際して学生は第一 Semester で学んだ経済概念や経済統計の知識を活用することが出来る。また、二つのクラスは個性の異なる教員が担当することになるが、配布資料、試験問題の統一などの工夫によって同時開講の困難をある程度解決する工夫が行われることになった。この科目は2005年10月から開講されるので、本稿執筆現在ではまだ経験について詳細に述べることは出来ない。引き続き調査研究していくべきであろう。

こうして試行錯誤しながら、学生全員が学ぶ統一した経済学入門科目がスタートした。その成果はまだ見えないが、担当者たちの真摯な取り組みと長期にわたる検討過程がもたらした共通認識がさまざまな難問の解決を促し、継続的に問題意識を持ち続けることによって改善が施され、理想に向かってさらに進むことが期待できる。「継続は力なり」である。

2 大学における経済学入門教育の調査

1) 大学調査

調査した大学は、経済学部・経営学部またはこれに準じる学部を擁する国公立大学である。内訳は、国立7大学、公立1大学、私立7大学計15大学である。地域別では、関東甲信越13大学、近畿2大学である。私立7大学は首都圏である。本学類教員が各大学の経済学入門教育担当者を訪れ、シラバス、学習案内等のカリキュラム解説冊子、教科書、講義ノート等の資料を集め、インタビューを行った。インタビュー内容は統一せず、担当者に任せる形としたが、経済学入門教育において政治経済学と近代経済学のいわゆる「伝統的並列」があるかどうかについては必ず質問してもらったこととした。

調査結果は次のようにまとめることが出来る。

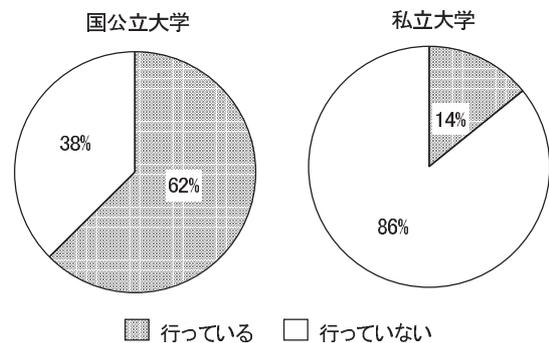
国公立8大学については、「伝統的並列」を行っている大学が5大学、このうち1大学が我々の新体制に近いが、残りははっきりとした手法別の並列である。

国公立のうち残り3大学は経済学入門としてミクロ・マクロの初歩を教えるか、またはミクロ・マクロそのものを第一学年から教える体制をとっている。

私立大学のうち入門科目で「伝統的並列」をとっている大学は7大学中2大学であるが、そのうちの1大学はミクロ・マクロ各4単位を必修とし、選択必修科目の中に並列科目を配している。したがってこれを除けば、厳密な意味で「伝統的並列」を行っているのは1大学のみである。

必修制についてであるが、並列で且つ必修である大学は、国公立1大学、私立1大学である。ミクロ・マクロを入門教育の必修としているのは国公立大学ではゼロであるが、1大学が近代経済学の入門科目を必修としている。私立大学は4大学である。私立大学ではほとんどがミクロ・マクロのほか統計・情報を組み合わせて必修または選択必修としている。

「経済学入門教育」における「伝統的並列」の実態



2) 入門教育への取り組み

各大学とも、経済学入門教育には苦勞があり、それぞれの立場で工夫が見られる。また、入門教育に対する考え方にもいくつかのタイプがある。ここではそれらを整理しておこう。

入門教育に対する考え方のタイプは大きく3つに整理できる。①学生の学習意欲が低いことに対応し、いわゆる経済学は教えず、経済現象そのものに関心を持たせようとするもの、②経済学の初歩として基礎的な知識や技能の習得をさせようとするもの、③初めからミクロ・マクロを系統的に教育するもの、である。

①のタイプとして、テキストを一冊読むことを目標にする、新聞等のデータを用い現実経済に興味を持た

せる、需要・供給曲線のみを用いきわめて初歩的な経済の見方を教える、といった工夫があった。ただし、このタイプの教育を行う大学は少なかった。

② のタイプは、難易度の低い教科書を使用したり、インターネットを利用した演習問題的なものを課したりするところが多い。大規模な私立大学の中には数学の学習を課して経済学の基礎教育を強化しているところもあった。テキストは板書・パワーポイント・プリント等教員の自作によるものと教科書使用に分かれた。大規模な私立大学では数人から30人近くの教員が同じ科目の複数クラスを担当しているが、使用するテキストは各人各様であるケースが多かった。教科書にも特徴がある。アメリカや日本の代表的な経済学者による2,3の初級教科書がかなり広く使われている。パワーポイント利用は意外に少なかった。全体ではこのタイプに属する大学が最も多かった。

③ のタイプは②について多かった。教科書を使うケースが多く、②と同様アメリカや日本の著名経済学者の入門教科書が多く使われている。私立大学の中には、試行的ではあるがインターネット経由のビデオ・オン・デマンドで実際の講義風景を流し、欠席者が講義の内容を補充できるようにしているところがあった。公認会計士志望の学生などに利用されているようである。途中のステップを聞きそびれてしまうとその先がわからなくなってしまうような科目については有効なサービスといえるかもしれない。

さまざまなタイプの大学が経済学入門教育の工夫を行っているが、総じて言えば、地方国公立大学は学生の興味を引き出すために相当苦勞している、といえる。また、「伝統的並列」が比較的多く、同じ悩みを抱えているのではないかと思われた。中には並列を超えて現実の経済を理解し興味を持つ、という点に教員資源を集約して工夫を重ねている大学もあったが、ごく少数である。

首都圏の私立大学では「やる気のある学生」にある程度のレベルの教育を行う、というスタンスに立っているとされる所がいくつか見られた。上級公務員や公認会計士、著名企業などを目指すレベルの高い学生を主たるターゲットとする教育である。各大学の方針・経営戦略によってばらつきのあるところである。

3) 総括と評価

国公立大学15校の経済学入門教育をみてきたが、

最後に本学類の試みを各大学の工夫と比較検討しながら総括していきたい。

先に紹介したように、福島大学経済経営学類の新しい取り組みは、「伝統的並列」をやめ、第一 Semester で GDP、消費者物価指数、失業などの経済学概念や統計の見方を丁寧に教え、第二 Semester でデータを中心に扱いながら日本経済の現状とさまざまな課題を考えさせ、経済を見るための技術を与えると同時に経済そのものに対する興味と関心を持たせようとするものである。調査結果から見ると、調査した国公立大学の6割以上が行っている「伝統的並列」をやめて教員資源を一続きのまとまりのある教育に集約したことは「画期的」であるといえる。我々の試みに近かった大学は1大学のみである。しかも単なる経済学の入門教育として経済学の初歩を教えるのではなく、まず現実経済を見るための道具をあたえ、未熟ながらも新聞等の記事をある程度読みこなす知識を習得させようとして現実経済の諸問題を自ら発見し、論じられるよう訓練を積ませる、という取り組みは他大学にはないものである。まだ第一 Semester が終わったばかりであり、成果を見ることは出来ないが、さまざまな理論に先んじて概念や統計のみを理解させようとして、未熟でも現実を自分の目で見るとを促す、という点については一定の手ごたえがあった。

首都圏の私立大学はほとんどの場合、学生定員が多く、大教室での講義が主となる点で事情が異なるが、調査対象大学のうち、かなりの大学が統計やコンピュータ処理技術の習得を義務付けており、インターネットの活用も工夫している。学生数の多さゆえの工夫ともいえるが、こうした技術的なものの習得については現行水準以上のものをさらに追求することも一つの方法として検討項目に加える価値があろう。

必修及び同時2クラス開講を行った場合、学生から見て二つのクラスが必ずしも均質でなく、まったく同じ教育を受けられる保証が無い、という問題であるが、首都圏の私立大学の現状を見る限り、異なったクラスでもまったく同じ教育を受けられるという条件を満たしているところはない。国公立大学で入門教育を必修にしているところでは、複数教員が開くクラスの中から学生が自由に選択する、というものがあつた。この問題に関しては妙案はないようである。高校では、担任教師の異なる同一科目がクラス分けの上実施されており、その点では我々が懸念したほどの大きな違和感や学生の側には現れていないようにも見える。この問題については推移を見守りたい。

さまざまな大学が苦心を重ねつつ効果的な経済学入門教育を求めている姿が調査から浮き彫りになった。だが、いずれにせよ、今回のわれわれの試みはしばらく試してみる価値がある、といえよう。

<おわりに>

日本の経済学入門教育の実態に触れて、この問題の深さと広がりを変えて認識した。誰を対象に、何を目的に、誰が、どのように、どのような道具を使って、何をどれだけ教えるべきか、を見定めるに当たって、多様な要素を考慮しつつ実現可能な道を探らねばならない。大きな目で見れば、どのような学生をあつめ、どのように他の大学に対して差別化を図っていくかという、大学自身の経営戦略にもかかわりを持つ。

学生にとってみれば、必ずしも経済学を学びたいわけではなく、4年の間に「自分探し」をしたいと思っている若者に大学は一体何をしてくれるのか、と考えるかもしれない。が、その一方で、社会が若者に求める能力はますます高まり、多様化し、変化する。

今回の経済経営学類の試みは、こうした課題に少しでも答えようとするものである。だが、社会の変化は我々に更なる変化と進歩を期待し、要求し続けるであろう。この課題に終わりはないのである。

最後に、貴重な時間を割き、たくさんの資料を提供して調査に協力してくださった15の大学および担当者の方々に心よりお礼を申し上げたい。

参考文献

池尾愛子『20世紀の経済学者ネットワーク 日本から見た経済学の展開』有斐閣、1994年
 宇仁宏幸他『入門社会経済学』ナカニシヤ出版、2004年
 角田修一『社会経済学入門』大月書店、2003年
 ケインズ『雇用利子および貨幣に関する一般理論』塩野谷裕一訳、東洋経済新報社、1983年
 杉本栄一『近代経済学の解明』理想社、1963年
 根岸隆『古典派経済学と近代経済学』岩波書店、1981年
 ヒックス『価値と資本 I II』安井琢磨・熊谷尚夫訳、岩波書店、1951年
 ヒックス『ケインズ経済学の危機』ダイヤモンド社、1977年
 ブランチャール『マクロ経済学 上下』鶴田忠彦・知野哲郎・中泉真樹・中山徳良・渡辺真一訳、東洋経済新報社、2000年

ブローグ『経済理論の歴史 上』久保芳和・真実一男・杉原四郎訳、東洋経済新報社、1966年

ブローグ『経済理論の歴史 中』杉原四郎・宮崎犀一訳、東洋経済新報社、1968年

ブローグ『経済理論の歴史 下』関恒義・浅野栄一・宮崎犀一訳、東洋経済新報社、1968年

バイン『産業組織論 上下』宮澤健一監訳、丸善、1970年
 マルクス『資本論』向坂逸郎訳、岩波文庫、1947-1954年
 森嶋道夫『近代社会の経済理論』創文社、1973年
 名和隆央『経済学入門コース』緑風出版、2004年

《調査報告》

阿武隈急行グロットグラム調査報告（1）

半沢 康
武田 拓

1. はじめに

筆者らはこれまで共同で宮城・福島両県の方言調査に取り組んできている。本稿ではそのうち、阿武隈急行線沿線（宮城県角田市ー福島市ー郡山市）で実施したグロットグラム調査の結果についてその一部を報告し、両県県境付近の方言変容と伝播に関する基礎的なデータを提示する。

グロットグラム（地理×年齢）調査は日本の方言学において開発された技法である。線上の地点を対象に世代別の調査を行って言語データを収集する。結果をマトリクス状に図化することにより、対象とする地域の言語伝播や言語変容の様相を把握することができる。これまでに奥羽線、東海道線、山陽本線など日本の主要な鉄道経路上で調査が行なわれ、福島県内では、東北線（井上史雄1985,井上史雄他編2003）、常磐線（半沢康他1997,加藤正信他編2004）、磐越東線（加藤正信他編2004）、磐越西線（廣田卓也2003）、水郡線（奥貫浩子2003）各沿線での調査結果が報告されている。

福島県は福島市、郡山市、会津若松市、いわき市という各地の中核となる都市を中心とした生活圏が存在し、方言区画もおおむねそれら生活圏に対応している。今回報告する阿武隈急行線調査の結果に、先に実施済みの磐越東西線の結果を重ねることで県内主要4都市間の方言動態が一望できることになる。さらに東北線グロットグラムの結果と比較することより、仙台市を中心とする宮城県方言の影響についても考察することが可能となる。また、今回の調査地域のうち福島市ー郡山市（南福島ー日和田）間は1980年当時のグロットグラムが作成されており（井上史雄1985）、共通項目については20年間の実時間上の変化を知ることできる。

2. 調査の概要

2.1 調査地点

宮城県角田市から福島県郡山市までの、阿武隈急行線（角田市ー福島市間）および東北線（福島市ー郡山市間）沿線の地区。阿武隈急行線沿線では主要駅、東北線沿線ではほぼ各駅の周辺の地区を対象とした。インフォーマントは調査当時70,60,50（または40）,30,20

代の5世代。一部にインフォーマントが見つからず、世代が欠ける地点がある。

阿武隈急行線は1984年に設立された第3セクター方式による鉄道。宮城県柴田町（槻木）と福島県福島市を結ぶ（約55km）。福島市以南は一部東北線に乗り入れ、福島県郡山市まで通じる。福島県伊達郡および宮城県伊具郡の主要な公共交通機関として通勤・通学を中心に利用されている。

2.2 調査時期

阿武隈急行グロットグラム調査は2003年8月7日～10日に実施。協力機関の都合による別日程の調査、補充調査などを以下の日に随時実施した。

8月5日,25日,9月1日～2日,2004年1月20日,2月3日,6日。

2.3 調査参加者

調査には以下のメンバーが調査員として参加した（所属は調査当時）。

武田拓（仙台電波高専）、半沢康（福島大）、遠藤理恵（郡山市安積中）、奥貫浩子（塙町笹原小）、廣田卓也（喜多方市関柴小）、本多真史（いわき明星大大学院生）、早津知範、深江雄希、柏木大作、穴戸茜、高橋瞳、滝田弓子、西山秀典、曳地麻美、藤岡由衣、村松祥成、望月愛子、山崎小百合（以上福島大学学生）

2.4 協力機関

調査にあたり、インフォーマントの紹介、調査会場の提供など以下の公的機関に多大なご尽力をいただいた。ご協力いただいた皆様のお名前を記して感謝の意を表します（肩書き等は調査当時のもの）。

郡山市日和田公民館（館長・遠藤敏夫様、石沢貞義様）
本宮町荒井公民館（館長・渡辺幸雄様、遠藤様）
本宮町中央公民館（館長・桑原政行様）
二本松市杉田公民館（館長・石川淳一様）
二本松公民館（菅野清一様）
安達町中央公民館（生涯学習課長・官野哲様、服部栄一様）

福島市杉妻公民館(館長・佐藤寛様, 高橋清己様)
 保原町上保原公民館(館長・石田十四夫様)
 保原町中央公民館(生涯学習課長・小林誠様)
 梁川町中央公民館(館長・菅野源太郎様, 岡崎秀男様)
 梁川町富野公民館(館長・宍戸榮一様)
 丸森町中央公民館(館長・阿部義郎様, 副館長・目黒様)
 角田市中央公民館(館長・小梨本夫様, 副館長・会田様)
 福島市立松陵中学校(教頭・工藤裕也先生)

2.5 本稿で使用する他のグロットグラムデータ

本稿のグロットグラムには、阿武隈急行グロットグラム調査以外の以下の調査データを比較のために表示する。

(1) 東北本線グロットグラム (THグロットグラム)

阿武隈急行グロットグラム調査とほぼ同時期に、東北線、津軽線、函館本線沿線(福島市ー北海道滝川市間)を対象としたTHグロットグラム調査(井上史雄他編2003)が実施された。本稿ではこのうち福島市ー仙台市間のデータを使用する。

(2) 仙台市周辺グロットグラム

また仙台市周辺の状況については仙台市を中心とする放射状グロットグラムデータも合わせて使用する(武田拓・半沢康2003)。

(3) 磐越東線グロットグラム

福島県内の中核都市である郡山市といわき市を結ぶグロットグラム。筆者らが2001年に実施した(加藤正信他編2004)。阿武隈急行グロットグラムと重ねることによって福島市を含む3都市間の方言動態が捉えられる。

なお、これらに加え、2004年には宮城県白石市から山形県高島町までのグロットグラム調査(七ヶ宿グロットグラム調査)を実施している(武田拓・半沢康2005)¹。今後、このデータを加え、宮城・福島(・山形)県境付近の詳細な言語動態について総合的な分析を行なう予定である。

3. データ整理・グロットグラム図の作成

阿武隈急行グロットグラム調査の調査テープを半沢がすべて聴きなおし、グロットグラム図を作成した。作成にはMicrosoft Excel上で作動するマクロプログラ

ムを使用した。

本稿では紙幅の関係上、阿武隈急行グロットグラム調査でY/N項目(特定の語形を示し、インフォーマント自身の使用・理解の有無を尋ねる項目)として調査した項目の結果を示すこととする。記号は回答にもとづき、原則として「● 言う(昔は言った)」「△ 聞く(自分は言わない)」「ー 聞いたことがない」とする。ただし複数の語形の使用を確認した項目やインフォーマントから補助的に情報が得られた項目については、その結果を反映させて上記以外の記号化を行なった場合がある。

比較のために示す他のグロットグラム調査では、当該項目が必ずしもY/N方式で調査されているとは限らない。調査方法が異なる場合は回答結果をY/N項目の回答に変換して示した。当該語形が使用語または理解語として回答されている場合は、それぞれ●, △を示す。一方、他の語形を回答している場合で、当該語形を「聞いたことがある」もしくは「聞いたことがない」という判断ができない場合は「.」という記号を用いる。当該項目が調査されていない場合は空欄とした。

今回データを使用するグロットグラム調査は、すべて調査時の年齢を基準として各世代のインフォーマントを紹介いただいて調査を行なっている。本稿のように調査時期が異なるデータを同時に表示すると、世代のずれが生じてしまう。本稿ではインフォーマントの生年にもとづいてグロットグラム図を作成する。地点を縦軸にとり、横軸に10年刻みで出生年代を表示する。地点によっては同一世代に2名のインフォーマントが含まれたり、逆にある世代が空白になったりする場合がある。

4. グロットグラム図(別掲)

グロットグラム図は別途Web上に公開する。掲載する図は以下のとおり。

- 001. 調査時のインフォーマントの年齢
- 002. インフォーマントの性別
- 131. カタス [かたづける]
- 132. カッターイ [疲れた・やる気がおきない]
- 132-2. カッターイの意味
- 133. ダイジ [大丈夫]
- 134. 紙にノボル [紙を踏む]
- 135. イキナリ暑い [非常に暑い]

¹ 2004年度福島大学奨励的研究経費の助成を受けて実施した。

137. インガミル [酷い目にあう]
 138. イズイ [しっくりこない, 落ち着かない]
 139. セッカドローモ [訪問時の挨拶]
 141. ジャス [運動着]
 142. ワケル [ご飯をよそう]
 143. オダツ [調子にのってはいしゃぐ]
 144. セブン [セブンイレブン]
 145. ミルウエイ [ミルクキーウェイ]
 146. ズッポ [会津っぽ]
 147. ムツケル [拗ねる]
 148. オッピサン [曾祖父]
 149. キシャズ, キラズ [おから]
 150. カツケル, カズケル [なすりつける]
 151. チョス [いじる]
 226. 隣までアルッテ行く [歩いて行く]
 227. 見たトキある [見たことがある]
 228. やめろデー [やめろよ]
 231. もう帰れ
 232. 明日は家サいる [家にいる]
 233. 鉛筆はここサある [ここにある]
 234. デパートは駅前サある [駅前にある]
 236. 行ったツケ, 誰もいなかった [行ったら]
 237. 私, 昨日東京へ行ったんだツケ [行ったんだよ]
 238. ○○さん, 昨日東京へ行ったんだツケ [行ったんだよ]

【引用文献】

- 井上史雄1985『関東・東北方言の地理的・年齢的分布 (SFグロットグラム)』東京外国語大学語学研究所
 井上史雄・玉井宏児・鎌水兼貴編2003『東北・北海道方言の地理的・年齢的分布 (THグロットグラム)』科研費報告書
 奥貫浩子2003「福島県東白川郡方言の研究—水郡線グロットグラム調査の結果から—」福島大学教育学部卒業論文
 加藤正信・大橋純一・武田拓・半沢康編2004『関東・東北境界域言語地図 | 常磐線・磐越東線グロットグラム』科研費報告書
 武田拓・半沢康2003「仙石線グロットグラム調査報告」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
 武田拓・半沢康2005「宮城・山形県境地域の方言の実態—七ヶ宿街道沿いの調査から—」『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』35
 半沢康・小林初夫・武田拓1997『宮城・福島沿岸地域におけるグロットグラム調査報告』私家版
 廣田卓也2003「福島県会津地方の方言の研究—磐越東西線グロットグラムの比較から—」福島大学教育学部卒業論文

【付記】

1. 本稿は科学研究費補助金 (2002—2004年度若手研究 (B)) 「現代東北方言の文法的諸特徴の記述およびその変容に関する調査研究」課題番号14710289) による研究の成果の一部である。また阿武隈急行グロットグラム調査の実施にあたっては、福島大学学術振興基金からも研究助成を受けている。

2. 本稿には、当初全グロットグラム図の掲載を予定していたが、編集委員会の判断により別途 Web 上で公開されることとなった。グロットグラム図については以下の URL を参照されたい。

<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/nenpo>

(はんざわやすし 福島大学文学・芸術学系)
 (たけだたく 仙台電波工業高等専門学校)

平成16年度奨励的研究助成予算「プロジェクト研究奨励費」

	学 系	事 業 名
1	人間・心理学系	<ul style="list-style-type: none"> ・学校・家庭・地域の連携による総合的学校臨床研究 ・ヒトの認知—行動プロセスに関わる生涯発達心理学的研究 ・いきいき生活応援プロジェクト—子どもの発達に応じた生活自立支援のための家庭・学校・地域教育のあり方について
2	文学・芸術学系	<ul style="list-style-type: none"> ・東アジアの言語文化に関する比較研究 ・福島県下における明治以降造営された洋風建築および附随する芸術作品の調査研究 ・マルチメディアを用いた音楽実技指導法に関する研究 ・我が国における音楽文化の近代化に関する基礎研究
3	健康・運動学系	身体リテラシー教育の充実に関する実践的研究
4	外国語・外国文化学系	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲルマン叙事詩解説のための基礎的研究 ・修飾関係の理論的・実証的研究
5	法律・政治学系	<ul style="list-style-type: none"> ・地域における法学教育と法的実践 ・政治改革・行政改革研究プロジェクト
6	社会・歴史学系	地域社会の公共性にかんする総合的研究
7	経済学系	日本経済の現状と課題に関する基礎データの収集・整備
8	経営学系	<ul style="list-style-type: none"> ・「コーポレート・ガバナンス・システムの企業業績に与える影響に関する日米比較研究」に関するミドルテネシー州立大学との共同研究 ・中南財経政法大学との学術交流による日中企業の経営比較
9	数理・情報学系	数理・情報学研究会の設立
10	機械・電子学系	感覚センサーを用いた人支援システムの開発
11	物質・エネルギー学系	無機—有機ハイブリット型化合物の創製と物性評価
12	生命・環境学系	生命・環境系の教育研究組織と運営のあり方についての調査

奨励的研究助成予算「プロジェクト研究奨励費」成果報告書

人間・心理学系長 内田 詔夫

人間・心理学系長 内田 詔夫

研究 課 題

研究 課 題

<p>学校・家庭・地域の連携による総合的学校臨床研究</p>	<p>ヒトの認知—行動プロセスに関わる生涯発達心理学的研究</p>
平成17年3月31日	平成17年3月31日
<p>1) 研究班のメンバー：教育臨床と教育実践にかかわる、中野明德、青木真理、生島 浩、水野 薫、鈴木庸裕、宮前 貢の6名。</p> <p>2) 本研究の目的：不登校、いじめ、非行、暴力、ひきこもり、学習困難、発達障害などの特別なニーズをもつ児童生徒及びその家族に対して、効果的な援助・支援をおこなう。</p> <p>3) 研究方法：地域の中にある社会的・人的資源を活用したり、学校の中で予防的・開発的な活動を発展させたりして、総合的に学校臨床を展開する。</p> <p>4) 平成16年度の成果</p> <p>①平成16年12月に、教育実践総合センターにある臨床心理・教育相談室の分室として、福島大学サテライト街なかブランチ内に「まちなか臨床心理・教育相談室」をオープンすることができた。これによって両相談室が福島市内の教育相談を支える有力なセンターとして第一歩を踏み出すことができた。</p> <p>②福島市内の幼・小・中・高校と連携すべく相談室のパンフレットを配布し、今後附属校園等の学校を支援する準備を整えた。</p> <p>③平成16年12月から平成17年3月に、まちなか相談室が扱った相談件数は10件で、面接総数は22であった。</p> <p style="padding-left: 2em;">相談内容は、不登校5件、発達障害3件、摂食障害1件、解離性障害1件であった。</p> <p>5) 次年度の課題</p> <p>①まちなか相談室の本格的な展開</p> <p>②相談室と学校とのネットワークづくり</p>	<p>我々は、外界刺激（あるいは環境刺激）に対する人間の行動表出を、刺激受容→認知的処理→行動表出という時系列的な心理的処理プロセスとして仮定し、それらの基礎的なメカニズムを解明するために、心理学的研究手法を用いた研究を行った。</p> <p>1. 課題場面を用いた認知—行動プロセス研究班</p> <p style="padding-left: 2em;">「心的カテゴリ構造の発達と衰退に関する研究」：長期意味記憶におけるドウブツカテゴリの構造化を日本語話者の幼児及び統合失調症患者を対象に検討した。その結果、統合失調症患者は単純に発達を逆行するのではない特異的な長期意味記憶の障害を示すことが明らかになった。</p> <p style="padding-left: 2em;">「社会的できごとの時間的記憶に関する研究」：過去のできごとが「いつごろ」起きたかについて若年者と高齢者とを対象に、質問紙実験の方式で調査したところ、若年者と比べて高齢者では「やや以前であった」という誤りの頻度が多くなる傾向が得られた。</p> <p>2. 対人場面を用いた認知—行動プロセス研究班</p> <p style="padding-left: 2em;">職場において過重労働やメンタルヘルスが問題になっており、労働時間や労働形態とメンタルヘルスおよびヒューマンエラーとの関連を調べた。時間などの物理的負荷は、睡眠を中心とした生活行動の状態が精神的健康に対する有意な説明変数であった。エラーについては調査対象者の76～82%が何らかのエラーを認めているが、労働条件やストレスとの関連は明らかにならなかった。安全対策としての職場における情報コミュニケーションが防御要因として着目された。また、協同場面における集団問題解決についての実験を行った。</p> <p>3. 認知—行動プロセスの生得的要因に関する研究班</p> <p style="padding-left: 2em;">満期産児と早産児の活動リズムを周期解析法の一つである自己相関関数と多変量解析の一種であるクラスター分析を応用して解析を行った結果、満期産児も早産児も受胎後46週を契機にリズムの顕著化が生じていた。このことから乳児の活動リズムの顕著化は、出生ではなく、受胎を契機として生じている可能性が高いと考えられた。満期産児では、活動リズムの顕著化と認知—行動系の変化が同時に起こるので、この系の変化も受胎を契機としている可能性がある。</p> <p style="padding-left: 2em;">現在、認知・行動に関する変数を解析中である。</p>

人間・心理学系長 内田 詔 夫

文学・芸術学系長 勝 倉 壽 一

研究課題

研究課題

いきいき生活応援プロジェクト

一子どもの発達に応じた生活自立支援のための家庭・学校・地域教育のあり方について

平成17年3月31日

本事業は、子どもの生活自立を促すために、発達段階に応じて学校・家庭・地域がどのように連携して教育を行う必要があるのかを検討し、得られた成果を地域に還元することを目的として3～4年計画で実施するものであり、今年度は、事業を進める上での基礎資料を得るため、幼児の保護者を対象に子育てに関する実態・意識等の質問紙調査を実施した。

調査は、福島大学附属幼稚園の保護者77名を対象に12月上旬に実施したが、回収率は66人-86%であった。これらの集計は、12月末からコンピューターへのデータ入力を行い1月初旬に単純集計、1月下旬にクロス集計を完了した。その後、結果のグラフ化及び考察を行い、「[子どもの生活および子育てに関する調査]結果報告」としてまとめ、調査協力者へ報告書を配布した。

本調査で得られた主な結果は以下の通りである。

①本調査の回答者は、92%が「母親」、年齢は「30～39歳」が73%、職業は「主婦」が68%を占めていた。②家族構成は、子どもとその親の「二世帯家族」が77%、祖父母と同居する「三世帯」が20%を占めていた。子どもの数は「2人」が56%と最も多かった。③「家庭の役割」については、「家族団らん」45%、「休息・安らぎ」38%と多かったが、後者は特に40歳以上に多くみられた。④「子育てにおいて大切に考えていること」として、話をよく聞く、抱きしめるなどの「親子関係」が67%と多く、これも40歳以上に多くみられた。⑤「子育ての相談相手」は夫婦が63%と最も多く、「子育ての情報入手方法」としては「友人」が67%と多かった。⑥「子育てに必要な支援」としては、「家庭ではできない体験活動の場所や機会を作る」が85%で最も多く、ついで「幼稚園や学校での生活を充実させる」52%、「幼稚園、学校で子ども同士が友人関係を深める機会を増やす」45%などが比較的多く上げられた。⑦食事に関する一連の行為において、「食事の挨拶」や「箸を使う」は80%以上が「いわれなくてもできる」と回答しており、性別の差もみられなかった。⑧子どもの食事面で心にかけていることの結果を点数化したところ（3点満点）、「栄養素のバランス」(1.98)、間食については「食べ過ぎないように心がける」(2.31)が高かった。⑨食事の面で困っていることとしては、「食べたり食べなかったりのムラがある」38%、「好き嫌いがある」36%が比較的高くあげられた。⑩子育てに関わる興味・関心として、「子どものほめ方、しかり方」、「子どもの感性を育てる」、「親子で作る料理作り」がいずれも45%以上で高く示された。

なお、今後子どもの生活自立のための調査をさらに進めるとともに、学校・家庭・地域の連携のあり方を検討していきたいと考えている。

(浜島京子、中田スウラ、白石昌子、千葉桂子、中村恵子)

東アジアの言語文化に関する比較研究

平成17年3月30日

プロジェクト研究①「東アジアの言語文化に関する比較研究」においては、漢文学・日本文学・国語教育の研究を国際的な視点から深化させることを目的として、東アジア（中国・朝鮮・日本）の諸関係を視野に入れた共同研究を推進してきた。そのために、中国の上海市立甘泉中学校の日本語教育実情調査、華東師範大学外国語学院日本語学部懇談会への参加、東アジア比較文化国際会議、日本中国学会への参加、中国芸文研究会秋期大会、秋田中国学会等における研究発表と討論、及び東京博物館、サントリー美術館、京都大学人文科学研究所、秋田中央図書館等における資料調査を行い、その成果の分析と整理が進められてきた。

以下、研究テーマ別に現在の進捗状況及び成果を記しておく。

○日中古典詩文の本草学的研究（澁澤尚）

10月8日：資料調査 東京国立博物館・サントリー美術館

10月9日：学会参加 日本中国学会第56回大会
～10日 (二松学舎大学)

11月22日：資料調査 京都大学人文科学研究所

11月23日：学会発表 中国芸文秋期研究会（立命館大学）

12月4日：学会発表 秋田中国学会（秋田大学）

12月5日：資料調査 秋田市立中央図書館

2月11日：資料調査 立命館大学文学部文献資料室
～13日

2月16日：資料調査 山形県立図書館
～18日

○東アジアの仏教と漢詩文の研究（井実充史）

10月9日：学会参加 東アジア比較文化国際会議
～10日

福島大学教育学部論集（人文科学部門）第76号に論文「鎮護国家と梵門詩」を掲載

○日本近代小説における中国古典の受容に関する研究（勝倉壽一）

○日本植民地（中国・朝鮮）文学の研究（澤正宏）

里村の著作（小説、随筆、ルポルタージュなど）を収集中

○中国における日本語教育の現状と歴史に関する研究

（高野保夫）

9月28日：中国・上海市立甘泉中学校見学および華東師範大学
～29日 外国語学院日本語学部教員懇談会参加

福島大学教育実践研究紀要第49号に論文「日本語学習者にみる文章表現上のつまづきー中国人学生の場合ー」を掲載予定

文学・芸術学系長 勝 倉 壽 一

文学・芸術学系長 勝 倉 壽 一

研 究 課 題

研 究 課 題

福島県下における明治以降造営された洋風建築および附随する芸術作品の調査研究

マルチメディアを用いた音楽実技指導法に関する研究

平成17年3月31日

平成17年3月30日

白河市歴史民俗資料館において「達磨」等の松平定信(1758-1829) 絵画作品及び書、谷文晁(1763-1840)「涅槃図」、小野町ふるさと文化の館において亜欧堂田善(1748-1822)「絵馬(洋人曳き馬図)」、「木造阿弥陀如来及び両脇侍像」、猪苗代町「天鏡閣」では建築と新海竹太郎(1868-1927)「有栖川宮威仁親王像」等の調査を行った。
県下の洋風建築およびそれに附随する芸術作品の現地調査を継続する上での貴重な資料を収集することができた。以下は、「天鏡閣」及び「有栖川宮威仁親王像」に関する調査研究の概要である。

国重要文化財指定・有栖川宮別邸「天鏡閣」

現在、国重要文化財指定とされる「天鏡閣」は、明治41年(1908)、有栖川宮威仁親王(1862-1913)によって猪苗代湖畔長浜の丘上に建てられた。ルネサンス様式からなる洋風木造建築である。厨房部分を除くと総二階で、ただ、三階展望室をもつ。室内のタイル、家具などに当時のヨーロッパで流行した美術様式が見られる。

大正12年(1923)に高松宮家に継承され、昭和27年(1952)福島県に寄贈された。

新海竹太郎の「有栖川宮威仁親王像」と「天鏡閣」

新海竹太郎は、明治、大正期に活躍した彫刻家である。山形市に生まれ、陸軍士官を志して上京した。近衛騎兵大隊時代に、たまたま制作した馬体彫刻が認められ、彫刻家に転身した。彫刻家としての自律をうながしたのは、竹太郎の代表作「北白川宮能久親王彫刻」である。明治33年(1900)パリ万国博にさいしてパリへ赴き、のちベルリンへ移り、同地の王立美術アカデミー教授ヘルテスに師事し、明治35年(1902)帰国した。

一方、有栖川宮威仁親王は、日本海軍の基礎確立に尽力し、明治37年(1904)6月海軍大将となり、大正2年(1913)7月、52歳で死去し、元帥府に列せられた。竹太郎が、威仁親王の銅像制作を依頼されたのは、大正5年(1916)である。竹太郎は雛型をつくり、原型は海軍造兵廠で鋳造され、大正10年(1921)12月に落成された。銅像は円柱上に置かれ、海軍参考館前に設立された。参考館は倒壊してしまったものの、銅像は残され、昭和59年(1984)7月、福島県の「天鏡閣」庭園に移設再建され、今日に至る。

マルチメディアを音楽実技指導において効果的に活用するための共同研究プロジェクトとして、データベース化のための音楽情報を集約、整理し、そのプロトタイプモデルの作成を完成、標準的で高性能なデータベース・ソフト、File Maker Pro 7を11月に購入、それに移植を終える。また、DVDの音楽資料を、インターネット等を利用して収集し、そのリストを作成し、それらの中から音楽実技教育に有用な資料を12月下旬に精選、購入。

これらと平行して、特別予算を得て、大型のプロジェクター(60インチ・プラズマディスプレイ)を設置し、教育費により、20年以上経過した音響(サウンドとビジュアル)機器の更新を進め、教育環境を整備しつつある。併せてこのプロジェクトの目的である音楽教員を目指す学生への指導に展開するための研究を進め、次年度学生へ展開する準備をしている。

文学・芸術学系長 勝 倉 壽 一

健康・運動学系長 佐 藤 理

研 究 課 題

研 究 課 題

我が国における音楽文化の近代化に関する基礎研究

身体リテラシー教育の充実に関する実践的研究

平成17年3月30日

平成17年3月31日

プロジェクト研究④「我が国における音楽文化の近代化に関する基礎的研究」では、主に明治から大正期にかけての音楽雑誌、教育雑誌、関係新聞記事、唱歌集、唱歌科教授法書、及び本プロジェクトに関わる先行研究資料の調査・収集を進めてきた。調査対象は国立国会図書館、東京芸術大学、武蔵野音楽大学、東京音楽大学等であり、調査をほぼ完了し、資料の分析と整理を実施してきた。

また、明治期以降の大衆音楽の近代化について考証するため、幅広く日本の大衆芸能を取り上げた解説書付きCD全集（中山一郎編『日本語を歌・唄・謡う』アド・ポポロ、2002年）、SPレコード目録（昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』アテネ書房、2003年）、及び中山晋平や古賀政男を始めとする著名な大衆音楽家のCDを購入した。

なお、本プロジェクトの主要論題でもある「音楽教育の近代化」に関わる研究の成果を、学会発表した。（杉田政夫「日本の学校音楽教育におけるヘルバルト主義教授理論の受容と展開—唱歌教材の構成理念に及ぼした影響を中心に—」日本音楽学会東北支部例会、宮城教育大学、3月26日）

現代社会を豊かに生きるためには、自己の身体の健康を確保することを最低条件として、各々がそれぞれの仕方ですべての身体運動を楽しみ、そのための能力すなわち身体リテラシーの獲得が求められている。本学系では上記の研究テーマを設定し、以下の課題に向けた調査を実施し検討を進めた。

1. 身体リテラシー概念の検討
仮説的身体リテラシー概念を構成し、学生の身体リテラシーに関する現状を調査する。
2. 学生各人が自己の身体リテラシーを把握し向上への指標となる仮称「福島大学身体リテラシースケール」の開発。
3. 身体リテラシーの発達を支援するプログラムの作成とその評価方法。
4. 身体リテラシーに関する知識の獲得および運動実践を支援する Web Based Learning システム、仮称「e-Karada」の開発。

先ず身体リテラシー概念を検討しその内包するものを整理した。その結果大別して「すべての人にとって生存を維持するための必要最小限の身体能力」と「人生の質をさらに豊かにするための文化財」という側面が考えられた。前者は自己実現のための健康の保持増進という側面であり、リソース（基盤としての）としての身体的諸力ということができる。後者はスポーツ文化の享受（スポーツに親しむ・楽しむ）やスポーツを媒介としてのコミュニケーションなどによる関係性の発達などがその具体的内容である。

次いで身体リテラシーに関わる現状を把握するため作業仮説的身体リテラシー概念にもとづき調査票を作成し、健康・運動科学実習履修学生に対するアンケートを実施した。主な結果としては、生存を維持し健康の保持増進に必要な身体活動量と、健康・運動・スポーツに関する科学的知識が不十分である現状が捉えられた。

新年度からの「健康・運動科学実習」の新らたなプログラム展開に向け、調査結果を実習でどのように活用するかという観点から、さらなる分析・考察を進めた。

外国語・外国文化学系長 九頭見 和 夫

外国語・外国文化学系長 九頭見 和 夫

研究課題

研究課題

<p>ゲルマン叙事詩解説のための基礎的研究</p>	<p>修飾関係の理論的・実証的研究</p>
<p>平成17年 3月22日</p>	<p>平成17年 4月12日</p>
<p>ゲルマン叙事詩、特に「ベオウルフ」の一般的な紹介のあり方について研究を進めてきた。</p> <p>学術的な入門書はすでに数多く出版されているが、これらは専門家にとっても問題を明らかにすると言うよりも、むしろ混乱させられるようなたぐいのものが多い。古くは Chambers, <i>Beowulf: An Introduction to the Study of the Poem</i> (1921) があり最近では Bjork and Niles, <i>A Beowulf Handbook</i> (1997) のような入門書が存在する。いずれも専門家でさえもただただ専門研究の迷路に迷い込むだけに終わりそうな入門書である。</p> <p>様々な概説書等を渉猟した結果、つぎの2書が、一般的な紹介としては最も適切であると判断した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Lehnert, <i>Beowulf</i> (1967) 2 Irving, Jr, <i>Introduction to Beowulf</i> (1969) <p>これらの入門書を基礎として、一般的な紹介に不可欠な項目をつぎのように選定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 作品の成立に関する背景的解説 2 作品を構成する素材 <ul style="list-style-type: none"> 歴史的な素材 (系統図、年代設定を含む) 物語的な素材 (ストーリーの梗概を含む) 3 文体的特徴 <p>一般的な紹介は簡明でなければならない。上の2書のうち簡にして明であるという要件を満たすものは Lehnert である。従って、この翻訳を試み、上記項目の具体的内容について検討した。</p>	<p>研究計画書に記載した「事業計画の概要」および「各担当者の研究目的」に沿って研究を進め、それぞれ以下の学会発表においてその成果を公表した。</p> <p>(朝賀) 東北英文学会第59回大会 (東北大学) 英語学部門シンポジウム 「形式と意味のインターフェイス: 述部をめぐる諸問題」</p> <p>日時: 2004年11月21日 題目: 類別詞構文における叙述関係 要旨: 本発表では、語彙項目としての構文の存在を認める立場から、英語の類別詞構文が、叙述関係を規定する語彙項目であることを論じた。英語の類別詞構文において類別詞とみなされる名詞は、連辞構文における述部名詞句と同様に、叙述関係の述部として機能していると考えられる。本発表は、この叙述関係を、概念構造において特性の帰属を表す意味関数を仮定することでとらえ、この構文の示す諸特性を説明した。また、この構文を統語構造における移動操作に基づいて派生する統語分析に対して批判的検討を加え、対応規則に基づいて統語構造と概念構造との相互関係をとらえる言語の構成の妥当性について考察した。</p> <p>(井本) 韓国日本学会第70回国際学術大会研究発表 (高麗大学校 (韓国ソウル))</p> <p>日時: 2005年 2月19日 題目: 動詞の意味と副詞的修飾関係 要旨: 本発表では、日本語の副詞的修飾関係について、修飾限定の基本原則と動詞句の意味的性質から修飾関係を捉える「副詞的修飾の関係構成のあり方を重視するアプローチ」を提示した。そして、このアプローチによって提起される2つの論点を提示した。</p> <p>まず、意味的修飾 (修飾限定) の概念規定を確認し、副詞的修飾関係が修飾限定という意味操作に一律にもとづくものであることを確認した。そして、「斜めに」や「ほど」句などの現象によって、意味解釈が本来的に副詞的成分の意味から切り離される「関係の意味」であることを例証した。このことから、副詞的修飾関係の多様性を修飾限定という意味的操作と述語動詞句の修飾対象に還元するという、従来の副詞研究とは異なるアプローチが導き出されることになる。</p> <p>次に、情態修飾関係の体系について、先行研究の提案を批判的に検討し、修飾関係の意味素性の抽出と素性による情態修飾関係の交差分類を提示し、情態修飾関係の分類に体系的予測力を与えることができることを主張した。また、本発表のアプローチに対する反例に見える現象として疑似結果構文を挙げ、これが修飾の基本原則を遵守することが動機となって生じた現象、つまり本発表のアプローチの傍証となることを示した。最後に、本稿で提示するアプローチが副詞的修飾関係の生成的性質を捉えるだけでなく、述語動詞句の意味的研究に寄与しうるものであることを示した。</p> <p>(福富) 15th Colloquium on Generative Grammar (第15回生成文法コロキウム) ポスター発表 (Universitat de Barcelona (スペイン・バルセロナ))</p> <p>日時: 2005年 4月 5日 題目: The Copy Theory of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation (移動のコピー理論: 日本語の右方転位の一例) 要旨: 自然言語には、統語事象と意味事象が乖離した現象が数多く見られる。その「ズレ」を解消し、かつ理論全体を簡素化する上で重要な役割を果たしているのが、「移動のコピー理論」と呼ばれる統語的な道具立てである。本発表では、日本語の右方転位、とりわけWH句、および修飾語句の右方転位という現象を取り上げ、従来の分析では問題とされてきた、その統語的・意味的特性が「移動のコピー理論」の下でどのように分析・説明されるかを考察した。さらに、その帰結として、1) 日本語のWH移動は顕在的な移動であること、2) 中核強勢規則 (Nuclear Stress Rule) は日本語においても階層構造に従うことを提案した。</p>

法律・政治学系長 稲庭 恒一

法律・政治学系長 稲庭 恒一

研究課題

研究課題

地域における法学教育と法的実践

政治改革・行政改革プロジェクト

平成17年4月7日

平成17年3月17日

本研究は、福島を中心とした地域における法的ニーズの所在を明らかにするとともに、そのニーズに応えるリーガルサービスや法学教育のあり方を探ることを目的としており、2004年度は、ロースクール時代における学部法学教育のあり方について調査研究を行った。

具体的には、福島大学にとっても参考となる、地方中規模大学が設立した、3つの法科大学院〔(信州法科大学院(信州大学)、四国法科大学院(香川大学及び愛媛大学)、山陰法科大学院(島根大学))と法科大学院の設置を断念した岩手大学の合わせて4校を訪問し、法科大学院設置に至るまでの経緯、入学者の動向、カリキュラムの特色、学部教育に与える影響、今後の課題などについてヒアリング調査を実施した。

そこから得られた知見をまとめると以下の通りである。

第一に、法科大学院設置大学では、必ずしも法学教員が多かったわけではなく、トップダウンによる意思決定のもとで、大学のスタッフと予算を重点的に配分することによって、法科大学院の設置に至っている。

第二に、法科大学院設置に当たっては、地元の法曹界や経済界の強力な支援があり、設置後も、実務家教員の派遣や教育ローンの設定などの面で支援がある。

第三に、法科大学院の入学者は、当該大学の学部から上がった者は少数であり、中央の大学を卒業した地元出身者(Uターン者)を主なターゲットにしている。また、新司法試験の合格率がかなり低いことが予想されることから、3年生コースを原則にしたり、身分の保証がある有職者を優先しているケースがある。

第四に、法科大学院の授業を担当する教員の負担はかなり重く(連合型の場合は通勤が加わる)、総じて、学部教育における法学教育が手薄になる傾向がみられる。

第五に、法科大学院を設置しなかった大学(岩手大学)においても、他の法科大学院への進学者に対して奨学金貸与を行うなど、一定の対応を実施している。

今後、専門職大学院(法科大学院および公共政策大学院)を修了して公務員に就職する者がかなりいることが予想される。したがって、福島大学においても、学類及び研究科の両方のレベルで、どのような法学教育を実践していくかについて、幅広く議論していく必要がある。

○政治・行政分野

政治・行政分野においては、地域の行政組織や諸集団の再編・改革に関して、他学系や地域の研究団体と協力しながら総合的な研究を行うことを目標に、今年度は「政治改革・行政改革」を年間テーマに、研究会を開催し、課題の共有化を図った。

・第1回 12月8日(水)

テーマ ローカル・マニフェスト

講師 磯崎初仁(中央大学教授)

概要 自治体の政治改革ツールとして、2003年統一地方選挙以来注目されているローカル・マニフェストについて、積極的な役割を果たしてきた磯崎教授の報告を受け、議論を交わした。

・第2回 1月18日(木)

テーマ 行政改革度都市ランキング

講師 市川嘉一(日本経済新聞社日経産業消費研究所主任研究員「日経グローカル」副編集長)

概要 隔年で実施されてきている日本経済新聞社日経産業消費研究所の行政改革度都市ランキングについて、その考え方や実態などについて報告を受け、議論を交わした。

・第3回 1月31日(月)

テーマ 「三位一体改革」をどう考えるか

講師 森田 朗(東京大学公共政策大学院院長)

概要 国自治体政府関係の政治行政改革のひとつとしての財政制度改革の現状について、あるときは当事者として関わった森田教授の報告を受け、議論を交わした。

社会・歴史学系長 栗原 る み

経済学系長 清水 修 二

研究 課 題

研究 課 題

地域社会の公共性にかんする総合的研究

日本経済の現状と課題に関する基礎データの収集
・整備

平成17年 4 月21日

平成17年10月21日

学系プロジェクト研究として「地域社会と公共性」という大きな主題を設定し、現在のグローバル＝ナショナルな文脈の構造的変動が提起している地域社会における「公共性」の存立と変容を明らかにするという問題意識により、研究会と実態調査を実施した。

研究会では、現在の日本が地域という生活の場およびそこで生活する個人に視座を据えたさい、それぞれの地域の特性に規定されて、どのような公共性を必要としているのか、国、県、市町村、町内会などのさまざまな集合が、どのような公共性を担うことができるのか、民間化、民営化という市場メカニズムの導入とNPO、やNGOなどの活躍への期待がどういう意味を付与しているのか、などの課題がだされたが、解明のための社会学・歴史学からのアプローチの方法の難しさを確認せざるをえなかった。

この困難を突破するため、パイロット調査を行うこととした。現時点において国レベルで提起されている「避けて通れない問題」として基地問題を位置づけ、地域社会に基地問題が提起している多層的課題をサーベイすることとした。そこで沖縄県の宜野湾市をフィールドに選定し、実態調査を実施した。地域社会における「公共性」の変容としてどのように論理構成するかを考察するための方法を模索する手がかりを得ることを期待したからである。

沖縄における県、市町村、自治会及び軍用地地主会の活動を調査した結果、現在のところは、ジェンダーの視点及び歴史的な文脈を不可欠とする地域の公共性に関する論理構築の可能性が見えたという段階で、今後の地域選定をふくめて、本格的な調査研究の継続が必要である。

今回の調査の概要は次のとおりである。

地域社会を主題とする調査では、市民生活課および自治会長会からのヒアリングを行い宜野湾市の地域社会と地域住民組織の概況を把握したのちに、戦前の集落をほぼ全面的に普天間基地に接収された宜野湾区を対象とする調査を実施した。これらによって明らかになった宜野湾市とりわけ宜野湾区の地域社会をめぐる「公共性」問題の基本構図は以下のとおりである。第一は基地の存在というグローバル＝ナショナルなレベルでの「公共性」とローカルな「公共性」との対抗関係、第二は普天間基地返還後の跡地利用をめぐる「行政」と「地元」の「公共性」をめぐる対抗と補完の関係、そして第三は「地元」内部での住民諸階層の利害の対立と調整という草の根レベルでの「公共性」構築の課題の存在である。なおこれらに関する詳細な検討は今後の課題である。

男女共同参画と福祉に関しては、県と宜野湾市の男女共同参画担当者及び女性団体の方からヒアリング調査を実施した。歴史的な文脈に関しては宜野湾市史編纂室でヒアリング調査を実施した。なお、現在、金武町では、米軍用地に接収された共有地「旭山」の入会権者でつくる「金武部落民会」の会則で、慣習を理由に原則として正会員資格を、男子子孫に限定している条項をめぐり、軍用地地主の権利関係に見られる女性排除の伝統が裁判係争中である。基地の存在が生存に不可欠だという構造と、その権利関係に付与している歴史的差別の継承をどう解決していくのか、興味深い課題に逢着したところである。

NPOと市民活動に関しては、宜野湾市人材育成センターにおいてヒアリング調査を実施し、生涯学習の取り組み状況と、市財政が厳しい中での生涯学習のあり方、および、市内のNPO法人との連携等の課題を把握した。個別のNPO法人の活動状況等については概要の把握にとどまり、より詳細な調査分析は今後の課題である。

本プロジェクトは、日本経済（これに関連する世界経済・地域経済を含む）に関するさまざまな分野の基礎データの収集・整備をすすめ、その作業の進捗状況を見ながら研究会を重ねつつ、個別のテーマの設定とその体系化について検討するものである。

昨年度は手始めとして、経済学の導入教育に利用しうる経済データの調査、収集および実際の教育現場におけるその活用実践に取り組んだ。導入授業である「経済データの見方・読み方」と「データで見る日本経済」の担当者が中心となって各地の大学を調査した。

調査対象は京都大学、一橋大学、千葉大学、横浜国立大学、富山大学、信州大学、滋賀大学、高崎経済大学、慶応大学、上智大学、専修大学、東京経済大学、明治大学、明治学院大学ならびに法政大学の合計15大学である。

調査の結果については導入教育の担当者による研究会を開催して検討し、調査報告にまとめて「研究年報」に掲載することになっている。

今回の調査により、経済学の導入教育に関する各大学のカリキュラムの概要と本学類の特徴を認識することができた。近代経済学と政治経済学の分離・並立関係を導入部分で超克しようとする本学類の試みの新しさが浮き彫りになった。

調査の結果を実際の授業に生かしながら「経済データの見方・読み方」は前期開講科目として実施され、その経験交流も行った。もう1つの導入科目である「データで見る日本経済」も、調査の結果をふまえて後期に実施されている。

昨年度に引き続き、経済学の導入教育に利用しうる経済データの調査、収集および実際の教育現場におけるその活用実践に取り組んだ。導入授業である「経済データの見方・読み方」と「データで見る日本経済」の担当者が中心となって各地の大学を調査し、経済学の導入教育の実情、およびそこで使われている資料の収集を行った。その内容は研究年報に調査報告としてまとめる作業が進行中である。「経済データの見方・読み方」は前期開講科目として実施され、その経験交流も行った。

経営学系長 山浦 廣海

経営学系長 山浦 廣海

研究課題

研究課題

「コーポレート・ガバナンス・システムの企業業績に与える影響に関する日米比較研究」に関するミドルテネシー州立大学との共同研究

中南財經政法大学との学术交流による日中企業の経営比較

平成17年3月22日

平成17年3月22日

16年度の取り組みとしては、10月16日より23日にかけて、Middle Tennessee State University(以下、MTSUとする)よりF. ミッチェロ教授およびG. ホメイファー教授を本学に招聘した。そして本学の奥本助教授とミッチェロ教授とによる「銀行の経営効率性に関する日米比較研究」を進めるため、わが国における金融機関の財務データを収集するとともに本県の金融機関(日本銀行福島支店、東邦銀行本店、野村証券福島支店)においてインタビュー調査を行った。この結果、上記の研究に関して大きな進展が得られ、これらの成果は、17年7月に白桃書房より発行予定の『石塚博司先生古稀記念論文集』において論文「地方銀行のコスト効率性に関する予備的考察」として掲載予定である。なお、日米比較研究については現在本学とMTSUにおいて分析を進めており、研究結果を得次第、学会等で報告する予定である。

16年度取組としては、本学側相良教授、奥山教授、川上助教授により訪問チームを結成し、10月末に中国・武漢の中南財經政法大学工商管理学院を訪問し、先方の院長、副院長と共同研究の協議を行い、本件共同研究の覚書を交わすことが出来た。これにより、両学間で「中南財經政法大学(中華人民共和国)と福島大学(日本国)の企業経営分野における学术交流に関する覚え書き」(2004年10月31日)が成立し、今後、「中日両国の大企業の成長シナリオに関する比較研究」、「中日両国の中小企業の発展に関する比較研究」および「中日間の貿易に関する研究」を共同して取り組み、その成果を中国語および日本語で日中両国で出版するほか、学術論文、学術研究報告さらには論文集を出版するよう努力することとなった。

さらに、今後の研究推進に関して、ミッチェロ教授およびホメイファー教授と協議し、「コーポレート・ガバナンス・システムの企業経営に与える影響に関する日米比較研究」の方向性とその具体的な研究方法について、双方の見解をすり合わせた。

その間、3年間合計3回づつ相互訪問を重ね、2005年3月から2008年3月までを暫定的に本件学术交流期間として定め、共同研究を進めることとなった。

また、MTSU College of Businessと福島大学経営学系とのその他の共同研究の可能性についても検討した。そこでは、双方とも経営学および会計学を専攻とする豊富なスタッフを有しており、多くの分野でのコラボレートが可能である旨の見解で一致した。

この間、訪問チームは武漢市郊外特区や湖北省の現地企業等の訪問視察を行い、本件予備調査を行った。

2005年3月以降、中南財經大側の訪問団来訪が計画され、その内容が固まり次第、双方の協議を経て本学側の受け入れに取組む予定である。

数理・情報学系長 大橋 勝 弘

機械・電子学系長 石 原 正

研 究 課 題

研 究 課 題

数理・情報学研究会の設立	感覚センサーを用いた人支援システムの開発
平成17年3月9日	平成17年3月31日
<p>平成17年2月18日に第1回の上記研究会を開催した。</p> <p>情報系から本学情報処理センターで仕事をしておられる本田修啓教員、数理系から笠井博則教員の発表があった。</p> <p>本田氏「本学ネットワークの現状と課題」、本学バックボーンネットワークおよび総合情報処理センター教育用パソコンシステムに関して、この1年間に行なったトラブルシューティングと改善のためのネットワーク改善作業の概要について、現象、原因究明のための実験と考察、具体的に実施した対策について説明した。また、主としてセキュリティの観点から、理想と考えるキャンパスネットワークのありかたと構成について説明し、それに向けて今後予定している事業について説明した。上記内容に関し、活発な議論が行なわれた。</p> <p>笠井氏「超伝導現象と Ginzberg-Landau 方程式」</p> <p>超伝導現象のモデル方程式である Ginzburg-Landau 方程式について、物理現象と対比しながら、解析的に知られている結果を紹介した。</p> <p>特に、方程式のある種の対称性を利用した、第2種超伝導状態に対応する渦糸解と呼ばれる解の近似解の構成と、時間依存の方程式の時間無限大での漸近挙動について、時間をとって紹介した。</p>	<p>機械・電子学系では、人の生活システムの知的化を目指して安全安心な生活のための感覚センサーとそれに必要なソフトウェアを開発し、地域産業との連携を図りつつ、産業活性化と福祉社会の実現に貢献することをめざしている。</p> <p>本年度は、いくつかの具体的問題に対して、新しい感覚センサーとそれを用いた人支援システムの開発のための基礎的研究（既存の各種センサーの利用と新しい信号処理アルゴリズムの開発等）を行った。「プロジェクト研究奨励費」はこれらの基礎研究において実験を行うための経費の一部として用いた。研究成果の一部は学系メンバーにより学術雑誌および国内外での会議にて公表されている。これらの成果公表実績は以下の通りである。</p> <p>学術論文 10編 国際会議発表論文 13編 国内会議発表論文 28篇</p> <p>来年度からは新たに2名のメンバーが本学系に加わる予定であり、より活発な研究活動が行われることが期待できる。</p>

物質・エネルギー学系長 長谷部 亨

生命・環境学系長 鈴木 浩

研究課題

研究課題

無機—有機ハイブリッド型化合物の創製と物性評価

生命・環境系の教育研究組織と運営のあり方についての調査

平成17年3月31日

平成17年3月31日

材料の素材は、有機物と無機物に大きく分けることができる。この有機、無機という分類はいささか古典的なものであるが、それぞれに特有の性質を示すことが多く、現在でもこの分類に従った研究が一般的である。今年度は、将来的にさまざまな有機物あるいは無機物を組み合わせるための導入として、それぞれの基礎的な合成および合成した物質の物性評価を行うため、物理化学、分析化学、有機化学、高分子化学、無機化学、材料工学等の学問分野の視点からアプローチするとともに、これら学問分野間の連携を深めることを目的とした。以下に今年度の6つの研究課題とこれらの成果を簡単に示す。

(1) エネルギー変換を可能とする分子デバイスの開発を目指した新規含金属化合物の合成とその基本的性質の理解

今年度は、エネルギー変換を可能とする分子デバイスを開発するための基礎的研究として、還元中に金属—炭素結合を安定化させるため、光および酸化還元に対して興味深い挙動を示すことが知られる有機物が結合した金属錯体を合成し、それらの酸化還元および光反応挙動を検討した。その結果、合成した金属錯体は酸化還元、光いずれの反応においても敏感に反応し、隣接した金属—炭素結合を含んだ安定な金属環を形成することを見出した。

(2) 光触媒機能と磁気センサーを組み合わせた環境調和材料の創製

2 源ターゲットを有する高周波スパッタ法を活用して、常温で鉄微粒子を多層の二酸化チタン層間に不連続分散したナノコンポジット膜を作成した。この状態では、二酸化チタン膜は非晶質で鉄微粒子は結晶状態で存在していた。常温測定で微小ながら巨大磁気抵抗効果 (GMR) の発現を確認した。成膜後に窒素ガス雰囲気中で焼鈍処理すると膜全体の透明度は増大した。今後はUV照射によりGMR増大を誘起する成膜法を開発する。

(3) 機能性「分子ふるい」の性能と選別分子に関する基本的性質の整理

「分子ふるい」とするメソポア (平均細孔直径 4 nm, 6 nm, 10 nm, 20 nm, 30 nm, 40 nm, 50 nm) を有する多孔質シリカ (Aldrich, Merck, 富士シリシア) の細孔径分布を窒素吸着法によって確認した。一部を除き、市販品は細孔径分布が大きく、機能性「分子ふるい」として用いるには問題点の多いことが明らかとなった。今後は、これらの合成を試みる。

(4) 塩素を含まないプラスチックの機能化

改質の困難と言われるポリエチレンの接着性の改良を目指し、種々の表面処理の条件を検討した。その結果、放電酸化処理による活性化の有効性を実験した結果、放電処理と高分子処理の組み合わせによるポリエチレンとアルミニウム板との接着性の改良が得られた。

(5) カルコゲンリッチな遷移金属クラスターの合成法の確立

ペンタメチルシクロペンタジエニル配位子 (Cp*配位子) を持つ鉄カルボニル二核錯体と硫黄およびジフェニルアセチレンとの熱反応を行なうことで、Cp*配位子とジチオレン配位子を持つ混合配位子型四鉄—四硫黄クラスターおよび四鉄—五硫黄クラスターの合成法を確立できた。また、この反応でアルキンの活性化が起こり、クラスター上でジチオレン配位子へ変換されることも見いだした。

(6) 含窒素7員環化合物を用いた触媒的酸化反応の検討

ピリミジン環に1-アザアズレンの縮環した化合物は、フラビンアデニンジヌクレオチド (FAD) のモデル化合物と位置づけられ、これを用いたアルコール類の酸化反応について検討した。6位の窒素上にフェニル基を導入した化合物において、最高91サイクルの触媒反応が進行した。現在これらの反応の詳細について検討を加えている。また、光反応の場合との比較などを今後検討していく予定である。

本プロジェクトでは、有機物・無機物を組み合わせることにより、これらの性質を集積し、従来にはない新たな機能の発見をめざす。

学系には、共生システム理工学類の創設を期に着任してきたメンバーが多く含まれている。また本学において生命・環境系という括りで教員が共同の取り組みをすることは従来ほとんどなかった。したがって、学系の創設期に、メンバーそれぞれの研究活動内容についての情報交換を行なうことが重要であり、それが共同研究の可能性を高めていくことになる位置づけられた。

そして、「プロジェクト研究奨励費」による当学系の課題は、①学系のメンバーの研究活動についての情報交換のために理工学類の研究者総覧を下敷きに学系のリストを作成すること、②生命・環境に関わる研究組織の先行的な事例についての調査を行うこと、の2つである。

①については、理工学類以外のメンバーに、一定の書式をもとに、作成を依頼し、一定の集約ができた。一方で、全学的な研究者総覧作成の必要性も指摘されており、学類を基礎にしたリストの活用 (HPへの掲載など) とともに、学系の括りによる情報の発信の仕方を工夫することが課題となっている。

②生命・環境系に関わる先行的な研究組織の情報収集は、広島大学、島根大学、鳥取環境大学、東京大学生産技術研究所などについて行なった。それらは共同研究や委託研究などを中心に対外的な関係が蓄積されているとともに、組織の中での研究者相互の意見交換や共同プロジェクトも蓄積されてきており、今後の方向性について、示唆をえた。また、それぞれの組織では、学術振興会特別研究員や非常勤研究員、さらには学内の他分野の専門家などとの弾力的な連携がなされていること、定常的な研究会にかなりのエネルギーが注がれていることなど、今後の活動の内容についても示唆を得ることができた。

平成16年度学術振興基金「学術研究支援助成」

1. 研究協力に関する事業

(1) 学術研究支援助成

番号	所属学系	氏名	研究課題
1	人間・心理	生島 浩	非行臨床における精神障害・発達障害のある対象者への治療的介入に関する研究
2	人間・心理	鈴木庸裕	特別支援教育コーディネーターの現職教員研修プログラムの開発に関する実証的研究
3	人間・心理	森本 明	聴覚障害児における算数アルゴリズムの正当化：文脈の共有プロセスの検討
4	文学・芸術	高野保夫	文化—歴史的アプローチによる日本と中国の小・中学校における授業改善研究
5	文学・芸術	半沢 康	現代東北方言の文法的諸特徴の記述およびその変容に関する調査研究
6	文学・芸術	渡邊晃一	メディア時代の現代美術と「生命形態」の関わり ～制作学を基盤にした日英米の Art 概念の比較検討～
7	健康・運動	安田俊広	「運動誘発性」筋損傷時の保護効果に関する研究
8	法律・政治	今井 照	大都市制度改革における特別区制度の将来像に関する研究
9	法律・政治	大黒太郎	「極右」政党の政権参加とヨーロッパ・デモクラシー：オーストリアを中心に
10	社会・歴史	雨森 勇	福島県周縁地域における社会変動とローカル・アイデンティティに関する研究
11	社会・歴史	菊地芳朗	東北地方南部における古墳時代首長系譜変動比較の基礎的研究
12	社会・歴史	佐々木康文	地域メディアの情報発信が地域イメージの形成に与える影響に関する研究
13	社会・歴史	西内裕一	現代青年のゲーム文化について
14	経 営	上野山達哉	労働力の流動化の下でのキャリアと組織の独自能力に関する実証研究
15	経 営	川上昌直	新規事業プロジェクトにおけるビジネスリスク・マネジメントの研究
16	数理・情報	笠井博則	Ginzburg-Landau-Maxwell 方程式の漸近挙動について
17	機械・電子	山口克彦	超音波干渉を用いた局所振動型磁気測定器の開発
18	物質・エネルギー	金澤 等	衣料用廃棄繊維素材の再利用による水質浄化材料の開発
19	生命・環境	後藤秀昭	微小変位地形と津波堆積物による東北日本における断層活動の時空間分布特性
20	生命・環境	鈴木 浩	「地域居住支援システム」の構築に関する研究
21	生命・環境	渡邊 明	局地降水量変動のなぞを探る
22	地域創造支援センター	齋藤勝弥	常磐炭砒資料に関わる整理・保存プロジェクト

人間・心理学系 生 島 浩

研 究 課 題

非行臨床における精神障害・発達障害のある対象者への治療的介入に関する研究

平成17年4月1日

虐待経験を持ち、注意欠陥・多動性障害（AD／HD）やアスペルガー障害などの発達障害を抱えた年少非行少年に対する治療的働き掛けを担っている児童相談所及び児童自立支援施設において家族支援プログラムが運営されるための準備作業として、福島県中央児童相談所及び福島県福島学園の参加を得て「家族支援に係る事例検討会」を開催した。参加者に対して研究代表者が、事例に則した実践的な家族支援の技術を指導した。来年度は、研究代表者が定期的にスーパービジョンを実施し、家族支援プログラムが継続的に運営されるよう働き掛けていく予定である。

また、非行性の進んだ少年を収容する少年院からの仮退院者へのアフターケアを担当する保護観察所において、グループワークを活用した家族に対する心理教育的プログラムである「家族教室」を運営するスタッフ養成のために、福島観察所において平成16年10月から研究指導者がファシリテーターとなって毎月1回試行し、その処遇場面をビデオカメラで記録している。来年度はその効果を測定するために、ビデオ記録の分析を行うとともに参加者へのアンケート調査を行う予定である。

このような研究成果については、平成16年11月の「日本精神衛生学会20周年記念大会」及び平成17年3月の「第2回子どものメンタルヘルス関連合同医学会」の各シンポジウムにおいて発表したほか、「非行臨床における教育心理的アプローチ」（『現代のエスプリ』451号、p109-118）や「子どもの危機に臨床家はいかに立ち向かうことができるか」（『犯罪と非行』143号、p79-98）として公表した。

人間・心理学系 鈴木庸裕

研 究 課 題

特別支援教育コーディネーターの現職教員研修プログラムの開発に関する実証的研究

平成17年4月7日

16年度の本研究において、特別支援教育のコーディネーター設置とその活用をめぐる先進地域調査を実施した。その方法として、千葉と埼玉の教育委員会への調査と資料の収集、及び国立特殊教育総合研究所への聞き取り調査と研究協議をおこなった。また、福島県等での教員向け実態調査を実施した。小中学校での担当者への直接の聞き取りやアンケート調査を実施した上で、これからのコーディネーター養成を大学院や現職教員研修のレベルでいかに実施するのか、そしてその際いかなるプログラムが有効なのかを考察・分析した。

現在、全国的にADHDなどの診断や「見立て」とその個別的な方法援助技法が中心になっている。しかしながら、今回の調査では、個別指導のありようと共に、地域の関係機関との連携や保護者との連携などをめぐる教育的技術について、多くの関心と困難さがあることが明らかになった。従来の教育的技術と医療や福祉などの領域での援助技術とをつなぐ「社会的技術」のありようについて、今後の課題を明らかにできた。

保健センターや医療機関、児童相談所などとの連携マニュアルの重要性とその開発に関する研究が急務といえる。まだ、コーディネーターの設置ははじまったばかりで、プログラム開発に関する実証的研究にはまだ数年の月日を必要とすると思われるが、今回の研究では、現時点での一考察として位置づけることができる。

なお、本研究の報告書については、現行「教育実践研究紀要」の9月発行に掲載し、報告に代える予定である。

人間・心理学系 森本 明

文学・芸術学系 高野 保夫

研究課題

研究課題

聴覚障害児における算数アルゴリズムの正当化：
文脈の共有プロセスの検討

文化一歴史的アプローチによる日本と中国の小・
中学校における授業改善研究

平成17年4月1日

平成17年4月1日

本研究の目的は、聴覚障害児における算数アルゴリズムの正当化の質の変容とその変容への教師の働きかけを、正当化の根拠となる文脈の共有プロセスを検討することで明らかにすることである。

今年度は正当化の根拠となる文脈の共有プロセスへの教師の働きかけの記述と分析を行った。この記述と分析により、子どもによるアルゴリズムの正当化を授業で特定し、聾学校の算数授業で正当化をよりよく図るための視点を明らかにした。具体的には、次の二つの視点である；
第一に、相互行為過程における記号が果たす役割の重要性、第二に、相互行為過程における行為の調整が果たす役割の重要性である。

この成果はろう教育科学会の学会誌「ろう教育科学」に、4月中にも投稿する予定である。タイトルは「算数授業の相互行為過程にみるアルゴリズムの正当化」である。

上記研究課題の具体化を図るため、平成16年9月26日から9月30日の日程で中国・上海市の小・中・高校を訪問し、授業改善研究に向けての予備調査を実施した。（今回の予備調査に参加したのは、国語教育の高野と数学教育の森本の2名である。）

授業を実際に参観したのは、華東師範大学附属小学校、同附属第二中学、上海市立甘泉中学の3校であり、それぞれの学校においては、国語、算数・数学、日本語教育に関する授業を実地に見学し、学習者の授業参加の様子、学校や教室の学習環境、授業方法等について多くの示唆を得ることができた。

今後は、今回の予備調査を踏まえながら、日・中それぞれの授業の構成、内容、指導方法等についての特徴をより明確にしながら、国語・数学を中心とした授業の改善に向けて問題の究明を図りたいと考えている。したがって、今後も継続的な研究が進められるよう、予算面でも一層の研究支援をお願いしたい。

文学・芸術学系 半 沢 康

文学・芸術学系 渡 邊 晃 一

研 究 課 題

研 究 課 題

現代東北方言の文法的諸特徴の記述およびその変容に関する調査研究

メディア時代の現代美術と「生命形態」の関わり～制作学を基盤にした日英米のArt概念の比較検討～

平成17年年 3 月31日

平成17年 3 月31日

本研究は2002-04年度科学研究費（若手B）に採択されたが、申請額に対して5割強の交付額にとどまったため（3年間で約270万の申請に対し150万の交付）、申請額の不足分について補助を受けたものである。

本研究の目的は、現在の東北方言における文法的諸特徴の世代的な変容とその地域差および伝播の様相を探ることにある。共通の調査票を用いて南奥方言域諸地点の高年層・若年層を対象に詳細な文法記述調査を行う。南奥方言の様々な文法特徴のうちモダリティをになう文末形式、形態音韻論的な問題、アスペクト表現などを取り上げる。

本年度は宮城県白石市、鶯沢町周辺、岩手県千厩町、室根村、大船渡市、陸前高田市、山形県村山市、高島町において高年層、若年層の調査を行った。

また、昨年度までの成果の整理を行い、福島県郡山市から福島市までのJR東北本線沿いおよび福島市から宮城県角田市までの阿武隈急行線沿いの各駅付近の地点において実施したグロットグラム調査の結果をもとに論文を発表した（「おらがことばと〇〇もんが隣接する方言のせめぎあい」『言語』33-9,2004.8）。

今年度は最終年度として多くの地点での調査を予定していたが、学内の会議などのために調査の時間が十分に取れなかったため、研究期間の延長を申請し、6月までにさらに東北各地の調査を進める予定である。

現在、収集データを整理しており、来年度の各地点における文法現象の記述調査およびグロットグラム調査の結果を踏まえ、南奥方言域における文法現象について、分布と年齢差に留意しながら、その変容の状況について総合的な考察を行っている。

平成16年、プラスチックが東京で展示され、多数の来館者を迎えた。この人体実物標本は、体内の水分をプラスチックに置換したものであり、人体構造を学ぶうえで価値ある教材となる反面、「個人の身体」の意味性が希薄な状態で展観されるなどの、多くの社会的問題をも内包していることが理解された。

一方、「生命形態」をいかに認識するかという問題は、写真、ビデオカメラ、テレビ、映画等の「メディア」が身体認識に与えた影響と重ねて、日本の社会に大きな問題を与えている。マスメディアを介して大量に伝達される視覚情報は現在、生命や自己の身体に対する認識をも大きく変化させていることが予想できるからである。そこで本研究では現代美術と「生命形態」とりわけ身体との関わりを、制作学の視点から「映像メディア」に焦点をあてて再考察した。そのなかで「美術の作品」のみならず、自然科学や哲学などの領域とも連動させながら、現代美術の「実技」領野と「理論」の結びつきを示すなかで、日本の文化、芸術、教育における新たな体系を模索した。

特に本年度は具体的に以下の研究を実施した。

1. 身体認識とメディアとの関わりについて、現代美術を自然科学と照らし合わせる中で考察した。
2. 現代美術の制作や発表を通じて、「生命形態」の認識に関わる知識や表現を「映像メディア」に関する理論との結びつきから具体的に措定した。
3. 英国と米国における現代美術の表現と「生命形態」の認識との関わりを再調査した。

以上、標題の研究の一段階としての成果を得ることができた。

健康・運動学系 安田 俊 広

法律・政治学系 今 井 照

研究 課 題

研究 課 題

「運動誘発性」筋損傷時の保護効果に関する研究	大都市制度改革における特別区制度の将来像に関する研究
平成17年4月8日	平成17年3月18日
<p>筋損傷を繰り返し経験すると、骨格筋は同一の刺激では損傷を起こさなくなる。この現象は保護効果と呼ばれているが、その生理学的メカニズムはわかっていない。本研究の目的は、筋損傷時の保護効果のメカニズムを明らかにすることであり、細胞内においてCa^{2+}を制御している筋小胞体に着目して実験を行った。研究上の仮説は、筋損傷刺激によって細胞内にヒートショックプロテイン(HSP)が発現し、その後の損傷刺激に対して筋小胞体のCa^{2+}-ATPase タンパクの損傷を保護し、筋損傷を軽減するというものである。本研究は損傷の程度によってHSPの発現量に差が出るかどうか、またその発現量とCa^{2+}-ATPase 活性との関連性を検討した。ラットの前脛骨筋に伸張性の筋収縮を加え筋損傷を引き起こした。しかしながら損傷の程度およびCa^{2+}-ATPase 活性とHSPの発現量との間には、統計的に有意な相関関係は認められなかった。しかしながら運動誘発性の筋損傷では、損傷の程度に大きな差を生むことが出来なかった可能性があり、より詳細な検討が必要である。</p>	<p>2000年4月における地方分権一括法の施行以来、自治体制度の再編が課題となっている。第27次地方制度調査会は、課題のひとつとして大都市制度のあり方を取り上げ、2003年秋に報告をまとめた。地方分権改革推進会議も同様に大都市制度改革に触れた報告書を2004年5月に提出した。これらの流れを受けて、2004年に発足した第28次地方制度調査会は道州制や大都市制度のあり方を検討事項にあげ、2005年初頭には、事実上、東京都区部のみを想定した「大都市道州制度」案をまとめている。また、東京23区の区長で構成される特別区長会は、特別区協議会に対して特別区の将来像に関する調査を諮問し、その結果、2003年10月に特別制度調査会が発足し、2004年に中間報告を出している。</p> <p>本研究は、以上のような論議と地域社会の動きについて基礎的な資料の収集と当事者の聞き取りなどを進めてきた。今後の動きはなお早まることが予想され、研究の意義は高まっている。成果の一部を下記論文で発表した。</p> <p>・「『地域自治組織』と自治体の政治—地域ガバナンスと『地域自治区』等の法制化に関する論点」 日本地方自治学会編『分権型社会の政治と自治』 敬文堂</p>

法律・政治学系 大黒太郎

社会・歴史学系 雨森 勇

研究課題

研究課題

「極右」政党の政権参加とヨーロッパ・デモクラシー：オーストリアを中心に

福島県周縁地域における社会変動とローカル・アイデンティティに関する研究

平成17年3月31日

平成17年3月31日

ヨーロッパで最も成功した「右翼」政党とされるオーストリア自由党（FPÖ）が2000年に政権参加してからすでに4年が経過した。当初危惧されたオーストリア政治全般の右傾化は見られず、4年前の政権交代は単なる通常の政権交代にすぎなかったとの見方も、現在生まれつつある。

しかし本研究は、2000年政権交代とその後の4年間に對し、政権参加時に見られた自由党の政権参加に対する倫理的批判とも、また、現在主流となりつつある政権交代論とも異なった解釈を提供することを目指してきた。すなわちここでの解釈とは、2000年の政権交代とその後の政権運営は、戦後一貫して続いてきたオーストリア政治の戦後枠組み（postwar settlement）の中核にあった政党システムそのもののあり方を根本的に変化させる契機となった、というものである。自由党の政権参加によって、オーストリア政治のイデオロギーが急激に右傾化したわけではないが、かといって、政治の構図に重大な変化がなかったわけではない。ここでは、「何が変わりつつあるのか」という変化の核に、「大連合政権」体制から「小連合政権」体制への転換を挙げ、この転換が、戦後オーストリア・デモクラシーにとっては、よりアカウンダブルでオープンな体制への移行をもたらす契機になるものであると論じた。本基金の助成によって、現代オーストリア政治分析にとっての貴重な資料である *Österreichische Jahrbuch Politik* の日本国内唯一の所蔵が可能になり、大きく研究が進展した。来年度は、今年度の成果をもとに、オーストリア戦後政治を一貫した論理で解釈する、より大きな試みに乗り出す予定である。

本研究は、福島県近隣の「周縁」地域におけるローカル・アイデンティティのありよう、およびその変化を、他地域との比較・過去との比較等によって、実証的に明らかにするものである。具体的研究対象地としては、福島県との県境にある、現在の新潟県東蒲原郡を中心とした地域に焦点を当て、i) 制度や規範の成立・変遷、ii) 自然環境・社会環境と住民意識の関係、iii) 住民意識の現状と変化、iv) 「意識」と「制度」の関係、v) 他地域との「差異」として認識される「アイデンティティ」なるものの存立基盤である情報の存在形態、vi) 地域メディアがアイデンティティ形成に果たす役割、について調査し、検証した。

当該地域は、郡区町村編制法および市制町村制に付随した郡制府県制の施行によって、福島県から新潟県へと県域を超えた配置転換が実施された地域である。本研究を通じて、こうした行政区画の変動が、それまで歴史的に形成されてきた既存のコミュニティにおける文化、組織、制度、社会規範、住民意識、メディア、自然環境に与えた広範囲な影響を明らかにしたものである。

【購入図書】

東蒲原郡史編纂室編『東蒲原郡史 8 民俗』等

社会・歴史学系 菊地 芳朗

研究課題

東北地方南部における古墳時代首長系譜変動比較の基礎的研究

平成17年6月30日

2004年度においては、福島県内、とくに福島盆地に所在する古墳の踏査を順次進め、データの集積に努めた。

その中で注目された福島市岡部に所在する上条1号墳にたいし、2004年夏休み期間に考古学実習を兼ねた測量調査を実施した。この調査では、縮尺100分の1、等高線間隔20cmの高精度測量図を作成し、今後の調査に備えた。完成した測量図は、製図のうえ2005年度中に刊行する予定である。

さらに、喜多方市慶徳町に所在する天神免古墳群の測量を計画したが、地元教育委員会および地権者との交渉に時間を要したのに加え、例年になく多雪により年度内の調査実施と完了が困難となった。そのため事業延長申請を提出したうえで、測量調査を2005年ゴールデンウィーク期間（4/27～5/10）に実施した。

天神免古墳群の測量では、縮尺1/100、等高線間隔20cmの高精度測量図を作成し、長く墳形と規模が不明であった同古墳中の天神免1号墳が、墳長約40mの前方後円墳であることを確定させた。このことは、会津地域の古墳動向を検討するうえで重要な基礎的データとなる。ただし、古墳群の測量は完了していないため、今後も調査を継続し、すべての古墳の測量図を作成したうえで成果を刊行する予定である。

以上の調査にあたり、踏査で採集された遺物の洗浄・乾燥のための専用カゴの購入、撮影した写真の現像焼付け費、調査成果の学会発表用の情報機器の購入、さらに、天神免古墳群測量調査のための旅費および調査補助学生に対する賃金および旅費として、学術振興基金を使用した。

社会・歴史学系 佐々木 康文

研究課題

地域メディアの情報発信が地域イメージの形成に与える影響に関する研究

平成17年3月31日

本年は、地域メディアが制作する地域情報番組の分析を行うために、基本的な資料と文献の収集、ケーブルテレビ局への聞き取り調査などを行った。その結果、以下のことが明らかになった。まず、ケーブルテレビの自主制作番組には、以前からコミュニティ・ジャーナリズムとしての機能が期待されてきた。しかし、小さな範囲とはいえ、放送の公共性に対する配慮からくる自主規制が強い場合、新たな地域問題の発見や提起、地域社会の多面的な分析を含んだ番組作りにはなかなかに至りにくい。特に、自治体の関わりが深いケーブルテレビの場合、その傾向が強いように思われる。また、自主規制の意識がそれほど強くない場合でも、現実的な問題がネックになっている。つまり、多くのケーブルテレビが、番組制作に関わる人間的な余裕に乏しい。また、ジャーナリズムの機能を果たすには様々な物事を問題化するための知識と能力が必要とされるが、そこまでの基盤を育てることが難しいという事情もある（地方TV局でさえ十分ではない）。しかし、他方で、地域社会の出来事を細かく提供する機能を果たしている部分は大きい。特に、ケーブルテレビが設置されている地域にゆるやかな人間のつながりが形成されている場合、自主制作番組の制作過程に住民の参加が生まれやすく、そのようなケーブルテレビを囲むネットワークなどから様々な情報や映像が現場にもたらされる。その結果、制作された番組は、普段はなかなか目にふれることのない地域社会の様々な姿を、地域住民に対して提供するものになっている。なお、放送のデジタル化という流れの中で、今後の方向性を模索している地方テレビ局が、ケーブルテレビ的なスタンスで地域情報番組を制作するケースが見受けられる。このようなことをふまえ、次年度以降、ケーブルテレビの自主制作番組の特性について、地方テレビ局との比較もまじえながら研究を深めるつもりである。

社会・歴史学系 西内裕一

経営学系 上野山達哉

研究課題

研究課題

現代青年のゲーム文化について

労働力の流動化の下でのキャリアと組織の独自能力に関する実証研究

平成17年10月6日

平成17年3月31日

福大の学生を対象に、テレビゲームの使用状況をアンケート調査し、その内の数人について聞き取り調査を行った。

その結果次のことが明らかになった。

- ・予想以上に女子学生も小さなころからゲームをしてきていること
- ・少年期だけでなく、青年期に入ってもゲームを熱心にやっている学生も少なからずいること

一番テレビゲームに熱心なのは小学校高学年から中学校1～2年であると思われることが仮説として明らかにできたので、今後はこの年齢の子どもたちに焦点を当てた研究をしたいと思っている。

なお、2月から4月にかけて体調を壊して入院していたので、研究成果も中途半端で終わっている。

1 研究課題に即した調査対象として日本におけるホテル産業を選択し、当該産業の現況について文献などの資料収集を実施するとともに、ヒアリング調査を実施した。また、これまでの研究で得た知見をもとに、組織および産業横断的な質問票を設計した。この質問票調査は、平成17年4月に実施される予定である。

2 前年度までの研究成果を以下において発表した。

〈学術論文〉

平成16年7月“Bondaryless or boundaryful? : The case of careers and HRM practices in Japan's hotel industry“(co-author : Masaru Yamashita) Paper presented at EGOS(European Group for Organizational Studies)20th conference, Ljubljana University, Slovenia

〈学会発表〉

平成16年7月“Bondaryless or boundaryful? : The case of careers and HRM practices in Japan's hotel industry”(co-presenter : Masaru Yamashita) EGOS (European Group for Organizational Studies) 20th conference, Ljubljana University, Slovenia

経営学系 川上正直

数理・情報学系 笠井博則

研究課題

研究課題

新規事業プロジェクトに関するビジネスリスク・マネジメントの研究

Ginzburg-Landau-Maxwell 方程式の漸近挙動

平成17年3月31日

平成17年3月31日

当該研究の目的は、プロジェクト・ファイナンスが、リスク・マネジメントにおいて果たす役割を、理論的・実証的に明らかにすることである。

本年度は、このようなプロジェクト・ファイナンスのスキームを組成する代表的なプロジェクトとして、映画産業をとりあげ、日米映画産業のリスク度についての比較考察を行い、その成果を報告した（下記参照）。

国際ビジネス学会第11回全国大会

「映画ビジネスと戦略リスク・マネジメント
～魅力的な投資案件としての映画・日米比較～」
(2004年11月7日・関西学院大学)

これまでに、あるパラメーター領域で自明解の近傍から初期値をとったとき、指数的に自明解に漸近することはわかっていたが、その結果を自明解を摂動させた解まで拡張することができ、その収束速度をパラメータを用いて評価することができた。

7月時点までで得られた結果に関して、研究会 SCI2004 (The 8th World Multi-Conference on Systems, Cybernetics and Informatics July 18-21, 2004 Orlando, Florida, USA) で講演を行った。

複数の渦糸解に関する解析は、Ginzburg-Landau パラメータ κ が十分大きな場合に関してのみ、エネルギーの漸近的な評価によるものが知られていたが、今年度の研究の成果として、解の対称性に着目した式変形を行うことによって、 κ がある程度大きい（第2種超伝導状態である）場合にも外部磁場と安定な渦糸の個数の関係を調べることに道筋がついた。

今後は上記の評価と、一昨年来行っている漸近挙動の計算を併せて、渦糸解への漸近挙動の性質を調べていくことを目標としている。

機械・電子学系 山口 克彦

物質・エネルギー学系 金澤 等

研究課題

研究課題

超音波干渉を用いた局所振動型磁気測定器の開発

衣料用廃棄繊維素材の再利用による水質浄化材料の開発

平成17年3月31日

平成16年4月～平成17年3月

物質の磁気特性を測定することは、物性を知る上でのひとつの重要な知見を与えるものである。ただし、通常はサンプル全体の特性を計る。これは全体が均質な状況にあると想定できるサンプルを用いるからであり、もちろん新規材料の特性を知る上ではこのような測定法は欠かせない。しかし均質に作られた素材であっても実際には局所的なばらつきは存在する。申請者はこれまで鉄鋼材の劣化診断において磁気的非破壊検査が有用である旨の報告をしてきた。その検証として既に行ってきたバルクハウゼンノイズの測定と共に重要と考えられるのが局所的な磁化を測定し、3次元にマッピングできる測定手法である。本研究はこのような背景のもとに進められた。

このアイデアは磁場中で磁性体を振動させると近傍に設置された検出コイルに磁化に応じた起電力が誘起することで測定する試料振動型磁気測定器 (VSM) を基にして、振動数の微妙に異なる2つの超音波振動を試料内に送り、その交差位置に発生する干渉 (うなり) を用いて、局所的な磁化を測定しようとするものである。

超音波発生源として積層圧電アクチュエータを2つ使い、250 Hz のうなりが生じるようにそれぞれの周波数 (例えば 25 kHz と 24.75 kHz など) を2チャンネルの DA コンバータを用いて発生させた。試料は鉄鋼材として一般的な S S 400 を使い、頂角が 90 度および 120 度の二等辺三角形となるよう切り出したものを使用した。同じ長さの 2 辺にそれぞれアクチュエータを押し当て、永久磁石により超音波の進行方向と垂直に 800 Gauss の磁場を与えた。検出用コイルを3つめの辺上で位置を変えながら測定し、幾何学的に超音波干渉が起こる領域でのみうなりと同期した信号を検出することができた。超音波の侵入長などの制限はまだあるが、局所的磁化マッピングを原理的に行うことができるようになった結果は意義がある。現在、特許申請も視野に入れながら福島市内の磁気測定器メーカーとも協力し、実用化を目指している。

現在、各家庭、商業流通経路、工場等には、不要となった繊維製品が大量に存在する。それらを焼却処理した場合、経済的損失に加えて環境汚染にも関わる事になる。本研究は、繊維の様々な分子構造と大きな表面積を利用して、不要とされる衣料用繊維素材の再利用による環境浄化材料 (主に空気と水を対象) の設計を目的とする。

代表的な衣料用繊維として、木綿、羊毛、絹、レーヨン、ナイロン、ポリエステル、ビニロンを選び、これらの繊維の少量を、ガラス瓶の中につり下げて、その瓶の底に、アルコール類、芳香族化合物、エステル等の有機化合物の液体を入れて、上昇する蒸気を繊維に吸収させた。所定時間後、各繊維に吸着した物質を、試料注入部に加熱装置を備えたガスクロマトグラフィーで分析したところ、それぞれの繊維に吸着された物質の種類と量が異なった。逆に、このような実験を行えば、繊維の種類を予測できることがわかった。

水中に含まれる各種アルコール (メタノール、エタノール、プロパノールなど) や、クロロホルムなどの吸着除去の可能性について、一連の化学繊維から天然繊維について、裁断したものを、円筒管 (カラム) につめて、水溶液を通過させる実験によって除去の可能性を見た。その結果、蒸留によっても不可能なこれらのアルコールの除去が可能になることを見出した。吸着能力は、水道法の基準値の有機化合物を含む水溶液の場合、繊維 1 グラムあたりで、200-3000 リットルの水を浄化できることがわかった。化学繊維と天然繊維共に優れた吸着能があり、吸着量は繊維の表面積の影響を大きく受ける事がわかった。以上の研究の結果、廃棄繊維による水質浄化の実用性は十分に期待できる事がわかった。

生命・環境学系 後藤 秀昭

生命・環境学系 鈴木 浩

研究課題

研究課題

微小変位地形と津波堆積物による東北日本における断層活動の時空間分布特性

「地域居住支援システム」の構築に関する研究

平成17年3月31日

平成17年3月31日

本研究は、微小変位地形の解析に基づく内陸活断層の最新活動時期の解明と、津波堆積物に基づくプレート間地震の発生時期の解明を通して、東北日本における断層活動の時空間分布を明らかにし、島弧における断層の活動特性を検討することを目的としている。

内陸活断層については、今年度は会津盆地東縁断層帯を対象にして調査を行った。昨年度に新たに見出された会津若松の市街地を南北に横切って延びる微小変位地形は、25,000分の1都市圏活断層図「若松」として地図化されて出版された。この微小変位地形を含め、会津盆地東縁断層帯を横切る断面測量を数地点で実施し、変形形態や変位量を明らかにした。

一方、津波に関する調査では、昨年度の予察的な調査に基づいて福島県浜通り地方の旧ラグーンにおいてハンディー・ジオスライサを用いて地層を抜き取り、津波堆積物を探し出した。相馬市山信田と小高町井田川の南北に約30km離れた2つの干拓された旧ラグーンを対象にして、それぞれ海岸線に直交する向きの側線を設け、それに沿って数カ所で試料を採取した。その結果、ラグーンの堆積物である腐植質の粘土層中に数枚の砂層がみられた。堆積構造の特徴や砂層中に含まれる貝殻や偽礫などから、この砂層が津波に伴って堆積したものであることが明らかとなった。また、堆積物の珪藻殻分析を実施したところ、津波を挟んで急激な堆積環境の変化が認められ、津波を起こした地震に伴って地殻変動が生じた可能性があることがわかった。

東京都墨田区において、区役所と地元の大工・工務店の組織との連携のもとに地域における高齢者の居住支援を行なう仕組みを模索し、その結果として、福祉サービスなどを含む包括的な生活支援をする「さわやかネット」と住まいの問題を中心に扱う「すまいるネット」の構想をまとめてきた。それらの構想をさらに一歩進めるためにNPO組織としての成立をめざして検討を重ねた。

一方で、わが国の住宅政策が大きな転換期にあり、これまでの「住宅建設計画」の体系が廃止される見通しの下で、住宅市場重視の住宅政策への転換が図られ、これまで公共住宅政策を進めてきた地方自治体における住宅政策の役割が大きく変わろうとしている状況を踏まえて、今後の地方自治体の住宅政策のあり方を「地域居住政策論」として構築することを考察した。

これらの研究結果を踏まえて、建築学会の研究者たちと2005年3月には「地域からの住まいづくり—住宅マスタープランを超えて」（ドメス出版）の刊行に結びつけることができた。さらに2005年9月に開催される建築学会では、長年取り組んできた「地域居住政策」の観点からの協議会が開催される見通しとなった。

また、墨田区では、地域居住支援のうちの住宅改善、耐震補強などについて、地元の大工・工務店との協力の下に助成を行なう仕組みが発足する可能性がでてきたし、地元の大工・工務店の組織が新たなNPOを立ち上げる準備を始めた。

生命・環境学系 渡邊 明

地域創造支援センター 齋藤 勝 弥

研究課題

研究課題

局地降水量変動のなぞを探る

常磐炭砒資料に関わる整理・保存プロジェクト

平成16年6月～平成17年3月

平成17年5月17日

2004年7月18日から23日にイタリア、ボローニャで開催された14th International Conference on Clouds and Precipitation2004に参加し、特に、局地降水量変動に大きく影響している冬季モンスーン内での筋状降雪雲の発生メカニズムについて発表してきた。研究対象の筋状雲はFroude数が小さく、迂回効果の大きい冬季モンスーンによって形成される水平 wind shear の増大が主たる要因で、wind shear によって形成された準水平渦循環によって水蒸気を収束し、筋状雲が発生することを示したものである。

また、この研究では気象観測とその観測値をもとに数値実験を行い、降水の局地性を研究したものであるが、数値実験用のシミュレータの支援が得られなかった。しかし、助成金で従来のPCのメモリーを増設することによって、従来の10kmの分解能を5km程度まで詳細に記述できるモデルを走らせることができるようになった。しかし、このPCでは3時間の積分に1ヶ月以上の時間が必要になっている。

主な成果は以下の通りである。

- 1) 福島県における Longitudinal-Mode Cloud による降雪システム、2004年11月、東北の雪と生活、No.19、67-72.
- 2) On the formation of longitudinal cloud mode in the winter monsoon over Japan, 2004年7月、The 14th International Conference on Clouds and Precipitation, 1855-1858.
- 3) CReSS による冬季降雪雲の Simulation, 2004年11月、第6回非静力学モデルに関するワークショップ, 17-18.

・わが国の石炭産業史研究の貴重資料である膨大な常磐炭砒資料、その整理を目的にした本プロジェクトは今年度2年目に入った。引き続き段ボールに入った資料を一つ一つファイリング（資料を取り出し、両面表紙・背表紙をつけて綴じ、資料タイトルをパソコンに打ち込み、タイトルをプリントアウトして表紙に貼る）し、書架に仮配架するという資料整理の基礎作業を黙々と続けて来た。

・今回の基金からの援助により、未整理であった段ボールを約30箱余りファイリングすることが出来、整理作業を着実に前進させることが出来た。また継続して整理作業が行えたため、作業に携わる学生諸君の作業技術を維持・向上させることが出来たことは、今後の作業に力強い展望を与えるものであった。さらに、基金による作業継続によって大学のこのプロジェクトに取り組む積極的姿勢を対外的にも示すことが出来、そのことが常磐興産に資金援助をお願いする際に大きな助けとなった。

・整理作業は次年度以降も行う必要がある。作業能率は着実に上がっているので作業を中断せず継続することがぜひとも必要である。ファイリングと仮配架を終えると、資料内容の評価・分類を行い資料の再配架作業、さらに以上の作業と並行して保存環境の整備（空調設備や移動書架等の設置）を進めていく必要がある。

平成16年度奨励的研究助成予算「若手研究者奨励費」

	所属学系	氏 名	研 究 テ ー マ
1	人間・心理	住吉チカ	日本語話者における音韻的に曖昧な音節記憶処理に関わる脳活動：fMRIによる計測
2	文学・芸術	半沢 康	福島・宮城県境付近における方言の言語地理学的研究
3	健康・運動	杉浦弘一	バスケットボール競技におけるボールのサイズ変更がプレイ技術に及ぼす影響について
4	法律・政治	荒木田岳	地方財政調整制度形成過程にみる「自治・分権」と格差是正の相克に関する基礎的研究
5	経 営	奥本英樹	コーポレート・ガバナンス・システムによる経営者行動への影響に関する日米比較研究
6	経 営	三崎秀央	組織的公正に関する研究
7	数理・情報	藤本勝成	屋外露出型鋼材表面のテクスチャーに注目した簡易型劣化および余寿命診断システム構築のための基礎的研究
8	物質・エネルギー	高安 徹	FADモデル化合物を用いた酸化反応の検討
9	生命・環境	長橋良隆	宮城県川崎町周辺に分布する火砕流堆積物（天神凝灰岩）の噴出年代に関する研究
10	生命・環境	永幡幸司	視覚障害者の音環境利用の実態に基づいた音響信号等のサイン音に求められる音響的要件と街頭放送等の許容音量についての検討

奨励的研究助成予算「若手研究者奨励費」成果報告書

人間・心理学系 住 吉 チ カ

文学・芸術学系 半 沢 康

研 究 課 題

研 究 課 題

<p>日本語話者における音韻的に曖昧な音節記憶処理に関わる脳活動：fMRIによる計測</p>	<p>福島・宮城県境付近における方言の言語地理学的研究</p>
平成17年4月26日	2005年3月31日
<p>本研究では、日本語話者を対象として、母国語（L1）と第二言語（L2）の書記素記憶処理の神経基盤を探った。具体的には、音韻が曖昧な書記素（例：ひらがなでは“ず”と“づ”、アルファベットでは“la”と“ra”など）による音節短期記憶課題実行時の脳活動を、fMRI（functional Magnetic Resonance Imaging）により計測した。fMRI実験の施行にあたっては、独立行政法人産業総合技術研究所関西センター医用ビジョンラボの協力を得た。</p> <p>fMRI実験の結果、曖昧ひらがな呈示条件、r/1音節呈示条件ともに、右中前頭回に強い賦活が見られた。右中前頭回は、作業記憶の負荷に敏感な部位であることが明らかにされている。ゆえにこの実験結果は、曖昧書記素の記憶処理の認知的困難さを裏付けるものといえる。一方、曖昧音節呈示条件同士を比較したところ、曖昧ひらがな呈示条件はr/1音節呈示条件に比べ、下頭頂小葉（角回・縁上回）により強い賦活が見られた。下頭頂小葉は、音韻-書記素対応付けに関連の深い部位であり、曖昧ひらがなの記憶処理には音韻符号化がなされていたと考えられる。この結果は、L1とL2で音韻情報の曖昧さが共通する場合でも、書記素の記憶処理は異なることを示唆している。</p> <p>日本語話者における音韻が曖昧な書記素記憶処理の神経活動は、欧米で報告される難読症・非識字者におけるそれと類似するものと考えられる。ゆえに本研究の知見は、難読症や非識字者の認知的困難さの神経基盤解明に貢献すると思われる。</p>	<p>仙台電波高専の武田拓氏と共同で、宮城県七ヶ宿町を中心としたグロットグラム調査を実施。白石市小原、七ヶ宿町関、滑津、湯原、山形県高島町二井宿、高島の6地点で世代別のデータを収集。また、七ヶ宿町稲子地区で高年層のデータを得た。</p> <p>これにより、宮城・山形県南の県境付近における方言動態の様子を把握することができた。さらに、これまでに収集済みの、東北線沿線、阿武隈急行線沿線、常磐線沿線のグロットグラムデータと総合することで、山形・宮城・福島3県の境界付近における方言状況を詳細に把握することが可能となる。一般的な言語変化、言語伝播に関する理論的考察のための基礎的なデータとなる。また、衰退しつつある東北方言についての、21世紀初頭の貴重な音声データを後世に伝えることができる。</p> <p>現在調査データを整理中で、終了次第グロットグラム報告を作成する。また他の調査データと合わせて、多変量解析を実施し、3県の境界域における方言分布と伝播、変容の状況を計量的に分析する。</p>

健康・運動学系 杉浦 弘一

法律・政治学系 荒木田 岳

研究課題

研究課題

バスケットボール競技におけるボールのサイズ変更がプレイ技術に及ぼす影響について

地方財政調整制度形成過程にみる「自治・分権」と格差是正の相克に関する基礎的研究

平成17年4月26日

平成17年3月31日

バスケットボールはこれまで高校生以上の競技においては、男女とも7号ボール（周囲74.9～78.0cm、重さ567～650g）を使用してきた。しかし、2004～2005シーズンより（日本国内は2004年4月より）高校生以上の女子競技において、中学生男女と同じ6号ボール（周囲72.4～73.7cm、重さ510～567g）を使用することになった。ボールのサイズが小さくなることにより、スピーディーでアグレッシブなプレイを期待したためである。

これまで女子選手は両手でボールを扱ってシュートやパスをすることが多かったが、ボールが小さくなることにより片手でのパス（Single Hand Pass）やシュート（Single Hand Shot）の重要性を指導者や選手は感じていた。

本研究では、ボールのサイズが小さくなることによりSingle Hand Playがどの程度増加するのかを高校生および大学生のトップレベルを対象に検証することとした。

スポーツデータコーポレーション社が撮影した対象となるゲームのビデオ画像を元に、パスおよびシュートにおいてSingle Hand PlayとBoth Hand Playの出現率を比較検討した。

全体の傾向としてはSingle Hand Play出現率が増えた。その傾向はパスにおいて顕著であった。大学生と高校生を比較すると、大学生の方がSingle Hand Play出現率が増えた。かねてから女子選手における片手でボールを扱うプレイの重要性が認識されており、特に大学生は7号ボールでのSingle Hand Playをトレーニングしてきている。従ってボールが小さくなることにより、力のある大学生の方が片手でプレイしやすくなったと考えられる。

シュートにおいて大学生はSingle Hand ShotとBoth Hand Shotを状況に応じて使い分けている選手が多いのに対し、高校生ではどちらか一方のみを選択しているプレイヤーが多い。これは大学生がプレイスタイルの過渡期にプレイヤーであるのに対し高校生は新しい概念ではじめからトレーニングしていることの現れであると考えられる。

高校生以上の女子におけるボールサイズの変更は、single Hand Playを増加させることが確認された。今後はよりスピーディーな、アグレッシブな競技へと発展することが期待される。

今年度は、標記テーマでの科学研究費補助金受給の最終年にあたり、本奨励費を付加申請した。

奨励費の使途としては、研究のための最終的なフィールドワークを主とした。その内容は史料調査と文献調査に大別されるが、史料調査としては、地方財政調整制度の構想者三好重夫の初めての任地である新潟県において調査を実施した。調査過程で、新潟県庁文書は新潟県立文書館の現物史料と、新潟県庁所蔵のマイクロフィルムの2つが存在することを知ったが、今回は専ら新潟県立文書館での簿冊分析を実施した。文献調査は、一橋大学附属図書館において実施した。一橋大学は各地の一次史料を多く所蔵し、地方財政や地方経済に関する多くの書籍を所蔵しているためである。

その結果、今回の研究テーマに関しては次のような知見が得られた。つまり、さまざまな地域間格差を調整しようという合意が社会に形成されるにあたっては、地域間格差の存在という「事実」よりも、「格差感」が社会的に認知されていくことが重要であるということである。なお、この事実は、前年までの調査結果を裏付けるものでもあった。

現在までに、まとめることができたライトモチーフに相当する部分は、雑誌『地方自治職員研修』に発表した。現在は、上記の調査結果に基づいて研究の総括を行い、雑誌報告を発展させた学術論文を鋭意作成中である。内容としては、対象時期を日露戦後から1940年地方財政制度改革までの約40年間とし、制度確立までの過程を概略し、日本近代における「再配分」と行政の安定化の意味について再考することが目標である。その結果、財政調整制度確立の意味のみならず、戦時体制の歴史的な意味、さらには「平等化」への流れがもたらした「意図せざる結果」の意味について考える手がかりが得られるであろう。なお、現在とりまとめている研究の内容は、平成17年度中に学術雑誌に発表し、公刊される予定である。

経営学系 奥本英樹

経営学系 三崎秀央

研究課題

研究課題

コーポレート・ガバナンス・システムによる経営者行動への影響に関する日米比較研究

組織的公正に関する研究

平成17年3月31日

平成17年3月31日

本研究は、コーポレート・ガバナンス・システムの違いが、経営者のインセンティブなどを通じて企業経営にどのような影響を与えるのかに関して、日米企業の業績比較によって実証的に明らかにすることを目的としている。

この目的のため平成16年度では、日米企業のうちでも銀行業に焦点を当て、その経営効率性とコーポレート・ガバナンスのあり方との関連について研究を進めた。この研究においては、平成16年度10月16日より23日にかけて、米国 Middle Tennessee State University より F. ミッチェロ教授と G. ホメイファー教授を招聘し、日本銀行および東邦銀行を訪問した。ここでのインタビューにより、日米の銀行業の間には、両国の金融行政の相違や資本提供者との関係、さらには銀行と顧客との関係など、互いのコーポレート・ガバナンス・システムに影響を与える要因を数多く発見することができた。これらを踏まえて、現在日米の銀行業における財務データを分析し、業績差異とコーポレート・ガバナンス要因との関連性について検証を進めているところである。

これらの成果は、平成17年度わが国および米国での関連学会等で報告する予定である。

当該研究の目的は、組織的公正がどのような要因によって確保されるのかを明らかにすることである。今日、成果主義の導入が盛んになっているが、必ずしも組織成員の公平感が高まっていない。先行研究では、評価のシステムやプロセスに注目してきたが、当該研究では、これに加えて、戦略の一貫性に注目したい。経営戦略とは、組織のあらゆるシステムの設計思想だからである。

本研究では、平成16年10月～11月にかけて「従業員意識調査」を実施した。質問票は兵庫県経営者協会を通じて150社に600部配布し240部回収（回収率40%）、連合兵庫を通じて15産別に1000部配布し615部の回収（回収率61.5%）を得た（合計855部：回収率53.4%）。

分析の結果、組織成員の公平性の知覚は、成果主義の導入をはじめとする制度的な影響はほとんどないことが示された。むしろ、組織自体の戦略やビジョンを明示し、その価値観に沿ったマネジメントが行われていることや、運営の仕方により強い影響を受けていた。以下、本研究のインプリケーションを簡単に示す。

- 戦略やビジョン：企業の示す戦略やビジョンが一貫しており、それにしたがって組織運営がなされていることが、手続き的公正に大きな影響を与えている。
- 評価プロセス：単に制度を導入するのではなく、適切な評価項目で、正確な評価を実施することが重要である。
- フィードバック：評価の結果を本人に知らせ、次の改善につなげることが報酬の公平感を高める。
- 評価と報酬のリンク：評価と報酬の関係を明示し、きちんとリンクさせることがプロセスおよび報酬の公平感に寄与する。
- 組織運営：上司が部下に対して配慮することをはじめ、仕事の配分の基準を能力・適性に基づいて行うことは、公平感に対してプラスの影響がある。
- 自律性：仕事の自律性を確保することは、仕事の結果責任を明確にすることにもつながり、結果を妥当なものとして受け入れることにつながる。

数理・情報学系 藤本 勝成

物質・エネルギー学系 高安 徹

研究課題

研究課題

屋外露出型鋼材表面のテクスチャーに注目した簡易型劣化および余寿命診断システム構築のための基礎的研究

FADモデル化合物を用いた酸化反応の検討

平成17年3月31日

平成17年3月31日

本研究では、鋼管構造物の触診による表面粗度診断への支援システムとして、高周波超音波による「屋外露出型鋼材表面のテクスチャーに注目した簡易型劣化および余寿命診断システム構築のための基礎的研究」を行った。

試験体として、鋼材裏面に設けた「連続並行溝」からなる人工粗度試験体と、片面のみ切削加工が施された「やすり」の半製品を試験体として用いた。連続並行溝試験体は、材質をS50Cとし、公称断面寸法9mm×25mmの平滑加工を施した鋼帯である。裏面に設けられた人工粗度は、目標ピッチを0.3、0.5、0.7、および1.0mmのピッチ毎に、目標振幅（溝深さ）を50、100、および150 μ mの3種類とする連続並列溝群である。各溝群は、25mm（鋼帯幅）×15mmで、25mm間隔である。溝加工は、ワイヤー放電加工による。加工された溝振幅には目標値と大きくずれるものもあるが、全て試験体として採用している。やすり試験体は、材質をC：1.10%~1.30%、Si：0.35%、Mg：0.50%、Cr：0.20%含有の、焼入れ未処理の鋼材とし、規格値としては、呼び寸法300mm/m（12inch）、幅30.0mm、厚さ7.0mmである。今回、試験体として用いたものは平形と呼ばれる形状のもので、片面のみに切削加工が施された半製品である。また、やすりには、平滑な部分、1方向のみに刃（溝）の入った部分、および、2方向に刃（溝）の入った部分が存在する。このように、粗面形状の異なる2種類の試験体を用いて、実験を行った。また、超音波試験装置は、超音波パルサーレーザー（日本パナメトリクス周波数帯域200MHz）、デジタルオシロスコープ（横河電機サンプリングレート200MS/sec. 周波数帯域150MHz）、および、解析用PCで構成される。超音波センサーには、発振周波数5、10、20MHzの3種類を使用した。この結果、第1エコー後続波において、溝ピッチの大きさを半波長にもつピーク周波数が卓越することがわかった。また、この特徴は、溝の深さ（溝振幅）や入射波の周波数に無関係であることもわかった。これにより、鋼材裏面に設けた規則的な人工粗度の溝ピッチを、超音波試験により精度よく特定できることを示した。これは、平行連続溝のような1方向の粗さに対しても、やすりのような2方向の粗さに対しても、同一の測定法で特定できるという点が非常に興味深い。さらに、複数の周波数を用いて測定すると、その信頼性は向上する。しかし、今回得られた結果に対する物理的メカニズムは明らかにできなかった。これは、今後の重要な課題である。また、不規則な粗度に関する検証も急務である。

5員環または6員環を含む含窒素環状化合物については多くの研究例があり、薬理活性など機能性の探索が進められている。しかし、7員環を含む1-アザアズレン類の合成研究例は報告されているが、その機能性の探索については未検討の点が多く、化学的、物理的な性質の報告例は少ない。これらの化合物は合成法の確立を含めて、機能性含窒素環状化合物の系統だった化学的、物理的な機能性の探索にとって重要な問題であり、今後、有機伝導体、あるいは有機磁性体、さらには光学材料としての発展も期待されるものである。今回検討した化合物は、生体内の酸化還元補酵素であるフラビンアデニンジヌクレオチド（FAD）の構造異性体にあたり、アルコール類などを酸化することが示唆されている。

合成は、6-アミノウラシル誘導体と2-クロロトロポンとを、アミン存在下室温にて行った。6位の置換基としてベンジル（1）およびフェニル基（2）を導入した2種類のFADモデル化合物を合成した。

アルコールの触媒的酸化反応の結果は、FADモデル化合物2 0.05mmol、ベンジルアルコール2 ml、塩基0.10mmol、ジオキサン16mlを混合し、酸素雰囲気下90℃にて40時間反応させた場合がもっとも効率よく反応が進行することを明らかにした。

(91サイクル触媒反応が進行) また、無溶媒の場合にも最高64サイクル触媒反応が進行することを見出している。一方、化合物1を用いた場合には、最高13サイクルしか反応は進行しなかった。これはサイクリックボルタモグラムの還元電位の測定より予想された通りの結果である。すなわち、化合物1の還元電位は-0.92Vに、化合物2のそれは-0.89Vに観測され、化合物2の方がアルコールを酸化する能力の高いことは明らかである。

一方、光反応の場合には、化合物1を用いた結果のみであるが、最高46サイクル触媒反応が進行することを見出している。

以上のように、生体内反応を応用した触媒反応の可能性について明らかにした。今後この反応の一般性について明らかにしてゆきたい。

生命・環境学系 長 橋 良 隆

研 究 課 題

宮城県川崎町周辺に分布する火砕流堆積物（天神凝灰岩）の噴出年代に関する研究

平成17年1月24日

宮城県川崎町から秋保町にかけて分布する天神凝灰岩は、中規模程度（層厚100m程度）の火砕流堆積物からなる。天神凝灰岩は、堇青石（鉄・マグネシウム・アルミニウム・珪素からなる鉱物）という火山噴出物には希にしか含まれない鉱物を含む。これまで天神凝灰岩についての放射年代値の報告はなく、正確な噴出年代が不明であった。しかも、当該地域のように、陸域に堆積した地層の場合には、地質時代の推定に有用な化石を含まないため、地層から噴出年代の推定を正確に行うことは困難である。

そこで、本研究経費では、天神凝灰岩のフィッシュオントラック年代測定を行った。測定は、(株)京都フィッシュオントラック社に依頼した。フィッシュオントラック年代測定法は、ジルコン結晶に含まれているウランの濃度と自発核分裂飛跡を計測する手法で、原子炉により熱中性子の照射が必要となる。

測定試料は、天神凝灰岩に含まれる軽石を現地では10kg採取した。採取した軽石は、粉碎し比重分離によりジルコンを1000粒子抽出した。そのうち、ジルコンの結晶形態や色調から本質結晶と推定される92粒子についてエッチング処理を行い熱中性子を照射した。最終的に、67粒子から $5.4 \pm 0.2 \text{ Ma}$ （540万年前で誤差が20万年）の年代値を得た。

これにより、天神凝灰岩の噴出年代が初めて明らかにされた。さらに、地質学的研究から、天神凝灰岩の噴出と同時にカルデラが形成されたことが明らかになった。カルデラの西縁には作並断層があるが、天神凝灰岩は作並断層に沿う火道から噴出しており、作並断層の活動時期が少なくとも540万年前以前にさかのぼることを示している。

本研究では、火砕流噴出という比較的規模の大きなマグマの噴出とテクトニクス（断層活動）との関連を探るうえでの年代学的な基礎資料を得ることができた。

生命・環境学系 永 幡 幸 司

研 究 課 題

視覚障害者の音環境利用の実態に基づいた音響信号等のサイン音に求められる音響的要件と街頭放送等の許容音量についての検討

平成17年3月31日

音響信号機や盲導鈴のような視覚障害者の歩行支援を目的としたサイン音は、その重要性が広く知られるようになり、設置数が増えてきている。しかしながら、それらのサイン音が、どのような音響特性を持つべきであるのかについては、音量の問題1つとっても、十分な知見がないのが現状である。そのため、設置はされたものの、視覚障害者の役には立っていないサイン音が多数存在する。

また、店舗等による街頭放送は、その音量が適切であれば、視覚障害者にとって目印となる有用な音であるが、音量が大きすぎれば他の情報をかき消してしまう危険な音ともなる。しかしながら、街頭放送の音量の許容値については、これまでほとんど研究されてきていない。

このような背景から、本研究では、視覚障害者が音響信号等のサイン音に求める音量、及び、街頭放送に対して許容する音量を、視覚障害者を対象とした音響心理実験によって測定している。

具体的な成果としては、歩行の不得手な視覚障害者をも被験者として実験に参加してもらえよう、ヘッドホンを用いた持ち運び可能な実験システムを構築し、実験室におけるスピーカ条件と同等の結果が得られることを確認した。この成果の一部は、日本音響学会春季研究発表会にて発表し、また、来年度開催される12th International Congress on Sound and Vibrationでの発表が受理された。

さらに、上述のシステムを用いて、福島、福岡、東京、函館の視覚障害者計33名を被験者とし、彼らがサイン音に求める音量、及び、街頭放送に対して許容する音量を測定した。この成果のうち、彼らがサイン音に求める音量については、来年度開催される inter-noise 2005での発表が受理された。

平成16年度研究業績一覧

平成16年(2004年)4月1日～平成17年(2005年)3月30日

人間・心理学系

五十嵐 敦

- 【論文】 「交友活動への積極的関与が入学直後の大学生の精神的健康に果たす役割について」 浅岡章一 進路指導研究 第22巻第2号 2004. 6

中学生の親のしつけ行動と夫婦関係
二宮克美ほか 愛知学院大学情報社会政策研究 第7巻1号 2004. 12

- 【調査報告】 「働く人々のメンタルヘルス；自殺防止のための生活要因」 産業保健情報誌「さんぼ福島」 Vol. 10 2004. 4

「安全のための心理学」 産業保健情報誌「さんぼ福島」 Vol. 11 2004. 11

「人事労務相談：若手社員の特徴と対処法」 月刊人事労務 2004. 8

産業保健調査研究報告書「産業保健情報の共有化を高め、推進センターの活性化を図る調査研究」 黒田、小山、桃生、田中、他 労働福祉事業団福島産業保健推進センター報告書 2004. 4

- 【学会発表】 「Developmental study on Japanese adolescents' mental health and social adjustment」 共 ISSBD 18th Biennial Meeting 国Belgium 2004. 7

「中学生の社会的行動についての研究(13)(14)(15)(16)」 共 日本心理学会第68回大会 国関西学院大学 2004. 9

「中学生の社会的行動についての研究(17)(18)(19)(20)」 共 日本教育心理学会第46回大会 国富山大学 2004. 10

「働く人々のメンタルヘルスに、勤務時間・形態、睡眠の問題は関係しているのか」 共 日本職業災害医学会第52回大会 国岡山大学 2004. 11

内田 詔夫

- 【学会発表】 哲学と教育と日常の接点 東北哲学会 国桜の聖母短期大学 2004. 10

小野原雅夫

- 【論文】 講義型授業において学生の主体的学びを支援する試み ―グループ・ディスカッションを活用した講義改革― 岩崎紀

子(福島大学) 福島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6

「哲学／倫理学」の講義をどう変えていくか ―「教え」から「学び」への転換?― 福島大学教育学部論集 教育・心理部門 76号 2004. 6

自由への教育 ―カント教育論のアポリア― 『別冊情況 特集カント没後200年』 2004. 12

角間 陽子

- 【著書】 少子高齢社会と生活経済 共著 建帛社

- 【論文】 異世代間におけるネットワークの可能性―祖父母と孫の交流関係から― 山崎美佐子、草野篤子 信州大学教育学部紀要 112号 2004. 8

介護福祉士養成教育における家政学実習の効果―訪問介護での食生活援助から― 松本短期大学研究紀要 14号 2005. 3

- 【訳書・翻訳】 現代のエスプリ「インタージェネレーション・コミュニティを育てる世代間交流」・スウェーデン・ストックホルムの義務教育における「おじいちゃんプロジェクト (granddad project)」 草野篤子、秋山博介編(題目の翻訳は単著) 至文堂 444号 2004. 7

- 【学会発表】 Lifetime estimates of unpaid work in Japan THE 20TH WORLD CONGRESS OF INTERNATIONAL FEDERATION FOR HOME ECONOMICS 国KYOTO 2004. 8

木暮 照正

- 【論文】 福島県原町市における市民カレッジ構想―はらまちマナビカレッジ構想に関する生涯学習プランの提案 福島大学生涯学習教育研究センター年報 第10巻 2005. 3

- 【調査報告】 平成16年度公開講座・公開授業アンケート調査の実施報告 福島大学生涯学習教育研究センター年報 第10巻 2005. 3

生涯学習系協議会参加報告 齊藤寛 福島大学生涯学習教育研究センター年報 第10巻 2005. 3

- 【学会発表】 物体性視覚短期記憶における空間手掛かりの効果 日本認知心理学会第2回大会 国同志社大学 2004. 5

Can configurational information of space have an influence on visual object working memory? Second International Conference on Working Memory
 関国立京都国際会館 2004. 8

社会的できごとの生起時期推定(2)
 —エイジングの効果— 日本心理学会
 第68回大会 関関西大学 2004. 9

生島 浩

【著 書】 困った親への対処法 共著 教育開発
 研究所

【論 文】 「ガンコ親父」のすすめ 単著 児童
 心理 804号 2004. 4

行為障害(非行臨床) 単著 日本医
 師会雑誌 131・12 2004. 6

スクールカウンセラーに期待される役割
 は何か 単著 教職研修 388号
 2004. 12

矯正保護機関における行為障害への対応
 と支援 単著 こころの臨床アラカル
 ト 23・4 2004. 12

子どもの危機に臨床家はいかに立ち向か
 うことができるか 単著 犯罪と非行
 143号 2005. 2

非行臨床における心理教育的アプローチ
 単著 現代のエスプリ 451号 2005. 2

【調査報告】 現職教員研修講座に関する調査研究
 中野明德、中田洋二郎、鈴木庸裕 福
 島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6

平成15年度福島大学教育学部附属臨床心
 理・教育相談室活動報告 中野明德、
 中田洋二郎、青木真理 福島大学教育
 実践研究紀要 46号 2004. 6

教育実践総合センター「教育実践」研修
 講座について 中野明德、中田洋二
 郎、鈴木庸裕、青木真理、宮前貢 福
 島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6

【学会発表】 非行・犯罪と地域 日本家族心理学会
 第21回大会 関広島 2004. 6

社会の危機に臨床家はいかに立ち向かう
 ことができるか 日本精神衛生学会創
 立20周年記念大会 関東京 2004. 11

【書 評】 島中宗一著「家族支援論」 家族療法
 研究 21・2 2004. 8

鈴木 庸裕

【著 書】 特別支援教育の争点 共著 文理閣
 2004. 4

「福祉教育」「統合教育」「交流教育」事
 典項目 共 現代教育方法事典 日本

教育方法学会編、図書文化 2004. 10

【論 文】 これからの特別支援教育コーディネータ
 ーのあり方を考える 単 福島大学教
 育実践研究紀要 46号 2004. 6

学級における被虐待児への指導援助に関
 する実践的研究 緑川広美 福島大
 学教育実践研究紀要 46号 2004. 6

学校と家庭、地域をつなぐソーシャルワ
 ークの役割と課題 単 ソーシャルワ
 ーク研究 ソーシャルワーク研究所
 相川書房 30巻2号 2004. 7

特別ニーズ教育をめぐるチームワークの
 形成 単 SNEジャーナル 日本特
 別ニーズ教育学会編、文理閣 10号
 2004. 10

学校ソーシャルワークの実践的課題
 単 福島大学教育学部論集 77号
 2004. 12

つなぐ方法とその担い手の役割 単
 生活指導 全生研編 明治図書 611号
 2004. 12

特別なニーズを持つ子どもの地域生活支
 援をめぐる課題 単 障害者問題研究
 全障研編 32巻4号 2005. 2

千葉 桂子

【著 書】 新版家政学事典 分担執筆 朝倉書店
 人間工学の百科事典 分担執筆 丸善
 株式会社

【論 文】 障害のある子どもの衣生活を支援するた
 めに一知的障害児の衣服選択と着装の観
 点から— 家庭科教育 78巻10号
 2004. 10

【学会発表】 車いす利用者のための試着スペースの検
 討 社)日本家政学会第56回大会
 関国立京都国際会館 2004. 8

鶴巻 正子

【著 書】 特別支援教育への扉 共著 八千代出版

【論 文】 AD/HDをもつ子どもの自己評価に関する
 研究 南中田洋二郎、鶴巻正子
 福島大学教育実践研究紀要 第46号
 2004. 6

軽度発達障害のある子どもの理解と支援
 (1) —公開セミナーの概要— 松崎
 博文、昼田源四郎、鶴巻正子 福島大
 学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12

軽度発達障害のある子どもの理解と支援
 (2) —シンポジウムでの質疑応答—
 昼田源四郎、鶴巻正子、松崎博文 福
 島大学教育実践研究紀要 第47号

2004. 12
軽度発達障害のある子どもの理解と支援
(3) ー参加者へのアンケート調査の分析ー 鶴巻正子、松崎博文、昼田源四郎 福島大学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12
- 【学会発表】** Teaching handwriting behavior of Chinese characters to a child with mental retardation. Association for Behavior Analysis International, 30th Annual ABA Convention 図米・シカゴシェラトンホテル 2004. 5
発達障害児における書字行動の獲得
(2)ー漢字の3つの構成部分を組み合わせるー 日本行動分析学会第22回年次大会 図帝京大学 2004. 9
発達障害児における書字行動の獲得
(3)ー構成反応見本合わせ課題の活用による支援ー 日本特殊教育学会第42回大会 図早稲田大学 2004. 9
「構成反応見本合わせの新たな可能性」Unclear but Present danger 発達障害に対する行動分析的な援助・指導テクノロジーの新たな展開 日本特殊教育学会第42回大会・シンポジウム 図早稲田大学 2004. 9
- 中野 明徳**
【著 書】 専門医をめざす人の精神医学 共著 医学書院
【論 文】 中学生の問題行動に対する保護者の意識の日米比較研究 初沢敏生、昼田源四郎、松崎博文 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 4号 2004
現職教員研究講座に関する調査研究 生島浩、鈴木庸裕 福島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6
学校不適応児の家族援助に関する研究 湊園実 福島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6
心理検査を活用した援助方針の検討 佐久間恵 福島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6
ロールシャッハ法と精神分析 単著 福島大学教育学部論集（教育・心理部門） 77号 2004. 12
アメリカの学校における包括的学校保健プログラム 昼田源四郎、松崎博文、初沢敏生、飛田操 福島大学教育学部論集（教育・心理部門） 77号 2004. 12
- 【調査報告】** 平成15（2003）年度福島大学教育学部附属臨床心理・教育相談室活動報告 青木真理、生島浩 福島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6
学習困難を持つ子どもへのメンタルフレンド活動 青木真理他8名 福島大学教育実践研究紀要 46号 2004. 6
2003年度「臨床心理・教育相談室」フレンドルーム活動報告 青木真理他11名 福島大学教育実践研究紀要 46号2004. 6
教育実践総合センター「教育実践」研修講座についてー2003年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討 青木真理、生島浩、鈴木庸裕、宮前貢 福島大学教育実践研究紀要 46号2004. 6
- 中村 恵子**
【論 文】 ゆで過程におけるスパゲティの芯の状態変化とアルデンテの評価 中町敦子、四宮陽子 日本調理科学会誌 37.2 2004. 5
【学会発表】 加熱に伴う農作物の細胞構造変化と物性について 日本食品工学会 図東京 2004. 8
卵白メレンゲの空気含有量におよぼす砂糖添加の影響 日本調理科学会 図札幌 2004. 9
- 中村 哲也**
【著 書】 新しい小学国語の創造 共著 双文社 pp.13-82 2004. 12
- 浜島 京子**
【著 書】 生活の自立と創造を育む家庭科教育（第7刷） 共著 家政教育社
家庭科で育つ子どもたちの力 共著 明治図書
新編 新しい家庭5・6 共著 東京書籍
【論 文】 児童・生徒の家庭生活における意識・実態調査 第1～4報 中屋、渡瀬、日景、長澤、浜島、黒川、高木、砂上 東北家庭科教育研究 3号 2004. 7
小学校家庭科の指導状況 浜島京子、佐藤未来 家庭科教育 78巻11号 2004. 11
- 【学会発表】** 家庭生活についての全国調査 東北データの分析 日本家庭科教育学会第47回大会 図東京学芸大学 2004. 6
生活上意欲、家庭科学習効果の認知と問題解決意欲 日本家庭科教育学会東北地区会第27回大会 図弘前市民参画センター 2004. 11

飛田 操

【論文】 Synergy between Diversity and Similarity in Group-Idea Generation. Miura Asako Small Group Research 35 2004

【学会発表】 Four heads are better than three? ～小集団問題解決場面における3名集団と4名集団の比較～ 日本グループ・ダイナミックス学会 関東洋大学 2004. 5

非ユークレカ課題における小集団問題解決過程 日本シミュレーション&ゲーミング学会 関東北大学 2004. 6

昼田源四郎

【論文】 アメリカの学校における包括的学校保健プログラム 中野明德、松崎博文、初澤敏生、飛田操、他 福島大学教育学部論集(教育・心理部門) 77号 2004. 12

アメリカと日本における施設化と脱施設化(その1)ー施設化の夢と現実 単著 精神医学史研究 8巻2号 2004. 10

軽度発達障害のある子どもの理解と支援(2) 松崎博文、鶴巻正子 福島大学教育実践研究紀要 47号 2004. 12

【調査報告】 生徒の問題行動に関する日米比較研究ー問題行動の促進および抑制要因の解明 中野明德、松崎博文、初澤敏生、飛田操、他 科研費報告書 基盤研究B(2) 課題番号:14310049 2005. 3

【学会発表】 A Comparative Study of the Behavior Problems of Students between Japan and America Jane Williams, Doug Winborn 16th Annual JUSTEC Seminar 関Waseda Univ. (Tokyo) 2004. 9
高尾山滝治療:聞き書き 第8回精神医学史学会 関慶応大学 東京 2004. 10

福田 一彦

【論文】 Delayed bedtime of nursery school children, caused by the obligatory nap, lasts during the elementary school period. Asaoka S. Sleep and Biological Rhythms Vol. 2, No. 2 2004. 6
固有の診療科を離れた立場からー思春期睡眠習慣とその問題点ー 石原金由 診断と治療 92巻, 7号 2004. 7

Effects of sleep-wake pattern and residential status on psychological distress in university students. Asaoka S., Yamazaki K. Sleep and Biological

Rhythms Vol. 2, No. 3 2004. 10

【学会発表】 健常若年成人における反社会性人格傾向と事象関連電位の特徴について 日本生理心理学会 関仁愛大学、福井県武生市 2004. 5

日常生活における睡眠-覚醒パターンと光暴露パターンとの関連 日本生理心理学会 関仁愛大学、福井県武生市 2004. 5

早産児の睡眠リズムの発達についてーPreterm期から修正12週までの縦断研究ー 日本生理心理学会 関仁愛大学、福井県武生市 2004. 5

ヒト乳児の睡眠覚醒概日リズムの発達は受胎を契機としている 日本睡眠学会 関赤坂プリンスホテル、東京 2004. 7

テレビ視聴時間の制限が大学生と高齢者の睡眠-覚醒パターンに及ぼす影響 日本睡眠学会 関赤坂プリンスホテル、東京 2004. 7

犯罪捜査場面におけるGKTの検出精度と影響要因 日本心理学会 関関西大学、大阪 2004. 9

テレビ視聴は“だらけた生活”の原因か?ー視聴時間の制限が大学生の睡眠-覚醒リズムと覚醒時の活動に与える影響ー 日本心理学会 関関西大学、大阪 2004. 9

テレビ視聴は“だらけた生活”の原因か?ー視聴時間の制限が高齢者の日常生活に与える影響ー 日本心理学会 関関西大学、大阪 2004. 9

睡眠リズムの発達は出産と受胎のどちらを契機としているのかー満期産児と早産児の比較ー 日本心理学会 関関西大学、大阪 2004. 9

満期産児と早産児における睡眠覚醒概日リズムの発達 特に生後2ヵ月の後半(受胎後約46週)に認められる変化について 日本時間生物学会 関ピアザ淡海、滋賀県大津市 2004. 11

テレビ視聴が大学生の睡眠-覚醒パターンに与える影響ー生活時間調査とテレビ視聴制限を用いた実験の両面からー 日本時間生物学会 関ピアザ淡海、滋賀県大津市 2004. 11

松崎 博文

【著書】 ダウン症ハンドブック 共著(分担執筆) 日本文化科学社

【論文】 特殊教育の現状と軽度発達障害児を取り巻く状況ー特殊教育から特別支援教育へ

の転換— 単著 福島大学教育実践研究紀要 第46号 2004. 6

アメリカの学校における包括的学校保健プログラム—子どものいじめ・暴力・自殺を予防するための学校を基盤とした取り組み— 共著 福島大学教育学部論集(教育・心理) 第73号 2004. 12

軽度発達障害のある子どもの理解と支援 (1)—公開セミナーの概要— 共著 福島大学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12

軽度発達障害のある子どもの理解と支援 (2)—シンポジウムでの質疑応答— 共著 福島大学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12

軽度発達障害のある子どもの理解と支援 (3)—参加者へのアンケート調査の分析— 共著 福島大学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12

【調査報告】 生徒の問題行動に関する日米比較研究—問題行動の促進及び抑制要因の解明— 共著 科研費成果報告書 2005. 3

松下 行則

【論 文】 「価値の明確化」型道徳授業を教育現場で試みる(2)—教授行為・学習者構造の問題— 福島大学教育実践研究紀要 第46号 2004. 6

水間 玲子

【論 文】 理想自己への志向性の構造について 心理学研究 75・1 2004. 4

【学会発表】 A study on how the self-narrative transits and develops: Through the transition of subject matters The Third International Conference on Dialogical Self 圏ポーランド, ワルシャワ社会心理学スクール 2004. 8

日常場面における自尊感情 (5)—友人関係のあり方との関連— 日本心理学会第68回大会 圏関西大学 2004. 9

日常場面における自尊感情 (6)—出来事と自己との関係づけにおける自尊感情の変動性による違い— 日本心理学会第68回大会 圏関西大学 2004. 9

日常的コミュニケーション場面における自己呈示—表情と言動に込められる他者反応への期待における予備的検討— 日本心理学会第68回大会 圏関西大学 2004. 9

2種の“自分探し”と個人の自己との関係について—自分探し尺度作成の試み— 日本教育心理学会第46回総会 圏富山大

学 2004. 10

現代青年の規範意識と非行(指定討論) 日本青年心理学会第12回大会 圏九州大学 2004. 10

心理学者、導入教育への挑戦(指定討論) 第11回大学教育研究フォーラム 圏京都大学 2005. 3

宮前 貢

【論 文】 教師に求められる「人間的指導力」と教員養成の課題 福島大学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12

小・中学校連携を目指したカリキュラム開発研究にかかると実践 青木真理、遠藤博晃 福島大学教育実践研究紀要 第47号 2004. 12

【学会発表】 教師に求められる「人間的指導力」と教師教育の課題 日本教師教育学会 圏立教大学 2004. 9

渡辺 隆

【論 文】 虐待する親への心理教育的介入—AD/HDを持つ子どもへの虐待事例の検討— 単著 家族療法研究 21(1)58-65 2004. 4

AD/HDのある子どもの家族への心理教育的介入—障害告知後の肯定的情緒的反応と家族関係の変化— 単著 家族療法研究 21(3) 23-30 2004. 12

AD/HDのある子どもの家族への心理教育的介入—障害告知後の肯定的情緒的反応と家族関係の変化— 単著 家族療法研究 21(1) 37 2004. 4

【学会発表】 AD/HDのある子どもの家族への心理教育的介入—障害告知後の肯定的情緒的反応と家族関係の変化— 単著 日本家族研究・家族療法学会第21回大会 圏木更津市 2004. 4

【書 評】 安全のサインを求めて—子ども虐待防止のためのサインオブセイフティーアプローチ A.Turnell, S.Edwards、著 白木孝二、井上薫、井上直美訳 単著 家族療法研究 21(3) 71-72 2004. 12

文学・芸術学系

新井 浩

【論 文】 越後妻有アートトリエンナーレにおける共同制作の試み—共同制作と造形表現の意味— 福島大学教育実践研究紀要 第46号 2004. 6

【実 技】 蝶が舞う森No.3 150×80×80 第78回国展彫刻部 会員として出品 2004. 4

響 No.6 65×30×30 第27回国展彫
刻部秋期展 会員として出品 2004. 9

幻想と追想に遊ぶもの達 新井浩個展
日本橋三越本店6階アートスクエア
個展 2004. 10

シエスタ 12×11×16 YEAR END
EXHIBITION OF MINI-SCULPTURE
ギャラリーせいほう 選抜 2004. 12

奏 No.12 ほか4点 2004三越美術逸
品会 ホテルニューオータニ 参考
2004. 10

蝶が舞う森 190×98×65 第5回桜
の森彫刻コンクール 大賞/182点中
2004. 6

蝶が舞う森No.3 150×80×80 第58回
福島県総合美術展覧会 招待 2004. 6

井実 充史

【論 文】 勅撰三集の閨怨詩について—嵯峨朝思婦
像の諸相— 福島大学教育学部論集,
人文科学部門 第76号 2004. 6

鎮護国家と梵門詩—『文華秀麗集』「梵
門」を中心に 福島大学教育学部論
集, 人文科学 第77号 2004. 12

磯崎 康彦

【著 書】 江戸時代の蘭画と蘭書・上巻 単著
ゆまに書房 2004. 4

江戸時代の蘭画と蘭書・下巻 単著
ゆまに書房 2005. 3

勝倉 壽一

【論 文】 大原富枝「婉という女」論 福島大学
教育学部論集 第76号 2004. 6

中山義秀「咲庵」論 福島大学教育学
部論集 第77号 2004. 12

【学会発表】 大原富枝「婉という女」について 福
島大学国語学国文学会 関福島大学
2004. 6

『大鏡』道長・伊周弓比べ説話の解釈
解釈学会第36回全国大会 関大妻女子大学
2004. 8

金谷 昌治

【実 技】 合奏 東京ハルモニア室内オーケスト
ラ第28回定期演奏会 関東京文化会館小
ホール 2004. 6

合奏 東京ハルモニア室内オーケスト
ラ第29回定期演奏会 関東京文化会館小
ホール 2004. 9

独奏及び室内楽 カメラータ・セシリ
アチャリティーコンサート 関カトリッ

ク水戸教会 2004. 9

独奏及び室内楽 カメラータ・セシリ
アチャリティーコンサート 関カトリッ
ク水戸教会 2004. 10

独奏及び室内楽 カメラータ・セシリ
アチャリティーコンサート 関カトリッ
ク水戸教会 2004. 11

独奏及び室内楽 カメラータ・セシリ
アチャリティーコンサート 関カトリッ
ク水戸教会 2004. 12

独奏及び室内楽 カメラータ・セシリ
アチャリティーコンサート 関カトリッ
ク水戸教会 2004. 12

独奏(複数の出演者における) セミナ
ーレ・カメラータ 関カトリック水戸教会
2005. 2

澁澤 尚

【論 文】 先秦楚國農業小考—兼ねて孫叔敖の水利
事績を論ず— 福島大学教育学部論集
・人文科学部門 第76号 2004. 6

列子華胥考—古漢語における異類同名に
ついて— 學林 第41号 2005. 3

【学会発表】 聖山と聖堂—壇台文化東漸についての一
試論— 福島大学国語学国文学会
関福島大学 2004. 11

『列子』の華胥について 中国藝文研
究會 関立命館大学 2004. 11

昆侖丘と明堂制 秋田中国学会 関秋
田大学 2004. 12

嶋津 武仁

【実 技】 二人の三味線奏者のための「みちづれ」
Concert R&M (紀尾井ホール、東京)
2004. 6

サウンド・ビジュアル作品「太陽風」
『フュージョン・アーツ・フェスティバ
ル』ニューヨーク 2004. 8

サウンド・ビジュアル作品「太陽風」
会津パフォーマンスフェスティバル
2004. 9

舞踊音楽『マイ・チェーホフ』 芙二
三枝子現代舞踊団公演、東京 2004. 9

児童合唱とチェロ、ピアノのための「幼
き命への墓碑銘」 福島市少年少女合
唱団公演、福島 2004. 9

弦楽オーケストラの為の「アダージョ」
「オルガンと室内楽の夕べ」、福島
2004. 12

新羅琴による「星巡り<燦>」 日本

- 舞踊『祐子の会』、東京 2004.12
 バイオリン・ソロのための「逝く春」
 JFC アンデパンダン、東京 2005.1
 17絃箏の為の「風の祭」 日本舞踊公
 演「水の宴」、東京 2005.3
 「オルガンと室内楽のひとつとき」 福
 島市音楽堂「設立20周年記念コンサート」
 2004.12

- 【書 評】 「天使の歌声」への思い 福島民報
 2004.5

高野 保夫

- 【著 書】 開かれる地平 単著 民報印刷
 【論 文】 文科省「国語力向上モデル事業」につい
 ての一考察 言文(福島大学国語学国
 文学会編) 52号 2005.3
 【学会発表】 「国語力向上モデル事業」が問いかける
 もの 福島大学国語学国文学会 函福
 島大学 2005.2
 【書 評】 国語科の教科内容を考えるための読書案
 内『るつぼの中の国語教師』 『国語
 科の教科内容をデザインする』(学文社)
 2004.8

竹下 英二

- 【著 書】 『セレーノ CD-ROM 版音楽科教育実
 践講座 理論編1』所収論文 「教材選
 択の観点と方法」(86-97頁) 共著
 (株)ニチブン 2004.4

中畑 淳

- 【実 技】 独奏会 「中畑淳ピアノリサイタル」
 演奏会評4誌 関東京文化会館 2004.12

半沢 康

- 【論 文】 方言研究と質問調査法 日本語学
 23-8 2004.6
 おらがことばと○○もんが隣接する方
 言のせめぎあい— 言語 33-9
 2004.8
 東北地方南部若年層における非標準語形
 使用の要因分析—心理的特性とのかかわ
 り— 国語学研究 44 2005.3
 【学会発表】 「関西弁帝国主義」は成立するか—東北
 地方における関西方言の影響— 福島
 大学国語学国文学会2004年10月学会
 関福島大学 2004.10

平田 公子

- 【著 書】 日本音楽教育事典 共著 音楽之友社

健康・運動学系

新谷 崇一

- 【論 文】 生涯スポーツとしての木球~その理論と
 実践~ 新谷崇一、穴戸隆之、周仲忽
 福島大学地域創造 第16巻第1号2004.9
 【訳書・翻訳】 木球のルール 共著 新谷崇一、穴戸
 隆之、周仲忽 国際木球連盟 2004.6

小川 宏

- 【著 書】 スポーツによる地域貢献で大学は変わる
 共著 大修館書店
 【論 文】 レクリエーションスポーツの教育的意義
 について—コミュニケーションを促進す
 るための教材価値の観点から— 体育
 ・スポーツ哲学研究 第26巻第2号
 2004.12

川本 和久

- 【論 文】 Eight days KAATSU-resistance training
 improved sprint but not jump perform-
 ance in collegiate male track and field
 athletes T.Abe, T.Yasuda, C.F.
 Kearns, T.Midorikawa, T.Sato Inter-
 national Journal of KAATSU Training
 Research Vol.1-1 2005.3
 【調査報告】 吉田真希子の足跡・その1・大学4年間
 吉田真希子 陸上競技研究 60号
 2005.3
 【学会発表】 日本トップスプリンターの身体組成と競
 技成績 第17回トレーニング科学研究
 会 関東京女子体育大学 2004.11
 【実 技】 池田久美子：100mH 第88回日本陸
 上競技選手権 1位 関鳥取 2004.6
 丹野麻美：400m 第88回日本陸上競
 技選手権 1位 関鳥取 2004.6
 久保倉里美：400m 第88回日本陸上
 競技選手権 2位 関鳥取 2004.6
 木田真有：400m 第88回日本陸上競
 技選手権 3位 関鳥取 2004.6
 池田久美子：走幅跳 第88回日本陸上
 競技選手権 2位 関鳥取 2004.6
 松田薫：200m 第88回日本陸上競
 技選手権 3位 関鳥取 2004.6
 佐藤光浩：400m 第88回日本陸上競
 技選手権 1位 関鳥取 2004.6
 吉田真希子：400mH 第88回日本陸
 上競技選手権 1位 関鳥取 2004.6
 久保倉里美：400mH 第88回日本陸
 上競技選手権 2位 関鳥取 2004.6

- 丹野麻美：400m アジアジュニア選手権 2位日本記録 ㊦インドネシア 2004. 6
- 丹野麻美：4×100m R アジアジュニア選手権 1位 ㊦インドネシア 2004. 6
- 松田 薫：4×100m R アジアジュニア選手権 1位 ㊦インドネシア 2004. 6
- 松田 薫：200m アジアジュニア選手権 5位 ㊦インドネシア 2004. 6
- 丹野麻美：400m 第73回日本学生陸上競技対校選手権 1位 ㊦東京 2004. 7
- 木田真有：400m 第73回日本学生陸上競技対校選手権 2位 ㊦東京 2004. 7
- 久保倉里美：400m 第73回日本学生陸上競技対校選手権 3位 ㊦東京 2004. 7
- 熊谷史子：100mH 第73回日本学生陸上競技対校選手権 2位 ㊦東京 2004. 7
- 福島大学：4×100mR 第73回日本学生陸上競技対校選手権 1位 ㊦東京 2004. 7
- 佐藤広樹：800m 第73回日本学生陸上競技対校選手権 2位 ㊦東京 2004. 7
- 丹野麻美：200m 第73回日本学生陸上競技対校選手権 1位 ㊦東京 2004. 7
- 久保倉里美：400mH 第73回日本学生陸上競技対校選手権 1位 ㊦東京 2004. 7
- 福島大学：4×400mR 第73回日本学生陸上競技対校選手権 1位日本学生記録 ㊦東京 2004. 7
- 松田 薫：100m 第10回世界ジュニア選手権 予選 ㊦イタリア 2004. 7
- 丹野麻美：400m 第10回世界ジュニア選手権 6位 ㊦イタリア 2004. 7
- 松田 薫：200m 第10回世界ジュニア選手権 予選 ㊦イタリア 2004. 7
- 丹野麻美：4×100m R 第10回世界ジュニア選手権 予選 ㊦イタリア 2004. 7
- 松田 薫：4×100m R 第10回世界ジュニア選手権 予選 ㊦イタリア
- 佐藤光浩：400m アテネオリンピック 予選 ㊦アテネ 2004. 8
- 佐藤光浩：4×400mR アテネオリンピック 4位 ㊦アテネ 2004. 8
- 久保倉里美：400mH スーパー陸上日本学生記録 ㊦横浜 2004. 9
- 松本真理子：200m 第52回全日本実業団対抗選手権 2位 ㊦岡山 2004. 9
- 吉田真希子：400mH 第52回全日本実業団対抗選手権 1位 ㊦岡山 2004. 9
- 池田久美子：走幅跳 第52回全日本実業団対抗選手権 2位 ㊦岡山 2004. 9
- 佐藤光浩：400m 第52回全日本実業団対抗選手権 1位 ㊦岡山 2004. 9
- 吉田真希子：400m 第52回全日本実業団対抗選手権 1位 ㊦岡山 2004. 9
- 池田久美子：100mH 第52回全日本実業団対抗選手権 1位 ㊦岡山 2004. 9
- 茂木智子：100mH 第52回全日本実業団対抗選手権 2位 ㊦岡山 2004. 9
- 池田久美子：走幅跳 第1回アジアオールスター 2位 ㊦シンガポール 2004. 9
- 丹野麻美：400m 第1回アジアオールスター 2位 ㊦シンガポール 2004. 9
- 久保倉里美：400mH 実業団対学生対抗 日本学生記録 ㊦小田原 2004. 10
- 福島大学：4×100mR 第88回日本陸上競技選手権 1位 ㊦前橋 2004. 10
- 福島大学：4×400mR 第88回日本陸上競技選手権 1位日本学生記録 ㊦前橋 2004. 10
- 福島大学：スウェーデンリレー レディース陸上 日本学生記録 ㊦熊本 2004. 11

菅家 礼子

- 【論文】 リズミカル・ムーブメントにおける音楽と動きの研究 ～音楽構成の理解と動きの変容との関係性～ 伊野義博、森下修次、田中幸治、滝澤かほる、坂下玲子 新潟大学教育人間科学部紀要 第7巻第1号 2004. 10

「からだ学習」の実践のための総合的研究 ーからだと心の自己学習をすすめる保健室づくりー 高橋由美子、佐藤文

子、菅家礼子、森知高、佐藤理 福島
大学教育実践研究紀要 第46号 2004. 6

大学)、安田俊広(福島大学) 第55
回日本体育学会大会 関信州大学
2004. 9

黒須 充

【著 書】 スポーツによる地域貢献で大学は変わる
共著 大修館書店 2004. 12

総合型地域スポーツクラブ 編著
ぎょうせい 2005. 3

【論 文】 総合型地域スポーツクラブの創設と自治
体の役割 市政 Vol.54 No.1 2005. 1

【調査報告】 県中・県南7町村のスポーツの現状と課
題 うつくしま広域スポーツセンター
2004. 4

Q & A 総合型地域スポーツクラブ み
んなのスポーツ 2004年6月号
Vol.302 2004. 6

福島県民の運動・スポーツに関する実態
調査報告書 財団法人福島県体育協会
・福島県教育委員会 2004. 11

地域が舞台 スポーツクラブが社会を変
える 指導者のためのスポーツジャー
ナル 2004年冬号(通巻262号)
2004. 11

第4回総合型地域スポーツクラブ育成状
況に関する調査報告書 NPO 法人ク
ラブネッツ 2005. 3

【学会発表】 学外での体育スポーツ活動 日本体育
学会第55回大会本部企画シンポジウムⅡ
関信州大学 2004. 9

スポーツと地域づくりの連携のあり方
平成16年度地域活性化フォーラム 関有
楽町朝日ホール 2005. 2

佐々木 武人

【論 文】 障害者の柔道指導に関する研究動向と課
題—特に欧米の動向より— 福島大学
教育学部論集・教育・心理部門 No.76
2004. 6

【調査報告】 —21世紀の時代における武道の役割—
“障害者と武道” 共著 平成16度・
国土研究会「国際シンポジウム」 4th
The New Japan 2005. 3

【学会発表】 一流柔道選手を対象とした効果的な釣手
動作の検討 曾我部晋哉(甲南大学)、
平井浩一郎、中村良三、小侯幸嗣、岡田
弘隆、久保田浩史、廣川充史、坂本道人
(筑波大学)、山崎俊輔(甲南大学)
日本武道学会第37回大会 関香川大学
2004. 8

一流スノーボード指導者によるロングタ
ーンカービングの動作分析 山内武巳
(石巻専修大学)、奥津光晴、北村勝郎
(東北大学)、高戸仁朗(東北文化学園

佐藤 理

【著 書】 学校保健ハンドブック 共 ぎょうせい

「授業書」方式による保健の授業 共
大修館書店

【論 文】 「からだ学習」の実践のための総合的研
究—からだの自己学習をすすめる保健室
づくり— 高橋由美子、佐藤文子、菅
家礼子、森知高 福島大学教育実践研
究紀要 第46号 2004. 6

白石 豊

【著 書】 どの子も伸びる運動神経 指導者編
共 かもがわ出版

スポーツの得意な子に育つ親子遊び
単 PHP 研究所

心を鍛える言葉 単 日本放送出版協会

【論 文】 体育における「四摂法」 単 楽しい
体育の授業 181号 2004. 12

Fernostliches Mentaltraining 単
Leistungssport 6/2004 2004. 12

杉浦 弘一

【著 書】 スポーツによる地域貢献で大学は変わる
共著 大修館書店 担当 pp.125-136

【実 技】 福島大学女子バスケットボール部(監
督) 東北学生バスケットボールリー
グ 第5位 2004. 9

福島大学女子バスケットボール部(監
督) 南奥羽学生春季バスケットボ
ール大会 第3位 2004. 5

福島大学女子バスケットボール部(監
督) 第57回福島県総合体育大会
第2位 2004. 7

福島県成年女子選抜(バスケットボール
競技)(監督) 東北総合体育大会
Bブロック3位 2004. 8

松田朋子(バスケットボール部で指導)
東北総合体育大会 福島県代表選手と
して出場、Bブロック3位 2004. 8

審判(バスケットボール) 日本スポ
ーツマスターズ2004福島大会バスケット
ボール競技 1回戦、2回戦審判(2試合)
2004

鈴木裕美子

【調査報告】 集団演技出演者の技能と意識の変容
単 舞踊学 26号 2004. 5

【学会発表】 地域おこしと祭り～福島わらじまつり～

舞踊学会 圏沖縄県立芸術大学 2004.12

2004. 6

安田 俊広

【論 文】 後期高齢者エリートアスリートにおける
全身持久性運動の安全性 鱈坂隆一、
勝田 茂、川島紫乃、大森 肇、松田光
生、渡辺重行、山口 巖 筑波大学体
育科学系紀要 27 2004

【学会発表】 スノーボードロングターンカービングの
動作分析 第55回日本体育学会大会
圏長野 2004. 9

【学会発表】 太宰治の外国文学受容について 日本
比較文学会東北・北海道支部 圏仙台市
仙台文学館 2004. 12

佐々木俊彦

【論 文】 The Trainspotting Phenomenon in Japan:
The History of the Reception of the Nov-
elistic and Cinematic Texts 商学論集
第73巻第3号 2005. 3

霜鳥 慶邦

【著 書】 Do You Know This?: Short Readings
and Basic Grammar for Cultural Literacy
(大学テキスト) 共著 朝日出版社

Eye-opening Facts: Short Readings and
Basic Grammar for Cultural Literacy (大
学テキスト) 共著 朝日出版社

【訳書・翻訳】 『D.H.ロレンス書簡集Ⅲ』 共訳
松柏社 2005. 3

【学会発表】 「〈生〉の象徴アメリカ／〈悪〉の根源ア
ジア—『セント・モア』の植民地幻想」
共同(ワークショップ『『セント・モ
ア』を再導入する』にて) 日本ロレ
ンス協会 設立35年記念大会 圏日本
大学芸術学部 2004. 6

【書 評】 Ronald Granofsky, D. H. Lawrence and
Survival: Darwinism in the Fiction of
the Transitional Period 単著 『D.
H.ロレンス研究』 14・15合併号2005. 3

外国語・外国文化学系

朝賀 俊彦

【論 文】 Predication in the English Classifier Con-
struction Proceedings of the 59th
Conference The Tohoku English Liter-
ary Society 2005. 3

【学会発表】 類別詞構文における叙述関係 東北英
文学会第59回大会 圏東北大学 2004. 11

池澤 實芳

【論 文】 人が落ちる物語—90代後半の4篇の鉄
凝作品の考察— 商学論集 73巻3号
2005. 3

衛藤 安治

【論 文】 Beowulf における罪のことなど 英語
史研究会会報 第11号 2004. 6

金 敬雄

【論 文】 井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける
訳語の増設についての考察—底本の英
語に新設した訳語— 行政社会論集第
17巻第2号 2004. 9

【学会発表】 中朝日漢字語彙の対照研究—一等級別国
語教育用語彙を軸に— 漢字文化圏近
代語研究会 圏中国上海・同济大学
2005. 3

九頭見 和夫

【著 書】 太宰治と外国文学、翻案小説の「原典」
へのアプローチ 単著 和泉書院

【論 文】 太宰治の「人魚の海」についての比較文
学的考察 国文学年次別論文集・近代
4 (朋文出版) 2004. 12

太宰治の「乞食学生」と外国文学 国
文学年次別論文集・近代4 (朋文出版)
2004. 12

【訳書・翻訳】 アンリー・デュナン—波瀾万丈の生涯と
驚異的なヴィジョン 単著 福島大学
教育学部論集、人文科学部門 76号

手代木有児

【論 文】 梁啓超の史界革命と明治時期的歴史学
近代中国 (上海中山学社) 第14輯
2004. 8

【学会発表】 清末における西洋体験と「公」概念の展
開 公共哲学京都フォーラム東北会議
圏東北大文学部 2004. 9

【書 評】 島田虔二編訳、梁啓超年譜長編第1巻
東方 283号 2004. 9

長尾 光之

【論 文】 いくつかの漢訳仏典における副詞と連詞
(上) 単著 行政社会論集 17巻・3号
2005. 1

いくつかの漢訳仏典における副詞と連詞
(下) 単著 行政社会論集 17巻・4号
2005. 3

【調査報告】 福島高商外人教師博華 単著 季刊中
国 79巻 2004年冬季号 2004. 12

04ふくしま平和のための戦争展と平和講
演会 共著 福島大学地域創造 2号
2005. 2

- 【学会発表】 使用電脳ネットワークデータベース和 Excel データベースの漢訳仏経の語法 第11回全国近代漢語学術年会・国際学術研討会 中国・徐州市徐州師範大学 2004.10

林 修

- 【著 書】 L'écriture du moi dans l'oeuvre de Marguerite Yourcenar 共著 SIEY(Clermond-Ferrand), FRANCE

Marguerite Yourcenar Ecrivain du XIXe siècle? 共著 SIEY(Clermond-Ferrand), FRANCE

- 【学会発表】 Marguerite Yourcenar et la poesie du haiku Marguerite Yourcenar et l'Univers Poetique 東京日仏学院 2004. 9

松浦 浩子

- 【著 書】 Essential Listening for the TOEIC Test 共著 金星堂

- 【論 文】 Compliment-giving Behavior in American English and Japanese JALT Journal 26(2) 2004.11

- 【調査報告】 The Officialization of English and ELT in Japan: 2000 Miho Fujieda, Sean Mahoney World Englishes 23(3) 2004. 8

法律・政治学系

伊藤 宏之

- 【論 文】 ホッブスをめぐるカントとスミス 単著 福島大学教育学部論集 第75号 2004.12

キリスト教的平等主義者としてのジョン・ロック 単著 福島大学教育学部論集 第74号 2004. 6

- 【書 評】 藤垣裕子著、専門知と公共性、東京大学出版会、2003年5月 社会思想史研究 No.28 2004. 9

稲庭 恒一

- 【論 文】 第三セクター会社の経営体制等経営状況・破綻に関する法的研究—第三セクター会社の全国的アンケート調査の結果を中心として— その1 単著 福島大学行政社会論集 17巻1号 2004. 6

同 その2 単著 福島大学行政社会論集 17巻2号 2004. 9

同 その3 単著 福島大学行政社会論集 17巻3号 2005. 1

今井 照

- 【著 書】 図解よくわかる地方自治のしくみ<第2次改訂版> 単著 学陽書房

超入門地方自治制度はこうなっている<第1次改訂版> 単著 学陽書房

自治体再構築における行政組織と職員の将来像 単著 公人の友社

分権型社会の政治と自治 共著 敬文堂
実践の政治学〔改訂版〕 共著 法律文化社

- 【論 文】 市民自治の制度化と政策法務 都市問題 第95巻第5号 2004. 5

一人ひとりを中心としたコミュニティ・ガバナンスへ 年報自治体学 第17号 2004. 5

アウトソーシングと指定管理者制度の位相 地方自治職員研修 第37巻第9号通巻517号 2004. 9

首長部局による教育政策のリスクと可能性 ガバナンス 通巻第70号 2005. 2

市町村合併に伴う自治体政治動向について—首長選挙と議会議員選挙の分析—自治総研 通巻第317号 2005. 3

市町村合併に伴う自治体政治動向について—首長選挙と議会議員選挙の分析—全国首長名簿2004年版 2005. 3

- 【学会発表】 新しい自治体人事制度の模索 自治体学会 圏千葉市 2004. 8

上田 真理

- 【調査報告】 社会保障法(2004年学界回顧) 国京則幸 法律時報 76巻13号 2004.12

金井 光生

- 【論 文】 ホームズの子どもたち、もしくは、Maleus Maleficarum 東京都立大学法学会雑誌 45巻1号 2004. 7

功刀 俊洋

- 【著 書】 戦後型地方政治の成立 単著 敬文堂

今野 順夫

- 【著 書】 福祉の現場 実践と発言 共著 信山社

- 【論 文】 全額払いの原則と相殺・放棄 Jurist 増刊(「労働法の争点」[第3版]) 2004.12

下山 憲治

- 【論 文】 不確実性の条件下における行政決定の法的制御に関する一考察 行政社会論集 17巻3号 2005. 1

- 【調査報告】 要綱による労災就学援護費の不支給決定と処分性 (判例評釈) 法学セミナー 594号 2004. 6
- 目黒公園都市計画決定における裁量統制 (判例評釈) 福島大学地域創造 16巻1号 2004. 9
- 地震災害と道路管理の瑕疵 (判例評釈) 法学セミナー 598号 2004. 9
- 環境影響評価書等の試案の非公開情報該当性 (判例評釈) 法学セミナー 603号 2005. 2

高瀬 雅男

- 【著 書】 農業協同組合とシャーマン法 丹宗暁信ほか編『構造改革批判と法の視点』共著 花伝社

中里見 博

- 【著 書】 憲法24条+9条—なぜ男女平等がねらわれるのか 単著 かもがわ出版
- 【論 文】 ポルノグラフィと法規制—ポルノの性暴力にジェンダー法学はいかに対抗すべきか 単著 東北大学21世紀 COE プログラム研究年報 2号I 2005. 3
- 【調査報告】 (学会回顧) ジェンダーと法 共著 二宮周平、谷田川知恵 法律時報 76巻3号 2004. 12
- (資料) 米国マサチューセッツ州およびミネソタ州におけるドメスティック・バイオレンスへの取り組みについて(2) 単著 福島大学行政社会論集 17巻1号 2004. 6
- 【訳書・翻訳】 リチャード・デルガド&ジーン・ステファンシック「ポルノグラフィと女性への被害—いかにして社会学者が救済の必要性を理解しそこねることがあるか」 単著 ポルノ・買春問題研究会論文・資料集 5号 2004. 11
- 【学会発表】 ポルノ被害と法規制—ポルノグラフィと法をめぐる視座転換をめざして ジェンダー法学会 関専修大学 2004. 12

社会・歴史学系

阿部 成治

- 【著 書】 欧米のまちづくり・都市計画制度 共著 ぎょうせい
- 【論 文】 ドイツのエコロジー都市施策における協働型プロジェクトに関する研究 神吉紀世子、小浦久子 日本都市計画学会論文集 39号 2004. 11

岩崎由美子

- 【著 書】 女性農業者の法的地位の明確化・強化について 共著 (社)女性・生活協会
- 【論 文】 「オルタナティブ・ワーク」としての農村女性起業と法人化 単著 農業と経済 70巻15号 2004. 12
- 【調査報告】 実践報告：第4回演習「水と緑と農との共生のある環境づくり」 塩谷弘康「まちづくりと生涯学習」における専門的人材養成に関する調査研究報告書 2005. 3
- 【学会発表】 家族経営における女性の地位—生産と生活の両面から 日本農業法学会 関東京経済大学 2004. 11

加藤 眞義

- 【論 文】 「市民社会」論再考：John Ehrenbergの所説をめぐって 単著 社会学年報 東北社会学会50周年記念特別号 2004. 7

丹波 史紀

- 【論 文】 わが国におけるひとり親家庭へのワークフェア政策の動向と課題 総合社会福祉研究 第25号 2004. 11

千葉 悦子

- 【著 書】 自然との共生とまちづくり 共著 北樹出版
- 女性白書2004 共著 ほるぷ出版
- 【論 文】 女性参画の促進 農業と経済 臨時増刊号 2004. 7
- 男女共同参画の視点から「担い手」問題を考える 食料・農業・農村基本計画の見直しについての見解 (衆議院調査局) 2004. 11
- 【調査報告】 男女共同参画に関する意識調査報告書 高橋準、中里見博 福島市 2005. 3
- 「まちづくりと生涯学習」における専門的人材養成に関する調査研究IⅡ 荒木田、今西、岩崎、境野、松野、坂本、塩谷 2005. 3
- 【書 評】 Women and Families in Rural Japan By M. Tsutsumi(Ed). International Journal of Japanese Sociology No.13 2004. 10

牧田 実

- 【論 文】 過疎地域におけるソーシャル・サポート・ネットワークと社会的資源 大塚洋子 日本家政学会家族関係学部会『家族関係学』 第23号 2004. 10
- 【学会発表】 地域住民組織とコミュニティー福島県三

春町の地区まちづくり協会の事例をと
して コミュニティ政策学会・研究
フォーラム第3回大会 関西学院大学
2004. 7

バンコクのスラムにおける地域住民組
織—カナカマカーン・チュムチョン・
ワット・ユアンクランランパックの事例
第77回日本社会学会 関熊本大学
2004. 11

経済学系

阿部 高樹

【論 文】 Real Indeterminacy in a Production Econ-
omy with Incomplete Markets Discussion Paper Series no.34. (The Eco-
nomic Society of Fukushima University)
2004. 12

伊部 正之

【書 評】 平田哲男『レッド・パーズの史的究明』
歴史評論 NO.654 2004. 10

大野 正智

【論 文】 The Choice of Invoice Currency under
Uncertainty: Theory and Evidence from
Korea Shin-ichi Fukuda 東京大学
CRIJE Discussion Paper Series No. F-
271 2004. 4

【学会発表】 貿易契約通貨の決定メカニズム—東アジ
アにおける「円の国際化」の視点から
福田慎一 アジア経済研究所「国際通
貨体制の新展開と開発途上国」研究会
関上智大学 2004. 7

熊本 尚雄

【論 文】 為替相場のボラティリティが国際貿易に
及ぼす影響：サーヴェイと今後の展望
一橋研究 第29巻・第1号 2004. 4

基軸通貨ドルにおける慣性の実証分析
一橋論叢 第131巻・第6号 2004. 6

為替相場における投機的バブルの期待安
定性 熊本方雄 商学論集 第73巻
・第1号 2004. 9

レセプトデータによる医療費改定の分析
細谷圭、増原宏明 鶴田忠彦[編著]
『日本の医療改革—レセプトデータに
よる経済分析—』所収(第7章)、東洋
経済新報社 2004. 9

伸縮的価格マネタリーモデルの共和分分
析 熊本方雄 生活経済学研究 第
20巻 2004. 9

通貨代替と為替相場のボラティリティー

メキシコにおける事例— 熊本方雄
ラテンアメリカ論集 第38号 2004. 11

ラテンアメリカのマクロ経済分析(1)
—概観— 熊本方雄 東京経大学
会誌 第241号 2005. 1

ラテンアメリカのマクロ経済分析(2)
—経済成長— 熊本方雄 東京経大
学会誌 第243号 2005. 3

ラテンアメリカのマクロ経済分析(3)
—累積債務問題— 熊本方雄 東京
経学会誌 第245号 2005. 3

小島 彰

【著 書】 郡山の商業 郡山市史統編3 通史
共著 郡山市

小山 良太

【著 書】 競走馬産業の形成と協同組合 単著
日本経済評論社 2004. 6

【論 文】 合併農協の挑戦—JAさっぽろ—
『ニューカントリー』北海道協同組合通
信社 第51巻第9号 2004. 9

組合員参加と意思決定 『ニューカン
トリー』北海道協同組合通信社 第51巻
第8号 2004. 8

日高・胆振地方における軽種馬生産の構
造変動③—預託生産の動向と経営対
応— 『JBBA NEWS』社団法人日
本軽種馬協会 Vol.377、第33巻6号
2004. 6

日高・胆振地方における軽種馬生産の構
造変動②—軽種馬部門中止の動向—
『JBBA NEWS』社団法人日本軽種馬協
会 Vol.376、第33巻5号 2004. 5

日高・胆振地方における軽種馬生産の構
造変動①—生産者数の減少と階層変動—
『JBBA NEWS』社団法人日本軽種馬協
会 Vol.375、第33巻4号 2004. 4

【調査報告】 軽種馬振興と経営展開方向 古林英一
(北海学園大学) 『平成16年度軽種
馬経営体育成促進事業報告書』北海道日
高支庁 2005. 3

北海道農協における准組合員対策と実践
課題 糸山健介、林扶俊(北海道大学
大学院) 北海道地域農業研究所
2005. 3

地域戦略の策定と合意形成の実行
『地域農業存立及び地域戦略形成システ
ム調査検討業務』北海道地域農業研究所
2005. 3

広域合併農協と農業事業・組織問題

- 『農協改革への提言—北海道の内なる改革を目指して—』北海道地域農業研究所
2005. 3
- 員外および准組合員対応と金融・生活事業 『農協改革への提言—北海道の内なる改革を目指して—』北海道地域農業研究所
2005. 3
- 全国系統農協の事業・組織再編と北海道 『農協改革への提言—北海道の内なる改革を目指して—』北海道地域農業研究所
2005. 3
- 協業化の論理と形態 古林英一（北海学園大学） 『さけ定置漁業の協業化に関する調査・研究』北海道定置漁業協会
2004. 4
- 【学会発表】 軽種馬経営の協業化モデルに関する一考察 日本ウマ科学会 函東京大学
2004. 11
- 農協の組織基盤と事業体制再編に関する研究—広域合併農協と連合会機能に注目して— 日本協同組合学会 函広島大学
2004. 10
- 【書 評】 岩崎徹著『競馬社会をみると日本経済がみえてくる—国際化と馬産地の課題—』『Hippophile』日本ウマ科学会 No.18
2004. 10
- 清水 修二
- 【著 書】 郡山市史・続編3 通史 共著 郡山市書店協同組合
2004. 9
- 【書 評】 地方小都市の産業振興戦略 福島大学地域創造 16巻1号
2004. 9
- 初沢 敏生
- 【著 書】 産業のグローバル化と産業地域 共原書房
- 【論 文】 福島県会津本郷陶磁器業の特徴と課題 単 福島大学教育学部論集 社会編 74
2004. 6
- 大堀相馬焼産地の特徴と課題 吉田聡子 福島大学地域創造 16・1
2004. 9
- わが国におけるミニ独立国運動の特徴 大塚亮太 福島地理論集 47
2004. 9
- 和ろうそく製造業の特徴と課題 単 福島大学教育学部論集 社会編 75
2004. 12
- アメリカの学校における包括的学校保健プログラム 昼田源四郎、他 福島大学教育学部論集 教育・心理編 77
2004. 12
- 模擬授業実践報告（3） 小学校4年社会科 地域の食文化の学習を例として 単 福島大学教育実践研究紀要 47
2004. 12
- 中高層建築物の分布からみた盛岡市中心部の都市構造の特質 単 福島大学地域創造 16・2
2005. 2
- 【調査報告】 生徒の問題行動に関する日米比較研究 昼田源四郎、他 科学研究費報告書
2005. 3
- 【学会発表】 大堀相馬焼産地の特性と技術伝承 東北地理学会 函仙台市戦災復興記念館
2004. 5
- 福島大学教育学部における地理教育実践報告 立正地理学会 函立正大学
2004. 6
- 中学校社会科地理的分野における「中国のとらえ方」に関する一考察 福島地理学会 函新鶴村・ほっとぴあ新鶴
2004. 10

経営学系

飯田 史彦

- 【著 書】 生きがいの教室 単著 P H P 研究所
生きがいの探求 単著 P H P 研究所
生きがいの創造 II 単著 P H P 研究所
- 人生において「会社」とは何か 単著 P H P 研究所
- 【論 文】 医療施設の差別化戦略に関する基本原理 福島大学商学論集 第73巻第2号
2004. 10

遠藤 明子

- 【論 文】 小売企業における物流業務内部化の論理：株式会社しまむらの事例 日本経営システム学会誌 第21巻第1号
2004. 9

貴田岡 信

- 【論 文】 ストープス氏指導による二段式標準原価計算の基本的構造とその特徴 単著 商学論集（福島大学） 第73巻第4号
2005. 3

衣川 修平

- 【論 文】 減損会計に関わる税効果会計 減損会計・税務特別委員会中間報告書
2004. 10
- 【学会発表】 減損会計・税務特別委員会中間報告 税務会計研究学会 函熊本学園大学
2004. 10

高山 清治

- 【論 文】 法人税法の概観—ドイツを中心として—
経理研究 第48巻 2005. 3

富澤 克美

- 【論 文】 1920年代アメリカにおける余暇・消費問題と労使関係の新たな「精神」の誕生：
経営プロフェッショナリズムとアメリカ
労働総同盟の「対話」 商学論集（福
島大学経済学会） 73巻2号 2005. 1

- 【学会発表】 1920年代アメリカにおける余暇・消費問題と労使関係の新たな「精神」の誕生：
経営プロフェッショナリズムとアメリカ
労働総同盟の「対話」 社会経済史学
会東北部会 関東北大学 2004. 6

美馬 武千代

- 【論 文】 概念フレームワークにおける会計公準の
役割 商学論集 73巻5号 2005. 3

- 【調査報告】 未来へ向けて 福島石油50年史
2005. 3

村田 英治

- 【論 文】 後入先出法と会計主体論（研究ノート）
商学論集（福島大学） 73巻4号
2005. 3

- 【書 評】 『財務諸表論究—動的貸借対照表論の応
用（第2版）』より学ぶ 新田忠誓先
生還暦記念論文集『会計数値の形成と財
務情報』白桃書房 2005. 1

山浦 廣海

- 【論 文】 WTO サービス交渉と人の移動 東北
経済学会誌 2003年度版、2003年度修
正版平成16年11月 2004. 9

アジアFTA網構築の基軸形成に向けて
日本貿易学会年報 第42号 2005. 3

- 【学会発表】 アジアFTA網構築の基軸形成に向けて
日本貿易学会 関日本大学経済学部
2004. 6

数理・情報学系**篠田 伸夫**

- 【学会発表】 中学校Webページの運営に関する実態調
査とその分析 馬場 宏昌、篠田 伸夫
日本産業技術教育学会第22回東北支部大
会 関秋田県生涯学習センター 2004. 11

董 彦文

- 【学会発表】 Formulation of Two-Stage Possibilistic
Programming Model For Fuzzy Vehicle
Routing Problem The 1st Interna-
tional Congress on Logistics and SCM

Systems 関東京 2004. 12

待ち時間と時間遅れのペナルティーを考
慮したファジィ配送スケジューリング問
題に関する研究 日本経営工学会
関東京 2004. 5

多変量解析手法を用いた取引先の信用評
価問題に関する研究 日本経営工学会
関金沢 2004. 10

星野 珙二

- 【論 文】 生協の社会性と経済性の両立に関する経
営学的研究 三崎秀央、上野山達哉、
川上昌直 第2回生協総研賞・研究奨
励助成事業研究論文集 2004. 9

T P S理解のために—システム論・在庫
管理論の立場から 単著 商学論集
第73巻、第4号 2005. 3

- 【学会発表】 Comparison Between r, R -Policy and
Fixed-interval Ordering Policy 13th
International Symposium on Inventories
関Budapest, Hungary 2004. 8

三浦 一之

- 【論 文】 Canonical Decomposition, Realizer, Schnyder
Labeling and Orderly Spanning Trees
of Plane Graphs M. Azuma, T.
Nishizeki Foundations of Computer
Science 16. 1 2005. 2

- 【学会発表】 Canonical Decomposition, Realizer, Schnyder
Labeling and Orderly Spanning Trees
of Plane Graphs COCOON 2004
関韓国 濟州島 2004. 8

Inner Rectangular Drawings of Plane
Graphs ISAAC 2004 関中国 香港
2004. 12

Rectangle-of-influence drawings of four-
connected plane graphs APVIS 2005
関オーストラリア シドニー 2005. 1

横山 雅夫

- 【論 文】 Optimization of Two-stage Production
System with Assembly and Setup Opera-
tions Computers and Operations Re-
search Vol. 31, No.12 2004. 10

Three-stage Flow-shop Scheduling with
Assembly Operations to Minimize the
Weighted Sum of Product Completion
Times D. L. Santos European
Journal of Operational Research Vol.
161, No.3 2005. 2

機械・電子学系

石原 正

- 【論文】 Intelligent learning controller for nonlinear systems using radial basis neural networks Muhammad Arif, Hikaru Inooka Control and Intelligent Systems 32:2 2004

Identification of the head-neck complex in response to the trunk horizontal vibration Mohammad Fard, Hikaru Inooka Biological Cybernetics 90 2004

非線形性とむだ時間を考慮した鉄道車両ブレーキのフィードバック制御 南京正信、猪岡 光 日本機械学会論文集 (C編) 70:696 2004

- 【学会発表】 Two-step design of critical control systems for non-minimum phase plants Asian Control Conference ④Melbourne 2004. 7

小沢 喜仁

- 【著書】 強さの不思議—ものづくりで遊ぶ材料力学— 日本機械学会、共著 技報堂出版 2005. 2

- 【論文】 Evaluation of Material Property of Short Fiber Reinforced Polymer Composites and Fiber Distribution Model Proceedings of The 11th US-Japan Conference on Composite Materials Feb7, pp.1-4. 2004. 9

Mechanical Behavior of Basalt Fiber Reinforced Polymer Composites in Temperature Condition Tokio KIKUCHI and Masayuki ISOHATA Proceedings of Third International Workshop on Green Composites (IWGC-3) pp.124-127. 2005. 3

- 【学会発表】 短繊維強化複合材料の材料特性の評価と繊維配向モデル 日本機械学会 M&M 2004 材料力学カンファレンス ④秋田大学 2004. 7

Evaluation of Material Property of Short Fiber Reinforced Polymer Composites and Fiber Distribution Model The 11th US-Japan Conference on Composite Materials ④Yamagata University 2004. 9

バサルト繊維強化有機複合材料の機械的特性と成型評価, 日本複合材料学会 第29回複合材料シンポジウム ④那覇市沖繩青年会館 2004.10

短繊維強化複合材料の材料特性と成型評価 日本機械学会 第17回計算力学講演会 ④仙台市民会館 2004.11

環境にやさしい有機複合材料の製作と機械的特性 日本産業技術教育学会 第22回東北支部大会 ④秋田県生涯学習センター 2004.11

Mechanical Behavior of Basalt Fiber Reinforced Polymer Composites in Temperature Condition Third International Workshop on Green Composites (IWGC-3) ④Doshisha University 2005. 3

柴原哲太郎

- 【調査報告】 企業経営における知的財産活動に関するオントロジー工学の応用 井口勝 商学論集 第73巻第1号 2004. 9

高橋 隆行

- 【著書】 大学院情報理工学4 「高知能移動ロボティクス」 共著 講談社サイエンティフィク

- 【論文】 脚車輪分離型ロボットの未知不整地における基本移動制御手法 中嶋秀朗、中野栄二、高橋隆行 日本ロボット学会誌 vol.22,no.8 2004.12

脚車輪分離型ロボットの予測型イベントドリブン方式によるトロット・ペース歩容 中嶋秀朗、中野栄二、高橋隆行 日本ロボット学会誌 vol.22,no.8 2004.12

脚車輪分離型ロボットのクロール歩容における脚先コンプライアンス設定法 中嶋秀朗、中野栄二、高橋隆行 日本ロボット学会誌 vol.22,no.8 2004.12

Motion Control Technique for Practical Use of a Leg-Wheel Robot on Unknown Outdoor Rough Terrains Shuro Nakajima, Eiji Nakano, and Takayuki Takahashi Proceedings of 2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2004) TP2-K1(CDROM) 2004. 9

Safety Service Manipulator : The reduction of harmful force by a controllable torque limiter SeongHee Jeong, Takayuki Takahashi, and Eiji Nakano Proceedings of 2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2004) TA 1-F 2 (CDROM) 2004. 9

Use of Sensitivity for Optimal Self-Localization with Landmarks Yukihiro

- Ono, Takayuki Takahashi, and Eiji Nakano Proceedings of 2004 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2004) TA1-A1(CDROM) 2004. 9
- 【調査報告】** FESと電気モータパワーアシストを用いた下肢障害者のためのサイクリングチェアの開発 高橋隆行、高沢稔、西山裕己、半田康延、中野栄二、木村格 厚生労働省平成15年度「神経疾患合同研究班」班会議資料 2004. 2
- 【学会発表】** 予測型イベントドリブン方式による脚車輪分離型ロボットを用いたトロット歩容及びペース歩容の実現 第9回ロボティクスシンポジウム予稿集 関沖縄県・那覇市 2005. 3
- FES Cycling Chair for the Lower Limbs Disabled People with Electric Motor Power Assist 9th Annual Conference of the International FES Society 関Bournemouth, England 2004. 9
- マニピュレータの逆運動学問題の補完解法 第22回日本ロボット学会学術講演会 関岐阜大学 2004. 9
- ペース冗長マニピュレータの安全性と安全性一器用さの適合度 第22回日本ロボット学会学術講演会 関岐阜大学 2004. 9
- 車輪型移動体の発生可能な力と速度の解析 第22回日本ロボット学会学術講演会 関岐阜大学 2004. 9
- 脚車輪分離型ロボットの大不整地移動戦略(上り段差編) 第22回日本ロボット学会学術講演会 関岐阜大学 2004. 9
- 下肢障害者用FESサイクリングチェアの仕事量推定型FES刺激強度コントローラ 第22回日本ロボット学会学術講演会 関岐阜大学 2004. 9
- 機能的電気刺激によるサイクリング運動時の脚モデルに関する実験的検討 第11回日本FES研究会学術講演会 関秋田大学 2004. 12
- マニピュレータ逆運動学問題の補完解法に関する研究 計測自動制御学会東北支部第215回研究集会 関岩手大学 2004. 5
- 田中 明**
- 【論文】** 血管内超音波法による冠動脈2次元組織速度表示方法の開発 西條 芳文、田中 明、岩本 貴宏、吉澤 誠 超音波医学31 2004. 4
- Addition of rhythm to non-pulsatile circulation. Yambe T, Sekine K, Shiraishi Y, Watanabe M, Shibata M, Yamaguchi T, Quintian W, Duan X, Jian LH, Yoshizawa M, Tanaka A, Matsuki H, Sato F, Haga Y, Esashi M, Tabayashi K, Mitamura Y, Sasada H, Sato E, Saijo Y, Nitta S. Biomed Pharmacother. 58 Suppl 1 2004. 10
- Development of an implantable undulation type ventricular assist device for control of organ circulation. Yambe T, Abe Y, Imachi K, Shiraishi Y, Shibata M, Yamaguchi T, Wang Q, Duan X, Liu H, Yoshizawa M, Tanaka A, Matsuki H, Sato F, Haga Y, Esashi M, Tabayashi K, Mitamura Y, Sasada H, Umezu M, Matsuda T, Nitta S. Artif Organs. 28 (10) 2004. 10
- 形状記憶合金アクチュエータを応用した人工食道開発 山家 智之、堀 義生、渡辺 誠、白石 泰之、井口 篤志、田林 暁一、芳賀 洋一、江刺 正喜、吉澤 誠、田中 明、松木 英敏、佐藤 文博、川野 恭之、羅 雲、高木 敏行、早瀬 敏幸、圓山 重直、仁田 新一、佐々田 比呂志、佐藤 英明、宮田 剛、里見 進、本間 大、前田 剛 日本AEM学会誌 12(2) 2004. 11
- 新しい人工心筋システムの開発 白石 泰之、山家 智之、関根 一光、西條 芳文、渡邊 誠、柴田 宗一、山口 濟、王慶田、段 旭東、劉 紅箭、仁田 新一、岡本 英治、吉澤 誠、田中 明、小川 大祐、佐藤 文博、松木 英敏、川野 聡恭、羅 雲、堀 義生、田林 暁一、高木 敏行、早瀬 敏幸、圓山 重直、佐々田 比呂志、梅津 光生、本間 大 日本AEM学会誌 12(2) 2004. 11
- Momentary changes in the cardiovascular autonomic system during mental loading in patients with panic disorder: a new physiological index " $\rho(\max)$ ". Shioiri T, Kojima M, Hosoki T, Kitamura H, Tanaka A, Bando T, Someya T. J Affect Disord. 82(3) 2004. 11
- 映像酔いに対する自律神経系の2相性反応 杉田 典大、吉澤 誠、田中 明、阿部 健一、山家 智之、仁田 新一、千葉 滋 日本バーチャルリアリティ学会論文誌 9(4) 2004. 12
- Diagnosis and rehabilitation of hemispatial neglect patients with virtual reality technology. Baheux K, Yoshizawa M, Tanaka A, Seki K, Handa Y. Related

Articles, Links Technol Health Care
13(4) 2005

Dysfunctional baroreflex regulation of sympathetic nerve activity in remitted patients with panic disorder A new methodological approach. Shioiri T, Kojima-Maruyama M, Hosoki T, Kitamura H, Tanaka A, Yoshizawa M, Bando T, Someya T Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci. Epub 2005. 1

- 【学会発表】 定常流型両心補助人工心臓における流量推定法の長期動物実験における評価
日本人工臓器学会 図東京 2004.10

二見 亮弘

- 【論文】 Wearable Data Collection System for Online Gait Stability Analysis T. Karcnik, T.Watanabe, R.Futami and N. Hoshimiya Neuromodulation Vol.7, No.3 2004. 6

Sequential grouping of tone sequence as reflected by the mismatch negativity S.Kanoh, R.Futami and N.Hoshimiya Biological Cybernetics Vol.91, No.6 2004. 11

- 【学会発表】 FES control based treadmill rehabilitation after incomplete spinal cord injury Japanese-Korean Joint Conference on Rehabilitation Medicine 2004 図Kyoto 2004. 4

Sensory Supported FES Control in Gait Training of Incomplete SCI Persons 8th Vienna International Workshop on Functional Electrical Stimulation 図Vienna 2004. 9

Psychophysical experiments of human luminance discrimination and the model neural network Fourth International Symposium on Human and Artificial Intelligence Systems 図Fukui 2004. 12

ヒトの輝度弁別特性とその神経回路モデル 電子情報通信学会 NC 研究会 図仙台 2004. 5

筋電駆動型下肢 F E S 制御システムの開発 電子情報通信学会 MBE 研究会 図仙台 2004. 11

筋電駆動型下肢 F E S 制御システムの開発 第11回日本 F E S 研究会学術講演会 図秋田 2004. 12

山口 克彦

- 【著書】 3次元可視化とWeb配信を用いた3次元の科学教材-Vol.3 可視化物性物理学

共著 メディア教育開発センター

- 【論文】 Monte Carlo simulation of dynamic magnetic processes for spin system with local defects K.Yamaguchi, S. Tanaka, O. Nittono, T. Takagi, K. Yamada Physica B 343 2004

Monte Carlo Simulation for Barkhausen Noise Katsuhiko YAMAGUCHI, Shinya TANAKA, Hiroko WATANABE and Toshiyuki TAKAGI IEEE TRANSACTIONS ON MAGNETICS 40 2004

- 【学会発表】 Monte Carlo Simulation of Barkhausen Noise for Micro Magnetic Clusters The Eleventh Biennial IEEE Conference on Electromagnetic Field Computation (CEFC2004) 図ソウル(韓国) 2004. 5

残留応力検出のための角度分解バルクハウゼンノイズ測定 第28回日本応用磁気学会学術講演会 図沖縄 2004. 9

強磁性障壁層のためのEuO薄膜の磁気特性 第28回日本応用磁気学会学術講演会 図沖縄 2004. 9

転位を含んだスピンのモンテカルロシミュレーション 第28回日本応用磁気学会学術講演会 図沖縄 2004. 9

物質・エネルギー学系

猪俣 慎二

- 【論文】 Reaction of mixed-ligand iron-sulfur cluster $[Fe_4(Cp^*)_3(Ph_2C_2S_2)(\mu_3-S)_3(\mu_3-S_2)]$ ($Cp^* = C_5Me_5$) with methyl iodide. Synthesis, structure, and redox behavior of $[Fe_4(Cp^*)_3(Ph_2C_2S_2)(\mu_3-S)_3(\mu_3-S_2Me)]$ Shinji Inomata, Keiichi Hitomi, and Hiroshi Ogino Bull. Chem. Soc. Jpn. 77 2004

大山 大

- 【論文】 Strong Interaction between Carbonyl and Dioxolene Ligands Caused by Charge Distribution of Ruthenium - Dioxolene Frameworks of Mono- and Dicarbonylruthenium Complexes Tohru Wada, Tetsuaki Fujihara, Mizuno Tomori, Koji Tanaka Bulletin of the Chemical Society of Japan Vol. 77 2004. 4

Selective methyl group dissociation by chemical and electrochemical reactions in ruthenium (II) complexes Inorganic Chemistry Communications Vol. 7 2004. 7

A synthetic precursor for hetero-binuclear metal complexes, [Ru(bpy)(dppy)₂(CO)₂](PF₆)₂ Masahito Sato Applied Organometallic Chemistry Vol. 18 2004. 8

【学会発表】 竹炭の添加による水の成分変動：キャピラリー電気泳動を用いた陽イオンのモニタリング 第65回分析化学討論会 関琉球大学 2004. 5

Synthesis and redox behavior of ruthenium complexes with redox active azopyridyl ligands 36th International Conference on Coordination Chemistry 関Merida (Mexico) 2004. 7

自発的にCOをリリースするルテニウム錯体 第54回錯体化学討論会 関熊本大学 2004. 9

金澤 等

【学会発表】 N-カルボキシアミノ酸無水物の反応性の再考(7)：BLGNCAを主とした溶液重合と固相重合の比較 澤井彩乃、稲田文、渡邊裕子 第53回高分子学会年次大会 関神戸 2004. 5

N-カルボキシアミノ酸無水物の反応性の再考(8)：溶液反応の見直しと固相重合の可能性 澤井彩乃、稲田文、渡邊裕子 2004年繊維学会年次大会 関東京 2004. 6

N-カルボキシアミノ酸無水物の反応性の再考の反応性の再考(9) 稲田文、川奈誠和 第49回家政学会東北・北海道支部大会 関山形 2004. 9

繊維の吸着による水中の有機化合物の除去の可能性 長田那美子、川奈誠和 第49回家政学会東北・北海道支部大会 関山形 2004. 9

N-カルボキシアミノ酸無水物の反応性の再考の反応性の再考(10) 稲田文、川奈誠和 2004高分子学会東北支部大会 関米沢 2004. 11

【特 許】 Method of Modifying Polymeric Material and Use Thereof Hitoshi Kanazawa USA Patent No.6830782 備考：取得特許 2004. 12

佐藤 理夫

【論 文】 化合物半導体を用いた水素選択透過膜 佐藤理夫 NTT先端技術総合研究所 ニュースレター 174号 2004. 9

【学会発表】 多孔質基板上に成長した化合物半導体を用いた水素選択透過膜 応用物理学会 関仙台 2004. 9

【特 許】 水素化反応方法および装置 佐藤理夫 特願2004-264229

水素分離膜およびそれを用いた水素精製装置 佐藤理夫 特願2004-176847

水素精製装置 佐藤理夫 特願2004-006662

島田 邦雄

【論 文】 ER流体を用いた回転形デバイスにおける電流密度の過渡特性 西田均、島田邦雄、藤田禱典、奥井健一 日本AEM学会誌 12巻2号 2004. 11

Magnetic rubber having magnetic clusters composed of meatl particles Kunio SHIMADA, Shigemitsu SHUCHI and Hideto KANNO Journal of Intelligent Material Systems and Structures-Vol.16 2005. 1

磁気反応流体を用いた粘性ダンパの可変減衰能に関する実験研究 菅野秀人、島田邦雄、小川淳二 日本機械学会論文集 71巻703号B編 2005. 3

【学会発表】 磁性粒子を含む流体と固体の磁化特性と自己集積化 電気学会マグネティクス研究会 関北九州 2004. 10

Rheological and magnetic characteristics of amorphous compound fluid 1st International Conference on Fluid Dynamics 関仙台 2004. 11

MCFフルートポリッシングの研磨特性に及ぼす構成成分の影響 磁性流体連合講演会 関東京 2004. 12

MCFを含有するシリコンゴムの動的特性 磁性流体連合講演会 関東京 2004. 12

杉森 大助

【論 文】 Microbial hydroxylation of indole to 7-hydroxyindole by Acinetobacter calcoaceticus strain 4-1-5 Takanori Sekiguchi, Fumihiko Hasumi, Motoki Kubo, Naoki Shirasaka, and Masaya Ikunaka Biosci. Biotechnol. Biochem. 68・5 2004. 5

【学会発表】 (R)-2-フェニルプロピオン酸メチルに対して高い立体選択性を有する糸状菌由来エステル加水分解酵素の精製 石油学会 関松山(南海放送本町会館)2004. 11

【書 評】 微生物製剤 単著 ペテロテック 28・1 2005. 1

油脂分解微生物製剤の開発を目指して 単著 ペテロテック 28・1 2005. 1

- 【特 許】 新規ホスホリパーゼC 杉森大助
特願2004-151255

高貝 慶隆

- 【論 文】 Determination of Lower Sub ppt Levels of Environmental Analytes Using High-powered Concentration System and High-performance Liquid Chromatography with Fluorescence Detection 秋山亮太郎、五十嵐淑郎 *Analyst* 129巻 2004. 4

Preconcentration technique for nonylphenol using cellulose cotton with homogeneous liquid-liquid extraction for liquid chromatographic analysis 久保田俊夫、秋山亮太郎、青山英司、五十嵐淑郎 *Analytical Bioanalytical Chemistry* 380巻2号 2004. 9

Adsorption and desorption properties of trans-resveratrol on cellulose cotton 久保田俊夫、小林英俊、田代智孝、高橋敦史、五十嵐淑郎 *Analytical Science* 21巻2号 2005. 2

- 【学会発表】 レスベラトロールの脱脂綿への吸着及び脱離特性 日本分析化学会 第53年会 圏千葉工業大学 2004. 9

入戸野 修

- 【著 書】 材料科学への招待 新しい視点に立って 共著(編)第4刷発行 培風館 2004. 7

- 【論 文】 Observation of magnetic structures in Fe granular films by differential phase contrast scanning transmission electron microscopy Sannomiya, Haga, Nakamura, Nittono *J.Appl.Phys.* 95(1) 214-218 2004

Monte Carlo simulation of dynamic magnetic process for spin system with local defects Yamaguchi, Tanaka, Nittono, Takagi, Yamada *Physica B* 343 298-302 2004

Magnetoresistance of Co-Pt-ITO composites films Ekawati, Shi, Nakamura, Nittono *Trans MRS* 29(4) 1803-1806 2004

Monte Carlo simulation for Barkhausen noise Yamaguchi, Tanaka, Watanabe, Nittono, Takagi, Yamada *IEEE Trans Magnetics* 40(2) 884-887 2004

Correlation between magnetization performance and magnetic microstructure of patterned permalloy films fabricated by microcontact printing Sannomiya, Shi, Nakamura, Nittono *J.Appl.Phys.*

96(9) 5050-5055 2004

Analysis of Barkhausen noise using Monte Carlo simulation for nondestructive evaluation Yamaguchi, Tanaka, Watanabe, Nittono, Takagi, Yamada *J.Mat. Proc. Tech.* 161 338-342 2005

- 【訳書・翻訳】 材料の科学と工学(1) 材料の微細構造 監訳(共著) 培風館 初版第2刷発行 2004. 9

材料の科学と工学(4) 材料の構造・製造・設計 監訳(共著) 培風館 初版第2刷発行 2004. 9

材料の科学と工学(2) 金属材料の力学的性質 監訳(共著) 培風館 初版第2刷発行 2004. 9

材料の科学と工学(3) [材料の物理的・化学的性質] 監訳(共著) 培風館 初版第2刷発行 2004. 9

- 【学会発表】 電析ニッケル薄膜の磁気的特性Ⅱ 日本物理学会 圏東京理科大 2005. 3

The Effect of Pt Content on Magnetoresistance in Co-ITO Films 日本金属学会 圏秋田大学 2004. 9

生命・環境学系

石田 葉月

- 【論 文】 持続可能な社会に向けて確保すべき農業就業人口の推定 後藤忍 環境共生 Vol.9 2004

- 【学会発表】 Capability, Income, and Sustainable Society International Society for Ecological Economics, 8th Biennial Scientific Conference 圏Montreal, CANADA.2004

木村 吉幸

- 【著 書】 小さな哺乳類 木村吉幸 歴史春秋出版株式会社 歴春ふくしま文庫25 2004. 5

原町市史 第Ⅱ編生物 第2章動物 概説 木村吉幸(分担執筆) 北日本印刷株式会社 第8巻 特別編I自然 2005. 3

- 【論 文】 福島県伊達郡川俣町小神地域における哺乳類 木村吉幸、岩崎雄輔、佐久間美穂、神谷みづき 福島生物 No.47 2004. 8

福島県におけるイノシシ (*Sus scrofa*) について 木村吉幸、今野志麻、岩崎雄輔 *ANIMATE* No.5 2004. 12

オオカミとカワウソの剥製標本 木村
吉幸 ANIMATE No.5 2004.12
DATA でみる自然保護⑤体の長さを測っ
て区別するヤチネズミとスミスネズミ
木村吉幸 自然保護 No.483 2005. 1

黒沢 高秀

【論文】 New species in Mallotus and Croton
(Euphorbiaceae) from Nepal Edinburgh J. Bot. 61 2004

ふくしま県民の森「フォレストパークあ
だたら」の植物相 遠藤史貴 福島
生物 47 2004. 8

岩手県立博物館所蔵の笹村コレクション
に含まれるトウダイグサ属標本の特色と
ラベルに記載された独自の学名について
鈴木まほろ 岩手県立博物館研究報告
22 2005. 3

【調査報告】 福島県外の学術雑誌で発表された福島県
の維管束植物に関する新知見 (2002-2004
年, および1990-2001年追補) 黒沢祥
子 フロラ福島 21 2004. 6

福島県内の植物標本の現状と課題。
フロラ福島 21 2004. 6

【学会発表】 A new *Thismia* Griff. (Burmanniaceae)
from the Himalayas The Society of
Himalayan Botany 国Institute for Tropi-
cal Biology and Conservation Universiti
Malaysia Sabah. 2004.12

福島市笹森山におけるクマガイソウのマ
ルハナバチによる訪花頻度, 送粉頻度,
および結実率 日本生態学会東北地区
会 国弘前大学 2005. 1

後藤 秀昭

【著 書】 1: 25,000都市圏活断層図「喜多方」
共著 今泉俊文、後藤秀昭、平川一臣、
宮内崇裕 国土地理院

1: 25,000都市圏活断層図「若松」 共
著 宮内崇裕、今泉俊文、越後智雄、後
藤秀昭、澤 祥、八木浩司 国土地理
院

【論文】 黒松内低地断層帯の最新活動時期と地下
地質構造 吾妻 崇、後藤秀昭、下川
浩一、奥村晃史、寒川 旭、杉山雄一、
町田 洋、黒沢英樹、信岡 大、三輪敦
志 活断層・古地震研究報告 4
2004.11

2002年6月22日イラン西部地震の地表地
震断層 後藤秀昭、吾妻 崇、小長井
一男、Sadr Amir 活断層研究 24
2004. 6

有馬-高槻断層帯の先史・歴史地震に伴
う横ずれ地表変位 堤 浩之、後藤秀
昭、谷美由紀 活断層研究 24
2004. 6

【学会発表】 常磐海岸北部におけるラグーン堆積物中
の津波堆積物 後藤秀昭、青山繁雄
日本地理学会 国青山学院大学 2005. 3

Segmentation and spatial clustering of
active faulting along the Median Tectonic
Line in Shikoku, Japan. Hokudan Inter-
national Symposium on Active Faulting
Hideaki Goto and Nakata Takashi
Research on Active Faulting to Mitigate
Seismic Hazards: the State of the Art
国北淡町震災記念公園 2005. 1

Active faults of the Fergana Basin, cen-
tral Asia Hideaki Goto, Yunuskhod-
jiev Rafik and Tyagunov Sergey Re-
search on Active Faulting to Mitigate
Seismic Hazards: the State of the Art
国北淡町震災記念公園 2005. 1

中央構造線活断層帯 (四国) における最
近の研究成果 後藤秀昭 日本地理
学会 国広島大学 2004. 9

Paleoseismicity of the Philippine fault
zone in the Luzon Island, Philippines.
Hokudan International Symposium on
Active Faulting Hiroyuki Tsutsumi,
Goto Hideaki, Daligdig A. Jessie, Okuno
Mitsuru, Nakata Takashi, and Tungol
M. Norman Research on Active Fault-
ing to Mitigate Seismic Hazards: the
State of the Art 国北淡町震災記念公園
2005. 1

Recent paleoseismological study on the
Kuromatsunai lowland thrust system in
southwestern Hokkaido, northern Japan
Takashi Azuma., Goto H., Okumura
K. and Y. Sugiyama Research on
Active Faulting to Mitigate Seismic Haz-
ards: the State of the Art 国北淡町震
災記念公園 2005. 1

The latest event and start period of the
thrust system in the Kuromatsunai low-
land, northernmost part of the back arc
zone of Northeast Japan Azuma T.,
Goto H., Okumura K., Sugiyama Y.
AGU Fall Meeting 国SanFrancisco, US
2004.12

長万部付近にみられる段丘面の傾動と活
褶曲運動 吾妻 崇、奥村晃史、後藤
秀昭、黒澤英樹、信岡 大、三輪敦志、
下川浩一、寒川 旭、杉山雄一 日本
第四紀学会 国山形大学 2004. 8

断層の分布形態と縦ずれ変位パターンから見たルソン島のフィリピン断層系のセグメンテーション 堤浩之、中田高、後藤秀昭 地球惑星科学関連学会2004年合同大会 函幕張メッセ国際会議場 2004. 5

黒松内低地断層帯における低角逆断層による地層変形とその活動 吾妻崇、後藤秀昭、下川浩一、杉山雄一、寒川旭、奥村晃史、黒澤英樹、信岡大、三輪敦志 地球惑星科学関連学会2004年合同大会 函幕張メッセ国際会議場 2004. 5

小山 純正

【論文】 睡眠・覚醒調節における汎性投射系の役割 生体の科学・55巻・6号 55巻・6号 2004. 11

【学会発表】 ラット橋排尿中枢に対する頻尿治療薬作用の検討 山尾裕、田中善之、河内明宏、藤戸章、邵仁哲、香山雪彦、三木恒治 第92回日本泌尿器科学会総会 函大阪 2004. 4

オレキシン-中脳投射系による筋トーンスの調節について 高橋和巳、原田広文、斎藤和也、奥村利勝、高草木薫 第6回オレキシン研究会プログラム 函東京 2004. 5

オレキシンによる脚橋被蓋核でのGABAの放出 高橋和巳、児玉亨、高草木薫 第6回オレキシン研究会プログラム 函東京 2004. 5

睡眠ステージ移行期の脳波ダイナミクスと神経活動の関係 玉川雄一、辛島彰洋、片山統裕、中尾光之 電子情報通信学会技術研究会 函仙台 2004. 5

Penile erection evoked after electrical stimulation of laterodorsal tegmental nucleus. Toledo J. Carlos, IWASAKI Hiroshi, SCHMIDT H Markus, KAYAMA Yukihiro 第81回日本生理学会大会 函札幌 2004. 6

逆説睡眠時の血圧変動に相関する外側視床下部のニューロン活動 高橋和巳、香山雪彦 日本睡眠学会第29回定期学術集会 函東京 2004. 7

REM睡眠発現ニューロンの活動を調節するGABA性入力について -モノアミンニューロンとの比較- 高橋和巳、香山雪彦 第27回日本神経科学学会 函大阪 2004. 9

視床下核ニューロンは選択的な神経路を介してドーパミン依存性行動を強調

小林和人、八十島安伸、香山雪彦 第27回日本神経科学学会 函大阪 2004. 9

老齢ラット脳幹のアセチルコリン、モノアミンおよびGABA作動性ニューロンについて 二宮治重子、香山雪彦 第27回日本神経科学学会 函大阪 2004. 9

Electrical stimulation of laterodorsal tegmental nucleus evokes penile erection Toledo J. Carlos, IWASAKI Hiroshi, SCHMIDT H Markus, KAYAMA Yukihiro 第37回東北生理学談話会 函仙台 2004. 10

Regulation of muscular tonus by the orexinergic projection to the mesopontine tegmentum TAKAHASHI Kazumi, KODAMA Tohru, SAITO Kazuya, HARADA Hirofumi, TAKAKUSAKI Kaoru 17th Congress of the European Sleep Society 函Prague 2004. 10

Neuronal activity in the lateral hypothalamus precedes phasic fluctuation of blood pressure during paradoxical sleep Takahashi Kazumi, KAYAMA Yukihiro 17th Congress of the European Sleep Society 函Prague 2004. 10

Orexinergic inhibition on the Mesopontine cholinergic neurons mediated through GABAergic neurons TAKAHASHI Kazumi, KODAMA Tohru, HONDA Yoshiko, TAKAKUSAKI Kaoru, KAYAMA Yukihiro 34th Annual Meeting of Society for Neuroscience 函San Diego 2004. 11

Role of orexinergic projections to the midbrain involved in the control of locomotion and postural muscle tone TAKAKUSAKI Kaoru, TAKAHASHI Kazumi, SAITO Kazuya, HARADA Hirofumi, OKUMURA Toshiharu, KAYAMA Yukihiro 34th Annual Meeting of Society for Neuroscience 函San Diego 2004. 11

Subthalamic neurons express dopaminergic-mediated behavior through differential neural pathways YASOSHIMA Yasunobu, Kayama Yukihiro, KOBAYASHI Kazuo 34th Annual Meeting of Society for Neuroscience 函San Diego 2004. 11

睡眠と血圧調節 第81回日本生理学会大会(シンポジウム) 函札幌 2004. 6

REM睡眠中の陰茎勃起のメカニズム

第14回日本性機能学会中部総会 (シンポジウム) 関京都 2004. 7

柴崎 直明

【学会発表】 日本の地下水シミュレーション技術
中国地質環境監測院 関中国北京市
2004. 7

地下水シミュレーションの最新動向
新疆大学資源と環境科学学院 関中国ウ
ルムチ市 2004. 11

新疆トルファンにおける地下水シミュ
レーション 新疆大学資源と環境科学学
院 関中国ウルムチ市 2005. 3

鈴木 浩

【著 書】 地域からの住まいづくり 共著 ドメ
ス出版

検証 地方がヘンだ 共著 洋泉社

ホームレスと住まいの権利—住宅白書
2004—2005 共著 ドメス出版

【論 文】 住宅建設計画と住宅基本法 単著
住宅会議 63号 2005. 2

今なぜコンパクトシティなのか 単著
次世代都市きたかみ創造ワークショップ
報告書 2005. 1

高齢化社会の展開とその対応—地域計
画、住宅政策の視点から 単著 東北
開発研究 132号 2004. 4

【調査報告】 阿武隈川流域総合調査報告書2002—2004
後藤忍、後藤秀昭、塩谷弘康、初沢敏生
単独出版 2005. 3

「地域居住支援システム」を支える地域
建設産業の展望 単独出版 2004. 5

【学会発表】 これからの地域居住政策のあり方 日
本建築学会 関札幌市 2004. 8

塘 忠顕

【論 文】 Transmission Electron Microscopical Ob-
servations of the Egg Membranes of a
South African Heel-walker, *Karoophasma*
biedouwensis (Insecta: Mantophasmato-
dea) R.Machida, K.Tojo, T.Uchifune,
K.-D.Klass, M.D.Picker Proceedings
of Arthropodan Embryological Society
of Japan 39 23-29 2004. 6

Embryonic development of heel-walkers:
Reference to some prerevolutionary
stages (Insecta: Mantophasmatodea)
R.Machida, K.Tojo, T.Uchifune, K.-D.
Klass, M.D.Picker, L.Pretorius Pro-
ceedings of Arthropodan Embryological
Society of Japan 39, 31-39 2004. 6

福島県飯野町におけるメクラツチカニム
シ *Mundochthonius japonicus* Chamber-
lin (蛛形綱: カニムシ目) の生活史
加藤与志輝 Proceedings of Arthropo-
dan Embryological Society of Japan 39,
55-58 2004. 6

シロハラコカゲロウ *Baetis thermicus*
Ueno の卵巣構造の発達と卵形過程 (昆
虫綱: カゲロウ目) 影山昌幹
Proceedings of Arthropodan Embryologi-
cal Society of Japan 39, 61-64 2004. 6

Ovarian structure and oogenesis of a
South African heel-walker, *Karoophasma*
biedouwensis (Mantophasmatodea)
K.Tojo, T.Uchifune, R.Machida Zoo-
logical Science 21, 1268 2004. 12

【調査報告】 福島大学構内における蝶類の記録 (2003
年5月—2004年5月) 野沢沙樹
福島生物 (47), 29-36 2004. 8

福島大学構内及びその周辺のアザミウマ
類 Ⅲ. 大学構内のブタナの花から採集
されたアザミウマ類 単著 福島生物
(47), 37-42 2004. 8

【学会発表】 *Tenothrips frici* Uzel の腹板腺の微細構
造 (総翅目: 穿孔亜目) 下谷沙織、
塘 忠顕 日本節足動物発生学会第40
回大会 関筑波大学 2004. 6

コカゲロウ類の卵膜の微細構造とその形
成過程 (昆虫綱: カゲロウ目) 夏坂
和史、塘 忠顕 日本節足動物発生学
会第40回大会 関筑波大学 2004. 6

ビドーカトアルキ *Karoophasma bie-*
douwensis の卵形成 (昆虫綱: カトアル
キ目) 塘 忠顕、東城幸治、町田
龍一郎 日本節足動物発生学会第40回
大会 関筑波大学 2004. 6

ビドーカトアルキの卵巣構造と卵形成
(昆虫綱: カトアルキ目) 塘 忠
顕、東城幸治、内船俊樹、町田龍一郎
日本動物学会第75回大会 関甲南大学
2004. 9

アザミウマ類 (昆虫綱: 総翅目) の腹板
腺の微細構造に関する比較形態学的研究
塘 忠顕、須藤弥奈、下谷沙織 日本
昆虫学会第64回大会 関北海道大学
2004. 9

公開シンポジウム 親子で楽しむ動物学
6 「知っていますか身近な動物たち: 環
境と生物から学ぶこと」 <実習> 身近
な川にすむ動物 —自分の目で水生昆虫
を見てみよう 日本動物学会東北支部
大会 関福島県立医科大学 2004. 8

長橋 良隆

【論文】 福島県太平洋岸の鮮新統大年寺層に挟在する広域テフラ層 長橋良隆、高橋友啓、柳沢幸夫、黒川勝己、吉田武義
地球科学 58・5 2004. 9

男鹿半島北浦層の Km2 テフラ層と新潟地域の SK100 テフラ層の対比 黒川勝己、矢萩春菜、丹 真紀子、長橋良隆
地球科学 58・5 2004. 9

火山ガラスの主要成分含有量と屈折率との関係 長橋良隆、吉川周作、宮川ちひろ、内山 高、里口保文 第四紀研究 43・5 2004. 10

福島市南西部に分布する鮮新世「笹森山安山岩」の K-Ar 年代 長橋良隆、木村裕司、大竹二男、八島 隆一 地球科学 58・6 2004. 11

【学会発表】 大阪層群と上総層群における前・中期更新世テフラ層の対比 日本第四紀学会 関山形大学 2004. 8

上総層群に挟在するテフラ層の爆発的火山噴火史と伊豆-小笠原弧のテクトニクス 日本地質学会 関千葉大学 2004. 9

2004年9月1日の浅間山噴火に伴う福島県郡山市の火山灰と福島市の降雨について 日本火山学会 関静岡県 2004. 10

仙台市西方、鮮新世深野・天神カルデラの地質 日本地質学会 関千葉大学 2004. 9

Evolution of magma plumbing systems in the late Cenozoic NE Honshu arc, Japan AGU 関アメリカ 2004. 12

永幡 幸司

【著書】 現代のエスプリ「ボトムアップ人間科学の可能性」 分担執筆 至文堂

【論文】 What kinds of sounds are noisy for citizenry?: a basic study on analyzing the people's concept of "noise" 単著
Proceeding of International Congress on Acoustics 2004 2004. 4

Ineffective "Barrier-free Acoustic Design" for Visually Impaired Persons 単著
Proceeding of inter-noise 2004 2004. 8

視覚障害者には役立たない視覚障害者のための音によるバリアフリーデザイン 単著 日本騒音制御工学会研究発表会講演論文集 2004. 9

A Soundscape Study: What kinds of

Sounds can Elderly people affected by Dementia recollect? K. Nagahata, T. Fukushima, N. Ishibashi, Y. Takahashi, M. Moriyama Noise & Health 6(24) 2004. 10

街頭ビジョンはどのように視聴されているのか -福島大学中央広場におけるケーススタディー 鹿俣美穂、永幡幸司 日本サウンドスケープ協会研究発表会講演論文集 2004. 10

現代の俳句に詠み込まれたサウンドスケープの特徴 中泉直之、永幡幸司、白石浩介、岩宮眞一郎 日本サウンドスケープ協会研究発表会講演論文集 2004. 10

Why are Inappropriate Barrier-free Acoustic Designs for Visually Impaired Persons Provided? 単著 Journal of Physiological Anthropology and Applied Human Science 24(1) 2005. 1

Quality of life from the viewpoint of patients with dementia in Japan: nurturing through an acceptance of dementia by patients, their families and care professionals Tetsuhito Fukushima, Koji Nagahata, Noriko Ishibashi, Yukio Takahashi, Masaki Moriyama Health and Social Care in the Community 13(1) 2005. 1

音による案内に視覚障害者が望む音量を測定するための基礎的検討 山内勝也、永幡幸司、上田麻理、岩宮眞一郎 日本音響学会2005年春季研究発表会講演論文集 2005. 3

【調査報告】 観世音寺の鐘を聴きに来るのは誰? サウンドスケープ研究会@福岡の1996年の記録より 単著 サウンドスケープ 6 2004. 6

【学会発表】 What kinds of sounds are noisy for citizenry?: a basic study on analyzing the people's concept of "noise" International Congress on Acoustics 関京都 2004. 4

Ineffective "Barrier-free Acoustic Design" for Visually Impaired Persons inter-noise 2004 関Prague 2004. 8

視覚障害者には役立たない視覚障害者のための音によるバリアフリーデザイン 日本騒音制御工学会 関甲府 2004. 9

Why are Inappropriate Barrier-free Acoustic Designs for Visually Impaired Persons Provided? Design of Artificial Environments on the Basis of Human

- Sensibility 関福岡 2004.12
- 難波 謙二**
- 【論文】** Analysis of facultative lithotroph distribution and diversity on volcanic deposits using the large sub-unit of ribulose 1,5-bisphosphate carboxylase/oxygenase. Nanba K., King G. M. and Dunfield K. *Applied and Environmental Microbiology* 70(4) 2004. 4
- Natural groundwater of a gas field utilizable for a bioremediation of trichloroethylene-contamination. Takeuchi M., Nanba K., Furuya K., Nirei H. and Yoshida M. *Environmental Geology* 45 2004. 5
- Functional roles of the transverse and longitudinal flagella in the swimming motility of *Prorocentrum minimum* (Dinophyceae). Miyasaka I., Nanba K., Furuya K., Nimura Y. and Azuma A. *The Journal of Experimental Biology* 207(17 Aug) 2004. 8
- 【調査報告】** 自動記録水位計のデータ処理方法に関する一つの考え方(その2) 飯島、高信、石田、本田、浅野、高嶋、難波、和田 第14回環境地質学シンポジウム論文集 2004.12
- 「環境」における Placebo 反応類似現象 難波 第14回環境地質学シンポジウム論文集 2004.12
- 大地の呼吸について 楡井、金城、板津、難波、吉田、檜山、大脇、楠田、庄山、篠原、干場、田村、高橋 第14回環境地質学シンポジウム論文集 2004.12
- 微生物・地質化学相互作用モデルの構築と検証 宮坂、難波、加藤、栃木、福永、菅野 第14回環境地質学シンポジウム論文集 2004.12
- 潮来市内完新統の微生物・地質・化学の相互影響 難波、宮坂、加藤、楡井、福永、菅野 第14回環境地質学シンポジウム論文集 2004.12
- 【学会発表】** 自動記録水位計のデータ処理方法に関する一つの考え方(その2) 第14回環境地質学シンポジウム 関東京 2004.12
- 「環境」における Placebo 反応類似現象 第14回環境地質学シンポジウム 関東京 2004.12
- 大地の呼吸について 第14回環境地質学シンポジウム 関東京 2004.12
- 微生物・地質化学相互作用モデルの構築と検証 第14回環境地質学シンポジウム 関東京 2004.12
- 潮来市内完新統の微生物・地質・化学の相互影響 第14回環境地質学シンポジウム 関東京 2004.12
- 微生物・地質化学の相互作用の数値シミュレーションを用いた定量評価 日本地質学会第111会学術大会 関千葉 2004. 9
- 潮来市内完新統の微生物・地質・化学の相互影響, 日本地質学会第111会学術大会 関千葉 2004. 9
- Response of marine and terrestrial bacteria to arsenic. 9th International Symposium on Microbial Ecology 関Mexico 2004. 8
- Chloroflexus-like bacteria are abundant in anoxic shallow terrestrial subsurface Holocene sediments from the catchment of Lake Kitaura. 日本微生物生態学会 関仙台 2004.10
- 虫明 功臣**
- 【著書】** 変革と水の21世紀 共著 山海堂 2004.12
- 自然と共生した流域圏・都市の再生 共著 山海堂 2005. 2
- 分散型サンテーションと資源循環 監修 技報堂出版 2005. 3
- 流域圏プランニングの時代 共著 技報堂出版 2005. 3
- 【論文】** Analysis of water resources variability in the Yellow River of China during the last half century using historical data Dawen Yang, Katumi Musiake, *et. al* *Water Resources Research* Vol. 40 2004. 6
- Challenges to Hydrology and Water Resources in Monsoon Asia Katumi Musiake *Proceedings of International Conference on "Advances in Integrated Mekong River Management"* 2004.10
- 渡邊 明**
- 【論文】** On the formation of longitudinal cloud mode in the winter monsoon over Japan 単 14th International Conference on Clouds and Precipitation 2004. 7
- CReSSによる冬季降雪雲のSimulation 単 第6回非静力学モデルに関するワークショップ 2004.11
- 福島県におけるLongitudinal-Mode Cloudによる降雪システム 単 東北の雪と

- 生活 No.19 2004. 11
- A change of mean physical quantity in the monsoon and pre-monsoon. Mu-siake.K *et. al* The 6th International Study Conference on GEWEX in Asia and GAME 2004. 12
- 福島県北東部の強風出現について 単
東北地域災害科学研究 No.41 2005. 3
- 【学会発表】** 福島県におけるLongitudinal-Mode Cloud
による降雪システム 日本雪氷学会東
北支部 関山形 2004. 5
- 2004年1月14日の Longitudinal-mode 降雪
雲の形成について 日本気象学会
関東京 2004. 5
- On the formation of longitudinal cloud
mode in the winter monsoon over Japan
単 14th International conference on
clouds and Precipitation 関ボローニャ
(イタリア) 2004. 7
- 冬季モンスーンにおける東北地方の降雪
雲モードについて 日本気象学会
関福岡 2004. 10
- CReSS による冬季降雪雲の Simulation
第6回非静力学モデルに関するワーク
ショップ 関仙台 2004. 11
- A change of mean physical quantity in
the monsoon and pre-monsoon. The
6th International Study Conference on
GEWEX in Asia and GAME 関京都
2004. 12
- 福島県北東部の強風出現について 日
本自然災害学会東北支部 関鶴岡
2005. 3
- 渡辺 厚**
- 【論 文】** 学生相談は自殺や犯罪の予防に効果があ
るのか? CAMPUS HEALTH 41(1)
2004
- 新入生の自覚症状の変遷 —平成7年か
ら13年までのUPI集計の概要— 福島
大学保健管理センター紀要 19 2004
- 渡辺 英綱**
- 【論 文】** Elevated plasma renin activity and al-
dosterone concentration are independent
risk factors for progression of renal in-
jury in hypertension Hidetsuna Wa-
tanabe and Pedro A. Jose Circulation-
Vol110, No.17, III-199 2004. 10
- 2年間の感冒様症状にて受診時の生活状
況に関する研究 渡辺英綱、渡辺
厚、酒井コウ、川上敦子 CAMPUS
HEALTH 41(1), p150 2004. 1
- 4年間の大学生における飲酒経験変化
渡辺英綱 福島大学保健管理センター
紀要 第19号 2004. 12
- 各種生活習慣危険因子と頸動脈硬化病変
に関する検討 渡辺英綱、渡辺 厚、
酒井コウ、川上敦子 CAMPUS
HEALTH 41(1), p86 2004. 1
- 【学会発表】** 頸動脈硬化病変とインスリン抵抗性およ
び生活習慣危険因子との関連 渡辺英
綱、福島県立医科大学第三内科 橋本重
厚、渡辺毅 第101回日本内科学会総
会・講演会 関東京国際フォーラム
2004. 4
- 大学生の定期健康診断における随時尿検
査と早朝尿検査の比較 渡辺英綱、福
島県立医科大学第三内科 加藤哲夫、渡
辺毅 第47回日本腎臓学会学術総会
関栃木県総合文化センター、宇都宮市
2004. 5
- 大学生の睡眠習慣と血圧 渡辺英綱、
早稲田大学大学院人間科学研究科 浅岡
章一、福島大学教育心理学 福田一彦
第42全国保健管理研究集会 関大阪国際
交流センター 2004. 10
- 労働者の疲労蓄積度自己診断チェックリ
ストと脳心血管危険因子との関連性
渡辺英綱、渡辺厚、酒井コウ、川上敦子
第42全国保健管理研究集会 関大阪国際
交流センター 2004. 10
- Elevated plasma renin activity and al-
dosterone concentration are independent
risk factors for progression of renal in-
jury in hypertension Hidetsuna Wa-
tanabe and Pedro A. Jose Scientific
Session 2004. American Heart Associa-
tion 関New Orleans Louisiana 2004. 11
- 血中高感度CRP濃度(hs-CRP)とインスリ
ン抵抗性および生活習慣要因との関連性
渡辺英綱、双葉厚生病院内科 林晃、重
富秀一 第47回日本糖尿病学会年次集
会 関東京 2004. 5
- 喫煙者の感冒症状の特徴—非喫煙者の感
冒との比較— 渡辺英綱、渡辺厚、酒
井コウ、川上敦子 第42回全国大学保
健管理研究集会東北地方研究集会 関福
島グリーンパレス、福島市 2004. 7

学 長

臼井 嘉一

- 【論 文】** ラッグカリキュラム理論と「社会問題学
習」(上) 安藤勝夫 福島大学教
育実践研究紀要 47号 2004. 12

福島大学研究年報編集・投稿規定

I、性格規定

1. 本研究年報は、大学が重点的に配分する研究経費に基づく研究成果を公表することを目的とする。
2. 大学が重点的に配分する研究経費は、以下のとおりである。
 - (1)奨励的研究経費
 - (2)学術振興基金・学術研究支援助成
 - (3)プロジェクト研究推進経費
3. 本研究年報は、論文、研究成果報告書、及び前年度研究業績一覧をもって構成する。論文、研究成果報告書、及び前年度研究業績一覧の詳細については、以下に記載する。

II、募集・刊行

1. 本研究年報に関する原稿の募集期限は9月末日とし、同年12月31日付けで刊行する。
2. 論文については投稿締め切り日をもって受理日とし、論文末尾にこれを記載する。

III、担当委員会及び事務部

1. 本研究年報の編集及び出版にかかる作業は研究推進委員会内に設置される研究年報編集委員会が行い、投稿論文の掲載の可否、研究成果報告書、及び前年度研究成果一覧の体裁や形式にかかる調整を担当する。
2. 本研究年報の刊行にかかる事務は研究連携課が行い、発送業務は附属図書館及び関係部署において行う（送付先が大学の場合は附属図書館宛に送付）。

IV、論文

1. 論文は、前年度の重点的予算に基づく研究成果を論文形態で公表するものであり、その内容により「論文」と「調査報告」に分けられる。「論文」には査読（レフェリー）制度を適用する。
2. 「論文」「調査報告」は刷り上がり10頁（400字詰め原稿用紙換算で50枚）を上限とし、下限は定めない。
3. 「論文」「調査報告」が制限頁数を越えた場合は、当該論文の投稿者（単位）が越えた分の必要経費を負担する。負担額は別に定める。
4. 本年報に掲載された「論文」「調査報告」の著作権は福島大学に帰属する。ただし、著作者（単位）自身は、自分の論文、調査報告の全部または一部を複製、翻訳、翻案などの形で利用することができる。なお、研究年報の全容は原則として電子化するものとし、附属図書館ホームページを通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開する。
5. 「論文」「調査報告」は9月末日までに研究連携課に提出する。

V、禁止事項

1. 本研究年報に掲載される論文は、未公刊のものに限る。研究者の倫理に基づき、論文の盗用、ならびに二重投稿を禁止する。
2. 論文の盗用、二重投稿と認められる行為があった場合は、その内容に基づき一定期間本研究年報への投稿を認めない。
3. 論文の盗用、二重投稿と認められる行為があった場合は、大学の説明責任に基づき、その事実関係、大学の処置について本研究年報誌上に公表するものとする。

VI、査読

1. 本研究年報に掲載する論文に査読を義務づける。
2. 編集委員会は査読者2名を選任し、論文の査読を依頼する。査読期間はおおむね2週間以内とする。
3. 査読者は、必要があれば助言を付して、当該論文の本年報への掲載の可否について編集委員会に意見を述べる。投稿者は助言を参照のうえ、必要があれば論文の加筆、訂正等を行うものとする。

Ⅶ、研究成果報告書

1. 大学が重点的に配分した研究経費による研究成果の報告を、本研究年報に掲載する。
2. 大学から重点的研究経費の配分を受けた者（単位）は、別に定める様式により4月末日までに研究成果報告書を研究連携課に提出する。

Ⅷ、前年度研究成果一覧

1. 本研究年報に、全教員の前年度（4月1日から翌年3月31日まで）1年間の「研究業績リスト」を掲載する。新規着任教員についても、前年度の全業績を掲載する。
2. 「研究業績リスト」の掲載項目は、以下のとおりである。
 - (1)著書……書名、単著、共著、共編著等の別、出版社名
 - (2)論文……論文題目、共同執筆者がある場合はその氏名、掲載誌名、巻号、刊行年月
 - (3)調査報告（判例批評等を含む）……題目、共同執筆者がある場合はその氏名、掲載誌名、巻号、刊行年月
 - (4)訳書……単著、共著、共編著等の別、出版社名
 - (5)学会発表……発表題目、学会名、場所、発表年月日
 - (6)実技に関する業績……開催者名（競技会、展覧会、演奏会等の名称）、題目（競技名、作品名等）、成績、開催年月日
 - (7)書評……題目、掲載誌名、巻号、刊行年月
 - (8)特許……特許名、発明者名、出願番号
3. 教員は別に定める様式により、9月末日までに「研究業績リスト」を編集委員会に届ける。

Ⅸ、配 布

本研究年報の配布先は、以下のとおりとする。

- (1)国立国会図書館
- (2)本学と機関誌交換による研究交流のある全国公私立大学、短期大学、国立工業高等専門学校
- (3)海外の交流協定締結大学
- (4)福島県立図書館、ならびに県内公立図書館
- (5)本学教員
- (6)上記以外に、本年報の配布を必要とする機関

Ⅹ、編集細則、執筆要領

本研究年報の編集にかかる細則、ならびに執筆要領は別に定める。

本規定は平成17年11月2日から施行する。

之心益聞 無_レ論_レ漱_レ瓊液 還得_レ洗_レ塵_レ顔 且_レ諧_レ宿所_レ好 永願_レ辭_レ人間
 第二首「日照_レ香爐_レ生_レ紫煙 遙看_レ瀑布_レ挂_レ前川 飛流_レ直下_レ三千尺 疑是_レ銀河
 落_レ九天」(『李太白集』卷二〇、傍点は唱和詩群全体との類似語句)

(いじつ みちふみ 福島大学文学・芸術学系)

平成十七年九月三十日受理

君臣関係からの離脱ではなく君主への奉仕へと読み替えたのである。ここには、〈道〉〈俗〉の最も先鋭化した対立構造が見て取れる。また、小野岑守が空海に贈った詩では、僧侶の超越性を賛美した後で、市中に隠逸する自己こそが「大隠」であるとして僧侶を挑発する。ここには、〈道〉〈俗〉の対立構造を認めつつも、〈道〉の超越性に対するある種の疑念が提示されている。さらに、「逸人・山人」と呼ばれた惟良春道は「山林修行に励む官吏」、〈道〉〈俗〉を兼備する特異な人格として描かれる。〈道〉の境界を易々と乗り越える「逸人」の存在は、〈道〉〈俗〉の対立構造が必ずしも堅固なものではなかったことを示している。

詩的表現における〈道〉〈俗〉の対立構造は、人（僧侶）および場（寺院）の超越性を示す形式が、『文華秀麗集』『梵門』の成立とあいまって確立する。しかし、その超越性は『経国集』『梵門』においては、早くも相対化されることとなる。具体的には、人の超越性は、山林修行の穏和化などによる宮廷趣味への同化、俗人の脱俗による僧侶の超越性への接近、修行僧の非主題化として相対化される。また、場の超越性は、寺院を宮廷趣味的に脱俗化したり、神仙郷と見なすなどのかたちで相対化される。

鎮護国家の理念は、一方では仏教界の超越性を認めてそれに頼りつつ、他方では超越的な仏教界を体制内に制御しなければならぬという矛盾を本質的に抱え込んでいた。平安朝初期の宮廷社会は、鎮護国家理念への回帰とあいまって、自ら仏教界に超越性を求めていった。しかし、もともと仏教界の自立性に対する認識が薄かったのも事実である。鎮護国家の理念を媒介として生まれた〈道〉〈俗〉の対立構造は、発生当初からその解体要因を内包していたと言えよう。『文華秀麗集』『梵門』が超越的な仏教界を創出する一方で、『経国集』『梵門』が仏教の超越性を相対化するという相反する現象が生じたのは、仏教界に対する宮廷社会の認識がそのように矛盾に充ちたものだったからであろう。

注

- (1) 拙稿「鎮護国家と梵門詩—『文華秀麗集』『梵門』を中心に—」（福島大学教育学部論集（人文科学部門）七七、二〇〇四・十二）
- (2) 小島憲之も「何れにしても全体としてみれば、題材相互間には精密な統一性がない」と述べる。（『国風暗黒時代の文学中（下）』二二一〇頁、一九八五・五）

(3) 空海は、嵯峨天皇の退位直前に宮内省に東寺を給わり、以後約十年間は東寺を中心に活動する。したがって、「道俗相分ちて数年を経たり」という状況は、嵯峨退位後より本集所載範囲の下限である天長四年までの間にはありえなかった。「嵯峨上皇」という作者名に反して、本詩は嵯峨在位時の作であると推測される。なお、小島憲之『経国集詩注』（『国風暗黒時代の文学』、以下小島注と略記する）も「弘仁五年、もしくは以後のかなり接近した年時の作」であると推測している。

(4) 船ヶ崎正孝『国家仏教変容過程の研究』第三編第一、二章（初出一九六五・一、一九八二・五）

(5) 速水侑『日本仏教史古代』（一九八六・十）四一

(6) 小島注は「南山の智上人」を南岳天台山の智顛（天台宗の開祖）であるとするが、作者三船にとつてすでに歴史上の人物であった智顛を「知己」（自分のことをよく理解してくれる人）ということはあるまい。

(7) 奈良朝にあつても、釈氏の詩では僧侶と俗人との違いが主張されている。『懐風藻』所載の釈道慈及び釈道融の詩を参照のこと。

(8) 後藤昭雄『史書への配慮—『経国集（卷十）詩注』に関して—』（『日本歴史』五二六、一九九二・三）に従い、「軍曹貞忠」は中臣鹿嶋連貞忠を指すと考える。

(9) 官吏が出家するさいの個人的動機としては、「風塵上下の情を見ることを厭ひ、雲栖に去りて無生を学ばむと欲す」（経・四五、惟良春道「送伴秀才入道」）に見えるような、宮廷社会の上下関係に対する嫌悪感などが考えられる。

(10) 小島注による。

(11) 注(1)前掲論文

(12) 後藤昭雄「空海の周辺—勅撰詩集作者との交渉—」（『仏教文学とその周辺』、一九九八・五）に従い、「清大夫」は浄野朝臣夏嗣を指すと考える。

(13) これら君臣唱和詩群は、全体として李白「望廬山瀑布水二首」との語句的類似性を示している。また、詩題の共通性も考慮すれば、李白詩的世界を模倣・再現することで、土着の風土を中国仏教の聖地である「廬山」に見立てたものと推測される。李白詩は以下のとおり。第一首「西登香爐峰—南見瀑布水—挂流三百丈—噴壑数十里—欸如飛電来—隱若白虹起—初驚河漢落—半灑雲天裏—仰觀勢軋雄—壯哉造化功—海風吹不斷—江月照還空—空中乱灑射—左右洗青壁—飛珠散輕霞—流沫沸穹石—而我樂名山—對

冬日過「山門」 笠仲守

香刹青雲外 虚廓絶岸傾 水清塵躡断 風静梵音明 古石苔為席 新房菴作名
森然蘿樹下 独聽暮鐘声 (経・七三)

奥深い山寺の清浄閑寂なる冬景を描いた作品である。世俗との隔絶感を詠んだ初二句を受けて、宗教的環境を演出する梵音・梵鐘が描かれる。しかし、道場につきものの修行僧の姿はなく、梵音・梵鐘の音色も、修行の一場面というよりは、むしろ冬景の清浄閑寂さを醸し出す一要素として風景の中にとけ込んでしまっている。寺院の脱俗性ばかりが目立つこの作品に、宮廷趣味的な脱俗的情景との差異を明示することは困難であろう。

宮廷人にとっての理想の世界は神仙郷であるが、寺院を神仙郷と見まごうばかりに描く作品も登場する。

秋日登「叡山」調「澄上人」 藤原常嗣

城東一岑聳 独負「叡山名」 貝葉上方界 焚香驚嶺城 飢飢藜藿熟 白舛練
沙成 輕梵窓中曙 疎鐘枕上清 桐蕉秋露色 鷄犬冷雲声 高陽丹丘地 方
知「南嶽晴」 (経・七二)

比叡山寺を訪ねて最澄に謁見したときの詩である。それにもかかわらず、最澄への言及はなされず、超越性を体現する僧侶への関心はまったく示されない。その一方で、山寺という場所の脱俗性には大なる関心を寄せる。しかし、そこは世俗を超越した修行道場として描かれることはない。むしろ、「鷄犬」相い聞える桃源郷のような、仙人の住む「丹丘」のような、宮廷人にはなじみ深い神仙郷に見立てられるのである。そこに暮らす僧侶たちは、隠者の如く「藜藿」(粗食)を食らい「練沙」(仙薬)作りに励む。さすがに早朝の勤行に触れて「輕梵窓中に曙け、疎鐘枕上に清し」とはいうものの、あたかも寝起きの背景音楽のように、枕に横たわりながら軽く聞き流すという有様である。常嗣にとって、比叡山寺は脱俗的気分が堪能できる憧れの神仙郷以外のなにもでもなかったのである。

一般に、世俗からの隔絶という表現形式は、《俗》の世界内における脱俗・隠逸志向の表現形式と構造的に一致する。したがって、それに偏れば、必然的に仏教の超越性は相対化されてしまうであろう。そして、宗教的環境に関する表現形式も、それが僧侶の修行活動の一環であることが忘れ去られてしまい、宮廷趣味的

な自然描写に取り込まれてしまえば、それに備わる超越的意味も薄れてしまうのである。

五 まとめ

以上、勅撰三集時代の梵門詩表現の基底にある構造を《道》《俗》対立と捉え、その構造がどのように表現化され、また、どのような変容を被っているかについて、『経国集』『梵門』の作品を中心に考察してきた。その結果、以下のことが確認できたと思う。

「梵門」前史である高野天皇時代の表現は、王と仏に備わる威徳や聖性を同一のものとして捉える場合と、宮廷人の脱俗指向性と僧侶の清浄性が等価関係にあるとみる場合がある。前者は尼天皇として君臨した高野天皇という王権の特殊性が背景にあり、世俗王権を仏教の権威で装飾しようとする特殊な政治的意識が働いたものと思われる。後者は奈良朝宮廷人が一般的に抱いていた僧侶観であり、宮廷社会に対する仏教界の自立性が宮廷社会側には明確に認識されていなかったことを示している。「梵門」成立以前の詩的表現においては、《俗》は《道》の自立性を認めておらず、したがって、両者の対立構造も宮廷側には存在していなかったのである。

ところが、鎮護国家の理念に沿った仏教政策が実施されるようになった光仁・桓武朝以降は、僧侶の清浄性を高めるための山林修行が奨励され、彼らの護国能力が期待されるようになった。そのようななかで、鎮護国家を目的とする仏教の政治的側面に焦点が当てられて、「梵門」という日本独自の部門が立てられるに至った。山林修行僧は、厳しい修行によって超越的な法力を得て、それによって王権および国家の安泰を図る鎮護国家の実践者である。宮廷社会はそのような修行僧の法力に期待を寄せ、彼らの超越性を認めるようになった。《俗》の側こそが、超越的な《道》の存在を必要としたのである。こうして、《道》《俗》の対立構造が宮廷人の間に認識されるようになった。

多様な梵門詩を収める『経国集』には、さまざまな形の《道》《俗》対立が現れている。ある下士官の出家入道をめぐる交わされた君臣唱和においては、個人的動機による出家を承認することで皇恩を示す君主の作品に対して、出家者の上官は、あくまでも部下の出家は鎮護国家という公的動機によるものと唱和することで、私的な動機であることを否定する。そうすることで、官吏の出家の意味を、

しようとするこうした傾向とは逆に、自身に脱俗的性格を与えて僧侶の超越性を相対化する場合もある。

問「浄上人疾」 嵯峨上皇
 聞公憂病臥「山房」 空報「鐘声」不「上」堂 道性如思「幽客問」 須「療」身是真葉
 王（経・三八）

既出の「浄」と呼ばれる山寺住まいの僧侶が病を患ったさいに見舞った詩で、源弘と源常の奉和（経・三九、四〇）を伴う。詩題の「問」は病氣見舞いの意味で、詩中では「幽客の問」がそれに当たる。したがって「幽客」は病氣を見舞った当人、すなわち嵯峨上皇自身を指す。この点は二首の奉和詩も同様で、同じ内容がそれぞれ「野客時」に來りて幽問を通ず（経・三九）、「山客尋ね來りて若し相問はば」（経・四〇）のように変奏される（何れも嵯峨詩と同じく転句に「問」を詠み込む）。隱遁生活を送る幽客（野客・山客）が、山林修行中の高僧を見舞うというのである。嵯峨上皇が隱者に身をやつすのは、実際に退位していたためであろうが、自らを脱俗的人物と見なすことで、世俗から隔絶した場所に生きる僧侶と形式的には接近し得る。もちろん、結句の「真の葉王」は僧侶の法力を示しており、その点で僧侶の超越性を認めてはいる。しかし、生活空間の脱俗性という形式的類似性を前面に出すことで、〈道〉〈俗〉の境界を曖昧にしていることは確かであり、〈道〉〈俗〉対立の相対化傾向をここにも見ることができるといえる。

また、修行する僧侶の姿を描いても、それが主題化されない作品もある。

和「良將軍題」瀑布下蘭若「清大夫」之作 嵯峨上皇
 瀑布一辺「山寺」 高車訪「道遠」追尋 空堂望「崖銀河」 古殿看「溪白虹臨」 霧
 雨灑來露「爐氣」 雷風噴怒乱「鐘音」 澹然僧「瞻流懸水」 盪漱独行「禪定心」（経・
 五一）

良岑安世が瀑布の下にある寺院に書きつけて浄野夏嗣¹²に贈った詩に、嵯峨上皇が唱和したもので、さらに源弘・惟良春道の唱和（経・五二、五三）が続く。一首は、山寺の上方から落ちる「瀑布」の描写に大半を費やし、最後にその清らかな水に手洗い嗽いで禪定する僧侶の姿を詠じて結びとする。僧侶が山林修行する様子は確かに描かれているのである。しかし、詩題が端的に示すように、一首の眼

目が「瀑布」にあることは明白であろう。そもそもこの「瀑布」は、山寺にとって本来周縁的な存在だったはずである。ところが、唱和の応酬という実際の参詣を伴わない観念的行為のなかで、周縁の「瀑布」は想像の中心に置かれ、本来中心にあるべきはずの寺院や僧侶が周縁化されているのである。「瀑布」の水流に塵埃を洗ぐ修行僧は、あくまでも「瀑布」の神々しさを引き立てる要素の一つに過ぎない（この点は唱和詩群すべてに共通する）。仏教の超越性は「瀑布」の神々しさに取って代わられ、道場としてではなく「瀑布」の名所としての山寺が創出されたのである。これもまた、仏教の相対化傾向を示すものと考えられる。

次は、場（寺院）の超越性に関する表現形式について見ていこう。

見「老僧帰」山 嵯峨上皇
 道性本来塵事退 独将「衣鉢」向「煙霞」 定知行尽「秋山路」 白雲深処是僧家
 （経・三〇）

山寺へ帰る老僧を詠んだ詩で、藤原冬嗣の応制詩（経・三二）を伴う。「衣鉢」（修行者の所持品）を持ってとあるので、山林修行の継続のため僧侶は帰山するのである。「塵事退かなり」「煙霞に向ふ」「行き尽くす」「白雲深き処」など、全体的に世俗との断絶感が歌われている。また、冬嗣応制詩では、「自ら語る一たび還らば更には出でじ、城を乞ふは雲居に臥すことに若くは無しと」のごとく、世俗との断絶に加えて世俗に対する山寺の優位性も歌われる。二首ともに、老僧が帰って行く道場を世俗から隔絶された世界としてイメージし、その超越性に対する一定の理解を示している。しかし、世俗との隔絶という表現形式は、宮廷人が別業などの郊外を描くさいに好んで用いる宮廷趣味的な「塵外」などの脱俗的表現と、絶対的な区別をつけることは困難である。この点は、場の超越性に関する表現形式にとっては避けられないことであろう。もし、その場の描写によって超越性を強調するのであれば、「羽客講席に親しみ、山精茶杯を供ふ」（華・七一、嵯峨天皇「答澄公奉献詩」）や「猿鳥梵宇に押れ、鬼神法筵を護る」（華・七八、巨勢識人「和澄上人臥病述懷之作」）のようなある種の異界的状況の描写が不可欠である。そのような異界性を一切欠いた仏教界は、宮廷趣味的な「塵外」の延長上に位置づけられざるを得ないであろう。

次に挙げる作品も同様の相対化傾向を示している。

僧侶)の超越性を示すための表現形式で、具体的には「法宇経を伝ふること久しく、深山食を乞ふこと難し、溪流に猿と共に漱ぎ、野飯鬼と相漬ふ」(華・七二)、「嵯峨天皇「和光法師遊東山之作」」のような山林修行の描写や、「境に対しては皆幻なることを知り、空を観じては此の身を厭ふ」(華・七六)、「嵯峨天皇「和澄公臥病述懷之作」」のような法理の覚悟がそれに当たる。第二は場(寺院)の超越性を示すための表現形式で、「梵宇深峯の裡、高僧住まりて還らず」(華・八〇)、「錦部彦公「題光上人山院」」のような世俗からの隔絶感や、「梵語を経閣に翻し、鐘声を香台に聴く」(華・七一)、「嵯峨天皇「答澄公奉献詩」」のような宗教的環境の描写があげられる。本節では、仏教の超越性に関するこれら二つの表現形式が、『経国集』『梵門』でどのように継承または変形されているかについて、具体的表現に即して考察していこう。

まずは人(僧侶)の超越性に関する表現形式から見ていく。『経国集』『梵門』にも僧侶の超越的能力を称える表現は見える。嵯峨上皇「和藤是雄春日過安禪師旧院」(経・三三)がそれで、「草堂虚しく駐む松蘿の月、石室翻すことを罷む了義の経、護法の鬼神何れの日にか会はむ、随縁の猿鳥竟に誰にか聴かむ」では、禪師没後の寂れた寺院の風景を描きつつ、護法の鬼神が集い功德が鳥獸にまで及んだという禪師生前の尊い修行生活の様子を想起させて、その超越的法力を賞賛する。しかし、『文華秀麗集』によく見られるような、こうした僧侶の超越性に直接言及する表現はあまり見あたらない。むしろ、次の如く抑制の利いた表現が主流となっている。

寄浄公山房 嵯峨上皇

古寺従来絶人蹤 吾師坐夏老雲峯 幽情独臥秋山裏 覺後恭聞五夜鐘(経・四一)

山寺に住まう「浄」と呼ばれる僧侶に宛てた詩である。世俗から隔絶した山寺に籠もって修行する僧侶のひたむきな姿を詠む。結句はたんに明け方の梵鐘を聞いたというのではなく、「恭しく聞く」という。姿勢を正して起床の鐘を聞き、これから一日の修行を始めるのである。ひたすら山林修行に打ち込む老僧の真摯な姿勢を描くことで、僧侶の超越性に対する了解と敬意を読み取ることができるが、『文華秀麗集』風の派手な修行の様子は影を潜めている。その一方で、「幽情独臥」と始まる転句には僧侶の孤独感が暗示されるが、肉親の情を断ち切ったは

ずの僧侶には不適切な心情である。僧侶の心情を世俗的に解釈してその超越性を矮小化したといってもよいであろう。実は、『経国集』梵門詩の特徴の一つに、こうした僧侶の超越性に対する相対化傾向が見て取れるのである。その点について、さらに具体的に検証していこう。

春日山寺探得春字 藤原三成

法堂寂寞凡幾辰 雲樹朦朧欲暮春 遥聽風中誦經処 定知時有安禪人(経・五〇)

春日の山寺での一風景を詠んだ詩で、誦経の響きに修禪中の僧侶を思い遣る。修行の様子を詠むのは僧侶への敬意の表れであろうが、風の中の誦経というところからは極めて間接的であり、山林修行に伴うはずの超人間的要素は緩和され、穏やかなものとして日常化される。そして、「寂寞」「朦朧」たる「暮春」の風景という、いかにも宮廷人が好みそうな趣味的風景の中にとけ込んでしまっている。次ぎの作品もまた、山寺の僧侶が宮廷趣味に絡め取られてしまった例である。

和光禪師山房暁風 滋野貞主

孤峯仰与白雲同 到暁深寒滿院風 雁影吹来古塔上 泉声纔定近溪中 侵窓老樹雖鳴葉 閉戸紗燈猶護虫 百籟相和山更靜 禪心弥觀世間空(経・七四)

最澄の弟子光定の「山房暁風」に唱和した詩で、比叡山寺に明け方吹く風を詠ずる。初句から第六句までは寺院を吹き抜ける明け方の風を細かく描き、それを第七句「百籟相和す」と承けて、暁風をめぐる風景の中に「空」の法理を悟ったと結ぶ。法理を覚悟する姿を詠むところに僧侶への敬意が認められるだろう。しかし、描写された山寺の風景に、非固定性・非実体性を意味する「空」の法理を象徴するような要素はなく、また、山林修行の様子もわずかに「禪心」の二文字ですまされている。そのような状況で宗教的真理を体得したと言っても説得力はなく、法理であるはずの「空」に真実味は感じられないであろう。本詩の眼目は、暁風を通して描く山房の脱俗的雰囲気であり、「空」を観じたといっても、要するに宮廷人好みの隠逸的気分を誇張的に表現しているに過ぎないのである。

自らが慣れ親しんだ宮廷趣味に仏教界を引き込むことで、その超越性を相対化

帰休業「閑寂」 在「踈忘」「鬻滓」 披「帙遊」玄妙「彈」琴「翫」山水「寄」言「陵」藪客
大隱「朝市」 偏「將」瓊「瑀」報「投」之以「桃李」(經・五八)

ここでは、自らの帰休後の脱俗的生活を「大隠」として自賛する一方で、山林修行する空海を「陵藪の客」すなわち小隠と見なして、僧侶を挑発しているのである。ただし、空海の超越的な生き様を賞賛して自らの俗物性を恥じる第一・二節に照らしてみれば、最後にとつてつけたように歌われる自画自賛の大隠の人生はどうみても戯言としか思えない。おそらく空海との深い友情あつてこそその戯言であるが、それゆえに俗人の本音が出たとも考えられる。山林にあつて法理を悟り護国を実践する修行僧の超越性は了解するものの、その超越性と官吏の脱俗性との間に絶対的な隔たりはあるのだろうか——そのような疑念が、脱俗を志向する官吏のなかには燻っていたのであろう。出家を隠逸と同等に見なしていた奈良朝以前であれば、こうした疑念は生まれなかったと思われる。僧侶の超越性を認めた上で、それを挑発した作品である。

それでもやはり、世俗に生きる官吏は超越性を有する僧侶との差異を認識せざるを得なかった。しかし、その差異を乗り越える官吏もいたようである。「逸人・山人」と呼ばれた惟良春道がそれである。

和「惟逸人春道秋日臥」疾華「巖山寺精舍」之作「嵯峨上皇」
絶頂華「巖寺」 雲深溪路「遙」 道心登「静境」 真性隔「塵囂」 関「鵬」禅庭「栢」 観「空」
法界蕉「天花流」 邃澗「香气度」 煙「霄」 風竹時開「合」 声鐘曉動「搖」 転経山月下
羸病「転寥寥」(經・三五)

逸人、惟良春道が華巖山寺に病臥して詠んだ作に嵯峨上皇が唱和した詩で、滋野善永の奉和詩(經・三六)がある。善永詩に「病中秋暮れむと欲す、杖を策きて雲居に到る」とあるので、春道は病気を患つてその治癒祈願のために山寺を訪れたと推測される。「道心静境に登り、真性塵囂を隔つ、鵬を関す禅庭の栢、空を観ず法界の蕉」の「道心」は「悟りを求める心」、「真性」は「真実を求める本性」でいずれも仏教語。「鵬」は一夏九旬の修行(夏安居)で、「鵬を関す」はそれを重ねること。つまりここでは、「道心」「真性」をもって修行に励む春道の姿が描かれていのである。春道に関する記事は『経国集』目録の「近江少掾従八位上」が初出で、それ以前の経歴は不明であるが、下級官吏として出仕していたことは

間違いない。したがって、ここでの修行は、たんなる治癒祈願のための一時的な勤行というのが実態であつたと思われる。しかし、小島注の指摘にあるように、本句は嵯峨天皇が最澄の修行する様子を描いた「対境知皆幻、観空厭此身、栢暗禅庭寂、花明梵宇春(境に対しては皆幻なることを知り、空を観じては此の身を厭ふ、栢暗く禅庭寂しく、花明けく梵宇春なり)」(華・七六、「和」澄公臥病述「懐之作」)との類似性が極めて高く、表現的には僧侶の修行の描写と同等であるといえよう。「逸人」とは、まさに「山林修行に励む官吏」だったのである。

次に挙げる作品も、おそらく春道が華巖山寺に病臥していたときのことを詠んだと思われる。

和「惟山人春道晚聽」山磬「嵯峨上皇」
黄昏磬「発」烟「霄」中「点点」悠揚「帶」山風「林下」暗堂臥「聽」磬「禅心」觀念「法皆空」(經・五四)

山寺の磬の音を詠じた春道に唱和した嵯峨上皇の作である。山寺で病臥しながら磬の音を聴き、心を集中して禅定修行した結果、「空」なる法理を体得したと歌う。官吏の身分のまま僧侶と同様の悟りを得たというのである。こうした官吏と僧侶の両方を兼ね備えた特異な人格を指して、「逸人」「山人」と言つたのであろう。そして、「道」「俗」を兼備した「逸人」「山人」の存在は、「道」「俗」の対立構造が、必ずしも堅固なものでなかったことを示している。奈良朝廷社会にあつては、「道」「俗」の間に断絶意識はなく、「道」の超越性は必ずしも了解されていなかった。それが平安朝に入ると、鎮護国家への理念的帰帰によって、「道」の超越性が「俗」の側から要請され、「道」「俗」対立の構造が作り上げられた。しかし、その対立構造は、どうやら確固たるものではなかったようである。今度は、具体的な表現のあり方からその点を探ってみよう。

四 仏教の超越性とその相対化

鎮護国家の理念は、宮廷社会に護国能力を擁する仏教界の超越性を認めさせることとなつたが、それは詩的言語の領域においても一定の表現形式を獲得する。鎮護国家理念に基づく仏教政策を背景に新たに「梵門」という部立を設けた『文華秀麗集』所載の梵門詩には、その具体例を見ることが出来る。その第一は人(『

三 〈道〉〈俗〉対立の諸相

宮廷社会が、僧侶の超越性を認め、仏教界を自己と対立する世界として了解するようにするのは、鎮護国家の理念に基づく政策的転換を行った光仁・桓武朝以降の仏教政策が背景にあったと思われる。それ以前にあつては、〈道〉〈俗〉の対立が宮廷側で顕在化することはなかった。本節では、『経国集』「梵門」に見える〈道〉〈俗〉の対立構造の諸相について考察していく。

宮廷人が〈道〉〈俗〉の対立を意識するのは、〈俗〉に生きる官吏が〈道〉との境界を越えるときであろう。そして、その最たるものが出家入道の場面であると思われる。

聞「右軍曹貞忠入道」因簡「大將軍良公」 淳和天皇
 久厭「輪廻多」苦事 遥思「聴法」鷲峯中 昨朝剣戟陪「丹閣」 今夕僧衣向「花宮」
 苔藓密間「乏」塵垢 松杉攢処有「清風」 芭蕉疎衲新慣「著」 貝葉真経誦未「工」
 山霧始開無明氣 溪泉欲「洗」夢心聾 夜来坐念因縁理「了」得皆空空亦空（経・四二）

右は、右近衛将曹中臣貞忠の出家入道を聞いた淳和天皇が、その直属の上司である右近衛大将良岑安世に書き送った詩で、嵯峨上皇及び安世による唱和がある。「昨朝剣戟丹閣に陪り、今夕僧衣花宮に向ふ」とあるので、武官から僧侶への変身は突然のことであつたのだろう。また、「芭蕉の疎衲新しく著るに慣れ、貝葉の真経誦すること未だ工ならず」のごとく僧侶として初々しい姿が描かれているのは、出家後まだ間もないころの作であるからと思われる。ところで、淳和天皇は「久しく輪廻の苦事多きことを厭ひ、遙かに聴法を思ふ鷲峯の中」と歌い始めて、武官貞忠の出家入道（＝官からの離脱）が個人的動機によるものであることを、最初から認めている。また、嵯峨上皇も、「帰真厭俗して兵戈を罷め、仰ぎて形闡を拝し皇天を謝る」（経・四三）のように個人的動機による出家と認め、さらには「聖代の雨露多きことに逢ふと雖も、別に是れ素懐金仙に奉らむ」（同上）と述べ、皇恩を受けてもなお出家しようとする強い志を賞賛する。もちろん、皇恩を無にしての出家は官吏として許されるものではないはずである。しかし、君主の立場としては、それを許すことがまた恩情を与えることになるのであろう。個人

的動機による臣下の出家を快く了承し励ますことは、ある意味で明君にふさわしい言動であつたと思われる。しかし、部下に出家者を出した上司の立場としては、そのままではいられたらなかつたようである。

奉「和聖製聞」右軍曹貞忠入道「見」賜 良岑安世
 効「忠非」独兵欄士 護国之誠法門人 丹闕上書已罷職 緇壇落髮不「闕」塵
 九重城裡回「頭望」 一乘車前專「意臻」 服色就「真道」体改「冠」狼未「減」半額分 秋
 嵐晚偈對「黃葉」 曉月疎鐘在「白雲」 行道偏雖「深羅」処「懸」心猶是為「明君」
 （経・四四）

初二句において、貞忠の出家は「兵欄の士」と同じく「忠」の表れであり、「護国の誠」を示すためであると述べるように、上司である安世は、部下の出家の動機を私的なものではなく天皇への忠誠心によるものとする。そして、部下は「落髮」しても「九重の城裡」を「頭を回らして望」み、「明君が為」に「道を行」うと続ける。泰平の御代に皇恩を賜った臣下が私的動機で宮廷社会から離脱するのは、まさに君臣和楽の危機であり倫理的に許されないことであつた。したがって、上司としては、その危機を回避すべく、部下の出家の動機を私的なものから公的なものへと置き換えて、なんとしても鎮護国家の理念に沿ったものに回収する必要があるためである。ここには、〈道〉〈俗〉関係における最も先鋭的な対立構造が顕在化していると言えよう。そして、この先鋭的な対立を緩和し宮廷社会の倫理的危機を避けるために、天皇・上皇と上官の間で、貞忠の出家動機をめぐる絶妙な唱和が交わされたのである。

次は、超越的存在を自認する僧侶を挑発した小野岑守「帰真独臥寄」高雄寺空上人（経・五八）について見てみよう。五言四十四句からなるこの大作は、内容上大きく三つに分けられる。第一節は初句から第二十句までで、諸行無常・有為転変の俗世間を離れ、山林修行によって法理を悟り慈悲を施し、清らかな生活を営む空海の超越的な生き方を賞賛的に描く。第二節は第二十一句から第二十四句までと短く、俗物である自分が空海の寛大な精神のおかげで高僧と交流できた喜びを歌う。第三節は第二十七句から第四十四句までで、官吏として出仕しながら隠逸生活も楽しむ自身の生き方を空海のそれと対比する。ここで問題となるのは、〈道〉に生きる空海と〈俗〉に生きる自身とを対比する第三節後半である。

修道主義による僧尼の資質向上にあり、その一環として、伝統的な寺院寂居主義を改めて山林修行を解禁し奨励したのである。山林修行とは、そもそも信仰の対象であった山中に分け入り、畏怖すべき山の神性を克服することで、自ら神人的験者となるための宗教行為であった。低下した護国機能を回復するために、僧侶の仏教験力の向上をもたらし山林修行が必要とされたのである。それは同時に、山林修行者が日常世俗の世界を超えた超越的存在となることでもあった。それゆえ、〈道〉〈俗〉対立の構造は、初期平安朝の宮廷社会が、鎮護国家への理念的回帰によって僧侶の超越的能力を世俗王権の危機管理に奉仕させようとしたことと深く関わっていたのである。本稿では、この〈道〉〈俗〉の対立構造という視点を軸として、『経国集』「梵門」の表現を具体的に考察していく。

二 「梵門」前史——高野天皇時代

『経国集』「梵門」には高野天皇時代（孝謙・称徳朝）の作品が多数掲載されている。しかし、「梵門」という部立は平安朝初期の仏教政策と深く関わりながら成立したものである。よって、それらを嵯峨・淳和朝に詠まれた作品と同等に扱うわけにはいかない。高野天皇時代の作品は「梵門」前史として見ていくべきであろう。

讚_レ仏 高野天皇

慧日照_二千界_一 慈雲覆_二万生_一 億縁成_二化徳_一 感心演_二法声_一（経・二九）

『経国集』「梵門」の冒頭を飾る作品である。詩題通り仏を讃えた詩であるが、「慧日千界を照らし、慈雲万生を覆ふ」という初二句の讃え方は、皇徳を称揚するさいの類型表現——たとえば、大友皇子が天智天皇を讃えた「皇明日月と光り、帝徳天地と載す」（懐・一、「侍宴」など）の転用であり、仏徳の称揚を皇徳称揚の表現形式に当てはめたものである。本来は自分に向けられるべき称揚表現を仏に向けて発すること、自らの威徳を仏に捧げ、仏の威徳と天子の威徳との一致・融合を図っているのである。こうした〈道〉〈俗〉一致の表現構造は、宮中に設置された内道場（仏教の修行所）を「無漏界」に見立てる淡海三船「於_二内道場_一観_二虚空蔵菩薩_一」（経・六七）や、天台宗の始祖慧思の転生と伝えられていた聖徳太子と高野天皇とを同じ「聖」として称賛する同「扈_二從聖徳宮寺_一」（経・六八）

にも貫かれている。しかし、いずれの場合も、王権に関わる表現レベルでのことであり、出家した尼天皇として自らが〈道〉〈俗〉一致を体現していた高野天皇に特有の例外的な表現構造であった。そして、これは、仏教の役割を鎮護国家の実践に限定し、世俗王権に奉仕させた平安朝初期の仏教政策にあっては、絶対には得ない表現構造であったと思われる。

しかし、次の作品は、奈良朝以前の〈道〉〈俗〉関係の一般的なあり方を示しているようである。

贈_二南山智上人_一 淡海三船

独居窮巷側 知己在_二幽山_一 得意千年桂 同_二香四海蘭_一 野人披_二薜納_一 朝隱忘_二衣冠_一
副思何処所 遠在_二白雲端_一（経・七一）

平城京の南、おそらく吉野あたりの山寺で修行生活を営む智上人へ贈った詩である。「窮巷」に住む自分を「朝隱」とし、「幽山」にいる僧侶を「野人」と呼び、「桂・蘭」の如き互いの香しい友情を歌う本詩には、〈道〉〈俗〉の対立より以前に、脱俗性を共有することによる両者の一体感が前面に出ている。『懐風藻』を紐解けばわかるように、脱俗志向は奈良朝にあつてすでに一般化していた。僧侶を同じ脱俗を志向する友と見なすことは、僧侶を朝隱（≡自己）と同じ隠者の変型として認めるということである。僧侶はともに隠逸を志向する同志であり、まったく同等の存在なのである。僧侶と宮廷人の交友関係を「竹林の友」と歌う釈智藏「秋日述_二志_一」（懐・九）も同様の表現であろう。こうした〈道〉〈俗〉同一の表現構造は、淡海三船「和_二藤六郎出家之作_一」（経・七〇）にも貫かれている。この作品は宮廷人の出家を詠んだものであるが、「道を棄みて心逾逸なり、空を安んじて理転真なり」とあるように、出家は脱俗と同じような精神的安楽をもたらしてくれるものであり、「高風如し望むべくは、子に從ひて羣塵を避けむ」の如く〈俗〉から〈道〉へ転身することも望めばできるというのである。要するにここでの出家への思いは、隠逸的生活への憧れとほとんど変わりなく、出家は脱俗の変型と見られているのである。僧侶の超越性を了解し、世俗に対立する存在として接する意識は、少なくとも世俗の側にはなかったのである。

《論文》

《道》《俗》対立の構造

— 『経国集』 「梵門」 を中心に —

井実 充史

要旨

鎮護国家の理念に沿う仏教政策をとった光仁・桓武朝以降、鎮護国家の実践者である僧侶には、その清浄性を高めるための山林修行が奨励された。山林修行僧は、厳しい修行によって超越的な法力を得、それによって王権および国家の安泰を図る役割を果たした。宮廷社会はそのような山林修行僧の法力に期待を寄せ、彼らの超越性を認めるようになった。こうして《道》《俗》の対立意識が生じ、それは勅撰三集時代の梵門詩表現の基底的構造となった。本稿では、『経国集』 「梵門」 の表現に、《道》《俗》の対立構造の具体的様相を探る。

【キーワード】 勅撰三集 仏教詩 嵯峨天皇 鎮護国家 山林修行

一 《道》《俗》の対立

『経国集』は、それに先立つ『文華秀麗集』を継承して、「梵門」という部を立てている。だが、『文華秀麗集』 「梵門」¹が、鎮護国家を目的とする仏教の政治的側面に焦点を当てて編纂されたと考えられるのに対して、『経国集』 「梵門」は寄せ集めの印象が強く、統一した編纂意図というものを想定することは極めて困難である。このことは、宮廷人の仏教界への詩的な関わり方が多様であったことを示していると考えられよう。あるいは、鎮護国家の理念を強く意識した『文華秀麗集』 「梵門」の表現自体が特殊であったと言えるかもしれない。しかし、この一見異なって見える二つの「梵門」も、嵯峨天皇を中心とする宮廷詩壇が生み出したものであることからすれば、多様な表現の基底に何らかの共通項が存在するはずである。

その共通項を探るための端緒として、次の作品を見てみよう。

与「海公」飲「茶送」帰「山」 嵯峨上皇

道俗相分経「数年」 今秋晤語亦良縁 香茶酌罷日云暮 稽首傷「離望」雲烟
(経・三四)

帰山する空海を見送った詩である。修行中の山寺から宮都に下りていた空海が、帰山の挨拶に嵯峨天皇を訪ねたときの作なのである。宮廷人と僧侶との交流のひとこまを歌った小品であるが、冒頭「道俗相分ちて数年を経たり」には、当時の宮廷人と僧侶とが交流するさいの基本的な関係が示されている。すなわち、僧侶と宮廷人は《道》と《俗》という異なる世界に分かれて生きる者として対立関係にあるということである。この《道》《俗》対立の背景には、平安朝初期の仏教政策があると思われる。道鏡の登用による称徳朝の政治的混乱を收拾した光仁・桓武朝は、皇室と癒着した道鏡政権下の恣意的な仏教行政による護国機能の低下を回復すべく、鎮護国家理念にそって仏教界を規制した。そのさいの中心的課題は

wigna.34: p.10.1895.

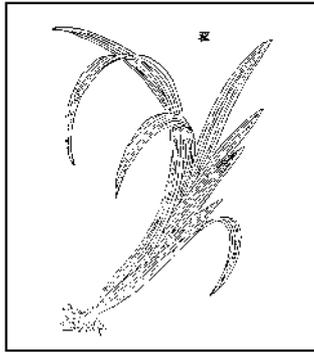
(32) 中村氏の前掲書、第三章「マコモと黒穂菌」、及び同氏論考「第3の菌食 マコモタケとマコモズミ」(『きのこ研だより』第二十二号 二〇〇三)の「栽培型マコモの特性」参照。後者論考に、「今日、日本でもマコモタケ「狐首のこと。筆者注」を採る目的で、マコモの栽培が始まりましたが、栽培に使う株は、私たちが野外で見ることが出来るマコモと性質がかなり違います。これを栽培型マコモといい、野生型にくらべてクロホ胞子ができにくく、マコモタケが大きくなります。栽培型マコモの親株は中国から直接あるいは台湾を経てわが国に入ってきたものです。栽培型マコモは、もともと中国で1200年以上も前に、野生型マコモのクロホ感染株から育成されたといわれています」[胡道静氏の前掲論考に基づく。筆者注]。しかし、その起源を探ることは資源植物学の立場から極めて興味深いのですが、それを証明することは難しいです。：おそらく、これらの形質は野生集団の中にも一度に生まれたとは考えられません。栽培型に関係した小さな変異がヒトと自然の淘汰を経て蓄積される過程があったに違いありません」とあって、左表「栽培型と野生型の比較」を附す。

項目	栽培型	野生型
葉形	立ち形	伏せ形
葉の幅	広い	狭い
葉基の色	白	紅
気孔の大きさ	大	小
分けつ期	6～8月	6～9月
分けつ数	少	多
菌えい 形成部位	地際	茎部
菌えい 節間	つまっている	伸びている
菌えい 数	少	多
菌えい 大きさ	大	小

(しづさわ ひさし 福島大学文学・芸術学系)
平成十七年九月三十日受理

二章「日本人とマコモ」中で、「この時期〔六月の秋田県。筆者注〕のマコモは背丈を越えるほどに伸びている。もとの方の、葉鞘に包まれた五〜六節の若い茎は半ば泥のなかにあって伸び始めている。葉のもとの葉鞘を剥いていくと、中心に五センチほどに伸びた薄黄色の若い葉が何層にも重なっているのがみられる。茎の先端部である。私たちはこれをマコモノメと呼んでいる。古くは、菰筍、菰菜と呼んでいた。口に入れて噛んでみると、柔らかく、ほのかな甘味と香りがあった、生でも食べられる」と記す。

- (17) 謝宗万「『本草綱目』図版的考察」(中国薬学会薬学史会編『李時珍研究論文集』所収) 湖北科学技術出版社 一九八五。なお、初版の原形を留めない味古齋本『本草綱目』の挿絵「左上図」は、その大半を清の呉其濬『植物名実図考』「左下図」に拠っており、菰草の図も「図考」をそのまま模写しているが、右下に「菰首」らしきものを描き加えている。



- (18) 篠田氏の前掲論考「忘れられた穀物」、第一章「菰」。
- (19) 明の謝肇淛『五雜俎』物部二にも、「菌草之属、多生深山窮谷中。蛇虺之氣薰蒸、易



- 中其毒。西湖志載、宋吳山寺產菰。大如盤、五色光潤」とある。岩城秀夫訳注『五雜俎』第五冊(平凡社・東洋文庫 一九九八)が「菰」を「まこも」とするのは誤解である。なお、邢昺『爾雅疏』に影響されたのか、宋本『爾雅音図』の「蘧蔬」図「上欄左上図」は、まったく地草と混同している。これでは、地草であることが明らか。「爾雅」の「中地」図「上欄左下図」と何ら変わらない。
- (20) 前掲拙論「爾雅蘧草蘧蔬考」、第六章「蘧蔬・蘧條同源」、また、拙論「列子華胥考―古漢語における異類同名について―」(『学林』第四十一号 二〇〇五) 参照。
- (21) 「春秋左氏伝」襄公二十三年の条に「狼蘧蔬」なる人名がみえる。黄侃『爾雅音訓』は、「此の草(蘧蔬)を以て名を為すなり」としており、これは、「蘧蔬」が古名であることを示している。
- (22) 胡道静氏の前掲論考。
- (23) 我が邦では、マコモズミが鎌倉彫における古色付けに用いられることが知られる。これは幕末明治の仏師、後藤斎宮考案によるものである。中村氏の前掲書、第三章「マコモと黒糖菌」参照。
- (24) 伊欽恒「略述我国古代的幾種栽培蔬菜的特殊技術」(『中国古代農業科技』所収 農業出版社 一九八〇)
- (25) この「菰筍」が必ず「菰首」を指しているとは断定することはできないが、この一文は「三月」の条に記載されているのであるから、秋の「菰首」収穫を指したものと解したい。
- (26) 顧元龍氏の前掲書、第五章「栽培技術」参照。
- (27) 袁枚「隨園食單」雑素菜単に、「茭白炒肉、炒鶏俱可。切整段、醬醋炙之、尤佳。煨肉亦佳。須切片以寸為度。初出太細者無味」とある。
- (28) 西山武一・熊代幸雄「校訂訳註齊民要術」(アジア経済出版会 一九六九)は、巻末「生産物利用例索引」の「B42追註」において菰の学名比定をおこなっている。ここでは「爾雅」の「彫蓬」「黍蓬」を挙げ、鄭樵・李時珍・小野蘭山の、菰に結実不結実の二種ありとの説に従って、「マコモ」黍蓬 *Zizania latifolia* Turz. とは別に、しばらく飯にと断りつつ、「ハナガツミ」彫蓬 *Zizania aquatica* var. ? とし、「古来の区別を強調する」としている。
- (29) 顧元龍氏の前掲書、第三章「生長發育特性」参照。
- (30) 伊欽恒氏の前掲論考に、「這種菌類対人類健康完全無害、它喜歡溫暖氣候、雨量宜多、氣温高時發展較快」とある。
- (31) Hennings, P.: Neue und interessante pilze aus dem Konigl. Botan. Museum in Berlin III, Hed-

注

- (1) 陸游詩の引用は、錢仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社 一九八五）に拠り、以下の論中で「詩稿」と略記することがある。
- (2) 胡道静『茭白園芸改革的時代和地点』（新建設 一九五四年十二月号、のち『農書農史論集』所収 農業出版社 一九八五、渡部武訳『中国古代農業博物誌考』中に邦訳あり。農山漁村文化協会 一九九〇）
- (3) 古典詩文にみえる植物を本草学的に、あるいは植物学的に考察する意義については、拙論『離騷』に詠まれる芳草香木の本草学的考察—巫医作離騷考序説—（『寛文生・松本幸男両教授退職記念中国文学論集』二〇〇〇）、及び拙論『爾雅積草蘧蔬考』（『学林』第二十七号 一九九七）参照。なお後者においては、既に菰草について簡単にまとめたのち、『爾雅』中の「蘧蔬」、すなわち当論で詳述する「菰首」の語源について検討している。
- (4) 『詩経』は五經の一つとして別格であったためか、詩中詠まれる多くの植物について、古来専著が生み出されている。一時『爾雅』も『詩経』読解の辞典と考えられていた。以後、三国の陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に始まり、清の徐雪樵『毛詩名物図説』、我が邦の江村如圭『詩経名物弁解』、岡元鳳『毛詩品物図攷』、近年では、陸文郁『詩草木今釈』（天津人民出版社 一九五七）、耿煊『詩経中の經濟植物』（台湾商務印書館 一九七四）、呉厚炎『詩経草木考』（貴州人民出版社 一九九二）などが知られ、ほぼ古漢名と学名との同定が済んでいる。
- (5) 陸游の詩集『劍南詩稿』八十五巻を閲して菰米に関する語を拾ってみると、「菰米」十三例、「菰飯」二例、「炊菰」五例、「新菰」三例、「香菰」一例、「雕胡」六例などが見出せる。これは多作で知られる陸游にあっても尋常の数ではなからう。これについては、次論「陸游と菰」において詳しく検討する予定である。
- (6) まとまて現存する最古の『爾雅』注は晋、郭璞のものである。『經典釈文』序録によれば、古くは前漢の韃為文学注三巻、劉歆注三巻、後漢の樊光注六巻、李巡注三巻、魏の孫炎注三巻があったことがわかるが、今では亡び、諸書に佚文が残るのみとなっている。
- (7) 中村重正『園食の民俗誌』（八坂書房 二〇〇〇）、第二章「日本人とマコモ」に指摘がある。なお、当書はマコモ文化を簡明にまとめた好著であり、文献検索の糸口を与えられるなど小論に裨益すること多大であった。
- (8) 神道における菰利用については、矢野憲一『伊勢神宮の衣食住』（東京書籍 一九九二）に詳しく、また中村氏の前掲書、第四章「非日常のマコモ文化」にまとまっている。
- (9) 湯浅浩史「マコモの名の由来」（『ジザニアぶみ』第五号 一九八七）、『日本植物方言集 草本類篇』（八坂書房 一九七二）参照。
- (10) 赤松宗旦『利根川図志』（巻五）の「根山神社」条に記す七言絶句は次の通り。詩として出来はよくないが、ともかく菰米を食した感動は伝わってこよう。
淡於蕎麦香於稷 蕎麦よりも淡く稷よりも香り
真味初知在水郷 真味初めて水郷に在るを知る
非向君家留竹枝 君が家に向ひて竹枝を留むるに非ざれば
一生不信有菰梁 一生菰梁有るを信ぜざるなり
- (11) 『晋書』文苑伝では「吳中菰菜・蓴羹・鱸魚膾」に作る。
- (12) 『本草綱目』巻十九草部に引く『本草図経』は「春末生白茅如笋」に作る。「春末」となれば、「菰首」の早生が当時からあった可能性も考えられ、ここである「菰菜」「茭白」が「菰首」を指すこともあり得るが、本論中にて後述する理由により、やはり否定せざるを得ない。
- (13) 顧元龍『蔬菜生産小叢書 茭白』（上海科学技術出版社 一九八七）、第四章「類型和品種」参照。
- (14) 顧元龍氏の前掲書第四章に「両熟茭」の品種として、「小蠟台」（蘇州）、「両頭台」（蘇州）、「中蠟台」（蘇州）、「稗草茭」（無錫）、「紅花壳茭」（無錫）、「中介茭」（無錫）などが紹介されている。
- (15) 「菰菜」十例中、秋以外制作の詩は、「自闕復還漢中次益昌」（乾道八年十月 『詩稿』卷三）の「吳中菰菜正堪烹」が初冬、「食酪」（嘉定二年春 『詩稿』卷八十一）が春の詩だが、後者は「未必鱸魚毛菰菜、便勝羊酪薦櫻桃」であるから秋でなくともよいことになる。「菰首」五例中、秋以外制作の詩は、「衰疾」（嘉泰四年夏 『詩稿』卷五十七）の「蓴菜菰首亦加餐」が夏である。「秋菰」六例中、秋以外制作の詩は、「新作火閣」（慶元四年冬 『詩稿』卷三十八）の「似玉秋菰殊未老」が冬、「夜聞姑惡」（慶元五年夏 『詩稿』卷三十九）が夏の詩だが、後者は「秋菰有米亦可飽」であるから、この「秋菰」は菰米を詠ったものであろう。
- (16) 菰についての専論、胡道静氏の前掲論考と篠田統氏の「忘れられた穀物」（『生活文化研究』第五号 一九五六、のち『中国食物史の研究』所収 八坂書房 一九七八）とがこの問題に一言も触れていないことは不可解である。さすがに中村氏は前掲書、第

のであろう。

美食家として鳴らした杭州人、袁枚の舌に適って、その製法集『随園食單』（一七九二年）にのぼった「菰首」の佳品には、およそ五百年の栽培史があったことになる。

結語

蝶冷停菰葉 蝶は冷やかに菰葉に停まり

鷗馴傍鱗枝 鷗は馴れて鱗枝に傍ふ

（陸游「公安」 『劍南詩稿』卷二）

いにしえより蒲葦とともに水郷の景色に翠蔭を差していたであろう菰は、ごくありふれた野草ながら大いなる価値があった。古代にあつては「滋味の麗しきもの」と讃えられる美饌「菰米」、後代にあつては「甘きこと蜜のごとし」と詠まれる美菜「菰首」、そのいずれもが身近な食材として供されてきた。

かつては王の宴席に欠かせない穀物に数えあげられ、また辞賦には南国の響きを与えるべく頻りに引かれていた菰米は、しかし唐代をさかいに価値を下げ、北宋には本草書中の救荒植物としてすっかり過去の産物になり果て、細々と食されるにとどまるようになる。

一方、秋風とともに軟白質を太らせた菰菜「菰首」は、秦漢の頃より徐々に賞味せられ、六朝以後はもっぱら川魚と羹につくられて食膳のご馳走にあがったが、その甜美さは相当なものであつたようで、長江流域の産地を中心にますますもてはやされ、宋末元初の頃には「烏鬱」になりにくい優良品種の栽培が展開し始める。

しかしながら、もともと菰米と「菰首」との収穫は両立しないのであつた。「菰首」は黒穂病菌の菌癭であるが、この菌は花穂をつくらせないから菰米は稔らな。換言すれば、菰米が稔る菰草には当然「菰首」はできないのである。菰に二種ありと誤解されるほど不結実の菰草は存在し、その多年生ゆえに、ひとたび感染すればまず出穂開花することはなくなる。菰米衰頹の背景には、よくいわれる宋元代の稲米栽培の普及確立とともに、しだいに菰米を収穫しようにもできない状況が拡がったことがあつたのかもしれない。

「芳しき菰」と呼ばれ、「肴饌の妙なるもの」にすら入れられた菰米の味そのものが飽きられたわけでは決してないだろう。おそらく古人は、穎果の散落激しく、

その収量に期待がもてない菰米の収穫と、代替の利かない馥郁たる珍珠「菰首」の獲得とを天秤に掛けた結果、菰米には見切りをつけ、黒穂病菌の蔓延をむしろ天恵とみなして、「菰首」を享受したのであろうと思う。

これを要するに、菰草は、人間という消費者の勝手な指向によって、この数千年来、黒穂病罹患種の撲滅（菰米目的）と、そのまったく反対、罹患種の保存改良（菰首目的）との狭間に翻弄され続けた植物ということになる。植物界における穀物の運命、蔬菜の運命とは往々このようなものであるのだから、その両方を味わうことを強制された菰草にあつては、まことに奇禍であつたといわねばならない。

小論をなすにあたって、歴代の本草書や農書はもとより、陸游の詩に教えられることが多かった。己が作品を本草学の考証に利用されるなど、詩人にあつては慮外のことかもしれないが、

少年読爾雅、亦喜騷人語 少年に爾雅を読み、亦た騷人の語を喜ぶ

若い時分、『爾雅』の草木、また楚辞の香草を喜んで読んだ。

〔葉圃〕 『詩稿』卷二十五

葉名尋本草、蘭族驗離騷 葉名には本草を尋ね、蘭族には離騷を騷す

葉草には本草書をあたり、香草には「離騷」を調べた。

〔初夏幽居雜賦・六〕 『詩稿』卷六十一

という彼であるから、あるいは許してくれるだろうか。

附記 この小論の半ばは、もともと南宋、陸游の詩に「菰」字が頻見される理由を明らかにしようとする拙稿中に組み込んでいたものである。しかし、煩瑣な本草学的考証を縷述した結果、別に一篇としてまとめるにいたつた。菰草の、特に菰米としての利用が極端に衰頹したなかにあつて、それを常食し、詩に詠み続け陸游の思いは那邊にあつたのか。次稿は「陸游と菰」と題し、当小論ではほとんど触れることのできなかつた唐詩（特に杜甫・王維）中にみえる菰、及び本草家としての陸游像についての考察とともに近く発表する予定である。

種、概于春季行分株繁殖。原産于我国。長江以南水沢地区及江三角洲水網地帯種植最多。

菰草は、温暖湿润を好み、粘土質の土壤でよく育つ。夏秋二期作種と秋単期作との二品種がある。だいたい春に株分けして繁殖させる。原産は我が国で、長江以南の河川、及び長江三角洲水郷地帯に多く植えられている。

とある。実際には、菰草は日本各地および台湾、中国、インドシナ、東シベリアの温帯から亜熱帯の水辺に広く分布する。しかし菰草は、萌芽期の適温が一〇から一五度、分蘖期の適温が二〇から三〇度、「菰首」肥大期の適温が一五から二五度（黒穂病菌生育の適温）であるから、比較的温暖な地域を好むことはいえ、現在の栽培地も温暖湿润で河川湖沼が多い地方と重なっている。

牧野がコモヅノの食用のこと、また伊氏もそれを収穫する品種のことをいうように、菰の栽培目的が今では副産物「菰首」のみにあること、前章にて述べたとおりである。続いて「菰首」について簡単にまとめておこう。

菰草が黒穂病菌に感染して、菌が地下茎から花茎部に侵入し活動を開始すると、その細胞を刺戟するために茎部が肥大化し畸形となる。その菌癭部分の漢名が「菰首」である。『爾雅』に「屈短の貌を表す聯縣の擬態語「蓬蔬」と古名で記されるのは、まさしくその形状に由来するものなのである。

既に『爾雅』の郭璞注から「甜滑」と示されるように、「菰首」の良品はすこぶる美味であり、『世説新語』に逸話をのこした晋の張翰ならずとも捨ておけない食材として現在にいたるまで栽培されている。伊氏によると病癭ではあるが人体にはまったく影響ないものという²⁰。

黒穂病菌について『中国真菌志』第十二卷（科学出版社 二〇〇〇）の「黒粉菌科」には次のようにある。

菰黒粉菌 *Ustilago esculenta* P. Hennings, Hedwigia 34: 10, 1895.

胞子堆引起茎部明顯腫脹、長卵円形或紡錘形、長8〜15 μ m、寬1.2〜4 μ m。胞子團形成于茎内の腔中、褐色或暗褐色、初期黏結、不久變成粉狀。黒粉胞子球形、近球形、橢円形、紡錘形或不規則形、6〜12 \times 5.5〜8 μ m、橄欖褐色、有瘤、掃描電鏡下可見瘤常集合。

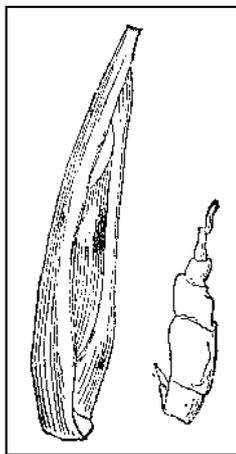
胞子堆は茎部のはっきりとした腫れを引き起こす。それは長卵形あるいは紡錘形で、長さ八〜十五センチメートル、幅一・二〜四センチメートル。胞子塊が茎部内の隙間に形成され、それは褐色あるいは暗褐色を呈し、初めは粘着しているが、やがて粉状に変化する。黒粉胞子は、球形、近球形、橢円形、紡錘形、あるいは不規則な形で、六

（十二×五・五〜八マイクロメートル、オリブ色で突起があり、走査型電子顕微鏡では突起の集合を見ることが出来る）。

その学名 *Ustilago esculenta* は一八九五年、ドイツの菌類学者 Paul Christoph Hennings (1841-1908) による命名で、「食用し得る黒穂菌」の意である²¹。

感染株の地下茎から花穂に侵入した内生菌、黒穂病菌は、その維管束内の隙間に菌糸を充満させながらインドール酢酸を分泌する。その刺戟は細胞分裂を異常に促進させ、花穂は発達させず、かわりに花茎の下部三節ほどに菌癭 (fungus gall) を形成させる。

この菌癭、すなわちコモヅノ「菰首」は、当初は真っ白く香気があって美味なるものであるが、やがて菌糸窩に黒穂胞子が充満し始め、そのメラニン色素によって鉛色から黒褐色の縞模様を呈するようになる。完全に成熟すると黒粉状の胞子が満ちた真っ黒い胞子塊ができる。これがマコモズミ（真菰墨）、漢名「烏鬱」である。漢名の由来は、もちろん烏のごとき黒きものが鬱然鬱積する意であろう。こうなると食用には適さないが、薬用や着色には利用される。



菰首の栽培種「寒頭交」

前章において、中国における「菰首」採取目的の菰草栽培の起源について検証した。すなわち、南宋末から元代にかけて一定の生産を伴う菰草栽培が開始されたのではないかと、いうものである。同時にそのことは、野生種の菰草から、より高品質の「菰首」を採取し得る栽培型 (incipient domesticate) が選抜されていったことを意味しよう。

栽培型の菰草が、野生種とその性質においてかなりの相違があることは知られる²²。特に野生種のコモヅノは胞子形成が早い。つまり、「烏鬱」になりやすいのである。これでは商品として流通させることが困難となるので、『種芸必用』にいう「不黒」の菰草を優良種として残し、「雄茭」「灰茭」の株を淘汰していったに違いない。コモヅノの大きさも、より大きな菌癭のものが選択されていたと思われる。このようにして、現在に引き継がれる「菰首」の栽培型が生まれていった

『種芸必用』に先立つこと約一世紀、陸游の詩に「園丁、菰白を売る」(春老)との一句があることは前述したとおりで、春のコモノコが売られていたことは察せられるが、この例などは「園丁」の一語からも、「菰首」を含む菰菜が計画的に量産されていた事実を示すものではないだろう。別の「秋雨初晴有感」なる詩、

菰羹菰菜珍無価、上釣魴魚健欲飛 (紹熙三年秋 『詩稿』 卷二十五)

に「菰羹菰菜は珍なれども価無し」とあるからには、菰菜は売り物でなかったわけであり、おそらく自宅の眼前に広がる鏡湖(鑑湖ともいう。紹興西郊の三山)において採集したものではなからうか。

陸詩に菰菜への言及が数多あることは再三にわたって述べた。その名も詩題「隣人に菰菜を送る」(嘉定元年秋 『詩稿』 卷七十八)まで存在する。しかし、劈頭に挙げた詩にも、街中で酒を賤い「湖上に菰を采る」とあるからには、やはり陸游はいまだ野生の菰菜の味を楽しんでいたようだ。

三 植物学上の菰

最後に、菰草および菰首を植物学的に明らかにしておきたい。

菰草は、禾本科(イネ科 Gramineae)・禾本亜科(イネ亜科 Oryzoideae)・禾本族(イネ族 Oryzaceae)・菰亜族(トコモ亜族 Zizaniinae)・菰属(トコモ属 Zizania)に分類される植物の総称である。

『中国植物志』(科学出版社 二〇〇二)第九卷第二分冊「禾本科・菰属」には、次の三種を載せる。

菰 *Zizania latifolia* (Griseb.) Stapf in Kew Bull.1909.

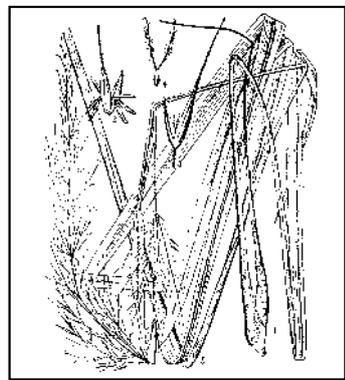
水生菰 *Zizania aquatica* L. Sp.Pl.2: 991.1953.

沼生菰 *Zizania palustris* L. Mant.295.1771.

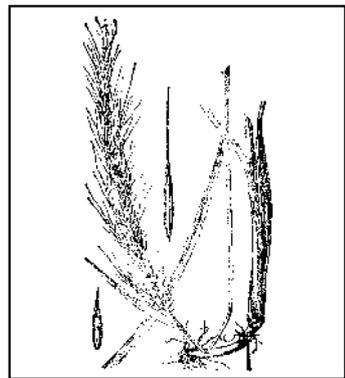
しかし、アジア分布の原産種は多年生の、和名マコモ、英名 *Manchurian wildrice*、学名 *Zizania latifolia* (Griseb.) Turcz.の一種類であるといわれている。他は、*Zizania texana* A.S.Hitchc.を含めて北米原産とされる、主に一年生のいわゆる *wild rice* である。

中国ではごく最近まで黒穂病菌が寄生して「菰首」を生み出す菰草を別種とみなし、『中国高等植物図鑑』なども学名 *Zizania caduciflora* (Turcz. ex Trin.) Hand-Mazz.を与えていたが、『中国植物志』は *Zizania latifolia* と同種として処理し、今ではこれが一般的になっている。以下、菰草は *Zizania latifolia* Turcz.を指すものと

する。



長江中下水域洲灘野生經濟植物



中国高等植物図鑑

菰草については、もちろん『中国高等植物図鑑』にも第五冊(科学出版社一九七六)に「茭笋」として載せるが、説明が簡略に過ぎているので、ここでは牧野富太郎の優れた解説から引用する。周知のように牧野の植物図鑑は生前、及び没後何度も改訂平易化を重ねて現在にいたっているが、あえて自身が詳述した文語の元版『牧野日本植物図鑑』(北隆館 一九四〇)によりたい。

まこも(菰) 一名 こも・かつみ・はながつみ

Zizania latifolia Turcz.

(=*Hydrophyrum latifolium* Griseb.; *Z. aquatica* Hack.; *Z. palustris* Sieb.)

溝瀆湖辺或ハ沼沢ニ生ズル大形ノ多年生草本。根茎ハ短ケレド太キ多肉ノ匍枝ヲ盛ニ泥中ニ横走セシメ、群落ヲ成セル葉叢ハ水中ヨリ叢生シ、稈ハ葉中ニ直立シ高サ $2\sim 3$ 内外アリ、真直粗大ニシテ円柱形ヲ成シ平滑ナリ。

葉ハ長大、綠色剛質ニシテ直立シ長サ $40\sim 100$ cmニ及ビ幅 $2\sim 3$ cmヲ算シ狭長披針形ニシテ漸尖シ辺縁ハ糙洪シ下部ハ次第二狭窄シ、葉鞘ハ円クシテ多胞質ヲ成シ厚キコトがまニ似タリ。

夏秋ノ候、稈頂ニ長サ $30\sim 50$ cm許ノ大ナル尖塔状円錐花叢ヲ直立シ多ク分枝シテ多数ノ小穂ヲ着ケ、…穎果ハ菰米ト謂ヒ狭長ニシテ熟スレバ綠色ノ稈ヲ伴フテ容易ニ散落ス。

往々菌類其嫩稈ヲ冒シ筍形ヲ呈スルヲ茭白(こもづの)ト称シ支那及ビ台湾ニテ食用ニ供シ、又其胞子熟シテ黒熟シ粉状ヲ呈スレバ之レヲまこもずみ(烏鬱)ト呼ブ。

伊欽恒『群芳譜詮釈』(農業出版社 一九八五)「菰」条の解説には、
茭草(菰草)、性喜温暖潮潤、適于粘壤土生長、有夏秋双季茭和秋産單季茭両

小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷十五草之八には、

老テ中二灰ノ如キ者ミツ。色黒シ。即烏鬱ナリ。一名芟鬱（三才図会）。コレヲ、マコモト云。一名、ハタチカツラ・コモクラ（筑後）・マコモズミ（備前）。婦人首ノ禿スルニヌリ、或ハ油蠟ニ雜ヘテ黒クス。

とあり、邦俗では着色に用いたようだ。古い和名は、『本草和名』にみえる「芟鬱和名古毛布都良（コモフツロ）」である。

さて、ここで『種芸必用』『便民図纂』『長物志』の「不黒」表現に対し甲乙丙三つの考え方が可能となるであろう。

甲 黒くならない↓当然菰首そのものができない↓菰米が収穫できる

〔菰米収穫が目的〕

乙 黒くならない↓烏鬱になりにくい↓よい菰首が採取できる

〔良質の菰首収穫が目的〕

丙 黒くならない↓菰首ができない↓芟白（春の若芽）は採取できる

〔春の若芽収穫が目的〕

甲説は、黒穂病菌に侵された菰草は結実しない（菰米が収穫できない）点を踏まえ、「不黒」とは病菌の産物「菰首」をいかに生じない株に育てるかを表現した、という解釈である。乙説は、「菰首」によつては早々に「烏鬱」が発生する点（これを「灰芟」という）を踏まえ、「不黒」とはいかに白さが持続する良質の「菰首」を作るかを表現した、という解釈である。すなわち、「灰芟」株出現の防止である。丙説は、『便民図纂』『長物志』に「芟白」とあるのを狭義にとつて、それを春の若芽（コモノコ）と解し、「菰首」ができなくとも構わないことを表現した、という解釈である。

丙説は、若芽「芟白」の採取は「菰首」のできる株か否かとは無関係であるのでとれない。また、「芟白」は既に「菰首」の意で用いられることが多くなっており、それが菰草そのものを指す名称にもなっていたことが、明、徐光啓の名著『農政全書』巻五十三「荒政」に、『救荒本草』草部に依拠して

本草有菰根、又名菰蔣草。江南人呼為芟草、俗又呼為芟白。

『本草』に菰根有り、又菰蔣草と名づく。江南の人呼びて芟草と為し、俗に又呼びて芟白と為す。

とあることから窺われる。つまり、「芟白」とあるからといって、春芽の採取を目

的とする可能性は低い。むしろ、この「芟白」は既に「菰首」の意で用いられているとみたい。

甲説は、伊欽恒氏に「可見、当時還実行逐年移植、防止芟鬱蔓延、希望継続収穫胡米、換句話説、宋元之際、還沒有大量生産芟白充作蔬菜（当時『種芸必用』が書かれた頃。筆者注）菰の逐年移植を行っていたのは、芟鬱の蔓延を防止し、継続的に菰米を収穫することを望んでいたものであり、いかえれば宋元の頃は、まだ菰首を大量生産して蔬菜利用していなかったことを意味する」との同一見解がある。これは、乙説と対蹠的な解釈となり、仮に甲説であれば、「菰首」栽培の記録は、平凡な記述ながら元の魯明善『農桑衣食撮要』三月の条に、

種芟筭不用蘆席、止於水辺深栽之。

芟筭を種うるには蘆席を用いず、止だ水辺に深く之を栽う。

とあるのが明記された早い例となるであろう。

しかし、『便民図纂』に「多く河泥を用ひて根を壅げば、則ち色白し」とあるのは、良質の「菰首」栽培の法を述べたものと解すべきであろうし、『長物志』の「池塘中にも亦た多く植うるに宜しく、以て灌園の欠く所を佐く、すなわち畑仕事で不足の分を補つてくれる、という表現も蔬菜価値の高い「菰首」を指すと推察できる。さらに、『種芸必用』は、「芟首」、すなわち「菰首」と明言しているのである。実際、「菰首」栽培における連作は品質低下をもたらすことが知られており、この「逐年移動」との一句は、まさにそのことを示しているのではないか。

生育旺盛な株は、往々「雄芟」（菰にコモツノができなくなる変異現象。放任した菰田に出現しやすいという）や「灰芟」（黒穂病菌が早々に充満し、食用に適したコモツノにならない現象）を引き起こす菰草になりやすいので、優秀な母株を選択し繁殖させるためにも逐年の移植は有効な手段なのである。よつて、『種芸必用』に代表される「不黒」表現の示すところは乙説をとるべく、それは、南宋末期に「菰首」収穫目的の栽培が始まっていたことを文献上確認できることを意味しよう。

もつとも、何の程度をもって栽培とみなすかは異論があるろう。清の程瑤田『九穀考』にいたっては、郷里歙県（安徽省）の「業芟塘者」、すなわち菰栽培業者への言及があるので、この記事は、菰米が見捨てられた時代にあつて、当然「菰首」が相応の規模をもって栽培量産されていたことをものがたっている。かの袁枚『隨園食單』雑素菜単には、菰菜と鶏肉の炒め物の料理法を載せており、この頃には確実に市場に流通するまでになっていたものと思われる。

菰菌魚羹。魚は方寸に准へ、菌は湯沙に中け、出して劈く。先に菌を煮て沸さしめて魚を下す。又云ふ、先に下して魚・菌・菜・糝・葱・豉と与へる。又云ふ、洗ふも沙せず、肥肉も亦た用ふべし。之を半奠す。

と、その調理法を詳載するが、栽培には一言も触れない。

蔬菜目的の菰草栽培記録を農書に求めるとすれば、南宋末、呉樸『種芸必用』(『永樂大典』卷一万三千百九十四引)に、

茭首、根逐年移動、生着不黒。

茭首、根、逐年移し動かせば、生着して黒からず。

とあるのが最古であろう。これに類する記事が明の鄭璠『便民図纂』(卷六)と、農書ではないが明の江南文人、文震亨の趣味書『長物志』(卷十二)とに見出せる。

《便民図纂》茭白、宜水辺深栽、逐年移動、則心不黒。多用河泥壅根、則色白。

《長物志》茭白、古称雕胡。性尤宜水。逐年移之、則心不黒。池塘中亦宜多植、以佐灌園所欠。

ここで問題となるのは、三書に共通してみえる「不黒」なる一句であろう。この解釈によって三書のもつ意味がまったく変わってくるのである。すなわち、これらの記事が「菰首」目的の菰草栽培とみなしてよいか否か、ということである。「不黒」とは何を意味する表現であろうか。

既述のごとく、「菰首」とは、菰草の花茎が菌に侵されたものであるが、その菌は黒穂病菌(次章にて詳述)と呼ばれるものであり、最終的には肥大茎の組織を墨のごとく真つ黒くさせてしまうのである。

《本草拾遺》菰首、：更有一種小者。擘肉如黒、名烏鬱、人亦食之。

《蜀本草》三年已上、心中生台如藕、白軟中有黒脈。堪啖、名菰首也。

《本草図経》菰首、：其台中有黒者、謂之交鬱。

これら本草書の「肉を撃けば黒のごとし」「白軟中に黒脈有り」「台中に黒有る者」との表現がそれぞれあり、つとにその現象は知られていた。清の程瑤田『九穀考』(『皇清経解』卷五百四十八)に、

実老、則心虚有直理。淤泥漬入、乃生黒脈。謂之烏鬱、亦曰交鬱。

実老ゆれば、則ち心虚ろにして直理有り。淤泥漬入し、乃ち黒脈を生ず。之を烏鬱と謂ひ、亦た交鬱と曰ふ。

とあるように、「菰首」の菌癭は初めは真つ白いものであるが、数日して熟すると黒い縞模様が出現し、やがて黒灰状の胞子が充満してしまう。これを「烏鬱」や

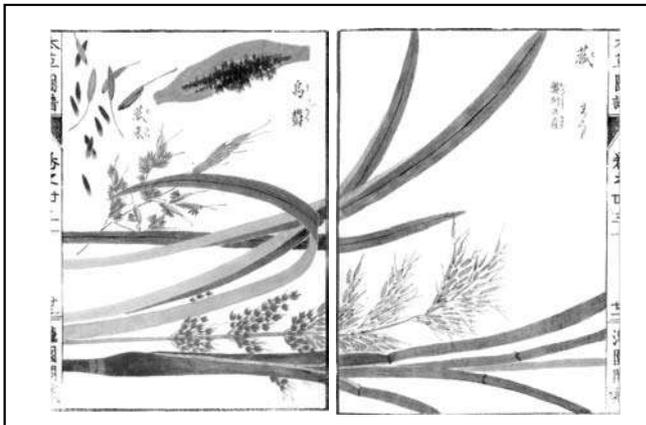
「交鬱」(和名マコモズミ)と呼び、こうなると食用にはまったく適さないのである。「左図参照」。もっとも、その原因には誤解があつて、程瑤田も「淤泥漬入」といい、「烏鬱」は菰草に汚泥が侵入したものとみなしている。

おそらくこの誤解は、羅願『爾雅翼』(卷二)の「菰」条に、

其或有黒縷如墨点者、名烏鬱。或云別種、非也。但是植之黒壤、歳久不易地、汗泥入其中耳。以潘水漚則去之。此菰首之不臧者也。

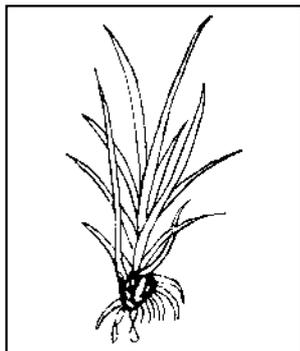
其の或いは黒縷の墨点のごとき者有るを、烏鬱と名づく。或いは別種と云ふは、非なり。但だ是れ之を黒壤に植ゑ、歳久しくするも地を易えざれば、汗泥其の中に入るのみ。潘水を以て漚せば則ち之を去る。此れ菰首の臧からざる者なり。

とあるのによるのだろう。郭璞以来、菰草に生ずる菌類と理解されていながらも、「烏鬱」がその成熟した胞子であるとは気付かなかつたのである。いずれにせよ羅願も「菰首」の不良品とみなすように、「菰首」には必ず「烏鬱」が出現し不可食となってしまうのである。前述「爾雅疏」の撰者邢昺の誤解が、もし「菰首」を実見していないことに由来するならば、それはこのような「菰首」の保存性の悪さに起因したものとさえいえる。



本草図譜 (岩崎灌園)

※図の左上が胞子のたけた烏鬱



本草蒙筌 ※はつきりしないが、根元の黒塊で烏鬱を表現か

と注し、あの傘をもつキノコと解している。ところが、前引「蘧蔬」の郭注にも「土菌のごとし」とあり、おそらく邢昺は、この郭注の二文に惑わされたのではないか。

さらに、『本草図経』菰根条には「南方の人、今に至るまで菌を謂ひて菰と為す」とあって、「菰」字に菌(キノコ)の意があったことを示唆している。『本草綱目』卷二十八菜部にも「土菌」の異称として「菰子」を挙げている。邢昺誤解の土壤は揃っていたといつてよい。

実のところ「蘧蔬」なる古名は、既に古漢語における異類同名の聯綿語を検討した拙論によって、病菌に冒された「菰首」の、ずんぐりとした特異な屈短形状から呼ばれた魚韻骨韻の擬態語であり、『詩経』邶風「新台」にみえる「蘧蔕」(粗悪なムシロ・鳩胸・蟾蜍などの多義あり)と同源、「菰首」を指すに相違ないことが明白になっているのである。

また、『西京雜記』(卷一)には、

太液池辺皆是彫胡・紫稗・緑節之類。菰之有米者、長安人謂為彫胡、葭蘆之未解葉者、謂之紫稗、菰之有首者、謂之緑節。

と為し、葭蘆の未だ葉を解かざる者、之を紫稗と謂ひ、菰の首有る者、之を緑節と謂ふ。

とあり、ここにみえる「緑節」を郝懿行『爾雅義疏』は「蘧蔬、すなわち「菰首」であると断定している。「菰之有首者」との表現から、まず間違いないであろう。

さらに、『呂氏春秋』本味篇に「菜の美き者、；越略の菌」とあり、『爾雅翼』(卷六)は「蘧蔬」条にこの一句を引いて、「則ち古より之を重んずること久し」と述べている。『西京雜記』は撰者がはつきりせず、『呂覽』の例はいまだ「菰首」と断定したいが、篠田氏のように、古代の文献に「菰首」への言及がまったくないわけではない。菰草が初見する『爾雅』が、わざわざ同じ積草篇中に穀実部分を表す「彫蓬」と菌瘦部分を表す「蘧蔬」とを別記しているという事実は、「菰首」に独自の価値を見出している何よりの証拠ともいえ、既に秦漢の頃より菰米とともに「菰首」部分をも食しつつあったことをもものがたっているのではないか。

胡道静氏は、先の張翰の逸話を引き、「当時中原地区栽植的芡草仍是为了收穫穀实、并不發展菌瘦栽培的(当時「四世紀初。筆者注」、中原地方で栽培されていた菰草は相変わず穀実を收穫するためのもので、菌瘦栽培はまったく発達してい

なかつた)、ゆえに張翰の洛陽を離れる口実となり得たのであろうという²²。確かに長江を中心にして湖沼敷が広く温暖湿润な呉越地方には、水辺に菰草が群生しており、他地域に比してその副産物である菰菜を食用とする習慣がより発達していたのは事実であろう。南朝梁の沈約にその名も「詠菰」なる詩一篇が伝わる。

結根布洲渚、垂葉滿臯沢 結根は洲渚に布く、垂葉は臯沢に満つ

匹彼露葵羹、可以留上客 彼の露葵の羹に匹ひ、以て上客を留むべし

〔芸文類聚・八十二〕

「あの露葵の汁物に匹敵し、それで賓客を留むべし」とは、「菰首」のいかに甘美なるかを讃えた表現に違いない。沈約には、別に「行園」詩があり、

寒瓜方臥壘、秋菰亦滿陂 寒瓜は方に壘に臥せ、秋菰は亦た陂に満つ

紫茄紛爛漫、緑芋鬱參差 紫茄は紛として爛漫たり、緑芋は鬱として參差たり

〔謝宣城集・四〕

と詠う。この「秋菰」も、「寒瓜」「紫茄」「緑芋」らと並挙されるからには秋の菰米ではなく、秋の「菰首」に違いない。

ただし、胡氏は前掲文に続き「別一方面、也就說明了芡草的園芸改革、是發生在江南地区的、所以那時的江東吳中就已產有了可口的芡笋(一方では、芡草の園芸的改良栽培は江南地方で發生したことをものがたっており、そのため当時の江東や吳中地方ではすでに食用の茭白筍の栽培生産が可能であった」という。秦漢より「菰首」が食されていたと既述したのは、野生の菰草より採取したとの前提であったのであって、南北朝以前に菰草が蔬菜目的に人工栽培されていたと断定することは容易にできない。

『西京雜記』(卷五)に、

會稽人顧鞠、少失父、事母至孝。母好食雕胡飯、常帥子女躬自採擷。還家、

導水鑿川、自種供養、每有贏儲。

會稽の人、顧鞠、少くして父を失ひ、母に事へて至孝なり。母好みて雕胡の飯を食ひ、常に子女を帥めて躬自ら採擷す。家に還りて、水を導き川を鑿ち、自ら種を養ひ、毎に贏儲有り。

とあり、菰草を栽培した早い記録であろうが、文中明らかなようにこれは「雕胡」、すなわち菰米採取を目的とするものである。『齊民要術』(卷八)の「羹蘆」項には、

菰菌魚羹。魚方寸准、菌湯沙中、出劈。先煮菌令沸、下魚。又云、先下、与魚菌菜糝葱豉。又云、洗不沙、肥肉亦可用。半奠之。

とある連歌は、まさしく春の「菰菜」コモノコを珍重していたことを示す例であろう。菰米とともに菰菜を詠うことの多い陸游詩にも「園丁、菰白を売る」との一句がある。

園丁売菰白、蠶妾采桑黄

〔春老〕 〔詩稿〕卷八十一

これは嘉定二年（一一〇九）春の詩であるから、この「菰白」とは菰草の軟白な若芽であるだろう。

しかし、「菰菜」「菰首」の二者が、本草学上、また植物学上別物であっても、古人にとつてはどちらも菰草から生み出される美菜として広義の菰菜であったに相違ない。「万里秋風菰菜老ゆ」と詠う陸游詩の「菰菜」はもちろん、章の冒頭に挙げた張翰の逸話中の、彼に帰郷を促した「菰菜」も、洛部に秋風が吹く頃であったのだから当然「菰首」ということになる。同様に梁の宗懐『荆楚歲時記』九月の条（『爾雅翼』卷六引）に、

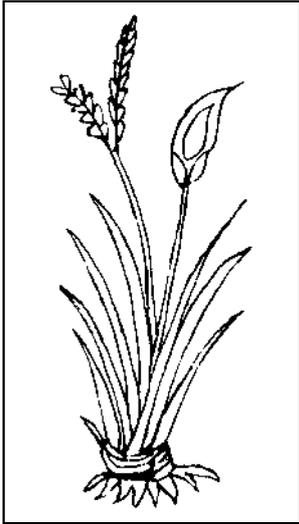
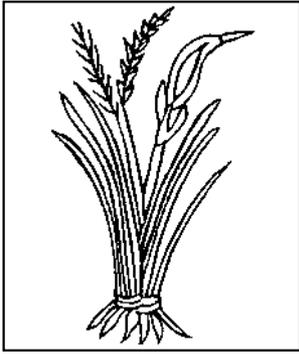
九月九日事中、称菰菜地菌之流、作羹甚美。鱸魚作膾。白如玉。一時之珍。

九月九日の事の中、菰菜の地菌の流を称え、羹を作るに甚だ美し。鱸魚にて膾を作る。白きこと玉のごとし。一時の珍なり。

とある「菰菜」も重陽に珍食した「菰首」であろう。

次章にて詳述することになるが、この春の嫩芽とは別の菰菜「菰首」とは、菰草に黒穂病菌が侵入し、夏から秋にかけて伸びる花茎部が菌瘦となり、白く太いたケノコ状を呈したもので、現在まで食される美味な蔬菜なのである。

ところで、歴代の本草書には図を伴うものが数種あり、当然菰草も描かれる。しかるに、菰の特徴ともいえるこの「菰首」まで図化したものがほとんどみられないことはまことに奇妙である。「前章所掲諸菰図参照」。そのような中であつて金陵本・江西本『本草綱目』の附図「左上図」は、菰米を稔らせた花序とともに、



はつきりと肥大化した「菰首」を描いていて出色である。

ところが、あまり知られていないようであるが、この図は『本草綱目』初版（金陵本）刊行の萬曆二十四年（一五九六）を溯ること三十年、嘉靖四十四年（一五六五）の自序を有する陳嘉謨『本草蒙筌』（卷三）の「菰根」条に附される図「上欄下図」をほぼそのまま写したものとみて間違いないだろう。謝宗万氏は『本草綱目』の挿絵について、「図形雖然比較粗放簡單、但能起到写生示意的作用（図の形は比較的粗放で簡單ではあるが、写生してその意図を示す役目をよく果たしている）」と述べ、李時珍監修のもと長子建中と次子建元が原図を描いたとされる附図を高く評価しているが、このように『本草綱目』の原作でないことが往々あることに注意せねばならない。贅言すれば、本来菰米と「菰首」とが同一株中に両立することはあり得ないので、その意味でも写実とはいえないのである。

さて、篠田統氏は、「古代『漢代以前。筆者注』の文献において、あれだけ菰米をうたつておきながら、ひとつことも茭白「菰首のこと。筆者注」におよんだものがないことは、注目してよろしい」と述べ、産地たる南方楚國の屈原らが「菰首」に触れないことを不審とし、菰米と違って「菰首」の保存が利かないことを理由に、「ともあれ茭白がごちそうとしてあげられるのはだいたいの南北朝のころからとおもわれる」と結論する。しかし、それは少々早計ではなからうか。

実は、既に「爾雅」釈草は「菰首」を載せる。ただし、「菰首」なる名ではなく「蘧蔬」としてである。

出隧、蘧蔬。（郭璞注）蘧蔬、似土菌、生菰草中。今、江東啖之。甜滑。

出隧は蘧蔬なり。（郭璞注）蘧蔬は土菌のごとく、菰草中に生ず。今、江東にて之を啖ふ。甜滑なり。

この「蘧蔬」という珍妙なる名称は古来不可解とされ、郭璞が「菰草に生ず」とはつきり注しているにもかかわらず、宋の邢昺『爾雅疏』のように『広雅』の「朝生は、形、鬼蓋のごとし」を引いて、「朝生」「鬼蓋」、すなわちあの傘を有するキノコであるとすつかり誤解してしまつた例もあるほどである。江南東晋の元帝に遇されていた博学の郭璞は、さすがに「菰首」を実見かつ食用していたのであるう、「甜滑」であるとその美味さを褒めている。しかし、済陰（山東省）の人邢昺にとって「菰首」は縁遠いものであつたのだろうか。

『爾雅』釈草に、

中廋、菌。小者菌。中廋は菌なり。小なる者は菌なり。

とあり、これに郭璞は「地覃なり。蓋のごとし。今、江東名づけて土菌と為す」

春秋兩季、中心生白臺。状如藕而軟、曰菰菜、俗謂之茭白。

春秋兩季、中心に白臺を生ず。状藕のごとくして軟らか、菰菜と曰ひ、俗に之を茭白と謂ふ。

とあることなどから知られるが、北宋当時、春の嫩芽といえ、若芽のことであろう。

顧元龍氏によると、現在各地で優良株を選抜していった品種が栽培されているといひ、それは「一熟茭」と「兩熟茭」とに大別できるといふ。前者は、秋季九月から十月にかけて年一回収穫する品種であり、後者は、春季五月から夏季六月と秋季九月から十月とに収穫する品種である。『清稗類鈔』に春とあるのは、ほぼ晩春初夏の意なのであろう。「兩熟茭」種の菰は、いずれも江蘇・浙江兩省一帶の栽培種である。

このような栽培種が、いつごろ生み出されたかによって、『本草図経』にいう「菰菜」（狭義）と「茭白」とがもつ意味に違いができることになる。すなわち、『本草図経』が春の甜美な若芽と称した「菰菜」「茭白」は、本来「菰首」とは別物であるとの卑見は前述したが、仮に当時（北宋代）から「兩熟茭」の菰草が栽培されていたとするならば、この「菰菜」「茭白」も早生の「菰首」を指す可能性がでてくるからである。

当時の本草書や農書が何も教えてくれない中、ここで南宋陸游の詩に着目したい。彼の詩集『劍南詩稿』全八十五巻から、たとえば菰菜に関する「菰菜」「菰首」「秋菰」の三語を拾ってみると、何と二十一例も見出せる（うち一例は詩題）。それは次のような詩である。

万里秋風菰菜老、一川明月稻花香

〔秋日郊居・二〕（紹熙三年秋）『詩稿』卷二十五

芋魁加糝香出屋、菰首芼羹甘若飴

〔幽居〕（淳熙八年九月）『詩稿』卷十三

秋菰出水白於玉、寒齋繞牆甘若飴

〔秋晚・三〕（紹熙五年秋）『詩稿』卷三十

そのほとんどすべてが秋制作の詩である。故に、陸游が好んで食し、かつ詠じていたのは、「菰菜」とあっても春の嫩芽、コモノコの「菰菜」ではなく、秋のコモツノ「菰首」ということになるだろう。陸游は山陰（浙江省紹興）の人であるから、既述の「兩熟茭」が仮に当時から栽培されていたならば、菰を常食し、その事実をかなり具体的に詠み込む陸游の詩にあって、春の「菰首」が当然詠まれて

いてしかるべきであろう。

後述するように、南宋の末期から元代には「菰首」採集目的の菰草栽培が始まっていたものと推察できるが、半世紀以上先立つ陸游活躍の頃は、いまだ発達していなかったか、あるいは開始されていたとしても「兩熟茭」といった二期作品種は普及していなかったとみるべきであろう。よって、さらに溯る北宋の嘉祐六年（一〇六一）に完成した『本草図経』中の「菰菜」「茭白」が、「春亦生笋甜美」と記される限り、それは「菰首」ではなく春の若芽を指すと判断されることになるのである。

『蜀本草』の記述をほぼ踏襲した羅願『爾雅翼』の、夏季に菌が寄生してできる「菰菜」というのは、正確には「菰首」であつたのだ。あるいは『蜀本草』は、「夏月生菌細」の「菰菜」とともに、「菰首」をも同文中に明記しているのであるから、できた「菰首」の大小を「菰菜」「菰首」の名称で区別している可能性はある。いずれにせよ、用語に混乱が起こり始めていることはいえ、博雅羅願の一言が欲しかったところだ。

後世、「菰菜」「茭白」「菰首」は往々混同されてゆき、それは現代の詩文の注釈書にまで及んでしまっているのである。かの李時珍でさえその『本草綱目』にて明言しなかった、あるいは気付かなかつたのだから無理もないであろう。かえって我が邦本草書の濫觴、大医博士深根輔仁『本草和名』（九一八年）に「茭弱 和名古毛乃古」（下巻二十）、「菰首 和名古毛都乃」（下巻十七）とあつて、「菰菜」を指す「茭弱」に「コモノコ」（菰の子）の意、「菰首」に「コモツノ」（菰角）の意の和名を与えて正確に区別している。小野蘭山『本草綱目啓蒙』も、「菰菜」を「菰筍」として、

春宿根ヨリ苗ヲ生ズ。初メ出ルトキ筍ノ形ヲナス。コレヲ菰筍ト云。マコモノ芽ナリ。：秋中根上ニ筍ノ如キ者ヲ生ズ。即菰首ナリ。コレヲ、コモツノ（和名鈔）・コモフツロ（同上）ト云。今ガンヅルト呼。

と峻別して述べている。

『古今著聞集』卷十八「飲食」の「左京大夫頭輔青侍と連歌の事」に、同卿のもとに盃酌ありけるに、たゝみめ「畳和布。干海苔の類。筆者注」にこのことをさかになしたりけるをみて、あるじ、
たゝみめにしくさかなこそなかりけれ
前にありける青侍のつけ侍ける、
こものこのみやさしまさるらむ

里に羈宦して以て名爵を要めんやと。遂に駕を命じて使ち帰る。俄にして齊王敗る。時人皆謂ひて機を見ると為せり。

これは晋の齊王司馬瓘に召されていた張翰が、都洛陽に秋風のたよりが届くや呉中（蘇州）の「菰菜羹、鱸魚膾」を思い出し、いてもたってもおれず官を辞して帰郷したという話である。もちろん辞官帰郷の真意は政治情勢への深謀であろうこと、この逸話が識鑒篇に収められているとおりであろうが、機を見るきっかけとなった「菰菜」が張翰の好物であり、その羹（吸物）が鱸の膾（刺身）と並拳される南方呉の名物であったことは察せられる。司馬瓘は太安元年（三〇三）に長沙王司馬乂に殺されているので、張翰の南渡はその直前のことであろう。

さて、ここに見える菰菜は、菰米ではない。菰は、前章に列挙したごとく、枚乗「七発」を嚆矢に「七」賦に詠み込まれる南方物産の常連であった。南朝梁の簡文帝にも「七劬」なる作が伝わる。

芳菰之菜、白霜之茄、…此亦天下之美。

〔文苑英華・三百五十一〕

この「芳菰之菜」も菰米ではない。

南宋の羅願『爾雅翼』（卷六）に次のようにある。

菰、蔣草也。江南呼為茭草。根久盤厚、則夏月生菌。菌即謂之菰菜、利五臟、雜鯉為羹。

菰は蔣草なり。江南呼びて茭草と為す。根久しくして盤厚すれば、則ち夏月に菌を生ず。菌は即ち之を菰菜と謂ひ、五臟を利し、鯉に雜へて羹と為す。

夏、歳を経た菰草に菌が寄生したものを菰菜といい、鯉と一緒に羹にするとある。さすがに羅願は安徽歙県の人だから、南方に多生する菰に関する記述は正確なはずである。ここで、より菰菜の実態を明らかにするために、羅願も参照したことがその表現から窺われる宋以前の本草書に目を通してみよう。

濫觴『神農本草經』に菰はみえず、初見は陶弘景『名醫別録』下品の「菰根」であるが、薬効を記すのみである。唐『新修本草』卷十一草部下品之下「菰根」の条も『名醫別録』の薬効を引いて、「菰根亦如蘆根、冷利復甚也」と附すくらいである。菰草については次掲の本草書にみえる。

〔唐〕孟詵・食療本草〕菰菜、利五臟、邪氣、酒麩、面赤、白癩、癩瘍、目赤等、効。然滑中、不可多食。

茭首、寒。主心胸中浮熱風。食之発冷氣、滋人飢、傷陽道、令下焦冷滑、不食甚好。

〔唐〕陳藏器・本草拾遺〕菰首、生菰蔣草心。至秋、如小兒臂、故云菰首、一

名茭首。主心胸中浮熱、動氣、不中食、食之発冷、滋牙飢、傷陽道、令下焦冷、不食為妙。煮食之、止渴、甘冷、雜蜜食之発痲疾、無別功。

菰菜、味甘、無毒、去煩熱、止渴、徐目黃、利大小便、止熱痢。雜鯉魚為羹。開胃口、解酒毒。生江東池沢。

〔後蜀〕韓保昇・蜀本草〕菰根生水中。葉似蔗荻。久根盤厚。夏月生菌細、堪啖。名菰菜。三年已上、心中生台如藕、白軟中有黑脈。堪啖、名菰首也。

〔北宋〕蘇頌・本草図経〕菰根、旧不著所出州土、今江湖陂沢中皆有之。即江南人呼為茭草者。生水中、葉如蒲葦輩、刈以秣馬甚肥。春亦生笋甜美、堪啖、即菰菜也。又謂之茭白。其歳久者、中心生白台如小兒臂、謂之菰手。

今人作菰首、非也。

これら諸書に入り紊れる菰菜の異称、すなわち「菰首」「茭首」「菰菜」「茭白」「菰手」と、季節を明示しないこともある曖昧な表現とが後世に混乱をもたらしているのである。それは博学の士、羅願にあつても例外ではなかった。

歴代本草書の簡潔な記述を丹念に読み解くと、実は菰菜に二種あつたことが浮かび上がってくる。当然羅願は一言すべきところであつたろう。

それは、まず「食療本草」が「菰菜」と「茭首」とに分けて、食用における注意と薬効とを各々記していることから窺われる。さらに、記述にやや混乱がみられるものの『本草拾遺』も「菰首」とは別に「菰菜」の特色を記している。太常博士の蘇頌が蘊蓄を傾けたといわれる『本草図経』はかなり要を得ており、春季に採れるタケノコ状の美菜を「菰菜」「茭白」、歳を経た株に生ずる菜（『拾遺』の記述で補えば、秋季にできる菜）を、その形状から「菰手」「菰首」というとある（以降、小論では後世まで呼ばれる「菰首」を用いる。首は「くび」ではなく「あたま」の意）。この「菰首」こそが若芽とは別の、我が邦でコモヅノと呼ばれる黒穂病菌寄生の美味なる肥大茎を指すことは、「白軟中に黒脈有り」（『蜀本草』）の表現（後述）からも確実である。

すなわち菰菜（広義）には、春の若芽を示す「菰菜」（狭義。我が邦ではコモノコと呼ばれる）と、秋以降の「菰首」（コモヅノ）とがあるようだ。もつとも、『本草図経』が春の芽を指すとした「菰菜」の別名「茭白」は、後世にわたり「菰首」の同義語として定着してしまうのである。それは、「菰首」も真っ白い肉質を有しており、まさに相応しい名であることによるのだろう。

後代、菰の栽培種が発達するにつれ、秋季以前にも「菰首」を採取し得る品種が生まれたことが、清の徐珂『清稗類鈔』植物類に、

をつける研究者もある(後述)。

しかし、既に牧野富太郎が『頭註国訳本草綱目』(春陽堂 一九三二、のち『新註校定国訳本草綱目』 春陽堂 一九七五)第七冊の頭註にて、

菰米ハまこもノ穀デ、往時ハ我邦デモ僅カニ之レヲ食用トシタ事モアルガ今日デハ其事實ガナイ。まこもニハ実ノ生ルモノト否ラザルモノトアルト唱ヘラレテキタガソソナ事ハ決シテナク、何レノ株ニモ能ク実ガ出来ル。

と明言するように、結実しない場合はあっても、結実しない菰草自体があるわけではない。

この菰草不結実説の背景には、二つの要因が考えられよう。

甲 菰草の単性花、及び結実した穎果はきわめて落下しやすく、容易に収穫することができない。

乙 黒穂病菌に感染した菰草は出穂、及び結実しない。

特に後者の病害は頻繁に起こり得る現象であり、また蔓延しやすい。かえって菰草の副産物コモヅノを収穫するに好都合であることは次章において述べるが、菰米収穫を目的とする場合にこの感染は由々しき事態であろう。特に多年生の菰草にあつては、一度感染すれば、その株は毎年出穂開花することがないのである。おそらくこの甲乙二つの要因があいまって、菰に結実・不結実の二種ありといわれるようになったのではなからうか。

ちなみに清の郝懿行『爾雅義疏』は、

鄭樵通志云々「前引」。楊慎卮言云々「前引」。此二説並無依拠。蓬乃蒿類与茭菰別。李時珍本草菰米下引、孫炎云彫蓬即茭米、亦未可信。

鄭樵『通志』に云々。楊慎『卮言』に云々。此の二説、並びに依拠無し。蓬は乃ち蒿の類にて茭菰とは別なり。李時珍『本草』菰米の下に、孫炎云ふ、彫蓬は即ち茭米を引くも亦た未だ信ずべからず。

と述べ、鄭樵二説に反駁し、『説文』(一下)の「蓬は蒿なり」を引き、そもそも『爾雅』の「彫蓬」「黍蓬」は「蒿」、すなわち「青蒿」(菊科 *Arenaria aplicea* Hance. 和名カワラニンジン) 『神農本草經』下品に初見)に代表されるヨモギ類であるとする。なお定めがたい問題であり、小論では示すにとどめておく。

我が邦においても二種あると信じられていた菰であるが、それは古来周知の水辺植物であり、早くも『万葉集』に、

三島江の玉江のこもを標めしより己がとぞ思ふいまだ刈らねど

〔巻七 一三四八〕

真薦刈る大野川原の水隠りに恋ひ来し妹が紐解く吾は

〔巻十一 二七〇三〕

などと詠われる。また、神事における薦類に用いられたことが『延喜式』にみえ、そのしきたりは現在にまで受け継がれている。端午の節句に粽を菰葉で巻き、七夕にマコモ馬(干した菰葉の馬)を作るなど伝統行事にも使用されるきわめて卑近な植物であり、一般に和名マコモで呼ばれる菰には、数十にも及ぶ方言が各地に知られている。しかし、我が邦で菰米を常食することはついになかったようである。宮崎安貞『農業全書』は菰草に触れず、赤松宗旦『利根川図志』(巻五)は、

根山神社 北須賀村門河といふ所にあり。…此辺沼に真菰多し。…マコモの実は麦の如き物にして、人も是を食す。…以下、原文は漢文。筆者注」菰米の書に著さるるや、屈原より以下、唐宋の詩人に及ぶまで、其の美さを言ふ者多し。我が邦未だ之を賞する者有るを聞かず。予之を食らふは、今日を以て初めとす。

と記して、その思いを七絶に詠っているのである。

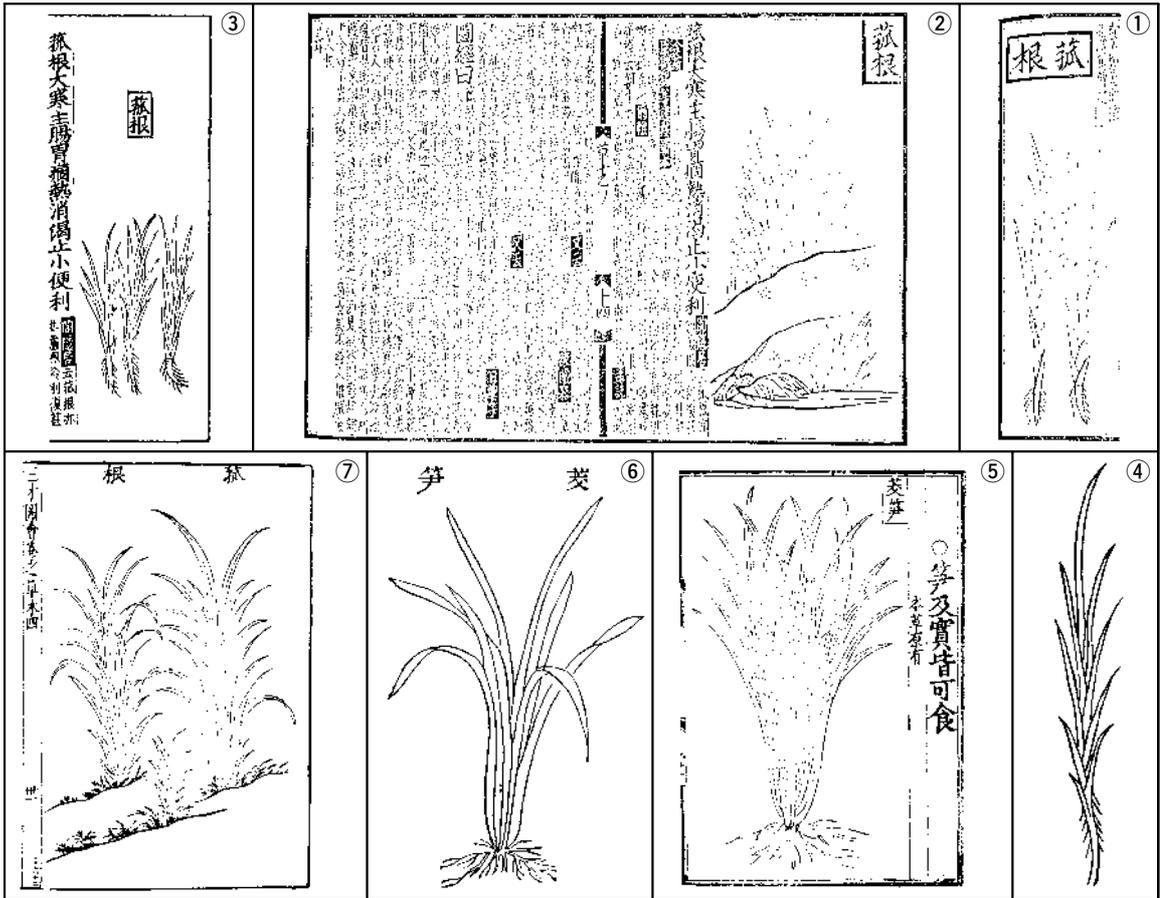
さて、前述したとおり、菰米は古代のご馳走として常食するようなことはなくなった。陸游は菰に執着した、あるいは執着せざるを得なかったらしいが、それは例外なのである。菰は明初にいたって周定王朱橚の、その名も『救荒本草』草部に収められるのである。「前頁諸菰図⑤参照」。反面、菰草から得られるもう一つの副産物「菰菜」の需要は衰頹することなく高まっていた。次章では、この「菰菜」について、多くの問題点とともに検討してみたい。

二 菰菜の本草学

『世説新語』識鑿篇に次のような逸話がある。

張季鷹辟齊王東曹掾在洛。見秋風起、因思吳中菰菜羹・鱸魚膾。曰、人生貴得適意爾。何能羈宦數千里以要名爵。遂命駕便歸。俄而齊王敗、時人皆謂為見機。

張季鷹、齊王の東曹掾に辟されて、洛に在り。秋風の起るを見、よりて吳中の菰菜の羹・鱸魚の膾を思ふ。曰く、人生は意に適ふを得るを貴ぶのみ。何ぞ能く数千



①・② 經史証類大觀本草
 ③ 本草蒙筌
 ④ 救荒本草
 ⑤ 重修政和經史証類備用本草
 ⑥ 農政全書
 ⑦ 三才図会

不可解にも歴代の本草書において、この問題に触れたものはなかったが、李時珍『本草綱目』は卷二十三穀部「菰米」条にて、まず孫炎の注「雕蓬は即ち莼米なり。古人以て五飯の一と為す者なり」を引き、続いて前引の鄭樵『通志』と、明の楊慎『扈言』にいう、

蓬有水陸二種。彫蓬乃水蓬、彫菰是也。黍蓬乃旱蓬、青科是也。青科結実如黍、羌人食之。今松州有焉。

蓬に水陸二種有り。彫蓬は乃ち水蓬にて彫菰是れなり。黍蓬は乃ち旱蓬にて青科是れなり。青科は結実すれば黍のごとく、羌人之を食らふ。今松州に焉れ有り。

との二説を支持して、

珍按、鄭楊二説不同。然皆有理。蓋蓬類非一種故也。

珍按するに、鄭楊の二説同じからず。然れども皆理有り。蓋し蓬の類は一種に非ざるが故ならむ。

と結論する。この説は『本草綱目』を、その權威とともに輸入した我が邦でも広くおこなわれ、貝原益軒『大和本草』卷八草之四には、

本草二菰二種アリ。一種ハ、秋ニ実ヲ結ビ黍ノ如キハ菰米也。飯餅ヲ作りテ食フ可シ。是沙菰米ナルベシ。沙菰米ハ典籍要覽ニ見エタリ。穀類ナリ。日本ニ異邦ヨリ来ル。日本ニハ米ノ如キ実ノナル菰アル事ヲキカズ。一種ハ鄭樵ガ所謂黍蓬ハ実ノナラザルコモノナリ。日本ニ多シ。水草ナリ。本草蘇頌所謂菰水中ニ生ジ葉蒲葦ノ如シト云フ是ナリ。是ハ米ノ如クナル実ナラズ。国俗マコモト称ス古哥ニモ詠ゼリ。

とある。小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷十五章之八にも、

菰、池沢中甚多シ。：秋ニ至テ高サ三四尺、上ニ長穂ヲ発ス。又二尺許、小花多ク綴リテ、淡竹葉花ノ如シ。実ヲ結バズ。

とあり、その卷十九穀之二には「菰米」を別載して、

菰米、莼ノ一種実ヲ生ズル者ナリ。常ノ、マコモハ花ヲ生ジ実ヲ生ゼズ。通志略ニ謂ユル黍蓬ナリ。ハナガツミノ苗ハ、常ノマコモヨリ長大ニシテ花後実ヲ生ズ。：コレ通志略ニ謂ユル彫蓬ニシテ即菰米ナリ。

と述べる。

実際に結実しない菰が存在したことは確かなようで、『採葉便記』中奥州（『古事類苑』植物部卷十四引）に「紀州熊野本宮ニモ菰米アリ。他所ノ菰ニ米穂ヲ生ルコトナシ」などがある。現代においてもこれらの事実を重視し、またしばしば結実しない菰が観察される報告があることから、菰に二種ありとして別個に学名

における美饌とみなされていたことは明らかである。それは、多くの北方植物が詠まれる『詩経』中に「菰」が一字も見出せないことから理解されよう。後代盛唐、王維の詩にあつても「鄆国稲苗秀で、楚人菰米肥ゆ」(友人の南帰するを送る)と詠まれるごとく、菰の語には南国情緒を醸す響きがあつたに違いない。魏の曹植は、枚乘以来の「七」体の常套にならつて菰を「芳菰」(芳しき菰米)と表現し、「肴饌の妙」と称讃している。以降の「七」は、すべて類書に引かれる佚文のため「天下之至美」「滋味之麗」様の文句はみえないが、おそらく類似の褒め言葉が後続していたものと察せられる。

このように魏晋の頃までは、菰は周知の糧食として認識されていたのである。当然保存の利く穀物であるから、北方においても食されてはいたのであろう。しかし、その詳しい調理法にあつては、かえつて賈思勰『齊民要術』(五四〇年頃)の「殮飯」(巻九)まで待たねばならない。

菰米飯法。菰穀盛草囊中、搗瓷器為屑。勿令作末。内草囊中令滿。板上採之、取末。一作可用升半。炊如稻米。

菰米の飯法。菰穀は草囊の中に盛り、瓷器を搗きて屑と為す。末に作さしむること勿かれ。草囊の中に内れ満たしむ。板上にて之を採み、末を取る。一作ことに升半を用ふるべし。炊くこと稻米のごとくす。

北朝の、それも後魏の文献になつて初めて調製法が詳述されなければならないのは、この頃から漸次菰米を常食とする習慣が、特に北方から廢れつつあり、一般的ではなくなつてきたことを意味するのではないだろうか。

下つて梁の陶弘景『集注本草』(五〇〇年頃)を増訂した最古の勅撰本草書、唐『新修本草』(六五七年)には、巻十九米部の「稷米」条に、

菰米、一名彫胡、可作餅。

菰米、一名は彫胡、餅を作るべし。

と記されるが、これは『集注本草』を踏襲するのみである。

続く陳藏器『本草拾遺』(七三九年)は、

彫胡、是菰蔣草米、古人所貴。

(『本草綱目』卷二十三穀部引)

彫胡、是れ菰蔣草の米にて、古人の貴ぶ所なり。

と過去の珍味であることを示唆し始める。もともと『証類本草』卷二十六米穀下品の「稷米」条に引く『本草拾遺』では、「古今所貴」に作るの、それならばまだ菰米の価値が一定認められていたことにはなろうが、やはり菰米の説明は独立せず、「稷米」条に附記されていることにかわりない。

北宋の蘇頌『本草図経』(一〇六一年)になると、菰を穀部にすら連ねず草部下品「菰根」条に附記し、

至秋結実。乃雕胡米也。古人以為美饌、今飢歲、人猶采以当糧。：彫胡諸米、今皆不貴。

秋に至れば実を結ぶ。乃ち雕胡米なり。古人は以て美饌と為すも、今、飢うる歳、人猶ほ采りて以て糧に当つ。：彫胡の諸米、今皆貴はず。

と救荒植物に下落したことを明言、続く寇宗奭『本草衍義』(一一一九年)にいたつては「蒲類」とみなしたのち、

河朔辺人、止以此苗飼馬。曰菰蔣、及作薦。：彼人収之、合粟為粥、食之濟饑。

河朔の辺人、止だ此の苗を以て馬を飼ふのみ。菰蔣と曰ひ、及び薦を作る。：彼の人之を収め、粟に合せて粥を為り、之を食らばは饑を濟ふ。

と、「河朔の辺人」、すなわち菰草を馬の飼葉に使う黄河以北の辺境人だけが、飢えをしのぐに食べるかのような表現をとるまでになつてしまつてゐる。どうやら各地において菰米を貴んで食する習慣は、唐代頃をさかいにして急速に衰頽していったものと思われる。ましてや菰米が王の宴席に出されたような、礼書に語られる古代の状況はなくなつてゐた。

この『本草衍義』は宣和元年に刊刻されているが、その六年後、宣和七年(一二一五)に生まれたのが冒頭にその詩を掲げた陸游である。陸游には菰米菰飯の美味さを詠った詩が多いが、菰米はもはや、少なくとも本草書の上では常食するに足るご馳走などではなくなつていたようだ[次頁諸菰図参照]。

ところで、問題となるのは、菰に二種ありとする説が古来となえられていることである。前掲『爾雅』の「蓄彫蓬、薦黍蓬」について鄭樵『通志』昆虫草木略は、

菰曰蓬、今人謂之芰。爾雅曰、蓄彫蓬、薦黍蓬。彫蓬者米芰也。其米謂之彫胡、可作飯。故曰蓄。黍蓬者、野芰也。不能結実、惟堪薦藉。故曰薦。

菰を蓬と曰ひ、今人之を芰と謂ふ。『爾雅』に曰く、彫蓬を蓄み、黍蓬を薦くと。彫蓬は米芰なり。其の米之を彫胡と謂ひ、飯を作るべし。故に蓄と曰ふ。黍蓬は、野芰なり。実を結ぶこと能はず、惟だ薦藉に堪ふるのみ。故に薦と曰ふ。

と述べ、菰には菰米が採取できる種、すなわち「芰米」(『爾雅』の彫蓬)と、結実せずただ薦藉(ムシロ)に用いる種、すなわち「野芰」(『爾雅』の黍蓬)とがあるというのである。

この小論では、従来諸説紛糾して定まらない菰米、及び菰菜について本草学的な整理検討を仔細に加え、もって経書詩文を解する一助にしたいと思うのである。

一 菰米の本草学

菰について、まずは古辞書の類をあたってみよう。『説文解字』（二下）では「菰」に作り、

菰、雕胡、一名蔣。 菰は雕胡、一名は蔣なり。

とあり、続いて「蔣」を引くと、

蔣、菰也。 蔣は菰なり。

と互訓する。『広雅』積草には、

菰、蔣也。其米謂之彫胡。 菰は蔣なり。其の米、之を彫胡と謂ふ。

とある。意外にも最古の『爾雅』には菰（菰）や蔣としてはみえないが、これについては後述する。

二書の簡潔な説明によると、菰（菰）は、蔣と同義であり、その米、すなわち顆粒状の実を「雕胡（彫胡）」ということがわかる。菰実が穀物の一種とみなされていたことは、原文で次掲する礼書の記載や漢儒の注からも窺われる。

〈周礼・食医〉凡會膳食之宜、牛宜稌、羊宜黍、豕宜稷、犬宜粱、雁宜麥、魚宜菰。凡君子之食、恒放焉。（鄭衆注）菰、彫胡也。

〈周礼・太宰〉以九職任万民。一曰三農、生九穀。（鄭衆注）九穀、黍・稷・秫・稻・麻・大小豆・大小麥。（鄭玄注）九穀無秫・大麥、而有粱・菰。

〈周礼・膳夫〉凡王之饋、食用六穀、膳用六牲、飲用六清。（鄭衆注）六穀、稌・黍・稷・粱・麥・菰。菰、彫胡也。

〈礼記・内則〉食、蝸醢而菰食・雉羹。（鄭玄注）菰、彫胡也。

どうやら雕胡（彫胡）と呼ばれた菰実は、黍（モチキビ）や稷（ウルチアワ）などとともに九穀・六穀のひとつとしても数え上げられ、君主の宴席にも出される古代常用の糧食であつたらしい。『淮南子』詮言訓には、

心有憂者、筐床衽席弗能安也、菰飯牯牛弗能甘也、琴瑟鳴竿弗能樂也。

心に憂ひ有る者は、筐床衽席も安んずること能はず、菰飯牯牛も甘きこと能はず、

琴瑟鳴竿も楽しむこと能はず。

とあり、「菰飯」というからには炊いで食されたらしく、『爾雅』積草に、
鬻彫蓬、薦黍蓬。 彫蓬を鬻み、黍蓬を薦ぐ。

とあるのを、宋の鄭樵はその『通志』昆虫草木略にて「彫蓬」を茭（菰と同義）とみなして、

彫蓬者米茭也。其米謂之彫胡、可作飯。

彫蓬は米茭なり。其の米、之を彫胡と謂ひ、飯を作るべし。

と解している。

さて、詩文の類ではどうか。ここでは魏晉時代までの用例を列挙してみる。

〈楚辞・大招〉五穀六仞、設菰梁只。（王逸注）菰梁、蔣実、謂雕胡也。言楚国土地肥美、堪用種植五穀。其穗長六仞。又有菰梁之飯、芬香且柔滑也。

〈宋玉・諷賦〉為臣炊彫胡之飯、烹露葵之羹、來勸臣食。 [古文苑・三]

〈司馬相如・上林賦〉鮮支黃礫、蔣苧青蘋。（張揖注）蔣、菰也。 [文選・八]

〈司馬相如・子虛賦〉其埤濕則生藏蓂葦、東牆彫胡。（張揖注）彫胡、菰也。 [文選・七]

〈枚乘・七發〉楚苗之食、安胡之飴、∴此亦天下之至美也。（李善注）安胡、彫胡也。 [文選・三十四]

〈張衡・七弁〉會稽之菰、冀野之粱、珍羞雜選、灼爍芳香、此滋味之麗也。 [芸文類聚・五十七]

〈桓麟・七說〉香其為飯、雜以梗菰。 [北堂書鈔・百四十五]

〈桓彬・七設〉菰粱雪累、班禱錦文。 [北堂書鈔・百四十四]

〈劉梁・七拳〉菰粱之飯、入口叢流。 [文選・三十四]

〈曹植・七啓〉芳菰精糲、霜蓄露葵、∴此香饌之妙也。 [初學記・二十六]

〈徐幹・七喻〉南土之秬、東湖之菰。 [初學記・二十六]

〈傅巽・七誨〉孟冬香秬、上秋膏粱、彫胡杭子。 [初學記・二十六]

〈杜預・七規〉農夫進菰粱之精稗。 [北堂書鈔・百四十二]

〈傅玄・七謨〉彫胡之飯、糲以游粱。 [北堂書鈔・百四十四]

ここで注目すべきは、前掲『淮南子』も含めて、南方に関係する文章に多く取り上げられていることであろう。「楚辞」はいうまでもなく、「子虚賦」は楚の物産を詠いあげたもの。呉王濞に仕えた枚乗の「七發」は、呉客が楚王の病を治療せんと謀って「楚苗の食」なる菰飯をもちだし、張衡「七弁」は「会稽（浙江省）の菰」とわざわざ明示している。

菰米の飯は、『淮南子』に「牯牛」（肥えた飼牛）と並挙され、さらに「天下の至美」（七發）、「滋味の麗」（七弁）などと讃えられるからには、特に南方

《論文》

「菰」の本草学

— 陸游詩所詠菰草考序説 —

澁澤尚

〔要旨〕

古典詩文に類見される菰は古来食用とされ、その実「菰米」の飯は南方の美饌とみなされてきた。しかし、秦漢の頃からその芽「菰菜」の利用が始まり、やがて唐代をさかいに菰米の方は救荒植物に成り下がってゆく。ところで菰菜には二種あるが、珍重されたのは春の嫩芽よりも、病菌に冒された秋の肥大茎「菰首」である。これはその特殊性ゆえか歴代の本草書と碩学とを紛乱させ、誤解聚訟をきわめている。当論では菰米・菰菜に関する諸問題、異称や利用の盛衰史などに本草学的考証を加え、もって菰草の実態を明らかにする。

〔キーワード〕 本草 菰 マコモ 菰米 菰菜 菰首 陸游

緒言

湖上采菰甘似蜜 湖上に菰を采る 甘きこと蜜のごとし
街頭買酒滑如油 街頭に酒を買ふ 滑らかなること油のごとし

〔戯題酒家壁〕 『劍南詩稿』卷四十四^①

南宋、陸游の詩にこう詠われた「菰」（和名マコモ）は、湖沼藪沢に群生する周知の植物であり、なにも珍奇なる草本ではまったくない。古くは経書や古辞書、下つては本草書や農書から料理書にまでその名がみえ、歴代の詩文にもたびたび登場してきた。陸詩を信ずれば、菰は相当な美饌になること相違なかるうが、それは諸書において菰一字で用いられるよりも、むしろ「菰米」「雕胡」「莼米」「菰菜」「茭白」「菰首」「茭笋」「蘆蔬」「烏鬱」「茭鬱」などと、その利用部位によりさまざまに呼び分けられてきた。

ところが、胡道静氏が「因為有這樣的一種變革存在、而這箇事實又被忽視了、

故对于古今茭米・茭笋、往往不易搞清它們是怎麼（菰の利用には変革があったにもかかわらず、その事實は等閑視されてきたため、古今にわたつて茭米と茭笋が往々にしていかなるものであつたか明確に把握できなかつた^②）と指摘するように、ある時期から菰の利用部位の好みには変化が起つたため、その実態が不鮮明になつていくという。

確かに菰やその異称の解釈については、本草書や農書、経書、詩文の諸注において歴代混乱が見受けられるようだ。これは、菰に少しく特殊な利用法があつたためであろう。すなわち、菰には大きく、「実の利用」（すなわち菰米）と「芽の利用」（すなわち菰菜）とがあり、特に芽茎については、そこに寄生する菌類をともなつて食用にするというのである。

しかし、ことはそう単純ではない。あるひと「菰草に二種あり」といい、あるひと「菰菜に二種あり」という。また菰草の寄生菌とは何物であるのか、「蘆蔬」「烏鬱」なる不可解な名称は何に由来し、何を意味するのか。



4. 新海竹太郎 有栖川宮威仁親王(背面) ブロンズ



3. 新海竹太郎 有栖川宮威仁親王(正面) ブロンズ

プランである。
 玄関を入ると、建物内は中央廊下で仕切られ、南側に主要室を、北側に付属小室を配す。一階は、玄関より食堂、客間、撞球室を南側に、二階は、西客室、居間、書斎、寝室を南側に配している。
 外装は、一、二階の境に胴蛇腹をつけ、一、二階の窓は、棧を井桁割りにした上下開閉窓である。軒下には、コンソール (console・渦巻形持送り) を配して、軒蛇腹を廻らす。

新海竹太郎は、北白川宮能久親王銅像を完成したところから、自らを彫刻家と自覚した。ベルリンから帰国すると、太平洋画会で作品を発表し、かつ同画会研究所が、谷中に設立されると、美術講話にも精進した。講話ばかりか、研究所に彫刻部が新設されると、彫刻教育に熱心であった。北村四海とともに教育にあたり、

堀進二、戸張孤雁、中原悌二郎らを育てた。明治四〇年秋の第一回文展第三部(彫塑)において、審査委員は木彫家、塑像家、学識経験者など、広く均衡をとって選出され、竹太郎も委員のひとりとなった。大正六年(一九一七)には、帝室技芸員となり、大正期の彫刻界を担う人物となった。
 大正時代の竹太郎は、大正五年に福島安正大將騎馬像、大正七年に大山巖元帥騎馬像を制作した。こうした軍人騎馬像は、竹太郎の得意とした従来の主題延長上にあった作品だが、竹太郎は、これらのほか新たな造形作品を手掛けた。それ

は、現代社会に生活する人々の造形表現であり、自らの彫刻対象の幅を広げたいえよう。竹太郎は、この新試作を明治四十五年の『書画骨董雑誌』で、「浮世彫刻」と言った。「浮世彫刻」は、義太夫を聴かせる男、散歩する子連れ夫婦、荷車をひく夫婦、相合い傘の男女などを造形表現している。

有栖川宮威仁親王銅像は、竹太郎が「浮世彫刻」に目覚めた以降の作品である。しかし威仁親王銅像は、「浮世彫刻」とかなり異なる。「浮世彫刻」は、日常の瞬間の場面をすばやくとらえて制作した印象をまぬがれない。それに比べ、威仁親王銅像は、用意周到、計算つくされた作品である。竹太郎の真骨頂ともいえる騎馬像の流れをくむ記念碑的彫刻であった。大正十年、落成された有栖川宮威仁親王銅像は、現在、台座が新造されて天鏡閣北側に立つ。そのブロンズ雛型は、天鏡閣二階の書斎に陳列される。

註

- 1 「湯の香」は、明治三十八年十一月発行の『女鑑』に発表された。
- 2 新海竹蔵撰『新海竹太郎伝』(昭和五十六年・非売品) 六二ページ。
- 3 『二六新報』(明治二十七年三月十八日)。
- 4 註2前掲書 三九ページ。
- 5 大正十一年八月『新小説』九月臨時増刊に「美術批評家としての森さん」記載、「新海竹太郎伝」にも採録(二二一ページ)される。
- 6 註2前掲書 三九ページ。
- 7 『新海竹太郎伝』(四六ページ)によれば、右前脚を隆起した地盤につかさせたのは、地震大風等の災禍を考慮したためとある。
- 8 註2前掲書 四七ページ。
- 9 磯崎康彦「ベルリンの新海竹太郎」、『山形新聞』夕刊、一九九六年十一月十八日と十九日。
- 10 註2前掲書 二〇二ページ。
- 11 明治三十八年四月『日本美術』第七十五号に記載、「新海竹太郎伝」にも採録(二五六ページ)される。
- 12 註2前掲書 一六〇ページ。

(いそざき やすひこ 福島大学文学・芸術学系)
 平成十七年九月三十日受理

できる。

竹太郎のベルリンでの生活は、質素であった。にもかかわらず、生活苦にあえいだ。竹太郎が、帰国を突然決定するのも、金銭上の問題であった。『新海竹太郎伝』によれば、明治三十四年十一月七日「都合上急に帰朝に決す、同日河村少佐にはかる」とある。

河村少佐は、かつて竹太郎の上官であった。河村の記述によれば、竹太郎は帰国にさいし、汽船賃のほか一文もない。そこで最小限度の小遣を与えたという。しかし竹太郎はその金銭で彫刻用小道具を購入してしまつた。

竹太郎は、帰国の途次、イタリヤを巡視しなかったが、金銭上断念し、明治三十四年（一九〇一）十一月十四日にベルリンを出発した。十七日にアントウエルペンを立ち、二十二日にロンドンを出航し、翌年（一九〇二）の一月十五日横浜へ着いた。

竹太郎は、山形の新海義蔵へ一九〇一年十二月三十日にロンドンより手紙を書いた。手紙に「十二月十八日当港着、明廿二日出航」とあり、ロンドンに五日間滞在したとわかる。霧には閉口したようだが、美術館を見学し、ネルソン提督記念柱を見た。このネルソン像と対比すべく制作されたのが、有栖川宮威仁親王銅像であった。

有栖川宮威仁親王銅像

威仁親王は、文久二年（一八六二）一月、有栖川宮^{なみのと}威仁親王の第四王子として生まれた。明治十一年（一八七八）海軍兵学校予科卒業後、一年あまり英艦に乗り、明治十四年（一八八二）グリニッチ海軍大学へ留学、二年あまりして帰国、のち日本海軍の基礎確立に力を注いだ。明治三十七年六月海軍大将、大正二年（一九一三）七月、五十二歳で死去し、元帥府に列せられた。

威仁親王没後、銅像建設の気運がおこり、東郷平八郎を代表として、建設計画が進められた。依頼されたのは、北白川宮能久親王銅像をすでに制作し、軍関係者に好評の新海竹太郎であった。

竹太郎は、帰国のさいに見たネルソン提督像を考慮しつつ、まず威仁親王雛型を制作した。親王は、海軍盛装姿で、右手を腰にあて、左手で長剣を握って杖とする。身体を若干左側に傾け、左足を支柱とする。雛型は、高さ六八・〇センチ、塑像で作成され、石膏どりされ、のちブロンズ像（図3、4）とされた。雛型は、

大正九年春頃には、完成していたと考えられ、現在、天鏡閣で見ることが出来る。このブロンズ像は、竹太郎が明治三十八年に書いた「彫刻の大作法について」に照らしてみると、第二「補助型フェルスマデル」に、また本雛型に該当するのであろう。

さて、竹太郎は、本雛型より四メートル弱の威仁親王原型をつくった。制作方法は、雛型と原型との間に一定の距離をとり、両者（雛型と原型）の中心を同一の水平線におき、一方の雛型からシユルヒシユナーベル（Storchschnabel）を利用して、原型骨組をとらえた、と思われる。この方法は、おそらくヘルテルのもとで学び、その写図器もドイツ遊学中に購入したのであろう。原型は、粘土か石膏のどちらかであった、と想像できる。竹太郎は、「彫刻の大作法について」で、

原型を作る方法がありますが、これは大きなものを粘土で作って、石膏の壊し型に取るということも容易なことではありません。それですからそれは直接に石膏で作ることになっております。

と述べている。したがって威仁親王原型は、石膏像であった可能性が高い。竹太郎制作の原型は、海軍造兵廠で製造され、大正十年（一九二一）十二月二十四日落成した。有栖川宮威仁親王銅像は、巨石からつくられた十五メートルほどの円柱にのせられ、東京築地の海軍参考館前に置かれた。基壇は装飾され、基壇ならびに全体の設計は、伊東忠太によった。

大正十二年（一九二三）、関東大震災のとき、海軍参考館は倒壊したものの、威仁親王銅像は倒れずに残り、戦後に至った。この銅像が、猪苗代町の天鏡閣に移設再建されたのは、昭和五十九年七月である。有栖川宮の祭祀を継承した高松宮宣仁親王の発案による。

天鏡閣は、威仁親王の別邸である。明治四十一年（一九〇八）夏に竣工し、翌年、東宮（大正天皇）東北巡遊のさい、李白の句「明湖落天鏡」を参照して、天鏡閣と命名された。

天鏡閣は、木造二階建て（一部三階）、建築面積四九一・九平方米、典雅なルネサンス式洋風建築である。南面の中央に八稜形状に突出した入口を、二階にバルコニーを設け、上部ペディメント中央に、有栖川宮家紋章を唐草で飾る。その西寄りに翼部をもつ。西面に玄関ポーチ、東にマンサード屋根（上部がゆるやかな勾配で、下部が急勾配の屋根）、北側に越屋根付の厨房をおく。平面は、コの字形

ベルリン遊学

明治三十三年（一九〇〇）、パリ万国博覧会が開催されるにあたり、明治政府は、わが国の伝統的古美術のみならず、現代の美術作品も出品した。多くの美術家は、この博覧会を機会に渡仏した。竹太郎もこれに乗じ、彫工会の代表者として、北村四海、海野美盛らとパリへ向った。浅井忠は、文部省からフランス留学を命ぜられ、洋画研究の目的で明治三十三年二月、神戸を立った。竹太郎は、パリで、浅井の下宿を訪ねている。

パリ万国博覧会では、ロダンの特別展覧会が催され、竹太郎も興味をもつて見学した。興味があったとはいえず、ロダンの彫刻を見た竹太郎は、「変な彫刻」だと思い、「然しそのうちで感じたのは、カレールの市民のうちで鍵を持っている人物であった」と述べている。「変な彫刻」だと思ったのは、この頃の竹太郎が、西洋彫刻をギリシア彫刻を中心とした懐古主義と考えていたからである。竹太郎は、その後、ベルリンでもロダンの彫刻に接し、やがてロダンの作風を理解しようである。というのは、「初め変だと思ったようなところにロダンの価値があったように思われる」と述べているからである。

大正十年（一九二一）、『中央美術』に記載された「士官候補試験に失策つて」によると、パリの竹太郎は、食事、酒、芝居などに消費がかさみ、ドイツへ留学していた友人から、ドイツでは「余程安く生活が出来るようでもあり、又研究の便宜もある様」だ、と知らされた。そこで、明治三十三年六月末にパリを立ち、ベルリンへ向かったのである。日本陸軍の軍人が、ベルリンにかなりおり、かつ軍籍をおいた竹太郎にとって、ベルリンはパリより暮らしやすい都市であった、と思われる。

竹太郎は、ベルリン駐在武官松川敏胤の紹介で、明治三十三年八月末、エルンスト・ヘルテル (Ernst Hertel, 1846-1917) を訪ね、彫刻を学ぶこととなった。当時、ヘルテルは、ベルリン美術学校の彫刻部主任教授であった。

ヘルテルは、一八四六年ベルリンで生まれ、同地の王立美術アカデミーに入学し、優秀賞を獲得したあと、彫刻研究のためコペンハーゲン、またイタリアへ遊学した。帰国後、アカデミー会員となり、一八九五年、美術学校の彫刻部長となった。

ヘルテルは、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて登場したネオ・バロック

様式追究の官学派彫刻家であった。ネオ・バロックは、冷たく平滑な形態からなる新古典主義美術の反動として起こった様式である。しかし、ヘルテルのように、古典様式に準拠しつつ、新しいバロックの様式を加味しようとする作家もかなりいた。

ベルリンのヴィクトリア公園の池に「珍しい漁獲」(Der seltene Fang) というヘルテルの彫刻がある。漁師が、人魚を捕獲した姿をとらえる。漁師や人魚の身体比例は、古典的規範によりつくられるが、両方の姿態はきわめて複雑である。人魚は自らの身体をねじり、かつ漁師と複雑にからみあう。ネオ・バロック作品というに相応しい。

筆者はベルリン滞留中、ベルリン美術学校の資料が、ブンデスアレーの美術古文書館に所蔵されているとわかった。すぐ同文書館を訪れ、一九〇〇年前後の学生名簿を調査した。しかし、竹太郎の名前を発見できなかった。したがって竹太郎は、美術学校の正規の学生でなく、外国人研究生か、ヘルテルの個人的弟子のどちらかであった、とわかる。後者の可能性が高い。

竹太郎自身は、ヘルテルの工房で仕事をしながら、次のように述べている。

研究生というのは僕の他に、美術学校の研究科の学生が二人ずつ、二週間か三週間毎に交代して、別々の学生が大作の実地研究に来るだけであった。^⑩

竹太郎が、自らを「研究生」というのは、美術学校研究科の学生という意味でなく、ヘルテルの個人的研究生という意味であろう。竹太郎の学習は、主にヘルテルのアトリエでおこなわれた、と考えられる。ヘルテルのアトリエは、当時、ベルリン新市街のウーラント通りであった。竹太郎は、ベルリン到着後、ハレシエ通りに住むが、すぐにシャルロットテンブルクのゲート通りへ移った。これは、ヘルテルのアトリエが近くあったからであろう。

竹太郎は、ヘルテルに月謝を払わなかったという。そのかわり、日本から『晝斎画談』や花鳥画譜を取りよせ、師に贈って嬉ばれたようである。また竹太郎は、ヘルテルの誕生日や夜会に招かれたから、両人はかなり親しい師弟関係にあったといえる。

竹太郎は、ヘルテルからレリーフの概念や技法を学んだ。また等身大以上の彫刻、つまり大作の制作技法や構成、さらに彫刻と環境の関係を習得したことは、ヘルテル学習下の大成果のひとつであった。レリーフに関しては、帰国後の太平洋画会第一回展覧会に出品した「少女」ら数点の作品に、その成果がみられる。大作の制作技法に関しては、帰国後の数々の騎馬像に、成果のあとを偲ぶことが

やがて大隊長渋谷在明の耳へも入った。ただこの木彫は、入隊中でなく、除隊後に完成しているかもしれない。渋谷は同郷人であり、竹太郎に後藤貞行を紹介した。和歌山県出身で、しかも軍人から彫刻家となった後藤貞行は、明治十八年（一八八五）末から、農務局畜産課の駒場農学校に勤務しており、明治二十三年四月に、高村光雲の推薦により東京美術学校校履教官となった。（囑託を解かれたのは、明治三十一年四月である。）

明治二十四年（一八九二）、満期除隊となった竹太郎は、後藤貞行の援助を得、寝食を共にした。後藤はこの頃、高村光雲を主任として山田鬼斎、石川光明らの彫刻家とともに「楠木正成銅像」の原型を制作していた。後藤の担当したのは、楠公の馬であった。竹太郎は、『新海竹太郎伝』によれば、甲冑や太刀をつけ、岡倉天心の愛馬わかくさに乗り、楠公のポーズをとるなど、後藤の助手として協力したとある。

「楠木正成銅像」の原型は木彫で、明治二十六年（一八九三）に完成し、ほぼ三年をかけて岡崎雪声によって鑄造され、同三十三年（一九〇〇）七月、建築家片山東熊設計の台座に置かれ完成した。竹太郎は後藤に協力するかたわら、かつてブロンズ製馬の置物を模刻した木彫と同じものを制作するよう、近衛師団長から命じられた。これを機縁に、竹太郎は、近衛師団長小松宮彰仁親王夫妻騎馬像を制作することになった。騎馬像は木彫で、明治二十六年（一八九三）秋に完成し、現在、彰仁親王像のみ靖国神社遊就館で見ることができている。

彰仁親王騎馬像もさることながら、像高およそ四メートルの楠公像を日々観察し、かつ後藤に協力した体験は、竹太郎が、大型騎馬像を自ら制作するさいに生かされた。これこそ明治二十九年（一八九六）の北白川宮能久親王銅像——原型は木彫——である。これは竹太郎にとって記念すべき代表作であるばかりか、彫刻家として自律を促した作品でもあった。竹太郎自身、

この銅像は自分にとつては大いに記念す可きもので、貧弱ながら彫刻家として今日あるは全くこの銅像のお蔭である。其れ以前に作つたものは素人細工に過ぎない。
と発言している。

能久親王は、伏見宮邦家親王の第九王子として、弘化四年（一八四七）二月に生まれ、嘉永元年（一八四八）仁孝天皇の養子となり、青蓮院門室を相続した。安政五年（一八五八）十一月江戸へ出、輪王寺に入った。戊辰戦争にあつては、彰義隊や奥羽越列藩同盟を擁護して官軍と対峙したため、降伏後、京都へ護送さ

れて謹慎されてしまった。宥免されたあと、明治三年（一八七〇）にドイツへ留学し、七年間ロシア陸軍大学校で学んだ。帰国後、陸軍に籍をおいて累進し、各師団長をつとめ、日清戦争にあつては、近衛師団長として出征した。明治二十八年（一八九五）、日清戦争は終結したものの、台湾は依然として不安定で、能久親王は同地鎮定のため赴いたが、台南でマラリアにより病死した。

竹太郎は、日清戦争のさい、予備役として明治二十七年十二月に応召し、近衛騎兵大隊へ入った。中国大陸から台湾へ渡った竹太郎は、師団長能久親王の配下であった。

竹太郎は、「美術批評家としての森（鷗外）さん」のなかで、兵士の水筒として使う椰子の殻に、能久親王自筆の「伴戦扶勞」という文字を彫るよう依頼された、という。

竹太郎が、「北白川宮能久親王銅像」を依頼されたのも、台湾征討での経験があつたからであろう。『新海竹太郎伝』によれば、

在隊中から知遇を受けていた渋谷在明、河村秀一らの諸将校の推挙も力があつたであろう。

と述べている。河村秀一は、台湾征討に大尉参謀として行き、かつ竹太郎と同じ頃、ドイツへ留学し、竹太郎へ金銭的援助をした軍人であった。

竹太郎は、明治二十九年（一八九六）五月に能久親王銅像を委託され、翌三十年その木彫雛形を完成し、同年（一八九七）九月の東京彫工会第十二回彫刻競技会に出品し、銀賞を獲得した。にもかかわらず、当時の『美術評論』では、厳しく批判された。それらの批判をまとめてみると、馬と馬上人物との比例が悪く、かつ馬との一体感がないばかりか、品位に欠ける、というものであった。

そこで竹太郎は、再度明治三十年七月に着手した木造原形に手を加え、明治三十二年（一八九九）七月に完成させ、日本体育会庭内にて公開した。その後鑄造され、明治三十三年（一九〇〇）にブロンズとなり、さらに片山東熊と足立鳩吉による台座も加わり、明治三十六年（一九〇二）一月、近衛連隊営門前に設置されて、除幕式をむかえた。能久親王銅像は、竹太郎の出世作となり、現在、東京国立近代美術館工芸館に見られる。

能久親王銅像は、馬の右前脚を折り曲げ、幾分盛られた地面に接す。左前脚は、深く折り曲げて地上から離す。馬の重心は、後脚にて支える。馬上の能久親王は、右手に双眼鏡を持ってうしろにたらし、左手で手綱をにぎって馬を制御し、身体を若干うしろに反らす。馬の躍動する一瞬をとらえた銅像である。

東京大学医学部教官玉越与平が、週二回、芸用解剖学を講義したのも、写実を重視するラグーザの考えによった。彫刻学科の志望者は、画学科と比べて少数であったため、官費で就学することができた。

ラグーザの指導を受けた人物に大熊氏広、藤田文蔵、佐野昭らがいる。大熊氏広は、工部美術学校創立とともに入学し、学術優秀なる故に、同校彫刻学科の助手となり、明治二十一年（一八八八）にイタリア、フランスへ遊学した。帰国後、彫工会や文展で活躍するが、代表作に明治二十六年（一八九三）の「大村益次郎銅像」、明治三十六年の「有栖川宮銅像」などがある。大熊や、また明治二十年（一八八七）ヴェネツィア美術学校で彫刻を学んで帰国した長沼守敬は、わが国の彫塑史の先駆者であった。工部美術学校は、明治十六年（一八八三）に廃止されたが、ラグーザの門弟、また長沼らは、明治二十二年に結成された明治美術会の彫塑部へ活躍の場を移したのである。

明治二十二年に開校した東京美術学校は、彫刻科を設けたが、彫塑はなく、木彫のみであった。指導したのは竹内久一、高村光雲、石川光明らである。その後、高村光雲に師事した米原雲海や平櫛田中らは、彫塑でなく、木彫制作に従事した。米原は、日本固有の木彫振興を掲げて彫刻会を設立し、わが国の伝統的木彫技術を標榜した。また平櫛も、伝統的木彫を顧みつつ、新しい木彫の方向を探った。

木彫のみの東京美術学校彫刻科に、塑造科が設けられたのは、明治三十二年（一八九九）であった。長沼守敬と、後任の藤田文蔵が指導にあたり、ラグーザの流れを受け継いだ。彫刻科を卒業した武石弘三郎、高村光太郎、水谷鉄也らは塑像制作に進み、西欧に留学して彫刻術に磨をかけた。とりわけロダンに師事した荻原守衛が、明治四十一年（一九〇八）に帰国し、またロダンに傾倒した高村光太郎が、翌四十二年に帰国すると、わが国の彫塑界は活気づいた。荻原守衛の影響のもと、中原悌二郎と戸張弧雁は彫塑へ転じ、かつ朝倉文夫や北村西望といった彫刻家が、やがて表舞台に登場してくるのである。

竹太郎は、工部美術学校の流れをくむ作家らの世代と、ロダンの影響のもと、華々しく台頭した作家らとの中間に位置した。竹太郎は、木彫と塑像の一方のみに縛られず、木彫も塑像も制作した。しかし木彫をしたからといえ、わが国の伝統主義を固守することはなかった。また塑像を制作したからといえ、ロダンの作風に迎合することはなかった。竹太郎が遊学して学んだものは、幾分時代遅れの官画系アカデミスムの表現であった。こうした点に、竹太郎の彫刻家としての存在が、近代日本彫刻史において希薄になっているのかもしれない。

彫刻家としての自律をうながした 「北白川宮能久親王銅像」

新海竹太郎は、慶応四年（一八六八）二月五日、山形市十日町に生まれた。同町小学校で修学し、十六歳のとき、地元の細谷塾へ入った。細谷風翁とその子細谷米山が、医業のかたわら、町内の子供らに漢学を教える塾であった。竹太郎は、息子の米山から漢学、漢画、詩文などを学んだ。父の風翁から直接教えられることはなかったが、深く感化されたようである。明治十八年（一八八五）、細谷米山が他界したために、細谷塾は閉鎖してしまった。

明治十九年（一八八六）、竹太郎は既述のように、陸軍士官を志して上京した。竹太郎が軍人を志したのは、細谷風翁の影響によるものらしい。風翁は、「男子は須らく軍人たる可し」と常に言ったという。そればかりか生活苦の竹太郎自身、士官になれば生計が安定し、かつその月給で親を養いえる、と考えたのであろう。

上京した竹太郎は、小学校の補助教員をしたり、筆耕などをして収入を得た。明治二十一年（一八八八）、士官候補生試験に失敗し、同年十二月に徴兵適齢期にあたり、近衛騎兵大隊へ入営した。



2. 新海竹太郎 馬 木彫 1891年

彫刻し、獣医官を嘆賞させた。その結果、乗馬学校の上官がフランスから持ち帰ったブロンズ製の馬の置物を木で模刻する羽目となった。でき上がった模刻の馬（図2）は、原物より優れているとの評価を仲間内で得たのである。

そればかりか下士集会所の看守の任にあった竹太郎は、同所にあったドイツ語本馬体解剖書を偶然見つけた。馬の写真や解剖、とりわけ馬の写実的な表現に驚いたことは言うまでもない。そこで竹太郎は、写真や絵画でこれほど真に迫る表現ができるなら、彫刻という立体表現をとったならば、より活气的で迫真的になるう、と考えたようである。

竹太郎の木彫の馬は、隊内で評判となり、

校系列から大熊氏広であった。彫刻部の出品は十九点で、このとき竹太郎は、「ゆあみ」と「露宮」を出品した。

「ゆあみ」は、〈ゆあみ〉と刻まれた高さ九〇センチの台座に立ち、石膏でつくられた一九〇センチあまりの女性像であった。今日よく目にするのは、この原像でなく、これから鑄造されたブロンズ像である。ブロンズ像では、台座が省略されている。

「ゆあみ」は、ほぼ垂直の立像であるが、左足の膝をわずかながら右足によせている。右手を肩からかけた薄手の布に運び、左手を右手にかかるとのせる。肩から胸・腹・腰・股へと流れるように垂れる布は、透けて裸体がみえるほど薄手である。若干官能的であるが、気品のある彫刻である。

「ゆあみ」は、大塚楠緒子の短編小説『湯の香』との関係がとりざたされた¹⁾。大塚楠緒子は、詩人・歌人・小説家で、夫大塚保治が漱石の友人であったところから、晩年、漱石の影響を受けた。竹太郎は、ドイツ帰国後、東京帝国大学文科の美学者大塚保治の助手となり、親交した。竹太郎は、大塚保治を介して楠緒子を知ったのであろう。

明治三十九年（一九〇六）、竹太郎は、楠緒子の短編小説集『晴小袖』の表紙を装幀した。『湯の香』は、このなかに収録されている。話の筋は、

夏の間、伊香保温泉に滞在する主人公姫は、美人で名家の令嬢である。姫は、侍女の京をつれて湯元へ出かけたとき、青年画家と会う。姫は、京に羽織をとりに行かせ、その間青年と話す。青年は、温泉という題で作品を描いたが、モデルに困っていると言う。姫は、青年の要望通りモデルとなった。そして京が、羽織を持って急いで戻ったとき、すでに青年の姿はなかった。

文中の「綺麗な形の少女が裸体で岩陰で湯気のある温泉を浴んでゐる」とか、「白き湯気に身を纏はせながら格好よく岩陰に立った」とかある。こうした文章は、竹太郎の「ゆあみ」を想像させるかもしれない。

しかし『湯の香』からの連想以外にも、「ゆあみ」という標題は、西洋美術の伝統的な一主題であった。ゆあみの場面は、ルネサンス以来、西洋の彫刻や絵画にしばしば描かれた。「ゆあみ」の制作は、竹太郎の遊学による西洋美術研究の成果のひとつとも考えられる。

『新海竹太郎伝』には、
希臘擬古の手法に日本式の清楚な観音のような表情を附したものであるが、
形は美しく整えられ、注意すべき作と思われ²⁾。

とある。「ゆあみ」は、明治政府に買上げられ、竹太郎の代表的作品となった。竹太郎は、数々の軍人騎馬像を制作したにもかかわらず、日本近代彫刻史では「ゆあみ」を代表作として、これしか載らない場合が多い。

「ゆあみ」を除いて、他の作品があまり注目されない理由は、竹太郎の彫刻家としての履歴によるのかもしれない。近代日本彫刻史を色どる作家たちは、工部美術学校彫刻科の出身者であり、また東京美術学校木彫・塑造の教官やその卒業生らであった。この点、竹太郎の経歴は、著しく異なった。

竹太郎は、元来陸軍士官を志して、明治十九年（一八八六）山形から上京し、士官候補生試験に失敗し、近衛騎兵大隊へ入営したのであった。明治二十七年（一八九四）三月の『二六新報』・『異材顕秘録 彫馬一刀』に次のようにある。

今は如何見ても一箇の好兵士となりし若者、志望も境遇も、全く美術的感念と隔り在ること、千里も畜ならず、彫刻の趣味風韻などには、夢にも交らざりし者が、しほらしや、一たび画馬の霊に触れて、転瞬の間に心情の宇宙を転覆し、何処より噴湧する美術の逸興に酔うて我、我を忘るる時其時に、神聖なる美の天女は、忽ち彼蒼より来降し玉ひ、其香ばしき温かき活きたる息を、此男（竹太郎のこと）の身に吹き込み玉ひぬ、この一刹那に、林訥なる一兵卒は死して、一箇の美術家と生れ代れり³⁾

この「異材顕秘録」では、竹太郎の彫刻家としての開眼を仏具師の家に生まれたことと結びつけているが、それにしても彫刻家への転身を夢のような驚きだと述べている。

竹太郎は少年の頃、地元の仏師から仏像彫刻を学ぶが、仏師を目指したわけではない。むしろ生計のために商務に勤しみ、やがて陸軍士官を志した。つまり竹太郎の本業とすべき志気が、いわゆる彫刻家の履歴とかけ離れているところに、近代日本彫刻史における竹太郎の表舞台に登場しにくい理由があるのだろう。

さらに登場しにくい理由として、竹太郎のおかれた年代層の問題がある。

明治九年（一八七六）夏、フォンタネージ（A.Fonanesi, 1818-82）、ラグーザ（V.Ragusa, 1841-1928）、カペレットティ（G.Cappellotti）ら来日し、工部美術学校の教師となった。彫刻学科を担当したラグーザは、「草花ノ彫刻、造家学ニ用ユル動物彫刻、肖像彫刻」などを教えた。ラグーザにより、わが国へはじめて彫塑が移植された。油土による実物写生やモデリング、そして石膏への移しは彫物師、根付師、大工らの木彫や牙彫と異なり、彫刻を学ぶものにとって画期的な技術とみえたのであろう。

《論文》

彫刻家新海竹太郎の有栖川宮威仁親王銅像と天鏡閣

磯崎 康彦

〔要旨〕

新海竹太郎（一八六八—一九二七）は、山形市出身の彫刻家である。近衛騎兵大隊入営中、好評となった馬の木彫をかわきりに、彫刻家の道歩みはじめた。後藤貞行から彫刻の教えを受け、かつベルリンのヘルテルのもとで西洋彫刻を学びとり帰国した。帰国後、発表した「ゆあみ」は、竹太郎の代表作とされる。この作品以外に、一連の軍人騎馬像は、竹太郎の真骨頂とした彫刻群であった。本県猪苗代町にある有栖川宮威仁親王像は、海軍正装姿で、天鏡閣庭園の柱上に立つ。かつて海軍参考館前に立ち、天鏡閣へ移設再建された竹太郎の彫刻であった。

〔キーワード〕 新海竹太郎 天鏡閣 騎馬像 近代彫刻史 有栖川宮威仁親王

新海竹太郎の彫刻家としての位置

新海竹太郎は、明治・大正期に活躍した彫刻家である。活躍したわりには、高村光太郎や荻原守衛らと比べると、知名度が低い。美術より近代文学の研究者に知られた彫刻家かもしれない。というのは近代文学の両雄、夏目漱石と森鷗外のデスマスクは、竹太郎によってとられたからである。

漱石は大正五年（一九一六）十二月九日に死亡した。臨終に立ちあつた森田草平から依頼された竹太郎は、十二月九日の深夜、漱石の石膏雌型をとり終えた。一方、鷗外は大正十一年（一九二二）七月九日に他界した。夫人からの願望により、竹太郎は、七月九日昼頃に石膏雌型をとった。

デスマスクは、石膏・蠟・寒天などの材質を顔面にあてて型どりする。材質が固まると、顔からはずして雌型とする。雌型に石膏などの材質を流し入れて型をぬき、でき上がった像がデスマスクである。デスマスクの制作には、頭部の左右両側に一人ずついた方がよいから、二名の制作者を必要とする。したがって漱石

の場合は、竹太郎と石膏師の宮島一の二名であり、鷗外の場合は、竹太郎と息子の新海竹蔵であった。

一方、近代美術の研究者に知られた竹太郎の彫刻は、「ゆあみ」（図1）である。「ゆあみ」は明治四十年（一九〇七）、第一回文展に出品された。第一回文展



1. 新海竹太郎 ゆあみ ブロンズ

は、第一部日本画、第二部西洋画、第三部彫刻からなつた。彫刻の審査委員は、東京美術学校木彫科から高村光雲・石川光明・竹内久一、同校塑造科から長沼守敬・白井雨山、太平洋画会から新海竹太郎、日本美術院から新納忠之介、工部美術学

福島大学研究年報 創刊号

発行2005年12月

編集・発行者

国立大学法人福島大学

〒960-1296 福島市金谷川1

TEL (024) 548-5151(代)

代表者 白井 嘉一

印刷所 山川印刷所

(非売品)

ANNUAL REPORT OF FUKUSHIMA UNIVERSITY

Vol. 1

CONTENTS

Introduction Vice-President KITAMURA Yasushi

Articles

Taketaro Shinkai und seine Bronzestatue von der kaiserlichen
Hoheit Prinz Takehito (Taketaro Shinkai and his bronze statue
of the Imperial Highness Prince Takehito) ISOZAKI Yasuhiko (一)

Gu-cao (菰草=Manchurian wildrice) in Chinese Classical
Literature : From a Chinese Pharmacological Perspective
SHIBUSAWA Hisashi (九)

Confrontational Structure of Buddhism and the World
IJITSU Michifumi (一〇)

Researches

An Investigation of Actual Conditions concerning “Shintai
Literacy” of Students of Fukushima University
ARAYA Shuichi, OGAWA Hiroshi, KANKE Reiko, KAWAMOTO
Kazuhisa, KUDO Koki, KUROSU Mitsuru, SASAKI Taketo, SATO
Osamu, SAKAUE Yasuhiro, SHIRAIISHI Yutaka, SUZUKI Yumiko,
SUGIURA Koichi, NAKAMURA Tamio, FUKAKURA Kazuaki,
MORI Tomotaka, YASUDA Toshihiro 1

〈Case Study〉 The Acquisition of Real Properties by Will “let
Someone succeed to…” and Registration TOMITA Tetsu 17

A Research on Introductory Courses of Economics in Japanese
Universities
INOUE Ken, OHNO Masanori, KUMAMOTO Hisao,
SANADA Tetsuya, SHIMIZU Shuhji, NAKAMURA Masakatsu,
HAKOGI Reiko, FUJIWARA Kazuya, MORI Ryohji 25

Age-Area Distribution of Dialects along the Abukuma-kyuko
Line (1) HANZAWA Yasusi, TAKEDA Taku 33

A List of Reports (April, 2004 — March, 2005) 36

A List of Publications (April, 2004 — March, 2005) 65

December 2005 Fukushima University

創刊 易學研究 17 年 平報 9 年 福島大學

創刊 易學研究 17 年 平報 9 年 福島大學